

小さな、体部の開きの強い形態へと変化しており、杯Bは絶対量を減らしている。黒色土器Aは杯AのみでI(口径15~19cm・器高4.5cm~7cm)・II(口径12.5~13.5cm・器高3.5~4.5cm)の2法量がある。煮炊具は土師器甕Bと小型甕Dの組み合わせである。貯蔵具は須恵器で5期の様相と変わらない。

7期 煮炊具・貯蔵具のあり方は5・6期の状況と変わらないが、食器に変化が表われる時期である。6期以前になかった有台の椀・皿の登場である。椀・皿は黒色土器Aと灰釉陶器があり、椀・皿形態の登場という動きのなかで灰釉陶器もこの時期に出現する。食器のなかにおける構成の比率は、須恵器の減少と黒色土器Aの増加、灰釉陶器・緑釉陶器の出現という方向で変化し、食器の主体は7期では須恵器から黒色土器Aへと交替する。さらに、7期の後半では須恵器杯Aに灰白色で軟質の焼成、内外面に黒斑の残るものが表われる。一方に須恵器杯Aが存在し、須恵器杯Aとは調整方法も異なる部分があることからこれらの土器を軟質須恵器杯Aとして区別することとした。この時期に伴伴する灰釉陶器は黒笹14号窯式・光ヶ丘1号窯式である。

8期 7期の状況をさらにおしすすめたのがこの時期で、食器にさらに7期までなかったロクロ調整の土師器が登場する。従って、土器の種類と器種の構成は次のような組み合わせをとることになる。

土師器 : 杯A II・椀

黒色土器A : 杯A I・杯A II・椀・皿B・鉢A

須恵器 : 杯A

軟質須恵器 : 杯A

灰釉陶器 : 椀・皿

主体となるのは黒色土器Aであるが、8期のなかで土師器が急速に量を増やし、後半では土師器が黒色土器Aを凌駕するにいたる。須恵器は極少量残るに過ぎず。軟質須恵器が遺構によってはかなりの量を占めることもある。伴伴する灰釉陶器は光ヶ丘1号窯式である。煮炊具は土師器甕Bと小型甕Dの組み合わせである。甕Bは、器高が低く底径の大きなズングリした形態に変化している。貯蔵具は須恵器の長頸壺・短頸壺・甕A・甕Eなどのほか、新たに灰釉陶器長頸壺・短頸壺が加わる。

12期 12期以降は、全般に遺物の量が少なく土器様相は把握しにくい。土器全体のなかにも占める食器の個体数の割合が非常に高く、従って煮炊具・貯蔵具は出土率が非常に低くなっている。食器は、須恵器・軟質須恵器は既に8期までで消滅しており、土師器・黒色土器A・黒色土器B・灰釉陶器とまれに緑釉陶器がある。この時期の遺構はSB86のみで、この遺構では食器は土師器杯A II・杯A III・盤B I、黒色土器A椀、灰釉陶器椀がある。杯A IIは口径9.9~10.3cm・器高3.2cmと小型である。煮炊具は羽釜のみ、貯蔵具は出土していない。

13期 この時期の遺構としてはSB33・97などがある。土師器杯A IIは12期よりさらに小型化し、口径10cm前後・器高2.5~3cmとなっている。椀は土師器・黒色土器A・灰釉陶器のものがあるが、いずれも大型の椀と小型の小椀の大小の関係が見られる。煮炊具は羽釜Aが見られるのみ、貯蔵具は確実にこの時期に付くと思われるものは確認できない。

14期 遺物の量が少なく土器様相はつかみにくいが、食器は土師器杯A II・杯A III・灰釉陶器椀などその器種は非常に限られ、単純な構成となっている。土師器杯A IIはさらに小型化し、口径10cm前後・器高2~2.5cmとなっている。煮炊具・貯蔵具は不明である。

15期 食器の構成は単純化し、土師器杯A II・杯A III・椀、灰釉陶器椀に中国製白磁を加えた構成である。杯A IIは小型化の極限で口径9~10cm・器高1.5~2cmの扁平な小皿に近い状態となっている。この期の竪穴住居址に伴う白磁は、SB172・174で出土しているが、SB172ではII類とIV類が、SB174ではIV類が出土している。煮炊具は羽釜がある。貯蔵具についてはその様相に触れるほどの遺物はない。

(2) 遺構出土の土器

ア 竪穴住居址出土土器

SB 2 図版103・104、第15表
第196図、PL51・52

食器は土師器・黒色土器A・須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器があるが、須恵器(20)は小破片のみで量も少ない。量的に最も多いのは黒色土器A、次いで灰釉陶器である。土師器は杯A II(1~6)の1器種のみ。黒色土器A杯は杯A II(7~10)・杯A I(11~13)・椀(14~19)・鉢(32)がある。軟質須恵器杯A(21~23)は内外面に黒斑をもつ。灰釉陶器は椀(24~26)・皿(27~29)・段皿(30)・耳皿(31)があり、すべてハケ塗りで施釉した光ヶ丘1号窯式である。煮炊具は土師器甕B(33~35)と小型甕D(36)の2者の組合せである。甕Bは口縁部が直線的に外上方へのびる形態である。貯蔵具は須恵器と灰釉陶器があり、器種も多様である。須恵器は長頸壺A・短頸壺A(38)・短頸壺C(37)・甕A(40・41)・甕D(39)他があり、灰釉陶器は長頸壺(43)と短頸壺(42)がある。8期の土器様相である。

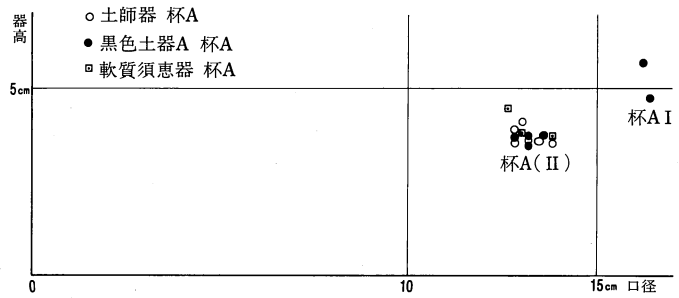
SB 3 図版105

食器は黒色土器A(1~4)が主体で、土師器(5)・須恵器・軟質須恵器(6)・灰釉陶器(7)がある。5は内面に煤が付着しており灯火器として使用されたと思われる。灰釉陶器は光ヶ丘1号窯式である。煮炊具は土師器甕Bと小型甕D(8)の2者。貯蔵具は須恵器甕Aと灰釉陶器短頸壺のみで小片である。8期の土器様相である。

SB 4 図版104、PL52

食器は須恵器が大部分で、土師器は高杯(5・6)があるのみである。5は杯部内面を横方向にへら磨きし黒色処理する。須恵器杯Aは2では底部切り離し後手持ちへら削りし、1は酸化焙焼成で橙色を呈する。3の杯蓋Bは口縁部が屈曲なく、断面三角形に垂下する形態である。4の杯BIVの高台は底面外寄りに貼付され、外にふんばる形態である。須恵器に美濃須衛窯産製品はない。煮炊具は土師器甕A(1)と甕D(7~10)・甗(12)がある。11は外面を縦方向のナデ調整、内面は不定方向の指ナデを施す。7~10はロクロ調整されている。7~9は外面にカキ目が施され、10はロクロナデ痕が残る。12は甗Aの把手である。2期の土器様相である。

SB 5 図版105



第196図 SB 2 出土土器法量分布図

食器						
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.	
土師器	杯A II	28	1,500	29 15%	1~6	
	盤A	1	50			
黒色土器A	杯A I	3	280	112 58%	11~13	
	杯A II	75	1,520		7~10	
	椀	31	1,355		14~19	
	鉢A	3	930		32	
	不明	1,200				
須恵器	杯A	6	140	10 5%	20	
	杯BIV	2	18			
	鉢B	2	220			
軟質須恵器	杯A	24	720	24 13%	21~23	
灰釉陶器	椀	10	705	17 9%	24~26	
	皿	4	290		27~29	
	段皿	2	1,200		30	
	耳皿A	1	45		31	
煮炊具						
土師器	甕 B	12	5,100	20 8%	33~35	
	小型甕D	8	770		36	
貯蔵具						
須恵器	長頸壺A	4	65	29 83%	35	
	短頸壺A	2	450			38
	短頸壺C	2	625			37
	甕 A	6	12,900			40・41
	甕 D	5	570			39
灰釉陶器	甕	10	11,570	14%		
	長頸壺	5	955	6 17%	43	
短頸壺	1	435	42			

第15表 SB 2 出土土器の構成

食器には土師器(1)・黒色土器A(2・3)・軟質須恵器(4~7)・灰釉陶器がある。煮炊具は土師器甕B(8)と小型甕Dの組合せである。(8)は底部周辺の外ハケ目をへら削りする。貯蔵具はない。8期の土器様相である。

SB 6 図版105、PL52

食器は黒色土器Aと須恵器があり、須恵器の量が多い。黒色土器Aは杯A II(1)と杯A I(2)がある。須恵器杯A(3~5)は回転糸切りのみで、器壁は薄くロクロ目が目立つ。体部の開きの大きな形態である。煮炊具は土師器甕B(9~11)と甕C・小型甕D(8)があり、甕Bは口縁部を短く「く」字に外反させる。8は底部外周を手持ちへら削りしている。貯蔵具は甕の体部破片があるのみである。6期の土器様相である。

SB 7 図版105

土器の構成はSB 6に近い。食器は須恵器と黒色土器Aがあり、量は須恵器のほうが多い。須恵器杯A(1~4)は体部の外傾の強い形態である。煮炊具の構成もSB 6と同様土師器甕B(8)と甕C・小型甕D(7)の組合せである。貯蔵具も須恵器甕の体部破片があるのみである。6期の土器様相である。

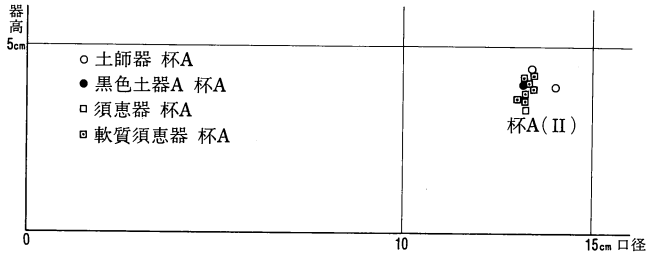
SB 8 図版106、第16表

第197図、PL53

食器は土師器・黒色土器A・須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器があり、主体は黒色土器Aと軟質須恵器杯A(8~16)で黒色土器Aは杯A(3・4)・皿B(5)・椀(6・7)・鉢A(20)がある。17は須恵器杯Aである。灰釉陶器は椀(18)と皿があるが、18は底面中央に糸切り痕が残り、施釉はハケ塗りである。21は土師器盤Aで口径27.6cmを測り、口縁端部は外傾する面をつくっている。貯蔵具は小破片が多く図示できるものは少ないが、須恵器と灰釉陶器があり、多様な器種がある。須恵器は長頸壺A・甕A・肩部に二段の凸帯を巡らす甕D、灰釉陶器では長頸壺・短頸壺・小瓶・大型瓶がある。8期の土器様相である。

SB 9 図版107

食器は土師器・黒色土器A・須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器があるが、主体は黒色土器Aである。黒色土器Aは概して内面のへら磨きが粗く、へら磨きの間隔が離れ間隙にロクロ調整痕が見えるものが多い。6は「十」字に線刻がなされている。13・14は軟質須恵器杯Aである。灰釉陶器は椀と皿がありいずれもハケ塗り施釉、17は底面に糸切り痕が残る。煮炊具は土師器甕B(25・26)と小型甕D(21~24)の二者があり、26は底径10.6cmと大きく、底部外周にへら削りが施される。小型甕Dは底部回転糸切りで、23は底部周辺を手持ちへら削りしている。貯蔵具は須恵器と灰釉陶器で、須恵器甕A・甕D・平瓶、灰釉陶器長頸



第197図 SB 8 出土土器法量分布図

食器					
種類	器種	個体数	重量	個体数比	実測図No.
土師器	杯A II	8	400	10	1・2
	盤A	2	345	14%	
黒色土器A	杯A II	10	710	21	3・4
	椀	9	470		
	皿B	1	125		
	鉢A	1	130		
須恵器	杯A	5	215	6	5
	鉢A	1	10	8%	
軟質須恵器	杯A	28	1,460	28	71
灰釉陶器	椀	4	205	40%	
	皿	2	35	6	8%
煮炊具					
土師器	甕 B	7	6,300	14	24~26
	甕 C	1	150		
	小型甕D	6	955		
貯蔵具					
須恵器	長頸壺A	2	20	9	14
	甕 D	2	90		
	甕	5	1,750		
灰釉陶器	長頸壺	2	120	5	14%
	短頸壺	1	70		
	小瓶	1	50		
	手付瓶	1	50		

第16表 SB 8 出土土器の構成

壺(20)・短頸壺・大型瓶がある。8期の土器様相である。

SB10 図版106

遺物は少ない。食器は土師器・黒色土器A・須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器がある。1は土師器杯Aで酸化焰で焼きあげているが、底部周辺に黒斑がある。4は軟質須恵器杯Aである。灰釉陶器は図示していないが、光ヶ丘1号窯式である。煮炊具は土師器甕B(5・6)・小型甕D(7)で、甕Bはくびれの弱い頸部で、口縁端部をくぼめて面取り状にし、底部外周は手持ちへう削りしている。7は底面に糸切り痕を残す。8期の土器様相である。

SB11

須恵器甕の体部破片が1片出土したのみである。

SB12 図版107・108

食器は黒色土器Aが主体である。1は黒色土器A杯A Iで、内面に暗文状のへう磨きが施される。4は軟質須恵器杯Aである。灰釉陶器碗(5)・皿(6)はいずれもハケ塗り施釉である。煮炊具は土師器甕B(8～11)と小型甕Dの組合せで、甕Bは口縁部が直線的にのびる形態で、端部は面取りしている。貯蔵具は須恵器と灰色釉陶器があり、須恵器は大形貯蔵具である甕、灰釉陶器は中形の長頸壺(7)と短頸壺がある。8期の土器様相である。

SB13 図版108

土器の量は少ない。食器は黒色土器A(1・2)と軟質須恵器(3)のみである。1は体部が直線的に開くもので椀であろう。8期の土器様相である。

SB14 図版108

土器は少なく、底部回転糸切りの須恵器杯A(1)を1点図示できたのみである。底径6.6cmで底部内面を平坦に広く挽く形態である。5期の土器様相である。

SB15 図版108

食器は黒色土器Aと須恵器がある。黒色土器Aは杯A IIと碗(1)、須恵器は杯Aのみである。煮炊具も土師器甕Bと小型甕Dの組合せで、7～8期の土器様相と思われる。

SB16 図版108

食器は黒色土器Aと須恵器がある。黒色土器Aは杯A II(1・2)のみで内面の磨きは丁寧である。須恵器杯Bには、杯B II(4)と杯B IVの2法量がある。煮炊具は土師器甕B・甕C・小型甕Dの三者がある。貯蔵具は須恵器甕Aの破片のみである。7期の土器様相である。

SB17 図版108

食器は須恵器が主体で黒色土器A杯A II(1)が1個体ある。須恵器杯Aはすべて底部回転糸切り未調整である。煮炊具は土師器甕Bと小型甕Dがあり、甕B(6)は口縁部が「く」字状に短く強く外反する形態である。5～6期の土器様相である。

SB18 図版108・109

食器は土師器(1・2)・黒色土器A(3・4)・須恵器(5～8)・灰釉陶器(9)がある。9はハケ塗りである。軟質須恵器はない。煮炊具は土師器甕B(11・12)・小型甕(10)の組合せであるが、甕Bには口縁部形態に二者があり、薄手で外反の強い11と、厚手で口縁部が直線的に伸びる12である。12は口径22.7cm・器高30.1cm・底径10.2cmと背の低いずんぐりした形態である。貯蔵具は須恵器のみで長頸壺A・短頸壺・甕A(13)・甕Dがある。新旧2時期の遺物の混在が予想され、5～8・11は5～6期、1・2・12は8期の土器であろう。前者は混入の可能性がある。

SB19 図版108

食器は黒色土器A(1~3)・須恵器・軟質須恵器(4)・灰釉陶器(5・6)があり、土師器はない。黒色土器A杯A II(1・2)は口縁部に煤が付着し灯火器として使用されている。灰釉陶器は椀と皿でハケ塗りで施釉する。煮炊具は土師器甕B(7)・甕C・小型甕Dがある。7期の土器様相である。

SB20 図版109

食器は須恵器が主体で、わずかに黒色土器A杯A IIの小片が混じる。須恵器は杯A(1・2)と杯B III、杯B IVがある。杯Aは回転糸切りが4個体・回転へら切り1個体で、1は回転へら切り後底部に不定方向の手持ちへら削りを施している。煮炊具は土師器甕B(4・5)・甕C・小型甕B(3)・小型甕Dの組合せで、甕Bには(4)のように内面にもハケ調整を施すものがある。3の小型甕Bは底部にもハケ目を施している。6は美濃須衛窯産と思われる須恵器鉢Aである。4期の土器様相である。

SB21 図版110

食器は黒色土器Aと須恵器で構成され、量的には両者ほぼ同量である。1は黒色土器A杯A II、2は杯A Iで、須恵器は(3・5)が回転糸切り、4は回転へら切りで板状圧痕が着く。4・5は床面出土であり、また墨書土器の項でふれるが、同一文字を同一の位置に墨書しており両者の共伴はほぼ確実である。6は土師器甕Cで口縁部形態が「コ」字に近い。甕Bの7は口径24cm・器高34.1cm・底径8.8cmと背が高く、口縁部は「く」字状に折れるがやや長くのび始めている。6期の土器様相である。

SB22 図版109、PL72

食器には黒色土器Aと須恵器があるが、須恵器が主体である。須恵器は杯A(2・3)と杯B III・杯B V(4)がある。煮炊具は土師器甕B(7~10)・甕C・小型甕D(6)と体部をタタキ調整する甕11がある。11は器壁が薄く胎土は甕Cに類似している。体部をタタキ調整し、内面口縁付近には横方向のハケ目を施している。貯蔵具では、底面に糸切り痕が残る須恵器短頸壺C(5)を図示した。6期の土器様相である。

SB23 図版110

食器は須恵器のみで、器種も杯Aのみである。1は底部回転へら切り未調整。2は美濃須衛窯産で回転へら切りと考えられる。煮炊具は土師器甕A(3)・甕B(4)・甕D・甕F(5)・小型甕A・小型甕Bがある。貯蔵具は須恵器甕の小片である。2期の土器様相である。

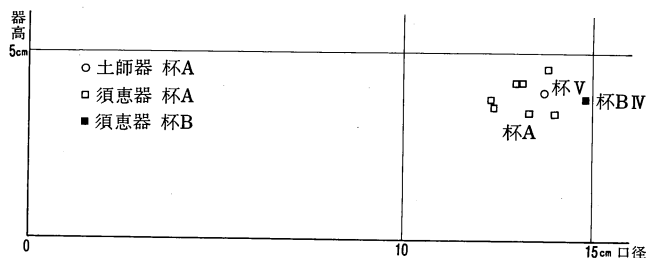
SB24

須恵器杯Aと土師器甕D・甕Fの破片があるのみである。杯Aは底部回転へら切りで、SB23の土器と接合した。2期以前の土器様相である。

SB25 図版110・111、第17表

第198図、PL53・54・72

ロクロ調整・還元焰焼成を須恵器、非ロクロ調整・酸化焰焼成を土師器という分類の概念でとら



第198図 SB25出土土器法量分布図

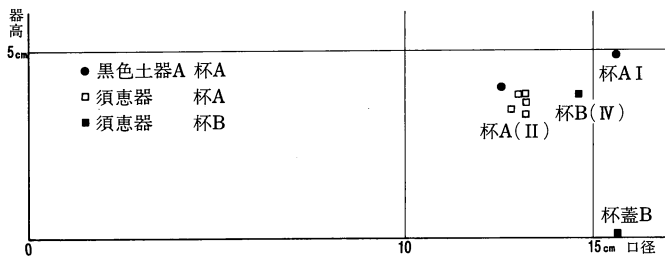
食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No
土師器	杯	2	40	10 27%	1 12~14
	高杯	8	890		
須恵器	杯A	23	1,715	27 50% 73%	2~9 10・11
	杯B II	2	220		
	杯B IV	2	30		
煮炊具					
土師器	甕 A	5	4,585	25 34%	21・22 18 23~25 17 15・16
	甕 B	5	640		
	甕 D	5	10,910		
	甕 F	3	395		
	小型甕A	4	595		
	小型甕D	3	1,185		
貯蔵具					
須恵器	短頸壺A	1	150	11 92% 16% 16% 16%	20 19
	短頸壺B	1	200		
	甕 C	1	245		
	甕 E	8	565		
	不明		25		
灰釉陶器	長頸壺	1	5	1 8%	

第17表 SB25 出土土器の構成

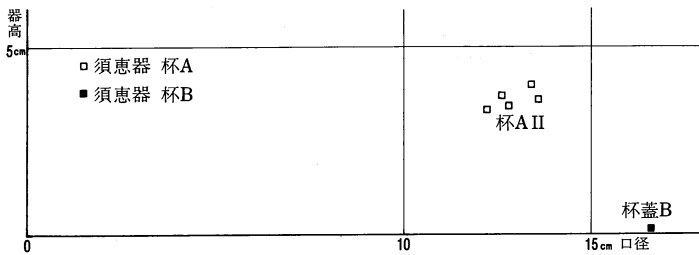
えると分類が非常に困難な土器の多い遺構である。1～9は杯Aに分類されるが、1はロクロ調整で酸化焰焼成、内面にヘラ磨き調整を施すことなく黒色処理を行っている。2～5はロクロ調整で赤褐色に酸化焰で焼き上げられている。6～9はロクロ調整で還元焰焼成である。いずれも底部の切り離しは回転ヘラ切りで行っており、8のみ回転ヘラ削りを加えている。高杯も同様に、12・13は成形は粘土紐積み上げと考えられるが、調整段階では回転が用いられたとみられ、焼成は酸化焰焼成、体部内面のみを横方向のヘラ磨きした後黒色処理する。14は非ロクロ調整で、脚部を縦ヘラ磨きしている。煮炊具についても同様に、小型甕(15・16)では底部に切り離し痕は観察できないものの、回転を利用した調整を行っており、15では底部周辺に回転ヘラ削りが観察できる。17は非ロクロ調整の小型甕Aである。長胴の甕では、21・22は体部に縦方向のナデを施しており非ロクロ調整。23～25は体部にロクロナデ痕が残り回転を利用した調整が行われ、底部は指ナデを施す。それぞれは第17表のように分類した。須恵器では9・10は美濃須衛窯産である。11も胎土から搬入品と考えられるが産地は不明。2期の土器様相と考えられるが、上述したような杯・甕類の様相は類例が少ない。

SB26 図版112、PL55

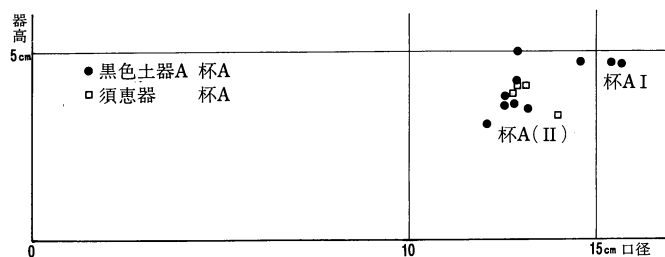
食器は須恵器のみである。1～3は杯Aで底部回転糸切りである。煮炊具は土師器甕B(7・8)と小型甕B(6)小型甕D(5)がある。甕Bは口縁部が短く強く外反する形態で、小型甕B(6)は外面縦方向のハケ目の



第199図 SB27出土土器法量分布図



第200図 SB28出土土器法量分布図



第201図 SB32出土土器法量分布図

後内外面にカキ目を施す。5期の土器様相である。

SB27 図版112、第199図

食器は黒色土器Aと須恵器で構成されている。黒色土器Aは杯A II(1)と杯A I(2・3)がある。須恵器は杯A(4～8)、杯B III・IV(10)・Vと、杯蓋B(9)がある。11は須恵器鉢Cで美濃須衛窯産と考えられる。煮炊具は土師器甕B(14)・甕C(13)・小型甕D(12)と、体部をタタキ調整する甕がある。貯蔵具は須恵器甕の体部があるのみである。6期の土器様相である。

SB28 図版112、第200図

食器は須恵器主体で、黒色土器Aは小片である。須恵器杯A(1～5)は底部回転糸切りで、底径の大きな体部の開きが弱い形態である。杯蓋B(6)は美濃須衛窯産である。煮炊具は土師器甕Bと小型甕D(10)の組合せで、貯蔵具は須恵器短頸壺Cの9がある。5期の土器様相である。

SB29 図版112・113、第18表 PL55

食器は黒色土器(1・2)が主体である。須恵器は杯A(3・4)のみで、体部の開きの強い形態である。5は須恵器杯Dで1期の遺

物の混入である。煮炊具は土師器甕B(7・8)・甕C(9)・小型甕Dがあり、甕Bの口縁部は直線的に外上方へのびる形態となる。6は須恵器長頸壺Aで完形品である。7期の土器様相である。

SB30 図版113、第19表、PL55・56・71

食器は土師器・黒色土器A・灰釉陶器からなっている。土師器は杯A II(1~3)と盤A(14)がある。黒色土器Aは杯A II(4~7)と椀(8~10)があり、5は内面の磨きが暗文状になっている。10は高台が高く土師器盤Bの形態に近い。灰釉陶器椀・皿(11・12)はハケ塗り施釉である。13は緑釉陶器の皿で、外面は口縁部直下までへう削り後、内外全面をへう磨きし、淡緑色の釉がかかる。胎土は灰褐色の硬質である。煮炊具は土師器甕B(15~17)とロクロ調整の小型甕D(18~22)がある。20~22は小型甕Dとしたが大形で、22の底部には糸切り痕がある。貯蔵具は須恵器長頸壺Aと甕A(23)、灰釉陶器長頸壺(24・25)がある。23は美濃須衛窯産である。8期の土器様相である。

SB31 図版114、PL56

食器は黒色土器Aと須恵器のみで構成されている。その中では黒色土器Aが主体を占めている。黒色土器Aには杯A II(1・2)・杯A I(3)・椀(4)・皿B(5)がある。椀(4)は底径6.6cmと小さめの底部から直線的に強く開く形態で、底面には糸切り痕を残す。6は唯一の須恵器杯Aで、底径5cmと小さく、器壁の薄い体部は開きが強い。煮炊具は土師器甕B(7~10)・甕C(11)・小型甕D(12~14)があり、甕Bの口縁部は「く」字状に屈曲し、やや長くのびている。甕Cは「コ」字状口縁を呈する。貯蔵具は須恵器のみで、長頸壺A(16)・甕(15)がある。7期の土器様相である。

SB32 図版114・115、第201図、PL56

食器は土師器・須恵器と黒色土器Aがあるが黒色土器Aが主体である。土師器は盤Aが1個体のみである。黒色土器Aは杯A II(1~7)・杯A I(8~10)・椀(11)・皿B(12)があり、内面のへう磨きはいずれも丁寧である。3は底面にへう記号がある。須恵器は杯蓋Bの小破片の他は、杯A(13~16)がほとんどで、薄い器壁にロクロ目が目立ち、体部の開きは強い。煮炊具は土師器甕B(23)・甕C(18)・甕B(17)・小型甕D(19~22)と円筒形土器(24)がある。貯蔵具は須恵器のみである。7期の土器様相である。

SB33 図版116、第20表、PL56

食器は土師器と黒色土器Aのみで、黒色土器Aは6の椀である。土師器杯A II(1・2)は口径9.6~9.7cm・器高2.7~2.9cmで、1は内面にカキ目状のナデ痕が残る。3・4は椀である。7は土師器鉢Aと考えられ

食器

種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
黒色土器A	杯A I	1	10	8 53%	15 2
	杯A II	7	405		
須恵器	杯D	1	15	7 47%	51% 5 3・4
	杯A	6	195		

煮炊具

土師器	甕 A	1	15	8 28%	7・8 9
	甕 B	4	1,740		
	甕 C	1	950		
	小型甕D	2	35		

貯蔵具

須恵器	長頸壺A	2	465	5 83%	6 21%
	甕	3	2,580		
灰釉陶器	壺	1	7	1 17%	

第18表 SB29 出土土器の構成

食器

種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯A II	12	620	13 38%	1~3 14
	盤A	1	140		
黒色土器A	杯A II	7	315	13 38%	4~7 8~10
	椀	6	485		
須恵器	杯A	2	25	4 12%	34 65%
	杯BIV	1	3		
	杯蓋B	1	3		
緑釉陶器	皿	1	5	1 3%	13
灰釉陶器	椀	2	135	3 9%	11 12
	皿	1	105		

煮炊具

土師器	甕 B	6	1,405	13 25%	15~17 18~22
	甕 C	1	5		
	小型甕D	6	870		

貯蔵具

須恵器	長頸壺A	3	25	4 80%	5 10%
	甕	1	2,060		
灰釉陶器	長頸壺	1	130	1 20%	24・25

第19表 SB30 出土土器の構成

底面に回転糸切り痕が残る。煮炊具・貯蔵具は確かめられない。13期の土器様相である。

SB34 図版115

食器は黒色土器A(1~4)と須恵器(8)・軟質須恵器(5~7)がある。煮炊具は量が多く、土師器甕B(11~14)・甕C(10)・小型甕D(9)がある。甕Bが主体である。貯蔵具は量が少なく須恵器壺と甕の体部小片である。7期の土器様相である。

SB35 図版116、第21表、第202図
PL56・57

土器全体のなかで食器の占める割合が高く、煮炊具・貯蔵具は少ない。食器は土師器・黒色土器A・軟質須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器がある。黒色土器Aは杯A I(6)・杯A II(1~5)・椀(7・8)・鉢Aがあり、7の椀は内面のへら磨きが「十」字状の暗文風に施されている。9~15は軟質須恵器で杯Aである。灰釉陶器椀・皿(16~19)はハケ塗り施釉の光ヶ丘1号窯式である。緑釉陶器は体部小片で図示できないが、胎土は灰色の硬質で内外両面をへら磨き、淡緑色の釉を掛ける。煮炊具は小型甕D(20)を図示した。底部回転糸切りで、体部外面にカキ目は施されない。8期の土器様相である。

SB36 図版116

食器は土師器(1)・黒色土器A(2~5)・須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器(6)で構成される。煮炊具は甕B(8)と小型甕D(7)の二者で、8は底径11cm、底部周辺を手持ちへら削りしている。8期の土器様相である。

SB37 図版116・117、PL57・58・72

食器は土師器(1~3)・黒色土器A(4~7)・須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器(8・9)があるが、須恵器は小片である。7の鉢Aは片口で、口径23.4cm・器高10.1cmを測り、底部には回転糸切り痕が残る。内面のへら磨きは雑で、特に縦方向の磨きではへら磨きとへら磨きの間隔があく。灰釉陶器は光ヶ丘1号窯式

である。煮炊具は土師器甕B(14・15)と小型甕D(10~13)を図示したが、このほかに甕Bの破片が2個体分あるのみでほとんどが図示できなかった。甕Bは14で見ると口径21.6cm・器高30.5cm・底径10.2cmのずんぐりした器形である。口縁部は直線的に上方に開く形態で、底部周辺にへら削り、口頸部のヨコナデは体部のハケ目を消すように肩の部分にまで及んでいる。ハケ目は14では粗く、15では細かい。貯蔵具は須恵器のみ

食器

種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯A II	2	150	6 75% 8 73%	1・2
	椀	2	110		3・4
	盤B II	1	70		5
	鉢A	1	45		7
	不明		30		
黒色土器A	椀	2	155	2 25%	6

煮炊具

土師器	甕 B	2	20	2	
	不明		95	18%	

貯蔵具

須恵器	不明(瓶類)	1	40	1 9%	
-----	--------	---	----	---------	--

第20表 SB33 出土土器の構成

食器

種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯A II	2	100	3 8%	
	盤A	1	150		
黒色土器A	杯A I	1	90	15 41% 36 80%	6
	杯A II	8	430		1~5
	椀	5	350		7・8
	鉢A	1	10		
	不明		345		
軟質須恵器	杯A	11	840	11 31%	9~15
緑釉陶器	椀	1	5	1 3%	
	皿	3	320		6 17%

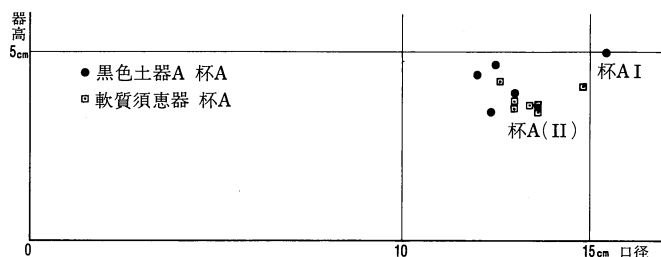
煮炊具

土師器	甕 B	3	110	5 11%	
	小型甕D	2	205		20

貯蔵具

須恵器	短頸壺C	1	20	2 50%	4
	甕	1	20		
灰釉陶器	長頸壺	1	10	2 50%	9%
	短頸壺	1	50		

第21表 SB35 出土土器の構成



第202図 SB35出土土器法量分布図

で壺と甕の体部破片があるのみである。

SB38 図版117

土器はいずれも小片である。黒色土器A杯A II(1)を図示した。6～7期の土器であろう。

SB39 図版117

食器は須恵器のみである。1は杯蓋Bで口径20cmを測る。2は杯B IIで底面は回転ヘラ削りする。煮炊具は土師器甕A(5)・小型甕D(3)と、体部をハケ目調整後ヘラ削りする(4)がある。2期の土器様相である。

SB40 図版118、PL58

食器は土師器(1)・黒色土器A(2～6)・軟質須恵器(7)・灰釉陶器(8)がある。主体は黒色土器Aが占めている。煮炊具は土師器甕Bと小型甕Dがある。貯蔵具は須恵器と灰釉陶器で、須恵器短頸壺A(13)、甕(12)の大中形品と、灰釉陶器小瓶(11)の小形品がある。11は口縁端部を欠くのみのはほぼ完形品で、底部回転ヘラ削りで、小さめの高台が付く。美濃須衛窯産の可能性はある。8期の土器様相である。

SB41 図版117

食器は黒色土器Aと須恵器がある。須恵器杯A(4)は器壁の薄い、体部の開きの強い形態で、体部外面にはロクロ目が目立つ。煮炊具は甕B(6)・甕C(5)・小型甕Dの組合せで、甕C(5)は「コ」の字状口縁となる。7は須恵器長頸壺Aである。7期の土器様相である。

SB42 図版118

食器は土師器(1)・黒色土器A・須恵器・軟質須恵器(2)・灰釉陶器(3)がある。須恵器は底部回転ヘラ削りで混入品であろう。煮炊具は土師器甕B(4)と甕C・小型甕D(5)があり、(4)は頸部の締まりが緩く口縁部を肥厚させる。5の底面には回転糸切り痕が残る。6は灰釉陶器小瓶で、底部回転糸切り、頸部で研磨再調整し小孔を穿っている。8期の土器様相である。

SB43 図版118

遺物は少ない。1は土師器杯Dで、非ロクロ調整、内・外面横ヘラ磨き、2は須恵器杯Aで底部回転ヘラ削りで、黄橙色を呈し軟質の焼き上がりである。煮炊具は土師器甕A(4)・小型甕B(3)がある。須恵器の貯蔵具はない。2期の土器様相である。

SB44 図版118

遺物は少ない。1は土師器杯A Iで口径15cmを測る。4は軟質須恵器、5・6は土師器甕Bで器壁は厚い。8期の土器である。

SB45 図版119

土器のなかで、食器の割合が低く、煮炊具が多い遺構である。量は少ないが、食器の土師器・黒色土器A・軟質須恵器・灰釉陶器という組合せは8期の様相である。

SB46 図版119

図示できる遺物は少ない。1は黒色土器A杯A I、2は灰釉陶器碗で光ヶ丘1号窯式。3は内面にのみ施釉される皿で黒笹14号窯式である。8期の土器様相である。

SB47 図版119

食器は黒色土器A・須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器があり、主体は黒色土器Aである。須恵器(8)は底径5cmと底部が小さく体部の開きの大きい形態である。灰釉陶器(9)は内面に厚くハケ塗りで施釉する。7期の土器様相である。

SB48 図版199

食器は土師器と須恵器がある。土師器は非ロクロ調整の杯F(1)で、内面は器表が荒れ調整は不明であるが、外面は稜から上の口縁部にかけて横ヘラ磨き、稜から下は底部にかけて手持ちヘラ削りを施してい

る。2は須恵器杯蓋Aで軟質の焼成。3～6は須恵器杯Aで、3は口径9.8cm・器高3.9cmで底部の調整は不明。4～6は底部を回転へら切り後回転へら削りしている。6は体部が深い。煮炊具は土師器甕A・甕B・小型甕A(7)があり、甕Bは1片のみである。7は底部に木葉痕が残る。貯蔵具は須恵器甕の体部破片が2片あるのみである。1～2期の土器様相である。

SB49 図版119、PL72

遺物は少なく、図示したものが大部分である。1は土師器杯で、淡赤褐色の緻密な胎土は一見して搬入品とわかる。口縁部での残存率10%と小破片であるが、口径19cm・器高5.7cmを図る。内面には2段に斜行暗文を施し、体部外面は横へら磨き、外面下半から底面にかけては手持ちへら削りする。畿内産の土器と考えられる。2は土師器甕F、3は小型甕Aである。1～2期の土器様相と考えられる。

SB50 図版119

食器は土師器と須恵器がある。1は土師器杯Dで、内面は横へら磨きで黒色処理し、外面は口縁部周辺をヨコナデ、底部は手持ちへら削りする。2は須恵器杯Aで底部手持ちへら削り、3は杯蓋Aで返りは小さく、偏平なつまみが付く。2・3は灰白色の同一の胎土でセットをなす。煮炊具は土師器甕A・甕B(5)・甕F・小型甕A(4)がある。須恵器貯蔵具はない。

SB51 図版120、第22表、PL58

食器は土師器と須恵器で、土師器は高杯(1)1点のみである。須恵器杯A(2・3)は6点が識別できるがいずれも回転へら切りで、2は手持ちへら削りを施す。また、2は酸化焰焼成である。4・5は杯蓋B、6・7は杯BIV、8は高杯で4・5・7は美濃須衛窯産である。煮炊具は土師器甕A・甕B・甕D・甕F(12)・小型甕A(9～11)・甕A(13)があり、12は口径27.2cm・器高25.5cmの体部が球形に近い形態で体部ナデ調整で底面には木葉痕が残る。13は小形の甕Aで底部に12孔を穿つ。貯蔵具は14の長頸壺Bと、15の短頸壺の2個体があるのみである。14は美濃須衛窯産と思われ、口縁端部を折り返すことなくラップ状に開く形態となるもので、口縁端部には面を作る。15は体部をタタキ調整し、内面には同心円の当て具痕を一部に残す。2期の土器様相である。

SB52 図版120

食器は須恵器が主体で、土師器が少量混じる構成である。1は土師器杯D、2は杯Eで、いずれも内面横へら磨き後、黒色処理し、外面は口縁部周辺をヨコナデ、底部は手持ちへら削りする。3～5は須恵器杯Aで、3・4は口径10cmを切る小型、底部回転へら切りで、5は底部周辺を回転へら削りしている。煮炊具は土師器甕A(7・8)と甕B(6)を図示した。6は底部外周を手持ちへら削りする。須恵器では、食器・貯蔵具とも美濃須衛窯産須恵器は皆無である。1期の土器様相である。

SB53 図版120

食器は土師器と須恵器がある。1は土師器杯Dで内面横へら磨き後、黒色処理し、外面は上半をヨコナデ、下半はへら削りする。2は杯Fで体部中ほどに稜を作り、外面下半はへら削りする。内外面を横へら磨きしている。3は高杯で杯部内外面ともに横へら磨き、脚部は器面が荒れ調整は不

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯F	1	5	2 14%	1
	高杯	1	45		
須恵器	杯A	6	120	12 45% 86%	2・3
	杯BIV	3	438		6・7
	杯蓋B	1	20		4・5
	高杯	1	12		8
	不明	1	50		
煮炊具					
土師器	甕A	6	190	13 42%	
	甕B	2	385		
	甕F	1			12
	小型甕A	3	385		9～11
	甕A	1	185		13
貯蔵具					
須恵器	長頸壺B	3	135	4 13%	14
	短頸壺	1	470		15

第22表 SB51 出土土器の構成

明である。4～7は須恵器で、4は杯蓋A、内面に返りが付く。5～7は美濃須衛窯産と考えられる灰白色の胎土で、同時に製作されたものと思われる。5・6は杯蓋Bで、5は口径11.3cm・器高2.2cmの扁平な蓋で口縁部は断面三角形をなす。7は口径9.2cm・器高4.7cm・底部7.4cmの身の深い杯Aで、底面は全面を回転へら削りする。6の天井部外面と7の杯体部外面には「財」のへら書きがある。6はつまみに向かって正位に、7は右横位に書かれる。9は土師器甕Bで底面に木葉痕が残る。8は平瓶の口縁部である。1期の土器様相である。

SB54 図版121

食器は須恵器が主体で、土師器が2点ある。1は土師器杯D、2は高杯である。3～8は須恵器で、3～5は回転へら切りの杯A、6は杯蓋B、7・8は杯B Vと杯B IIで美濃須衛窯産である。煮炊具は土師器甕A(11)・甕B(12)・小型甕A(9)・小型甕D(10)があり、11・12には底面に木葉痕が残る。貯蔵具は須恵器で、長頸壺・横瓶・小壺・甕A・甕Eなど器種は比較的多い。須恵器では美濃須衛窯産が食器で2個体、貯蔵具で3個体数えられる。2期の土器様相である。

SB55

土師器甕Aの破片があるが、図示できない。2期以前であろう。

SB56 図版121

煮炊具の土師器甕類の量の多さが目立つ。食器・貯蔵具は小片のみである。食器は須恵器のみ。1の回転へら切りの杯Aと2の鉢Cを図示した。2は体部に櫛描波状文を施す。2期の土器様相である。

SB57 図版121

1は土師器杯Eあるいは高杯の杯部と考えられる。2・3は須恵器杯Aで、2は底部手持ちへら削り、3は回転へら削りを施す。4は高杯の脚部か。5は杯BIVである。6は壺類の肩部である。煮炊具は図示してないが、土師器甕Aでは2個体に底部に木葉痕が残る。2期の土器様相である。

SB58 図版121、第23表

量的には土師器甕類が非常に多いが、図示できるのは食器類のみである。1は土師器杯Dで、内面をへら磨き後、黒色処理するが、磨きの方向は不明である。2・3は須恵器杯Aで、3は底部手持ちへら削りを施す。4は美濃須衛窯産の杯蓋B。5～7は杯B IIで、5は高い高台で端部が外に折れ曲がる。6は美濃須衛窯産である。煮炊具は土師器甕A・甕F・甕Bの3者が主体である。貯蔵具は須恵器で長頸壺・短頸壺・平瓶・甕A・甕Eがあるが、甕Eが最も多い。2期の土器様相である。

SB59 図版121

土師器甕類が大部分を占める。1は須恵器杯Aで底部回転へら切り、赤褐色を呈する酸化焰焼成である。2は土師器小型甕Aで指ナデ調整である。2期の土器様相である。

SB60 図版121

須恵器2点を図示した。1は杯B IIIで5期の土器と思われる。2は高杯の脚部である。煮炊具は甕Aが主体で底面に木葉痕をもつ。貯蔵具は須恵

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯D	1	10	12%	1
	杯A	2	45		2・3
須恵器	杯B II	2	50	88%	5～7
	杯B IV	1	100		4
	杯蓋B	1	20		24%
	鉢A	1	10		8%
煮炊具					
土師器	甕 A	5	1,640	58%	
	甕 B	4	990		20
	甕 C	1	10		
	甕 F	9	820		
	小型甕D	1	40		
貯蔵具					
須恵器	長頸壺A	1	20	18%	
	短頸壺A	1	20		
	甕 E	1	400		6
	甕	2	140		
	平瓶	1	10		

第23表 SB58 出土土器の構成

器壺類の体部と甕Eがあるが、甕Eは灰白色の軟質の焼き上がりである。2期の土器様相である。

SB61 図版122、第24表、第203図、PL59

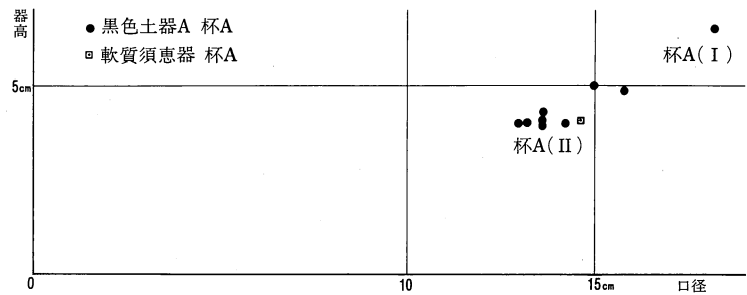
食器は黒色土器Aと須恵器・軟質須恵器があり、主体は黒色土器Aである。煮炊具は土師器甕B・甕C・小型甕Dの組合せで構成される。貯蔵具は須恵器と灰釉陶器がある。7期の土器様相である。

SB62 図版121

食器は黒色土器Aと須恵器・軟質須恵器があるが黒色土器A(1~5)が主体である。6は須恵器杯Aで体部の開きの大きな形態で器壁も薄い。煮炊具は土師器甕Bと小型甕Dの組合せである。7は須恵器短頸壺C、8は灰釉陶器短頸壺Aである。7期の土器様相である。

SB63 図版122

食器は黒色土器Aと軟質須恵器・灰釉陶器がある。黒色土器Aには杯AII(1~4)・杯A I(5)・皿B(6)がある。7~10は軟質須恵器、11は灰釉陶器で光ヶ丘1号窯式である。煮炊具は土師器甕B(14・15)と小型甕D(13)の2器種。貯蔵具は中・小形品が灰釉陶器、大形品が須恵器で、それぞれ長頸壺と小瓶(12)、甕D(16)がある。7~8期の土器様相である。



第203図 SB61出土土器 法量分布図

SB64 図版123、PL60

食器は黒色土器A主体で須恵器が少量ある。黒色土器Aは杯A I・杯A II(1)・椀(2)・片口の鉢A(5)がある。須恵器は底部回転糸切りの杯A(3)と杯蓋B(4)を図示した。煮炊具は土師器甕B(8・9)・甕C(6)・小型甕D(7)の組合せで、甕Cは口縁部が「コ」字状を呈する。煮炊具は須恵器のみ、長頸壺Aと甕A(10・11)があるが、10の波状文を頸部にもつ甕は搬入品であろう。7期の土器様相である。

SB65 図版123

食器は黒色土器Aと須恵器・軟質須恵器があるが、須恵器は小片で図示できない。7・8は軟質須恵器である。煮炊具は土師器甕B(13~16)・小型甕D(12)の二者である。甕Bの口縁部は直線的に伸びる形態(13・15)で、16のように底部周辺をへう削りするものもある。貯蔵具は須恵器のみで、10は短頸壺C、11は甕Dである。7期の土器様相である。

SB66 図版123

食器は黒色土器Aが主体で、土師器・須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器が少量ずつある。土師器は杯Aが1片のみである。黒色土器Aは杯A I(2)・杯A II(1)・椀(4)・皿B(5)・鉢A(3)とすべての器種がある。須恵器は杯A(6)以外は小片で、7・8は軟質須恵器である。9・10は灰釉陶器で、10は角高台を貼付するもので、内面にのみ自然降灰の釉が掛かる。9は光ヶ丘1号窯式で、10は黒笹14号窯式である。煮炊具は土師

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯D	2	35	2 5%	
黒色土器A	杯A I	2	330		
	杯A II	16	1,325	1~5	
	椀	6	275	10・11	
	鉢A	1	160	9	
須恵器	杯A	5	63	9 22%	12
	杯蓋B	4	28		
軟質須恵器	杯A	5	245	5 12%	13・14
煮炊具					
土師器	甕 B	7	3,215	11 19%	17~19
	甕 C	1	20		
	小型甕D	3	460		16
貯蔵具					
須恵器	短頸壺C	1	720	4 80%	5 9%
	甕	3	3,015		
灰釉陶器	長頸壺	1	5	1 20%	

第24表 SB61 出土土器の構成

器甕B(13~15)・小型甕D(11・12)の2種で、土師器甕Bは口縁部を肥厚させ直立させるものである。貯蔵具は須恵器のみ、16・17は中形の甕で凸帯の付く甕Dの可能性もある。7~8期の土器様相である。

SB67 図版124

土器の量は少ない。食器は黒色土器Aと須恵器である。煮炊具は土師器甕B(4・5)と小型甕D(3)で、甕Bは口縁部が短く「く」字に外反する形態である。7期の土器様相である。

SB68 図版124

食器は黒色土器A・須恵器・軟質須恵器がある。軟質須恵器は小片のみで、黒色土器Aと須恵器の量はほぼ同量かやや須恵器が多い。黒色土器Aは杯A I(1・2)と杯A II・皿Bがある。3・4は須恵器杯A・5は杯B Vである。煮炊具は土師器甕B(8)と甕C・小型甕D(6・7)で、甕Bは口縁部がやや直線的に伸び始めている。7期の土器様相である。

SB69 図版125

食器は須恵器のみである。1・2の須恵器杯Aは底部回転糸切りで、底径6.6~6.7cmを測る。4は杯B Vである。煮炊具は土師器甕B・甕C(6)・小型甕B(5)で、甕Cは口縁部を「く」字状にする形態である。貯蔵具は須恵器で、7は短頸壺Cか、底部回転糸切りである。8は頸部に波状文をもつ甕Aで、灰白色の緻密は胎土から搬入品と考えられる。5期の土器様相である。

SB70 図版125

須恵器杯A(1)1点のみの出土である。口径14cm・器高3.2cm・底径6.4cmで、体部が直線的に開く形態である。6~7期の土器様相である。

SB71 図版125

食器は黒色土器Aが主体を占め、土師器と須恵器が少量ある。6は土師器盤Aで脚台の上半に四角形の透かしを施す。5は須恵器杯Aである。回転糸切りで、底径5.2cmと小さい底部から体部は直線的に開く。煮炊具は土師器甕B・甕C(7)・小型甕Dがあり、7の甕Cは口縁部が「コ」字状である。7期の土器様相である。

SB72 図版125

食器は土師器と須恵器がある。土師器は非クロ調整の杯Dで内面黒色処理する。須恵器は杯Aで、底部回転糸切り(1・2)6個体・回転ヘラ切り(3)1個体である。煮炊具は土師器甕A・甕B・甕C・小型甕A・小型甕B(4)がある。4期の土器様相である。

SB73 図版125

食器は土師器・黒色土器A・須恵器・軟質須恵器があるが、土師器・須恵器は少量である。1は土師器杯A II、2は黒色土器A杯A I、3は皿Bである。4は軟質須恵器杯A。煮炊具は土師器甕B(5)と小型甕Dで、貯蔵具は須恵器のみ、長頸壺A(6)と短頸壺・甕がある。8期の土器様相である。

SB74 図版125・126

食器は黒色土器A・須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器があるが、須恵器と灰釉陶器は少量である。食器の主体を占める黒色土器Aは杯A I(2)・杯A II(1)・椀(3)・皿B(4)・鉢A(5)がある。6は軟質須恵器杯A。7・8は灰釉陶器の椀・皿で、施釉はハケ塗りの光ヶ丘1号窯式である。煮炊具は土師器甕B(11~16)、小型甕D(9・10)のほかに、17は円筒形土器で、体部に段をもつ形態である。外面は縦方向のハケ調整、内面には粘土紐の積み上げ痕が残る。貯蔵具は須恵器と灰釉陶器があり、須恵器は短頸壺・長頸壺・甕、灰釉陶器は小瓶・長頸壺がある。白磁椀体部破片があるが、重複するSD27の遺物の混入である。7~8期の土器様相である。

SB75 図版125

土器は少なく小片が多い。1は黒色土器A皿B、2・3は須恵器杯Aで両者ともに器壁が厚い。3は底部回転糸切りで底部外周に段をもつ形態である。

SB76 図版126

遺物が少なく須恵器杯Aと土師器小型甕B(1)があるのみである。須恵器杯Aは体部の破片であるが回転へら切りの可能性がある。2～3期を前後する段階か。

SB77 図版126

遺物は少なく小片である。1は黒色土器A杯II、2は黒色土器A椀である。煮炊具は土師器甕Bがある。4は白磁椀II類の体部で、外面は回転へら削りを行う。混入品である。遺物は少ないが7期を前後する段階である。

SB78 図版126、第25表

煮炊具の土師器甕類が多く、食器類は少ない。食器には黒色土器Aと須恵器がある。須恵器杯Aは3個体あるが、底部回転糸切り、回転へら切り、へら削りが一個体ずつある。煮炊具は土師器甕B(4・5)と小型甕A(2・3)がある。6は須恵器甕Aである。4期の土器様相である。

SB79 図版126

遺物は少ない。1は黒色土器A杯A II、2は須恵器杯Aで体部の開きが強い形態である。3は土師器甕Bで口径20.2cm・器高25.3cm・底径9cmを測る。7期の土器様相である。

SB80 図版126

食器は黒色土器Aと須恵器で黒色土器Aが主体となる。黒色土器Aは1～3が杯A II、4が杯A I、5・6は椀、7は皿Bである。8～10は須恵器杯Aで体部の開きが強く、外面にロクロ目を強く残している。煮炊具は土師器甕Bと小型甕D(11・12)の2器種。貯蔵具は須恵器の長頸壺・甕がある。7期の土器様相である。

SB82 図版127、第26表

食器は黒色土器Aと須恵器で構成され、量的には須恵器が黒色土器Aを上まわる。1は黒色土器A杯A IIで器壁は厚い。2は皿Bで小さ目の高台が付く。3～5は須恵器杯Aで底部回転糸切り。7は杯B IIIである。煮炊具は図示できないが、土師器甕B・甕C・小型甕Dの組合せである。甕Cの口縁部は「コ」字状を呈さない。8は須恵器長頸壺A、9の甕は内面に薄く当て具痕を残す。

SB83 図版127、第204図、PL59・60

食器は土師器・黒色土器A・黒色土器B・灰釉陶器がある。土師器杯AはII(1～4)とIII(5・6)の2法量がある。黒色土器Aは椀のみで、小椀(7・8)と椀(9)がある。7は磨きが暗文状に施されている。10は黒色土器Bの椀で体部下半の強く張る形態である。11～13は灰釉陶器で13の段皿は底面

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
黒色土器A	杯A II	1	8	3 43%	7
	杯A II	2	25		
須恵器	杯A	2	40	4 57%	32% 1
	杯B II	1	45		
	杯B	1			
煮炊具					
土師器	甕 B	8	3,418	11 50%	4・5
	小型甕A	2	250		2・3
	不明	1	60		
貯蔵具					
須恵器	甕	4	185	4 18%	6

第25表 SB78 出土土器の構成

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
黒色土器A	杯A II	5	65	6 37%	1
	皿 B	1	30		2
須恵器	杯A	8	350	10 63%	3～5
	杯B III	1	70		7
	杯蓋B	1	50		6
煮炊具					
須恵器	甕 A	1	30	11 31%	
	甕 B	5	1,420		
	甕 C	1	55		
	小型甕D	4	65		
貯蔵具					
須恵器	長頸壺A	2	95	8 23%	8
	短頸壺	1	40		
	甕 A	1	115		9
	甕	4	3,030		

第26表 SB82 出土土器の構成

に糸切り痕を残す。13期の土器様相である。

SB84 図版127・128、第27表、第205図、PL60

食器は黒色土器Aと須恵器があり、量的に黒色土器Aが須恵器をやや上回る。2の黒色土器A杯A IIには底面に「十」字のへう記号が描かれる。6の皿Bは底面に糸切り痕を残し、高台はほんの少し盛り上がる程度と思われる。8～13は底部回転糸切りの須恵器杯Aで、体部の開きが直線的で強い。煮炊具は土師器甕B(20・21)・甕C(19)・小型甕D(16～18)の組合せで、甕Cの口縁部は「コ」字状を呈する。貯蔵具は須恵器のみで、長頸壺A(23)・甕D(22)・甕がある。7期の土器様相である。

SB85 図版127

遺物は少なくほとんどを図示できた。1は黒色土器A杯A I、2は杯A Iである。3は土師器小型甕D、4は口縁部を「コ」字状に折り曲げる甕C、5は須恵器短頸壺Cである。7期の土器様相である。

SB86 図版128

食器は土師器と黒色土器A・灰釉陶器がある。1～3は土師器杯A IIである。4は盤B、5は黒色土器A椀、6・7は灰釉陶器である。8は羽釜Bで口縁端部を肥厚させて面をなす。鏝は4か所には離れており、指でつまんで調整している。12期の土器様相である。

SB87 図版128

食器は黒色土器Aと須恵器があるが、土師器杯F(1)は1期の遺物の混入である。黒色土器Aは杯A II(1)と杯A I(2)法量がある。4～6は須恵器杯Aで底部回転糸切り、底径が大きく体部の開きは弱い。7は口縁端部を断面三角形に納める杯蓋Bである。煮炊具は土師器甕B(10)、小型甕(8・9)があり、10は底面外周まで斜めの方向のハケ目を施している。11は須恵器短頸壺C、12は甕Aである。6期の土器様相である。

SB88 図版128・129

食器は黒色土器Aが主体で須恵器が少量ある。黒色土器Aは杯A IIがほとんどで他には皿B(8)が1点あるのみである。9は須恵器杯Aで底径5.6cmである。煮炊具は土師器甕B・甕C・小型甕D(10・11)の組合せである。貯蔵具は須恵器のみだが7点を図示できた。12・13・16は短頸壺Cで、12は底部回転糸切りである。14・15は長頸壺Aで14はほぼ完形、15は把手が付く。17・18は同一個体と思われる平底の甕で、体

食器

種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
黒色土器A	杯A I	1	90	25 52%	4・5
	杯A II	21	1,120		1～3
	皿 B	1	135		6
	鉢 A	2	230		7
須恵器	杯A	19	840	23 48%	8～13
	杯B III	2	30		15
	杯蓋B	2	60		14

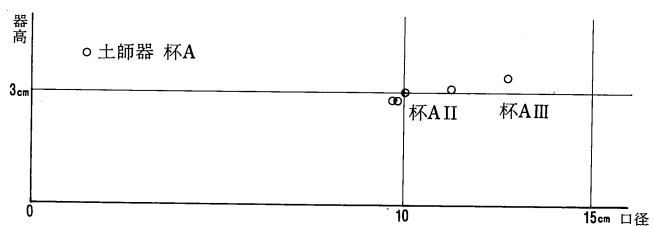
煮炊具

土師器	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	甕 A	1	10	13 19%	20・21
	甕 B	6	1,700		19
	甕 C	1	170		16～18
	小型甕D	5	465		

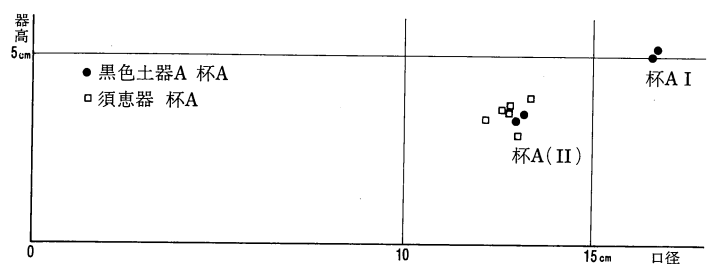
貯蔵具

須恵器	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
須恵器	長頸壺A	3	270	8 12%	23
	短頸壺	1	50		
	甕 D	1	100		22
	甕	3	225		

第27表 SB84 出土土器の構成



第204図 SB83出土土器法量分布図



第205図 SB84出土土器法量分布図

部内面にはハケ状工具によるナデが施されている。7期の土器様相である。

SB89 図版129、第28表、PL60

食器は少なく土師器甕類が多い。食器は黒色土器A(1・2)と須恵器(3)がある。3は器壁が薄く体部の開きが強い。煮炊具は土師器甕B(6・7)・甕C・小型甕D(4・5)がある。甕Bの口縁部は「く」字に短く外反するが口縁がやや肥厚している。7期の土器様相である。

SB90 図版129

土器のほとんどは土師器甕類で食器・貯蔵具は少ない。食器は須恵器のみで、杯A(1)は底部回転ヘラ切り。2の杯BIV、3の杯蓋Bは美濃須衛窯産である。煮炊具は土師器甕B(5・6・8・9)・甕G(7)がある。貯蔵具は4の須恵器短頸壺と甕Eがある。2期の土器様相である。

SB91 図版130

食器は黒色土器Aと須恵器がある。両者ともに杯Aのみで重量比では黒色土器Aのほうが多い構成である。黒色土器Aは杯A II(1~3)と杯A I(4~6)で椀・皿類はない。4は底部周辺を手持ちヘラ削りする。7~10は須恵器杯Aで、底径が小さく体部が直線的に伸びる形態である。煮炊具は土師器甕B(11)と小型甕D(12)があり、貯蔵具は須恵器甕D(13)と甕体部破片があるのみで、壺類はない。7期の土器様相である。

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
黒色土器A	杯A I	1	120	56%	2
	杯A II	4	60		
須恵器	杯A	4	120	44%	3
煮炊具					
土師器	甕 B	2	1,220	44%	6・7
	甕 C	1	5		
	小型甕D	4	490		

第28表 SB89 出土土器の構成

SB92 図版130

食器は黒色土器Aと須恵器があるが須恵器のほうが多い。黒色土器Aは杯A(1・2)と鉢A(3)がある。須恵器は杯A(4・5)と杯BIV(6)・杯B III(7)がある。6は美濃須衛窯産である。煮炊具は土師器甕B(9)と小型甕D(8)の2器種の組合せで、貯蔵具は長頸壺A・甕D・甕E(10)がある。10は口縁部を内側に屈曲させ面取りしている。6期の土器様相である。

SB93 図版130

食器は黒色土器Aと須恵器で構成されるが黒色土器Aのほうが多い。黒色土器Aは杯A II(1~3)と杯A I(4・5)で、椀・皿類はない。須恵器は杯A(4)と杯BIV(7)がある。煮炊具は土師器甕B(8)と小型甕Dの組合せ、貯蔵具は須恵器甕類のみである。7期の土器様相である。

SB94 図版130

食器は黒色土器Aと須恵器で、量的には須恵器が多い。須恵器杯A(3~7)は器高が低く体部の開きが強いものが多い。8は盤の脚台である。煮炊具は小型甕D(9・10)のみ、9は口径7.6cm・器高6.7cmの小形である。貯蔵具は須恵器壺と甕の体部小片2片のみである。6期の土器様相である。

SB95 図版131

土器は小片が多い。食器は須恵器のみ、1・2は須恵器杯Aで、2は口径13.2cm・器高4.6cm・底径6cmを測り体部の外傾の弱い深めの形態である。底部は回転糸切りである。3は杯BIVである。煮炊具は土師器甕Bのみで図示できないが、口縁端部を面取りし、体部内面にはハケ調整が施されている。4~5期の土器様相である。

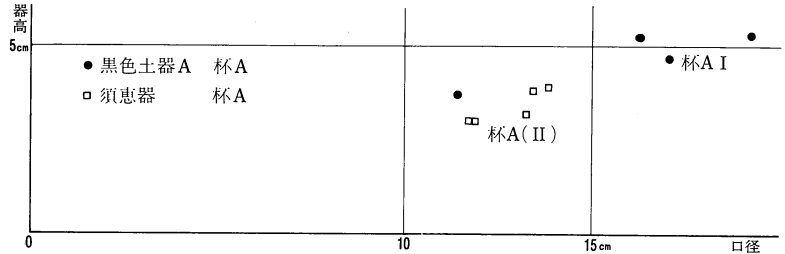
SB96 図版131・第29表・第206図、PL61

食器は黒色土器Aと須恵器がある。量的には黒色土器Aが須恵器をうわまわる。黒色土器Aは杯AのみでI(2~4)とII(1)の2法量がある。須恵器は杯A(5~9)のみで、5は口径11.7cm・器高3cm・底径5.2cmで

ある。煮炊具は土師器甕B(11・12)と小型甕B(10)・小型甕Dがある。11は口縁部が短く外反するが、頸部を指ナデし口縁部を肥厚させている。貯蔵具は須恵器短頸壺D(13)・甕(14)がある。14は甕Dの可能性もある。6期の土器様相である。

SB97 図版131

混入遺物が多い。1・2は土師器杯A IIで、1は口径9.7cm・器高2.8cmである。3は土師器小椀、4は椀、5は黒色土器A小椀、6は椀である。8・9は灰釉陶器椀で丸石2号窯式である。7の須恵器杯Aは混入である。煮炊具には羽釜がある。貯蔵具はない。13期の土器様相である。



第206図 SB96出土土器法量分布図

SB98 図版131

遺物は少ない。食器は須恵器主体で、黒色土器Aは少ない。図示したのは須恵器で1・2は杯A、2は底面に糸切り痕が残る。3は杯B IIIである。煮炊具では土師器甕Bと甕Cの小片があるのみである。貯蔵具はない。5期の土器様相である。

SB99 図版131

食器は黒色土器Aと須恵器があり両者、ほぼ同量である。黒色土器Aは杯A II(1~3)と杯A I(4)のほかに椀が1点ある。須恵器杯A(5~8)は体部の開きの強い形態である。煮炊具は土師器甕B(10・11)、甕C(12)、小型甕Dの組合せで、甕Bは口縁部が「く」字に強く外反する。貯蔵具は図示できないが、須恵器長頸壺A・短頸壺C・甕Dがある。6期の土器様相である。

SB100 図版131、PL71

遺物は黒色土器A杯A II・鉢A、須恵器杯A・杯B、土師器甕B・小型甕D、須恵器甃・壺・甕など1期あるいは6・7期の土器であるが、いずれもローリングを受けており遺構の重複などによって混入したものと思われる。5は青白磁合子で、外面には型づくりによる蓮花文を有する。底面には「□家合子記」と銘が型押しされる。

SB101 図版132

食器は黒色土器A・須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器がある。主体は黒色土器Aである。1は黒色土器A椀、2は軟質須恵器杯Aである。煮炊具は土師器甕B(5~8)・甕C・小型甕D(3・4)の組合せである。甕Bは全体にズングリしたプロポーションで、口縁部が直線的で肥厚し、底部周辺はへら削りを施している。貯蔵具では須恵器が主体で灰釉陶器の小瓶がある。7期の土器様相である。

SB102 図版132、第30表、PL61

食器は黒色土器Aと須恵器があり両者ほぼ同量である。黒色土器Aは杯A II(1・2)・杯A I(3)・椀(4・5)・皿B(6)・鉢A(7)がある。3は底部を回転へら削りしている。8~11は須恵器杯Aで底部回転糸切り、体部の開きの強い形態である。煮炊具は土師器甕B・甕C・小型甕D(13・14)があ。貯蔵具は須恵器で長頸壺・短頸壺・平底の甕(15)がある。6~7期の土器様相である。

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
黒色土器A	杯A I	4	285	6 46%	13 62%
	杯A II	2	40		
須恵器	杯A	7	490	7 54%	5~9
煮炊具					
須恵器	甕 B	1	760	4 19%	11・12 10
	小型甕B	1	20		
	小型甕D	2	90		
貯蔵具					
須恵器	短頸壺D	1	440	4 19%	13 14
	甕	3	220		

第29表 SB96 出土土器の構成

SB103 図版132

遺物は少ない。食器は黒色土器Aと須恵器で、須恵器杯Aは細片である。1は黒色土器A杯A II、2は椀で高台は断面方形である。煮炊具は土師器甕Bと小型甕Dの組合せ。3は須恵器甕Dである。7期の土器様相である。

SB104 図版132

食器は黒色土器Aと須恵器があり、量的には須恵器が多い。4は軟質須恵器で混入か。5・6は土師器甕Bで口縁部が短く「く」字に折れる形態である。6期の土器様相である。

SB105 図版133、第31表、PL61

食器は土師器・黒色土器A・黒色土器B・灰釉陶器からなる。須恵器もあるが混入であろう。1は土師器杯A IIで口径9.8cm・器高2.5cmである。黒色土器Aは椀のみで2・3がある。3は内面の磨きが「十」字状の範囲になされている。4・5の黒色土器Bの椀は内外面をへら磨きの後、黒色処理するが、5の底面には糸切り痕が残る。6～10は灰釉陶器で、6～8は椀、9は皿、10は段皿である。8は口縁端部が外反する形態で、内面にのみハケ塗りで施釉する黒笹14号窯式で混入の可能性が大きい。他はいずれも漬掛け施釉の丸石2号窯式である。煮炊具は土師器羽釜A(13)と小型甕E(11)がある。11は内外面に繊維束状の工具で縦方向の強いナデを施している。12の甕Bは混入であろう。貯蔵具には14の灰釉陶器広口瓶がある。肩の部分に把手の痕跡が残るもので、底面には糸切り痕が残る。須恵器の壺・甕類は混入である。13期の土器様相である。

SB106 図版133

食器は黒色土器Aが主体で、土師器・須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器がある。土師器は1の皿と15の盤Aがある。1は体部内面のへら磨きがないが、黒色土器A皿Bの製作途中で焼成されたものと思われる。底部には糸切り痕が残る。15は脚台の付く盤Aの口縁部破片で端部に外傾する面をもつ。黒色土器Aは杯A II(2~4)・杯A I(5)・椀(6・7)・皿B(8)・鉢A・鉢B(9)と多様な器種がある。9は内面へら磨き後黒色処理するもので、外面にはロクロナデ痕が残る。10・11は須恵器、12・13は軟質須恵器である。14は灰釉陶器椀で、回転へ

食器

種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
黒色土器A	杯A I	2	120	13 54% 24 52%	3
	杯A II	7	155		1・2
	椀	2	155		4・5
	皿 B	1	15		6
	鉢 A	1	450		7
	不明		215		
須恵器	杯A	6	500	9 38%	8~11
	杯BIV	1	10		
	杯蓋B	2	45		12
軟質須恵器	杯A	2	10	2 8%	

煮炊具

種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	甕 B	4	600	10 22%	
	甕 C	1	20		
	小型甕D	5	520		13・14

貯蔵具

種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
須恵器	長頸壺A	4	95	12 26%	
	短頸壺	3	40		
	甕	5	1,215		15

第30表 SB102出土土器の構成

食器

種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯A II	3	90	5 19%	1
	杯A III	1	15		
	盤 A	1	135		
黒色土器A	椀	4	190	4 15% 2 8%	2・3
黒色土器B	椀	2	140		4・5
須恵器	杯A	4	30	9 35%	
	杯B III	3	60		
	杯蓋B	2	10		
灰釉陶器	椀	4	310	6 23%	6~8
	皿	1	55		9
	段皿	1	5		10

煮炊具

種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	甕 B	3	25	7 16%	12
	甕 C	1	5		
	小型甕E	1	195		11
	小型甕D	1	20		
	羽釜	1	840		13
	不明		100		

貯蔵具

種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
須恵器	短頸壺	1	595	12 27%	
	壺	3	85		
	甕 A	2	4,610		
	甕	6	330		

第31表 SB105出土土器の構成

ラ削りが底面から体部下半にまで及んでいる。内外面ともにハケ塗り、底部内面にも一筆のハケ塗りを行なう。煮炊具は土師器甕B(18・19)・甕C(16)・小型甕D(17)がある。貯蔵具は須恵器で、長頸壺A(20・21)・甕D・甕E(22)がある。22は灰白色を呈し軟質の焼成である。須恵器には美濃須衛窯産の杯B・甕があり、2・3期の遺物の混入であろう。7期の土器様相である。

SB107 図版134、第32表、PL62

食器は土師器・黒色土器A・須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器がある。須恵器は微細な破片のみである。1は土師器杯A IIで、口径12.4cm・器高4.1cmである。黒色土器Aは器種が多様で、杯A II(2)・杯A I(3)・椀(4~6)・鉢Aがある。椀の高台には断面梯形のもの三角形のものがある。7~11は軟質須恵器杯で、10は口縁部に炭化物の付着が見られ灯火器として使用されたことがわかる。煮炊具は土師器甕B(16・17)・小型甕C(14)・小型甕D(15)がある。12は須恵器長頸壺A、13は須恵器鉢Aである。8期の土器様相である。

SB108 図版134、第33表

食器は須恵器が主体で少量黒色土器Aがある。1は黒色土器A杯A IIで底部回転糸切り。9は鉢Aで、口径24cmを越える大形で、底面と底部周辺をへら削りする。10は土師器盤Aの脚台で、端部に面を作っている。須恵器杯A(2・3)もすべて回転糸切りである。煮炊具は土師器甕B(8)・甕C・小型甕Dがある。甕Bには内面にもハケ調整を施すものがある。5期の土器様相である。

SB109 図版134・135

遺物の量は多い。食器は黒色土器Aと須恵器・軟質須恵器があるが、量は黒色土器Aが多い。黒色土器Aは杯AII(1~7)・杯A I(8・9)・椀(10)・皿B(11~15)・鉢A(16・17)の器種がある。6は底部周辺を手持ちへら削りする。19~26は須恵器杯Aで体部が直線的に強く開く形態である。18は軟質須恵器で、須恵器杯Aに比べ内面見込の部分の押さえが弱く、灰白色軟質の焼成である。27は灰釉陶器椀である。煮炊具は食器の量に比して多くない。土師器甕B(30・31)と小型甕D(28・29)の組合せである。貯蔵具は須恵器と灰釉陶器があり、器種も多様である。須恵器では長頸壺A(32)・短頸壺・甕D・甕E(35)・甕(36)・平瓶(34)がある。灰釉陶器では小瓶がある。7期の土器様相である。

SB110 図版135

食器

種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯C	1	2	7%	1
	杯A II	1	75		
黒色土器A	杯A I	2	280	49%	4~6
	杯A II	6	325		
	椀	4	410		
	鉢A	2	180		
	須恵器	杯A	5		
杯蓋B	1	2			
鉢A	1	20			
軟質須恵器	杯A	5	475	17%	7~11
灰釉陶器	椀	1	5	3%	

煮炊具

種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	甕B	7	1,740	23%	16・17
	小型甕C	2	10		
	小型甕D	3	165		

貯蔵具

種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
須恵器	長頸壺A	1	8	21%	12
	壺	4	80		
	甕A	1	125		
	甕	5	210		

第32表 SB107出土土器の構成

食器

種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	盤A	1	35	4%	10
黒色土器A	杯A II	3	35	17%	9
	鉢A	1	230		
須恵器	杯A	6	205	75%	2・3
	杯BIV	4	80		
	杯蓋A	1	5		
	杯蓋B	3	180		
	鉢A	3	60		
灰釉陶器	椀	1	10	4%	4

煮炊具

種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	甕B	7	445	24%	8
	甕C	2	10		
	小型甕D	1	30		

貯蔵具

種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
須恵器	長頸壺A	3	60	20%	7
	甕	5	445		

第33表 SB108出土土器の構成

遺物は小片が多い。食器は黒色土器Aと須恵器で須恵器が主体である。須恵器杯A(2・3)は底径が小さく体部の外傾が強い形態である。6期の土器様相である。

SB111 図版135・136、第34表、PL62・63・72

遺物の量は多く、特に煮炊具が多い。食器は土師器・黒色土器A・須恵器があるが、主体は黒色土器Aである。土師器は2個体ある。1は小形の杯A IIで、13期前後の土器である。2は盤Aの脚台。黒色土器Aは杯A II(3~13)・杯A I(14・15)・椀(16・17)・皿B(18・19)がある。20~23は須恵器杯Aで器壁が薄く体部の外傾の強いもの(21~23)が多い。煮炊具は土師器甕B(31~35)・甕C(28~30)・小型甕D(24~27)からなる。このうち32・33は外面をハケ調整するが、底面に糸切り痕が残り、ロクロ調整されたことがわかる。

甕B(31)は口径22.6cm・器高35.4cm・底径9cmを測る。貯蔵具は小片で図示できない。7期の土器様相である。

SB112 図版136

食器は黒色土器A主体である。1は土師器杯Cと類似する明褐色の緻密な胎土で、底部内面に放射状の暗文を施し、底部は高台を削り出している。ローリングを受けており3~4期の遺物の混入と思われる。2・3は黒色土器A杯A II、4は高台の高い皿Bである。5は須恵器杯Aで底面を手持ちへら削りしている。7期の土器様相である。

SB113 図版136

遺物は少なく小片が多い。食器は土師器・黒色土器A・須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器があるが、黒色土器Aと軟質須恵器が主体となる。1・2

は黒色土器A椀で底面に糸切り痕が残る。3・4は軟質須恵器Aで、3には内外面にタール状付着物が残る。5は灰釉陶器椀で内面に朱が残る。煮炊具は土師器小型甕Dの小片が1片あるのみである。6は灰釉陶器長頸壺、7は須恵器甕である。8期の土器様相である。

SB114 図版137

食器は黒色土器Aと須恵器・軟質須恵器で構成される。5~7は軟質須恵器杯A、8は灰釉陶器椀でハケ塗りで施釉する。煮炊具は土師器甕B(10)と小型甕D(9)がある。10は体部で器壁が厚く底部周辺をへら削りしている。9は体部が鉢状に開く形態で、体部外面にカキ目を施す。底面は指ナデする。7期の土器様相である。

SB115 図版137

食器は須恵器がほとんどである。1は杯Cで底径8cmに復元できる。内面見込に沈線を巡らし、体部と底面に放射状の暗文を施す。外面体部は横へら磨き、底面は手持ちへら削りを施す。須恵器杯Aは底部回転へら切り(4)と回転糸切り(2)の両者があり、確認できるものでは回転へら切り4個体に対し回転糸切り9個体である。杯BはII・III・IV・V(9)の各法量がある。9は底面に糸切り痕が残る。煮炊具は土師器甕B(11)・甕C・小型甕D(10)・須恵器甕(16)がある。11は内面にもハケ目調整がなされ、底部外周はへら削りされる。10の底面には糸切り痕が残る。16は口縁部と底部の破片のみで全容は知れないが、口径26cm・底径18.8cmを測る。貯蔵具は須恵器で、長頸壺A(12・13)・短頸壺A(15)・甕・甗(14)がある。4期の土器様相である。

食器

種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯A II	1	50	2	1
	盤A	1	10		
黒色土器A	杯A I	2	155	23	39
	杯A II	18	1,395		
	椀	1	75		
	皿B	2	270		
須恵器	杯A	8	430	14	60%
	杯B IV	1	10		
	杯蓋B	5	45		

煮炊具

土師器	甕B	5	2,220	17	31~35
	甕C	3	1,310		
	小型甕D	9	1,710		
				26%	28~30
					24~27

貯蔵具

須恵器	壺	2	105	9	
	甕	7	985		
				14%	

第34表 SB111出土土器の構成

SB116 図版137・138

食器は黒色土器Aが主体で、土師器と須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器がある。11は軟質須恵器杯A。12は灰釉陶器椀で釉はハケ塗り。13は土師器盤Aで脚台に「十」字になると思われる透かしを穿つ。煮炊具は土師器甕B(15・16)・小型甕D(14)の組合せである。14は鉢状に開く形態で、体部はカキ目、底面には糸切り痕が残る。貯蔵具は須恵器のみで18は短頸壺Cで底部には糸切り痕が残る。17は甕Dの可能性が有る。7期の土器様相である。

SB117 図版138

食器は須恵器が主体で、他に土師器杯D(1)と盤Aが1片ずつあるのみである。須恵器杯Aは底部回転糸切り(2~4)18個体に対し、回転へら切り2個体を数える。杯BはIV(6)・V(7・8)・II(9)・III(10)がある。6には、杯底部内面にやや右に寄せて髪の長い女性の上半身像を描き、左には縦に「泰□」と思われる文字をへら描きしている。底面には自然降灰が付着しており、逆位で焼成されたことがわかる。煮炊具は土師器甕B(11~13)・甕C・小型甕B(14)・小型甕Dがある。貯蔵具は須恵器のみであるが器種は多様で、長頸壺A(17)・長頸壺B(16)・短頸壺(18)・甕E(20)・横瓶等がある。16は美濃須衛窯産である。4期の土器様相である。

SB118 図版139

食器は須恵器がほとんどで、他には土師器杯Cが1片ある。須恵器杯Aは底部回転糸切りのみ、2は杯B III、3は須恵器鉢Aである。煮炊具は土師器甕B・甕C・小型甕Dと甌C(5)がある。5は口径35.4cm・底径27cmを測る。形態はSB115出土の須恵器甌に類似している。調整は内外面に縦方向のハケ目調整、内面はそれをナデ消している。底面にはタガ状の円盤を接合する。胎土・焼成は甕Bのそれと同一である。5期の土器様相である。

SB119 図版139、第35表、PL63・64

食器は須恵器主体で黒色土器Aが少量ある。1は黒色土器A杯A I。須恵器杯A(2・3)はすべて底部回転糸切りである。煮炊具は土師器甕B・甕C(6・7)・甕G・小型甕Bがある。甕Gは1・2期の遺物の混入か。5期の土器様相である。

SB120 図版138

食器は黒色土器Aと須恵器で黒色土器Aが主体となる。黒色土器Aは杯A II(1)・杯A I(2・3)・椀(4・5)・皿B(6・7)がある。須恵器は杯A(8)と杯B V(9)がある。煮炊具は土師器甕B(12)・甕C(11)・小型甕D(10)による構成である。貯蔵具は長頸壺A(14)・短頸壺C(13)・甕A・甕D・甕Eと多様である。7期の土器様相である。

SB121 図版139・140

食器は土師器と須恵器がある。1・2は非クロ調整の土師器杯Dで、内面へら磨き後、黒色処理する。2はへら磨きが放射状の方向にまずなされ、次に口縁部周辺を横方向に磨くという4期以降に見られる黒色土器と同じ手順で行なわれている。また、2は体部外面下半を手持ちへら削りする。須恵器杯Aは底部回転へら切り(3・4)と回転糸切り(5)があるが、回転糸切りのものは体部の開きの強い6・7期のもので、混入であろう。6は

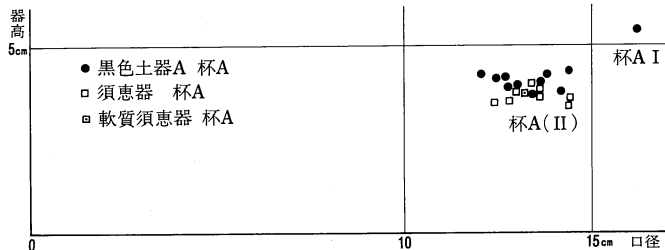
食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
黒色土器A	杯A I	3	70	4 36%	1
	鉢 A	1	15		
須恵器	杯A	4	245	7 55% 64%	11 2・3 5 4
	杯BIV	1	100		
	杯B V	1	55		
	杯蓋B	1	40		
煮炊具					
土師器	甕 B	1	105	4 33%	6・7
	甕 C	1	65		
	甕 G	1	120		
	小型甕B	1	90		
貯蔵具					
須恵器	甕	2	225	2 12%	
	不明		35		

第35表 SB119出土土器の構成

美濃須衛窯産である。8は内面黒色処理の土師器鉢で、内外面を丁寧にへら磨きしている。煮炊具は土師器甕A(9~12)・甕B(14・15)・甕F(16)・小型甕A(13)・小型甕Bがある。甕Aのうち3個体は底面に木葉痕を残す。貯蔵具は須恵器長頸壺(17)・甕・甕(18)がある。19の長頸壺Aは混入品であろう。1期の土器様相である。

SB122 図版140・141、第36表
第207図、PL64

黒色土器Aと須恵器を中心に食器は構成され、土師器と軟質須恵器・灰釉陶器が少量入る。量的には黒色土器Aが圧倒的である。黒色土器A杯Aは底部回転糸切り未調整であるが、1は手持ちへら削りを施している。9は焼成後の穿孔である。須恵器杯Aは底径が小さく体部が直線的に開く形態で、器壁は薄くロクロ目が目立つ。灰釉陶器碗(33)は口縁が強く外反する形態で、釉はハケ塗りである。煮炊具は土師器甕B・甕C・小型甕Dがあるが、甕Bは口縁をやや肥厚させている。甕F・甕(50)は混入品である。7期の土器様相である。



第207図 SB122出土土器法量分布図

SB123 図版142

土器は少なくいずれも小片である。土師器甕B(1)を図示した。器壁が厚く底部周辺を手持ちへら削りするもので、食器に土師器杯A IIがあることから8期の土器群と考えられる。

SB124 図版143

土器は少なく、混入と思われる黒色土器A杯A IIを除いてすべて図示できた。1は須恵器杯Aで底部回転へら切り後手持ちへら削りする。2は土師器小型甕B、3は土師器甕Gで、内外面に縦方向のハケ目を施し、底部外周をへら削りしている。器壁は厚く赤褐色・硬質の焼成である。

SB125 図版142

食器は須恵器のみ。杯Aは底部回転へら切りと回転糸切りが共伴するが、回転へら切りと確認できるのは1点のみである。1・2は回転糸切り未調整で、底径の大きな体部の開きの弱い形態である。煮炊具は土師器甕B・甕C・小型甕B(3)・小型甕D(4・5)があり、甕Bは内面にもハケ目調整するものがある。5の底面には糸切り痕が残る。4期の土器様相である。

SB126 図版141・142

食器						
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No	
土師器	盤 A	1	30	2 1%	34	
	高杯	1	35			
黒色土器A	杯A I	10	770	143 69%	14・15	
	杯A II	101	5,840		1~13	
	碗	21	715		16・17	
	皿 B	4	210		18~20	
須恵器	鉢 A	7	625	206 77%	35~38	
	杯A	40	1,685		21~28	
	杯B III	4	150		30	
	杯B IV	3	60		55 27%	29
	杯B IV	1	20			
	杯蓋A	1	10			
軟質須恵器	杯A	4	160	4 2%	31・32	
	灰釉陶器 碗	2	10		2 1%	33

煮炊具					
土師器	甕 B	16	12,700	32 12%	41~44
	甕 C	3	310		
	甕 F	1	20		
	小型甕D	12	1,615		39・40

貯蔵具						
須恵器	長頸壺A	6	750	27 90%	45~48	
	短頸壺C	4	1,000		49	
	壺	2	50		30 11%	51~53
	甕 A	3	1,000			
	甕 D	2	380			
甕	9	3,210				
須恵器	甕	1	30	3 10%	50	
灰釉陶器	長頸壺	2	95			
	短頸壺	1	25			

第36表 SB122出土土器の構成

食器は土師器・黒色土器A・須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器があるが、主体は黒色土器A(1~9・17・18)である。10は須恵器、11は軟質須恵器である。灰釉陶器(12~16)はいずれもハケ塗りで施釉、底面は回転へら削りする。16は厚手の段皿で黒笹14号窯式、あとは光ヶ丘1号窯式である。煮炊具は土師器甕B(20・21)と小型甕Dで、甕Bは口縁部が直線的に伸び、底部外周はへら削りする。21は口径24cm・器高32cm・底径8.8cmを測る。22は須恵器甕Eで口径は55.8cmある。貯蔵具は他に長頸壺A・甕D・甕Aがある。7期の土器様相である。

SB127 図版142・143

食器は黒色土器A主体である。1~4は杯A・5は鉢A・6は椀・7は皿Bである。8は須恵器杯A、9は軟質須恵器杯Aである。10の灰釉陶器は光ヶ丘1号窯式である。11は土師器盤Aで口径34cmの口縁端部には面をもつ。煮炊具は土師器甕B(12・13)と小型甕D(14)の、貯蔵具は須恵器で、長頸壺A(15)と甕D(16)のほか横瓶がある。7期の土器様相である。

SB128 図版143・144、PL72

食器は土師器と須恵器である。1~3は土師器杯Dで、1は外面下半を手持ちへら削り後内外面をへら磨きし、内面に黒色処理を施す。2・3は、外面は下半を手持ちへら削りのみでへら磨きは行なわない。内面も黒色処理を施していない。4は赤褐色の緻密な胎土の土器で、外面底部は手持ちへら削り、体部は横へら磨きを施す。内面には斜行暗文を施している。いわゆる畿内系の暗文土器である。須恵器は杯A(8・9)・杯B II(10)・杯蓋A(5~7)・皿A(11)・高杯(12)がある。杯Aは底部回転へら切りで小形の8と、口径のやや大きい9がある。10は口径20cmを測る。杯蓋Aは内面の返りが比較的長く、5・6では口縁端部より下に突き出す形となっている。煮炊具は土師器甕A・甕B・甕F(16・17)・甕G・小型甕A(13・14)・小型甕B(15)と多様である。須恵器貯蔵具は甕Eが1片あるのみである。1期の土器様相である。

SB129 図版143

食器は土師器と須恵器がある。1は土師器杯Eで内面縦へら磨き、底部外面を手持ちへら削りする。2は土師器高杯の脚部である。3は須恵器杯Aで底部回転へら切り、口径13cmである。4・5は杯蓋Aで内面の返りは口縁より内側に納まっている。煮炊具は土師器甕A(6・7)と甕B・甕Fがある。6・7の底面には木葉痕が残る。須恵器貯蔵具は甕の体部破片が2片のみである。1期の土器様相である。

SB131 図版143

遺物は小片が多い。1・2は須恵器杯Aで、底部回転へら切り、2は手持ちへら削りを施す。3は杯蓋Aで口径12cmである。4は口頸部が内湾する鉢Bである。煮炊具は土師器甕Bと甕F(5)がある。1期の土器様相である。

SB132 図版144

杯蓋A(1)と甕Fがある。1は扁平な器形で、返りの部分が突き出している。天井の回転へら削りが比較的広くなされ、宝珠形のつまみも大きい。口径12.6cmである。1期の土器様相である。

SB133 図版144

混入遺物が多い。1は土師器高杯。3は須恵器杯蓋Aで軟質の焼成のため器表が摩耗しているが内面には返りが付く。4は土師器甕Fである。1期の土器様相である。

SB134

カマドから土師器甕Bと甕Cを出土した。食器はない。5期前後の様相か。

SB136 図版144

食器は須恵器を主体に黒色土器Aが少量ある。1は黒色土器A杯A II、2は杯A Iで、底部回転糸切り後底部周辺を手持ちへら削りしている。3の須恵器杯Aは回転糸切り後底面を手持ちへら削りする。5は

杯BIV、6は杯BIIIである。4の杯蓋Bは美濃須衛窯産である。煮炊具は土師器甕B(7)と小型甕Dがあり、7は底部外周をへら削りする。8は平底の甕である。5期の土器様相である。

SB137 図版144

食器は黒色土器A(1~5)・須恵器(6・8)・軟質須恵器(7)・灰釉陶器(9・10)がある。灰釉陶器はハケ塗り施釉で内面に重ね焼き痕が残る。煮炊具は土師器甕Bと小型甕Dの2種。12は須恵器長頸壺A、13の甕Aは頸部に櫛描波状文を二段に施す。7期の土器様相である。

SB138 図版144

食器は黒色土器Aが主体で須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器がある。土師器は盤A1点である。6は体部の開きの強い須恵器杯A、7は軟質須恵器杯Aである。煮炊具は土師器甕B(8)・甕C・小型甕Dで、8は底部周辺をへら削りする。貯蔵具は須恵器で長頸壺A・短頸壺・甕がある。7期の土器様相である。

SB139 図版144

食器は須恵器のみで黒色土器Aはない。須恵器杯BIIIで体部の開きの強い形態である。煮炊具は土師器甕B(4)と小型甕D(2・3)で、4は底径の小さな細身の器形で底部外周をへら削りしている。貯蔵具はない。5期の土器様相である。

SB140 図版145

食器は土師器・黒色土器A・須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器がある。量的に最も多いのは黒色土器A、次いで軟質須恵器、須恵器、灰釉陶器の順で、土師器は小片のみである。黒色土器Aは、杯AII(1~3)・杯AI(5・6)・椀(7)・皿B(8・9)・鉢A(4)があり、ほとんどの器種が揃っている。9は底面に糸切り痕が残る高台は付けずに焼成されている。10~13は須恵器、14~16は軟質須恵器である。13は底径15cmを測る杯BIIで混入であろう。灰釉陶器は17が椀・18が皿で光ヶ丘1号窯式、19の段皿は黒笹14号窯式である。煮炊具は土師器甕Bと小型甕D(20・21)がある。20・21の底面には糸切り痕が残る。貯蔵具は須恵器と灰釉陶器があり、22・23は須恵器短頸壺Cで底部回転糸切り、24は長頸壺Aである。25は甕Eであろうか。26・27は灰釉陶器長頸壺である。8期の土器様相である。

SB141 図版145

食器は黒色土器A主体で、須恵器と軟質須恵器・灰釉陶器が少量ある。5は黒色土器A鉢Aで底部回転糸切り、口径26cm、器高10.5cmである。6は片口の付く鉢Aで、体部下半も回転へら削りする。7は須恵器杯A、8・9は須恵器短頸壺Cで、10・11は軟質須恵器Aである。12~17は灰釉陶器で施釉はハケ塗り、底部のあるものは内面に重ね焼き痕が残る。底面に糸切り痕が残るものはない。17の段皿は口径19.4cmを測る。煮炊具は土師器甕B(18・19)と小型甕D(20・21)で、甕Bの口縁部は直立気味で、器壁の厚い底部周辺はへら削りしている。貯蔵具は須恵器と灰釉陶器があり、灰釉陶器は長頸壺A(22)がある。7期の土器様相である。

SB142 図版146

土師器杯AII(1・2)があるのみである。1は口径9.1cm・器高2.2cm、2は口径9.5cm・器高2.1cmである。底部回転糸切り、口縁部をやや内湾させる方向で挽き上げている。14期の土器である。

SB143 図版146

遺物は小片で少ない。食器は黒色土器Aと須恵器があるが須恵器のほうが多い。1は黒色土器A杯AI、2は須恵器杯Aで、3は須恵器の鉢Aである。6期の土器様相である。

SB144 図版146

食器は土師器・黒色土器A・須恵器・軟質須恵器がある。1・2は土師器、3・4は黒色土器A、9は須恵器、11は軟質須恵器の杯Aである。煮炊具は土師器甕Bと小型甕D(12)、貯蔵具は須恵器で、長頸壺・短

頸壺・甕がある。8期の土器様相である。

SB145 図版146

食器は土師器と須恵器がある。土師器は非ロクロ調整の鉢(7・8)である。8は底部外面をへら削り、体部外面は縦へら磨き南面は横へら磨きを施す。7は丸底で体部が内湾する形態である。器表は荒れて調整は不明であるが、内面はへら状の工具の痕跡が残る。1～4は須恵器杯蓋Aで、4が軟質の焼成のほかは固い焼きである。いずれも天井部の回転へら削りは広い範囲に施される。内面の返りは短い。1のつまみは扁平で大きい。1は口径10.6cm・器高3cmである。5は須恵器杯Aで底部を回転へら削りする。口径10.6cm・器高4.1cmである。6は須恵器鉢Cで口縁端部に面を作る。煮炊具は土師器甕A・甕F・小型甕A・小型甕B(9・10)があり甕Aには底面に木葉痕が残るものが2個体ある。1期の土器様相である。

SB146 図版146、第37表、PL66・72

煮炊具が土器の大部分を占め、食器は1の須恵器のみ。美濃須衛窯産である。煮炊具は土師器甕A(4・5)・甕B(3・6)・甕F・小型甕A(2)がある。6は口径21cm・器高33.6cmを測る。須恵器壺・甕類の貯蔵具はない。1期の土器様相である。

SB147 図版147、第208図、PL65

遺物は多く特に食器の量が多い。土師器は杯A IIのみで、1・2は軟質須恵器に近い印象を受け、2には内面に黒斑が残る。黒色土器Aは杯A I・杯A II・椀・皿B・鉢Aがある。21は口縁部を波状にするもので、口径19.4cm・器高4.7cmである。須恵器杯Aは、24で口径12.8cm・器高3.4cm・底径5cmと底径が小さく体部の外傾が強い形態である。灰釉陶器はすべてハケ塗りで施釉し、40は底部内面に「の」字状に一筆のハケ塗りを施す。47は底部に回転糸切り痕を残し、体部外面を縦へら削りする。灰白色を呈し一見して須恵質に見えるが胎土・調整は土師器甕Cに類似しており、土師器甕が二次的に還元焙焼成を受けたものかもしれない。8期の土器様相である。

SB148 図版148、第38表、PL60

食器は非ロクロの土師器が主体で少量の須恵器がある。土師器杯は杯F(1・2)と杯E(3)である。1・2は体部に稜をもち、内面と稜より上はへら磨き、下はへら削りである。4・5は体部を指ナデする。6・7は須恵器杯Aで小形である。土器の大部分を占める煮炊具は、土師器甕A(8)・甕B(9)・甕F(11・12)・小型甕B(10)がある。須恵器の貯蔵具はない。1期の土器様相である。

SB149 図版148

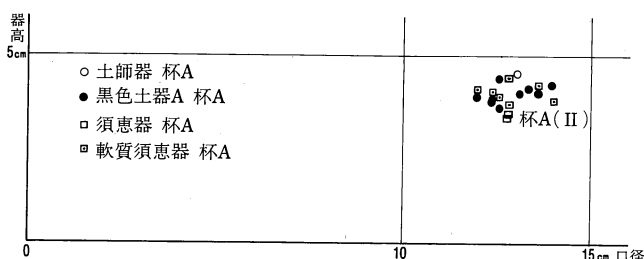
食器は土師器・黒色土器A・須恵器があるが、土師器の非ロクロ杯(1)は土師器甕A(6)とともに、重複するSB148からの混入であろう。黒色土器A(2・3)・須恵器(4・5)ともに杯Aのみである。煮炊具は土師器甕Bと小型甕D(7)のである。8は須恵器平底の甕である。7期の土器様相である。

SB150 図版148

食器は土師器・黒色土器A(1～5)・須恵器(6・9)・軟質須恵器(7)・灰釉陶器(8)がある。黒色土器Aは椀(4)がある。煮炊具は土師器甕Bと

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
黒色土器A	杯A II	2	15	} 2 67%	3
須恵器	杯蓋A	1	85		
煮炊具					
土師器	甕 A	6	4,300	} 10 77%	4・5
	甕 B	2	670		3・6
	小型甕A	2	460		2

第37表 SB146出土土器の構成



第208図 SB147出土土器 法量分布図

小型甕Dがあり、土師器甕Bは図示してないが口縁部が直線的に伸びる形態である。7期の土器様相である。

SB151 図版149、第39表
PL66・67・71

土器の量は多く、特に食器の量が多い。食器は土師器・黒色土器A・須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器がある。土師器は盤Aで、黒色土器Aは杯A II(1~7)・杯A I(8・9)・鉢A(10~12)・椀(13~16)・皿B(17~21)がある。須恵器は杯A(22~31)が主体で、杯Bは34・35のIVとIIIの法量があるが量は少ない。36は軟質須恵器である。灰釉陶器は椀(37~41)、皿(42)がある。底面から体部下半にかけて回転ヘラ削りを施し、施釉はすべてハケ塗りである。43は円盤状の高台をもつ緑釉陶器椀で、胎土は黄味を帯びた灰白色で軟質の焼成である。釉は内外面とも全面に施釉されているが、剥落が激しくところどころにやや白みを帯びた透明の釉が残るのみである。煮炊具は土師器甕Bと小型甕Dがあるが、図示できるものが少なく小型甕D(44~46)を図示したのみである。貯蔵具は須恵器と灰釉陶器で、小破片のため図示できるものは少ない。47は須恵器の甗で2期の土器の混入である。48の須恵器甗口縁は甕Dの可能性がある。7期の土器様相である。

SB152 図版148、PL68

遺物は少ない。食器は黒色土器Aと須恵器があるが、黒色土器A(1)が多い。煮炊具は土師器甕Cと小型甕D(2)がある。7期の土器様相である。

SB153 図版150、第40表、第209図
PL67・68

土器の量は多い。食器は土師器・黒色土器A・須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器がある。土師器は盤Aの口縁部破片(34)1点のみで、端部に面をもつものである。黒色土器Aは杯A II(1~17)が主体で、杯A Iは(18)の1点が確認できるのみである。椀は19~21で、20・21が断面三角形の高台であるのに対し、19は角高台状を呈し、破損後底部中央に穴が開けられている。22~24は皿Bである。須恵器は杯A(25・26)が主体で、杯B・杯蓋Bは小破片のみである。27~31は軟質須恵器で、内面を底部中央から滑らかに口縁まで挽いている。灰釉陶器は皿(32)と段皿(33)のみで椀はない。両者とも底面を回転ヘラ削りし、ハケ塗り施釉する。32は口径15.4cm・器高3.3cm、33は口径18.6cm・器高3.8cmを測る。煮炊具は土師器甕B(41

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯E	1	60	60% } 40%	3
	杯F	2	25		1・2
	鉢	2	465		4・5
	高杯	1	30		
須恵器	杯A	4	70	40%	6・7
煮炊具					
土師器	甕A	7	6,540	56% } 14	8・9
	甕F	4	3,745		11・12
	小型甕B	3	790		10
貯蔵具					
須恵器	横瓶	1	40	4%	

第38表 SB148出土土器の構成

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	盤A	2	205	45% } 123	
黒色土器A	杯A I	6	175		8・9
	杯A II	81	2,000		1~7
	椀	21	845		13~16
	皿B	8	580		17~21
	鉢A	7	850		10~12
	不明		2,140		
須恵器	杯A	93	2,580	85% } 270	22~31
	杯B III	4	120		
	杯B IV	6	120		34・35
	杯蓋A	2	10		
	杯蓋B	13	190		
	鉢A	4	165		
軟質須恵器	杯A	11	360	11% } 4%	36
緑釉陶器	皿	1	20	1% } 1%	43
灰釉陶器	椀	11	200	12% } 4%	37~41
	皿	1	15		

煮炊具

土師器	甕B	9	3,520	6% } 20	
	小型甕D	11	2,510		44~46

貯蔵具

須恵器	長頸壺A	1	25	89% } 27		
	短頸壺	2	175			
	甕A	5	1,654		9%	48
	甕D	1	35			
	甕	14	3,095			
	甗	1	55			47
灰釉陶器	長頸壺	3	110	3% } 11%		

第39表 SB151出土土器の構成

～45)と小型甕D(38・39)の2者の組合せである。貯蔵具は須恵器と灰釉陶器があるが、小片が多く図示できるものはない。7期の土器様相である。

SB154 図版148

遺物は少ない。食器は須恵器杯Aの1点のみ、底部回転糸切りである。煮炊具は土師器甕B(1)と小型甕Dがある。甕Bには体部内面にもハケ目調整を施したものがあ

SB155 図版151、PL72

る。4期もしくは5期の土器様相である。
食器は土師器と須恵器がある。土師器は杯C(1)で、体部外面は横方向のへら磨き、内面には放射状の暗文が施されるが、底部内面には観察されない。底面は手持ちへら削りが施される。須恵器杯A(2・3)はすべて底部回転糸切りである。煮炊具は土師器甕B(4～9)・甕C(5)・小型甕B(7・8)・小型甕D(6)がある。甕Bのうち9は口径10.4cm・器高36.5cm・底部9cmを測り、体部外面上半と内面に横方向のハケ、外面底部周辺はへら削りを施している。47はロクロナデ状のヨコナデ調整である。甕Cは口縁部を緩やかな「く」字状に折る形態である。貯蔵具は須恵器のみで、いずれも小片である。5期の土器様相である。

SB156 図版149

1は土師器の鉢で、非ロクロ調整で内面は放射状の方向のへら磨きを施し、黒色処理を行なう。須恵器杯Aは底部回転へら切り(2)と回転糸切り

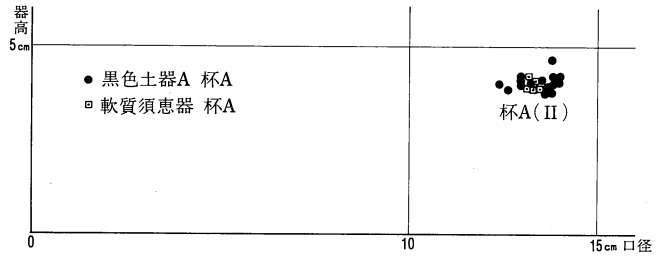
(3)がある。煮炊具は土師器甕Bと小型甕Dがあり、甕Bには内面にハケ目調整を施すものがある。4は須恵器短頸壺Bで肩で屈曲し稜をなす。美濃須衛窯産の可能性が有る。4期の土器様相である。

SB157 図版149

土器は煮炊具がほとんどで、食器類・貯蔵具類は少ない。食器は非ロクロ調整の土師器鉢(2)と須恵器杯蓋A(1)がある。杯蓋Aは灰白色の緻密な胎土で、美濃須衛窯産である。煮炊具は図示できないが、土師器甕A・甕F・甕G・小型甕Aがある。須恵器の貯蔵具は甕Eがある。1期の土器様相である。

SB158 図版151・152、第210図

食器は黒色土器Aと須恵器・軟質須恵器があり、量的には黒色土器Aが主体となる。黒色土器Aは杯A II(1～4)と杯A I(5～7)・碗(8・9)・鉢A(10)がある。須恵器は杯A(11～14)が主体で、12の法量は口径が12.6cm・器高2.9cm・底径5.7cmである。杯Bは15がIII、16がIVである。17・18は軟質須恵器である。煮炊具は土師器甕B(21～25)・甕C(20)と小型甕D(19)の組合せで、甕Bは21では口縁部が「く」字に外反し、ハケ目も底部まで施されているもの(22・23)と、底部周辺をヨコナデあるいはへら削りするもの24・25が



第209図 SB153出土土器法量分布図

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	盤 A	1	140	1%	34
	杯A I	2	180		18
黒色土器A	杯A II	30	2,540	51 62%	1～17
	碗	7	330		19～21
	皿 B	6	550		22～24
	鉢 A	6	670		35～37
	須恵器	杯A	12		370
杯B II	1	20			
杯蓋B	3	85			
鉢 A	1	90	40		
軟質須恵器	杯A	9	540	9 11%	27～31
灰釉陶器	皿	3	200		4
	段皿	1	80	5%	33
煮炊具					
土師器	甕 B	5	2,990	9 8%	41～45
	小型甕D	4	300		38・39
貯蔵具					
須恵器	長頸壺A	4	85	15 88%	17 16%
	短頸壺A	1	25		
	短頸壺	1	2		
	甕 E	1	170		
	甕	8	935		
灰釉陶器	長頸壺	2	30	2 12%	

第40表 SB153出土土器の構成

ある。煮炊具は須恵器のみで、長頸壺A(27)・短頸壺C(26)のほか甕D・甕Eがある。7期の土器様相である。

SB159 図版152

土器は少ない。食器は土師器・黒色土器A・須恵器・灰釉陶器があるが、灰釉陶器(4)は光ヶ丘1号窯式で混入であろう。須恵器杯

A(2・3)は底部回転糸切りで、底径の大きな体部の開きの弱い形態である。煮炊具・貯蔵具はいずれも小片である。5期の土器様相である。

SB160 図版152

遺物の量は少ない。食器では、須恵器杯BIV(1)と杯蓋B、煮炊具で土師器甕A・甕B・甕F・小型甕A(2・3)があるのみである。3の底面には木葉痕が残る。2期を前後する段階か。

SB161 図版152

食器は黒色土器Aと須恵器がある。黒色土器Aは杯AII(1)と杯AI(2・3)があり、椀・皿Bはない。煮炊具は土師器甕B(7・8)・小型甕D(6)の組合せである。貯蔵具は須恵器甕の破片であるのみである。7期の土器様相である。

SB163 図版152

食器は黒色土器A・須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器がある。5は黒色土器A小椀と思われ、底面に糸切り痕を残す。6は須恵器杯A、7は軟質須恵器である。8は灰釉陶器椀である。10・11は土師器甕Bで10は口縁部が肥厚するものである。12は須恵器長頸壺Aである。このほか須恵器貯蔵具に短頸壺・甕A・甕D、灰釉陶器は壺の体部と9の壺蓋Aがある。7期の土器様相である。

SB164 図版154

土器は全体に少なく、黒色土器Aの食器が目立つ。食器は黒色土器Aと須恵器があるが須恵器は杯Aが1片あるのみである。図示したのは黒色土器Aのみ、杯AII(1~3)・杯AI(4)・椀(5)・皿B(6)・鉢A(7・8)で黒色土器Aの全器種がある。煮炊具は土師器甕Bが2片のみ。貯蔵具も須恵器甕の体部破片である。7期の土器様相である。

SB165 図版154

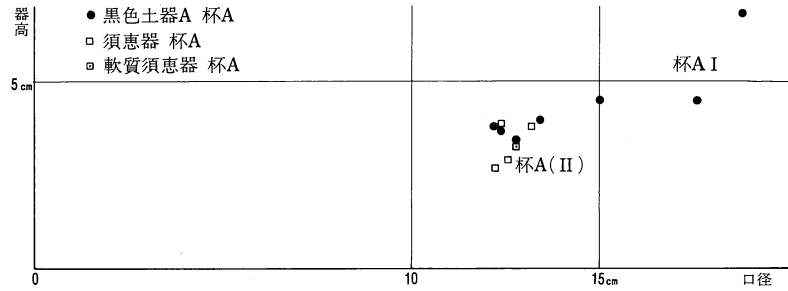
土師器甕A(2・3)が遺物の大半で、他には、須恵器杯A(1)と須恵器壺の口縁部(4)があるのみである。1は底部回転へら切りである。1期前後の土器か。

SB166 図版154

土器は小片のみで少ない。食器は土師器杯AII・黒色土器A杯Aと皿B・灰釉陶器椀である。煮炊具は土師器小型甕D(1)、貯蔵具は灰釉陶器長頸壺(2)がある。7~8期の土器か。

SB167 図版153、第41表、第211図、PL69・70

食器は土師器・黒色土器A・軟質須恵器・灰釉陶器がある。1は土師器杯AIIで口径14.4cm・器高3.8cm、底部回転糸切りである。黒色土器Aは杯AII(2~10)・杯AI(11)・皿B(12~14)・椀(15~17)がある。18~25は軟質須恵器で、内外面に黒斑が残る。完形の23の法量は口径13.8cm・器高4.2cmである。26・27は灰釉陶器椀・皿で、26の内面には重ね焼き痕が残る。両者ともに底面をへら削りする。28~30は黒色土器A鉢で28は須恵器鉢Aの模倣形態と思われる。29・30は鉢Aで底面にへら記号が残る。煮炊具は土師器



第210図 SB158出土土器法量分布図

甕B(34)と小型甕D(31~33)の組合せである。34は口縁部が直立して肥厚する形態であり、体部上部は縦方向のハケ目が部分的にナデ消されている。貯蔵具は須恵器壺・甕A・甕B(35)、灰釉陶器長頸壺(36)がある。35は口縁部での残存10%と小破片のため把手などの存在は不明であるが、球形の器体をもつ直口の甕で、体部タタキ調整後肩の部分に、断面三角形の凸帯を貼付している。8期の土器様相である。

SB168 図版154、PL71

食器は土師器・黒色土器A・灰釉陶器がある。土師器杯A II(1)は口径10.6cm・器高は3.1cmの小形である。2は土師器碗、3・4は灰釉陶器碗・皿で、3は体部外面にロクロ目が、底面には糸切り痕が残る。4の皿は体部外面の回転へら削りが口縁部直下まで及んでいる。5は緑釉陶器碗で、高台は高く、胎土は黄味の強い灰白色軟質で、へら磨き調整は認められない。釉は濃淡のある黄緑色で全面に施される。11~12期の土器様相である。

SB169 図版154、第42表、第212図、PL70

土師器と灰釉陶器の食器のみで、煮炊具・貯蔵具にあたるものはない。1~6は土師器杯A IIで口径9.2~10.6cm・器高1.7~2.3cmを測り、4と底部がやや柱状に伸びる5を除いて器高が2cmをきる皿状の形態である。いずれもロクロ調整で底面には回転糸切り痕を残している。7・8は土師器の小碗で、体部は浅い。9は灰釉陶器耳皿で、口縁をヒグ状につまんでいる。15期の土器様相である。

SB170 図版154、第213図

遺物は少なく、土師器の杯A II(1~4)と杯A III(5)、灰釉陶器の碗、灰釉陶器の花瓶(7)があるのみで、煮炊具にあたるものはない。杯A IIは口径9.1~10.6cm・器高1.9~2.4cmを測る。5は杯A IIIで口径13cmに復元できる。7は脚台を欠くが体部は完形で、頸部に2条、肩部に1条の沈線を施す。体部を回転へら削りしている。14~15期の土器様相である。

食器

種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯A II	1	100	1% 57 81% 71% 11% 15% 2 3%	1
黒色土器A	杯A I	2	145		11
	杯A II	28	990		2~10
	碗	17	835		15~17
	皿 B	4	195		12~14
	鉢 A	5	560		29・30
	鉢	1	140		28
	不明		1,200		
軟質須恵器	杯A	11	870	18~25	
灰釉陶器	碗	1	25	26	
	皿	1	45	27	

煮炊具

土師器	甕 B	5	1,780	14 15%	34
	小型甕D	9	915		31~33
	不明		225		

貯蔵具

須恵器	壺	1	25	5 83% 7%	6 35
	甕 A	1	90		
	甕 B	1	150		
	甕	2	225		
灰釉陶器	長頸壺	1	290	1 17%	36

第41表 SB167出土土器の構成

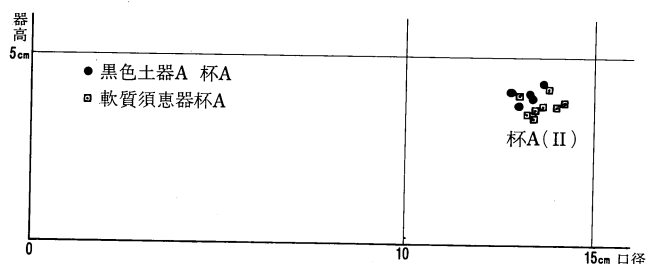
食器

種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯A II	9	505	13 93% 93% 1 7%	14 1~6 7・8
	杯A III	1	20		
	小碗	2	80		
	不明	1	55		
灰釉陶器	皿 B	1	45	1 7%	9

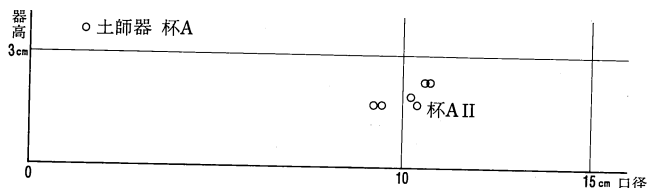
煮炊具

土師器	甕(A)	1	10	1 7%	
-----	------	---	----	---------	--

第42表 SB169出土土器の構成



第211図 SB167出土土器法量分布図



第212図 SB169出土土器法量分布図

SB171 図版154

灰釉陶器小椀(1)が1点あるのみである。高台は断面三角形で、小さく体部の開きも強い。底面に糸切り痕が残る。14~15期の土器である。

SB172 図版154、PL71

中国製白磁が3点出土したのみである。1・2は薄手で、黄味を帯びた透明釉には貫入が入り、

口縁は小さな玉縁を作る白磁椀II類。3は灰色を帯びた透明釉が掛かり、口縁は大きな玉縁を作る椀IV類で、体部外面の回転へう削りは口縁部直下まで及ぶ。15期に伴う。

SB173

黒色土器A杯または椀の破片と羽釜の小片があるのみで、土器の様相はつかみ難い。

SB174 図版154、PL71

食器は杯A II(1・2)と山茶碗、白磁椀IV類(3)がある。煮炊具で羽釜(4)がある。土師器杯A IIは底部回転糸切りで、1は口径9cm・器高1.7cm、2は底部が厚く口径10cm・器高2.9cmである。白磁椀は口縁に大きな玉縁を付けるIV類椀で、体部外面は口縁直下まで回転へう削り、内面見込みには沈線が施される。灰色を帯びる透明釉である。15期の土器様相である。

SB175 図版155

遺物は少ない。土師器杯A II・III(1)と椀(2)・羽釜A(3)があるのみである。1は底部を回転糸切りするもので器形の全容は知れない。15期の土器群か。

SB176 図版155、第43表

遺物は少ないがほとんどを図示できた。1は土師器杯A IIで口径8.4cm・器高1.7cmである。2の土師器杯A IIIは口径14.5cm・器高3.6cmを測る。いずれも底部には回転糸切り痕が残る。3は口縁内部に沈線を巡らす灰釉陶器椀で、釉は漬掛けで施される。4は羽釜A、5は羽釜の底部で、底面には砂粒が付着するいわゆる砂底となる。15期の土器様相である。

SB177 図版155

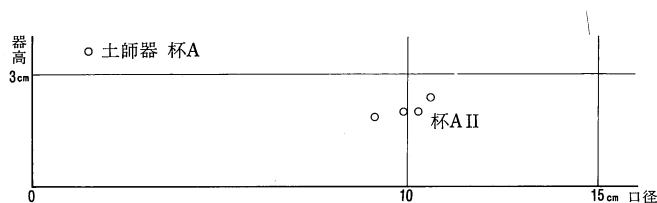
遺物は少なく土師器杯A II・鉢(2)・土師器甕(1)・羽釜Aがある。1は口径25cmを測るもので、体部内外面をロクロ状のヨコナデを施している。2は非ロクロ調整の鉢で、底部内面付近、口縁部周辺に指頭圧痕が残る。14期前後と考えられるが不確定である。

SB178 図版155

土師器杯A II(1)と土師器杯A III(2)があるのみである。1は口径9.5cm・器高1.9cmで、2は口径14.8cmを測る。14期の土器様相である。

SB179 図版155、第44表

食器のみである。土師器杯A II(1)と杯A III(2)、灰釉陶器椀(3)である。1は口径9cm・器高1.4cm、2は口径13.8cm・器高3.5cm・底径7cmで底径の大きな形態で底部には糸切り痕が残る。15期の土器様相である。



第213図 SB170出土土器法量分布図

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯A II	2	25	4 80%	5 71%
	杯A III	2	70		
灰釉陶器	椀	1	15	1 20%	3
煮炊具					
土師器	羽釜	2	480	2 29%	4・5

第43表 SB176出土土器の構成

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No.
土師器	杯A II	2	30	5 83%	6 100%
	杯A III	2	95		
	不明	1	5		
灰釉陶器	椀	1	5	1 17%	3

第44表 SB179出土土器の構成

イ 掘立柱建物址出土土器

ST 2 図版155

柱穴P₂から出土した須恵器杯A(1)と、黒色土器A椀(2)を図示した。1は底部回転糸切りで口径14.8cm・器高3.9cm・底径7.6cmに復元できる。器壁はやや厚い。2の黒色土器A椀も底面に糸切り痕を残す。7期の土器である。

ST 5 図版156

掘立柱建物址の柱穴と建物に伴うと思われるが土坑から出土した遺物がある。図示した1の須恵器甕は、建物に伴うと思われる土坑(SK137)から出土した。最大径部で直径90cmに近い法量をもつ。建物の柱掘り方からは黒色土器A杯II・須恵器杯A・土師器甕B・須恵器長頸壺A・短頸壺が出土している。7期を前後する時期の遺物である。

ST 6 図版155

P₂掘り方から須恵器杯A II(1)・須恵器長頸壺A・須恵器甕A(2)が出土した。1は底部回転糸切りである。5～6期の土器か。

ST 7 図版155

須恵器杯A(1・2)と土師器甕Bが出土した。1は薄手で体部の外傾は強い。2は底部回転へら切りである。土師器甕Bは図示していないが、体部下半の破片で器壁は薄く、底部周辺のへら削りは施されていない。1と土師器甕Bは6期前後の土器か。

ST12 図版155

P₅の掘り方から土師器甕Aと須恵器鉢A(1)が出土した。1は口縁部を折り返して口縁帯を作るもので、口頸部内面にはカキ目が施される。2期を前後する時期の土器であろう。

ST22 図版155

P₁の柱痕跡底部から1の須恵器杯Aが逆位で出土した。底部回転へら切りで完形である。2期の遺物である。

ST27 図版155

柱掘り方から黒色土器A杯A・椀・軟質須恵器・須恵器甕・須恵器鉢A(1)が出土した。7～8期の土器である。

ST30 図版156

柱穴より黒色土器A杯A II(1)・椀(2)・軟質須恵器(3)が出土した。1・2はP₁₀から、3はP₄からの出土である。7～8期の遺物であろう。

ST31 図版156

須恵器杯A(1)・土師器高杯・土師器甕B・須恵器甕(2・3)がある。

ST34 図版156

P₄の柱掘り方から1の黒色土器A皿Bが出土した。口縁部を欠くが直線的に開く体部をもち、口径13.6cmである。7～8期の土器である。

ST39 図版156

P₅の柱掘り方から黒色土器A杯A(1)と須恵器杯A(2)が出土した。2はロクロ目の強く残る体部の外反の強い形態で、6～7期の土器と考えられる。

ST43 図版156

いずれも柱掘り方からの出土遺物であるが、黒色土器A杯A II(1)と軟質須恵器杯A・小型甕Dがある。7～8期の土器であろう。

ST44 図版156

柱掘り方から黒色土器A椀(1)・須恵器杯A(2)・土師器甕A・須恵器甕が出土した。1は底部が厚いもので、皿Bの可能性もある。2は口径13.2cm・器高3.8cm・底径6.4cmを測る体部の外傾の弱い形態である。6～7期の土器である。

ST48 図版156

柱掘り方から、土師器杯A II、黒色土器A杯A II、須恵器杯A(1)・杯蓋B、土師器甕A・甕B・須恵器甕が出土した。1はP₂出土で底面に回転ヘラ削りを施す。須恵器杯蓋Bは美濃須衛窯産である。須恵器杯A・杯蓋B・土師器甕Aの2期の土器と、その他の7～8期の土器の2時期のものが掘り方内で混在している。

ST49 図版156

柱掘り方から黒色土器A杯A(1)、須恵器杯A・杯蓋A、土師器甕A、須恵器甕が出土した。1はP₂出土である。須恵器杯蓋A・土師器甕Aは1～2期の土器で、黒色土器A杯AはIは6～8期の土器である。

ST53 図版156

柱掘り方から黒色土器A杯A II(1・2)、須恵器杯A(3・4)・杯B(5)、灰釉陶器椀(6)、須恵器甕E(7)が出土した。須恵器杯Aは器壁が薄く体部の外傾の強いものである。6は光ヶ丘1号窯式である。7は体部最大径部に板状の把手を付ける。7～8期の土器である。

ST56 図版157

柱掘り方からの出土で、須恵器杯A・鉢A、軟質須恵器杯A(1)、灰釉陶器椀、土師器甕B、須恵器短頸壺・甕がある。7～8期の土器であろう。

ST57 図版157

土師器杯E(1)、黒色土器A杯A I、土師器甕Bがある。1は内面を黒色処理しているがヘラ磨きの方向等は不明である。口径は18cmを測る。

ST58 図版157

柱掘り方から出土した。1は黒色土器A杯A I、2は黒色土器A椀である。3・4は須恵器杯Aで器高の低い、体部の開きの強い形態である。5は小型甕Dである。7期の土器様相を示す。

ST59 図版157

柱掘り方から黒色土器A椀(1)、須恵器杯A、土師器甕Aが出土した。

ST61 図版157

柱穴から黒色土器A杯A II(1)・土師器甕B(2・3)が出土した。3は体部が強く開く形態で、底部周辺を手持ちヘラ削りしている。7～8期の土器か。

ウ 柵址出土土器

SA 3 図版157

東から2つ目の柱穴から出土した須恵器を図示した。1は底部回転糸切りの須恵器杯A、2は杯BIVである。3は高杯で脚台は大きく開く。4は長頸壺Bで口縁部は口縁帯を作らずラップ状に開くものである。

SA 4 図版157

1の黒色土器A椀は西から3つ目の柱穴から出土した。底部に糸切り痕を残す。

エ 溝址出土土器

SD 1 図版157

土師器甕Bがある。1は口縁部「く」字に短く外反させるものである。

SD12 図版157

土師器甕Bと小型甕Dがある。1の甕Bは口縁部を短く「く」字に外反させている。

SD23 図版157、PL71

1は須恵器杯A、2は軟質須恵器杯A、3は灰釉陶器碗、4は白磁碗IV類である。水路として利用された遺構と考えられ、須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器など8期の遺物は重複する竪穴などからの混入と考えられる。4は15期に伴う遺物である。

SD26 図版157

食器は土師器杯(1)、須恵器杯A(2・3)が、煮炊具は土師器甕A・甕B・甕F・甕Gが、貯蔵具は須恵器短頸壺・甕Aがある。1は赤褐色緻密な胎土で体部外面へラ削り後横へラ磨き、内面は暗文状に縦方向にへラ磨きを施す。2・3は須恵器杯Aで底部回転へラ切りである。

SD38 図版157

食器は土師器と黒色土器A(1・2)・須恵器(3)・軟質須恵器・灰釉陶器(4・5)がある。灰釉陶器はいずれも三日月高台で、施釉はハケ塗りである。

オ 土坑出土土器

SK12 図版157

黒色土器A杯A II(1)と杯A I(2)を図示した。他に土師器甕Bと小型甕Dがある。

SK39 図版157

1は土師器非ロクロ調整の杯、2は須恵器杯Aで回転へラ切りの可能性もある。3は杯蓋Bである。

SK101 図版157

1は土師器小型甕Bで底面には木葉痕が残る。2は高杯で体部内面を黒色処理する。

SK156 図版158

1は土師器杯A II、IIは高杯の脚部、3は黒色土器A碗である。

SK187 図版158

食器・煮炊具・貯蔵具がある。食器は須恵器のみである。1・2は杯Aで底部回転へラ切り、3は内面に返りをもつ杯蓋A、4・5は杯蓋Bで5は美濃須衛窯産である。7は直線的に開く形態で口径25cmを測る器種は不明である。8は鉢B、9は皿Aである。煮炊具は甕Aと甕B、貯蔵具も須恵器のみで、10は長頸壺、11は鉢A、12は短頸壺である。2期の土器である。

SK188 図版158

小片だが土器は多い。1は土師器杯Fで体部に稜をもち内外面は丁寧にへラ磨きで仕上げる。2は須恵器杯蓋B、3は杯B V、4は盤である。5は鉢Cである。

SK190 図版158

底部回転へラ切りの須恵器杯A(1・2)を図示した。他に食器では、非ロクロ調整の杯、煮炊具では甕Aと甕Bがある。

SK193 図版158

1は手捏ねの土師器で、外面を手持ちへラ削りする。2・3は須恵器杯Aで底部回転へラ切り、4は高杯か。

SK249 図版159

1は軟質須恵器杯A、2は灰釉陶器長頸壺である。

SK348 図版159

1・2は黒色土器A杯A I・II、4・5の須恵器杯蓋Bは美濃須衛窯産である。

SK414 図版158

土師器甕C(1)を図示した、口縁部は「く」字に外反する。食器には須恵器杯A・杯Bがある。

SK518 図版159

1は土師器杯Cで内面には放射状の、外面には横方向の暗文状のへら磨きが施されている。

SK534 図版159

1は黒色土器A鉢A、2は須恵器杯Aで底部回転糸切りである。3・4は須恵器鉢A。食器は他に、黒色土器A杯Aと須恵器杯Aがある。

SK576 図版158

土師器杯D(1)を図示した。体部外面はヨコナデ、下半はへら削りを施す。内面は横方向のへら磨き後、黒色処理する。

SK606 図版159

1は須恵器杯蓋B、2は鉢Cである。

SK676 図版159

土師器甕B(1・2)が2点あるのみである。体部内面にもハケを施し、底部外周は横方向にハケを巡らしている。

SK800 図版159

杯A(1・3)は、1が須恵器、3は軟質須恵器である。

SK804 図版159

1は黒色土器A杯A IIであるが2.7cmと器高は低い。2は土師器小型甕C、3は須恵器長頸壺Aである。

SK805 図版159

1は黒色土器A杯A I、2は皿B、3は灰釉陶器碗である。

SK840 図版160

黒色土器A碗(1)と鉢A(2)、土師器小型甕D(3)を図示した。

SK841 図版159

食器はほとんどが黒色土器A(1~3)である。煮炊具では小型甕D、貯蔵具では須恵器甕がある。7~8期の土器群か。

SK977 図版160

須恵器杯蓋A(1)を図示した。内面の返りは小さく、つまみは扁平で大きい。天井部は半分以上を回転へら削りしている。他に土師器杯Dがある。

SK1224 図版160

黒色土器A鉢Aが1点完形で出土した。口縁部に片口を付する器形で、口径26.4cm・器高12.1cm・底径9.6cmである。

SK1225 図版160

食器は黒色土器A(1~3)と軟質須恵器(4・5)がある。煮炊具は土師器甕Bと小型甕D、貯蔵具は須恵器甕の構成で、7~8期の竪穴住居址に見る土器構成である。

SK1258 図版160

1は土師器杯A IIで底部に糸切り痕を残す。口径10cm・器高2.2cmである。

SK1259 図版160

1は土師器杯A IIで口径9 cmを測る。ロクロ調整と考えられる。

SK1263 図版160、PL71

1は白磁皿で口径10.2cm・器高2.5cm、胎土はやや粗い灰白色で黒色の微粒を含む。底面をへら削りするほかは体部内外面ともにロクロナデ、黄味の強い透明釉が体部全面に掛かる。他に須恵器杯Aが出土しているが混入である。

SK1276 図版160

1は山茶碗で胎土に黒灰色粒を含む、2は白磁碗IV類の底部で内面と底面を除いた外面に透明釉が掛かる。

SK1278 図版160

1は土師器杯A III・2は小碗である。3・4は灰釉陶器碗で、高台は貼り付け面の大きな断面三角形を呈する。5は土師器の非ロクロ調整の鉢である。8～10は羽釜A、7は足釜の脚部か。6は青白磁小壺である。

カ 自然流路出土土器

NR 3 図版160

1は黒色土器A碗で内面に暗文状のへら磨きが施される。2は須恵器杯A II、3は須恵器鉢Cである。他に土師器甕Aと須恵器の平底の甕がある。

NR 8 図版160

食器では黒色土器A杯A II(1)と底部回転糸切りの須恵器杯A(2)、須恵器鉢A、白磁碗V類(3)、山茶碗がある。煮炊具は土師器甕Bと小型甕D。貯蔵具では須恵器長頸壺A(4)と須恵器甕がある。7期を前後する時期の土器と15期の土器が混在している。

NR 6 図版161

須恵器の壺・甕類が多く、食器・煮炊具は少ない。食器は黒色土器A(1・2)と須恵器(3)・灰釉陶器(4・5)がある。灰釉陶器は漬掛けで施釉され、釉は薄い。貯蔵具は6・7が長頸壺Aで、7には把手が付く。8～12の甕類は、8には口縁に沈線と櫛描波状文による紋様が施される。9は甕Dで肩の部分に凸帯が巡る。12は甕Eで口径63cmの大形である。

(3) その他の土器

遺構外出土土器 図版161

1は土師器杯Fで、内面はへら磨き後黒色処理する。2・3の須恵器杯Aは底部回転へら切り後2は手持ちへら削り、3は回転へら削りを施している。4は須恵器高杯である。5は杯蓋Bで、口径10.6cm・器高2.5cmである。6・7は須恵器杯Aで6は底部回転へら切り・7は回転糸切りである。8は軟質須恵器で杯Aである。9～11は灰釉陶器。12・13は白磁碗V類である。14は白磁双耳壺の把手かと思われる。1～4は中部I地区掘立柱建物址群検出面出土。5は北部I地区、6～11は南部I地区。12は北端I地区南IB層中、13は北部II地区14は北端I地区南出土である。

2 文字関係資料

本遺跡出土の文字関係資料には墨書土器、刻書土器、陶硯、転用硯がある。

(1) 墨書土器 第214図・第45表・図版162～167・PL73・74

墨書土器は総数108点を数える。各固体についての観察は付表7に掲げたので、ここでは総括的記述に止める。墨書土器の遺構別内訳は竪穴住居址90点、土坑15点と遺構外の3点である。大半の住居址が数点の出土であるのに対し、SB109からは6点、SB151からは15点、SB167からは11点が出土し、この3軒の出土点数はなかでも特に多い。

まず、第45表を参考に墨書された器の種類や器種などについて概観する。種類別内訳は黒色土器Aが78点、須恵器26点、灰釉陶器2点、土師器・軟質須恵器各1点で、黒色土器Aの占める割合が71%でほかを凌駕する。黒色土器Aの量が多いのは本遺跡の墨書土器の大半が6～8期の住居址から出土するためもあるだろうが、軟質須恵器に墨書する例が皆無に等しいことを考慮すると、黒色土器Aを意図的に選択したとも考えられよう。

器種は食器の種類に関係なく、杯Aが85点で圧倒的に多い。続いて、椀12点、皿B7点でこれに次ぐ。杯に墨書する種類は黒色土器A、須恵器、土師器など出土個体数の多寡に関わらず、すべての器種に認められる傾向である。黒色土器Aをみると、杯57点、椀11点、皿7点を数え、杯を意図的に選択して墨書したとも受け取れる比率である。須恵器は杯Aに限られるが、これは墨書土器の盛行時期との関連もあろう。なお、本遺跡とほぼ同数の墨書土器を出土した隣接の北栗遺跡の構成とは大きく違わないが、黒色土器Aの皿の出土点数が目立ち、本遺跡の特徴とみて良いかもしれない。

墨書される器の位置、部位についてみてみる。部位は体部と底部に大別され、体部は字句の書き方によってさらに区分される。前者の内訳は体部92点、底部17点で、体部に墨書するものは全体の85%に当たる。これは字句が誰の目にも止まるような配慮から意識的に記したものと予想される。体部に書かれた字句は書き方の不明な30点を除くと、土器を正位に置いた際、字句が正位になるものが28点、逆位が13点、字句が横になる右横位13点、左横位8点で、正位に書く例が目立つ。

続いて、字句をみてみる。読取り可能な字句で最も多いのが『菟』である。SB109から3点、151からは6点が出土した他、SB62・111・152・164に各1点がある。墨書される器の種類は黒色土器Aと須恵器の二種類で、黒色土器Aには杯、椀、皿の3つの器種がみられ、須恵器を含めて杯に墨書する例が多く、いずれも体部に記している。これら以外にも細片のため断定はできないが、1・51・61・63・67なども『菟』になる可能性が高い。字句全体が遺存していた例がSB151の59と68にしかないため、筆跡を判断できる資料は少ないが、28・46・74のように形状が崩れたものがみられたり、文字の大きさが不揃いな点を考慮すると、複数の書き手を想定していいだろう。

『菟』に続いて多い字句が『東』で、10点を数える。SB147から出土した55～57の3点以外は散発的な

	体部正位	体部逆位	体部右横	体部左横	体部不明	右部	計	種類別合計
土師器 杯					1		1	1
黒色土器A 杯	14	8	11	1	18	5	57	
〃 椀	4	2	1	1	3		11	
〃 皿		2		2	2	1	7	79
鉢	1						1	
〃 不明	1				2		3	
須恵器 杯	8	1	1	4	3	9	26	26
軟質須恵器 杯					1		1	1
灰釉陶器 椀						2	2	2
計	28	13	13	8	30	17	109	109

第45表 墨書土器一覧表

其

28

其

41

其

44

其

45

其

46

其

59

其

60

其

62

其

68

其

70

其

74

其

77

東

47

東

48

東

55

東

56

東

57

秋

83

東

79

東

97

東

85

東

99

東

105

秋

84

秋

98

吉

13

吉

14

吉

12

吉

26

今

21

今

23

津

3

里

20

金

33

倉

19

只

27

津

5

津

4

田

24

老

40

本

43

一

80

太

81

長

92

土

93

寺

102

火

104

川

108

第214回 墨書文字集成(1:2)

出土状況である。墨書される食器は黒色土器Aに限られるが、器種は椀、杯、皿、鉢など多器種に亘り、『菟』とは若干様相を異にする。『東』は47・55・79・99のように第7・8画目を伸ばす書き方と48・56・57・85のように伸ばさずに書く二通りがあり、前者は文字を書き慣れた書き手による墨書とも想定される。また、前者は47・55が体部正位に墨書し、79・99が右横位に墨書する。一方、後者も書き方に二通りがみられることからそれぞれ複数の書き手がいたと推定できよう。『東』を墨書した器で、79の黒書土器Aの鉢、57の皿の2つの器種はともに墨書の対象となる例は少ない。特に、57は口縁が波状になり、類例のない器で、墨書土器の性格を考える上で重要である。

『秋』はSB167から3点が出土した。種類の内訳は黒色土器A 2点、灰釉陶器1点で、底部に墨書するものが2点ある。83は黒色土器A体部に逆位で大きな文字を記す。『秋』は同一住居址から出土した状況や筆跡に明瞭な差が認められないことから同一人物による墨書と判断しても良いかもしれない。

この3つの字句以外は単発的に出土する例がほとんどである。

3は「津」または「湊」を意図して書かれたものと考えられるが、同一住居址から出土した4・5も同じ字句になると思われる。4は須恵器の杯で内面には墨痕が観察される。また、31もこれと同一字句になる可能性がある。SB21の13・14は須恵器杯の体部に『里□』と左横位で記される。文字に精通した書き手によると思われる。両者とも同じ方法で、同じ部位を打ち欠いた痕跡が認められ注目できる。なお、『里』の下の字句は残存部位がわずかなため読取ることができない。

SB27の17・18はともに黒色土器Aの杯底部に墨書するが、同じ字句を書こうとしたと推定されるが、両者が漢字を意図して書かれたかは微妙である。19は『倉』である。SB68出土の30も『倉』と記しており、隣接の北栗遺跡にも類例がある。SB29の21は『今』で、SB31からも同一字句が出土した。22は黒色土器A椀の底部付近に習書とも受け取れる墨書がある。24はSB32から出土し、黒色土器Aの皿体部に『田人』と左横位で記される。26は『金吉』であろう。SB21からも『吉』と墨書土器した字句がみられ、同じ文字を書いた可能性が高い。33は『金』である。

SB41出土の37は黒色土器A椀体部に小さな文字を多数墨書する。墨書は口縁を左手に持って、三行程書かれ、細い筆を使用していると推察される。文字は『人』や『長』など部分的に読み取れるが、不鮮明なため解読は困難である。但し、『頁』似た形状の字句が度々観察されることから習書に用いたとも考えられよう。いずれにせよ、今回調査した松本平周辺遺跡では37の他にはこのような墨書土器の出土例はなく、貴重な資料と言えよう。

SB109出土の40は『庄』である。「庄園」や「庄家」などが連想される字句で注目できる。SB151出土の73は須恵器杯の底部に墨書されるが、「田」などが考えられよう。SB167の80は黒色土器Aの杯体部に『一』と大きく墨書する。81は『太』である。遺構外から出土した108と同様、本遺跡に隣接して調査された『松本市島立条里遺構』の第3号住居址に類例がみられる(松本市教委1988)。SK398の92は『長』と須恵器の杯体部が逆位で書かれる。93は「足」なども考えられるが、『之』と判断した。SK1226は『寺』で、須恵器の杯体部の底部付近に正位に墨書される。付近に寺の存在を窺わせるが、断定はできない。

(2) 刻書土器 図版167、PL74

ここで言う刻書土器とは土器焼成後に先端の尖った工具を使用して文字などを線刻したものを指し、土器焼成前に篋書きされた、いわゆる「へう記号」とは区別する。

本遺跡からはSB139から出土した109の1点がある。軟質須恵器の杯体部全体に左横位で『田中』と大きく線刻する。線刻は釘状の工具で1mm弱の幅で一気に刻んでいる。

(3) 陶硯 図版167

陶硯は風字硯1点が出土した。SB110から出土した110は陸部の一角が残存したもので、脚部を欠損して失う。陸部は9mmの厚みがあり、摩滅痕跡が明瞭である。硯背には降灰を被り、整形の痕跡は観察できない。縁は厚み6mm程で、垂直に約2.5cm立ち上がる。内側はヨコナデが観察されるが、外側は降灰のため器面は荒れる。なお、風字硯を出土した遺跡は松本平調査遺跡では本遺跡のこの1点の資料だけであり、注目できる資料である。

(4) 転用硯 図版167

ここで言う転用硯とは土器や陶器がもつ本来の属性を失い、硯として転用されたものを指す。分類や定義については「総論」で述べるが、筆揃えや墨溜めとして使用したものは厳密に区別できないため広義の転用硯として扱うことにした。また、朱を付着する資料については朱墨硯との区別が困難であるため、これに加えた。(図版167のうち、網部は墨や朱の付着を、一点鎖線は摩滅範囲を示す。)

本遺跡出土の転用硯は総数21点を数える。転用された食器の種類は須恵器4点、灰釉陶器6点で、須恵器の内訳は蓋2点、杯1点に分かれ、杯釉陶器は椀5点、皿B1点にそれぞれ分かれる。

朱の痕跡が認められた資料は4点がある。112は須恵器蓋の外面に朱がわずかに観察されるが、朱墨硯用に使ったものではなく、何等かの要因によって付着したものだだろう。117・118・120はともに朱が鮮明にみられる。117は灰釉陶器の椀の体部を打ち欠き、調製を加える。朱は内面全体に薄く認められるが、摩滅痕は明瞭ではない。118は須恵器杯BIVで、朱が底面から口縁直下付近まで観察され、朱溜めとして利用したと考えられる。120は灰釉陶器椀の底部外側に朱が付着するが、朱は高台の付く箇所に鮮明に残る。須恵器を転用するSB18の112、SB28の113は蓋内面を硯面とする。112はクロ目が摩滅して滑らかになり、広範囲にわたって光沢がある。113は美濃須衛窯産で、墨痕が鮮明に残り、摩滅痕も明瞭である。同じ須恵器を転用した116は甕胴部を加工し、内面を硯面として使用する。規格は風字硯とほぼ同じであろうか、墨痕は不鮮明ながら摩滅痕跡は明らかである。

111・114・115・119は灰釉陶器を転用する。このうち皿Bを転用した115を除き、いずれも椀の体部を打ち欠く、加工痕が残る。SB2出土の111は内面に墨痕が薄く残り、摩滅による光沢がある。114は灰釉の被らない範囲に墨痕がある。119は墨痕・摩滅痕は不鮮明ながら、硯に転用する意図から調製を加えたと判断し、転用硯の範疇で捉えた。調製は体部外側からかなり細かく加えられる。

3 金属製品・鉄滓

(1) 鉄製品 図版168～172、PL75～77、付表10

本遺跡出土の古代に属する鉄製品は136点を数える。その内訳は鋤鍬先3点、鎌21点、刀子31点、斧2点、鑿2点、釘8点、鋏1点、鋸5点、鉸具2点、苧引鉄2点、紡錘車8点、用途不明品51点(うち棒状品33点、板状品5点、環状品3点、鉄片6点、不明品4点)である。鉄製品の出土遺構は堅穴住居址59軒掘立柱建物址1棟、柵址1条、畠址1面、土坑4基におよび、このほかは古代遺構の展開する検出面の遺物である。中世段階の土坑4基で、その形態から古代に帰属すると思われる鎌が出土している。鉄製品が数多く出土した遺構としてはSB8の7点、SB128の6点があげられ、SB122で5点、SB2・49・61・174で4点ずつ出土している。以下、器種ごとに記述を進めていく。

なお、X線撮影を行った遺物については、細線で銹を、太線で本体を示している。破損面で断面観察の行えた遺物についても、同様の方法で図示してある。

鋤鋏先 3点とも広義のU字形鋤鋏先であるが、使用により刃部はV字形に近い形状を呈している。1はSB57出土で片側の耳部を欠く。残存する耳部の先端内側はやや膨らみを有し、袋部の深さを増している。2はSB62出土の完形品であるが、腐食が進み刃先側には拳大の鉄滓が付着しており、袋部の深さも明確にできなかった。3はSB128の柱穴掘り方内から出土したもので耳部のみ残っていた。耳部の形状は2に類似する。

鎌 4はSB8出土で先端部を欠く。末端にはほぼ直角に折り返された着柄部が作られるが、想定される柄と身部背縁とのなす着柄角は直角に近い。5はSB33出土で先端と基部をわずかに欠く。刃部は大きく湾曲し、着柄角は60°位である。6はSB64出土で先端と基部をわずかに欠く。刃部と身部は一体化しわずかに湾曲する。着柄部の折り返しは背縁と末端の交わるコーナーに設けられ着柄角は40°である。7はSB83、8はSB84、9はSB117出土でいずれも刃部のみ残存しており、全体の形状は6に近いものであろう。10はSB117出土で基部のみの破片である。幅広であることから大形品になる可能性がある。11はSB97床面出土で、炭化した柄部が着柄された状態で遺存していた。柄は現状で径25mmの丸木材で末端を欠く。炭化材は中島豊志氏の鑑定では、散孔材で単列もしくは複列放射組織・複合放射組織が見られることから、カエデなどが想定されるという。刃部は幅広で大きく湾曲している。着柄部折返しは背縁と末端の交わるコーナーに設けられ着柄角は80°を測る。装着は丸木材に縦に割れ目を入れ、刃先を挟んで折返し部と柄を密着しているが、固定を目的とした巻物などは見られなかった。12はSB117出土の完形品である。着柄部は大きく折返され、装着角は直角に近い。13・14はSB128出土の破片で6と同形状と考えられるが、着柄部の折返しは逆方向である。17はSB176出土で、刃部および着柄部を欠いた基部付近の破片で幅は狭い。18はST58柱穴掘り方内の出土で着柄部を欠くが、刃部の幅・厚さの類似から6と同様の着柄角を取ると判断した。19～21は中世の土坑からの出土品で、22・23は検出面の遺物である。いずれも末端部が折返された形状を取ることから古代の鎌と判断した。着柄角は19が40°、20が80°、21が20°、22が85°、23が30°であった。

刀子 SB8・27・49・50・165より2点ずつ、SB25・35・65・67・79・117・119・120・121・122・131・145・158・161・164・169・174とSK34で各1点ずつ、検出面で2点出土したがそのうち24点(24～47)を図示した。完形品は36のみであり、身部、茎部片の出土も多い。大きさの点ではSB175出土の24が茎部の幅が広い大形品と判断される。また、鎌と同様に使用・研ぎによる消耗が著しく、製品元来の形状は留まりにくいと判断されるが、刀子の形状については次のようなことも指摘できる。身部の棟(背縁)には角棟・丸棟の両方が観察されるが、鑄(しのぎ)造りの刀子は見られず全て平造りである。また、身部と茎部の境目の形状では棟側に区(まち)を有するものと、刃部側に区が見られるもの、両側に区をもつ両区の三者が存在する。25・26・31・32・36・44は両区であった。茎部の形状については先細りし先端が尖る形状の24・45と一定の幅を保ちつつ、円形ないしは方形の茎先を有する36・44が見られる。なお、目釘穴を有する刀子はなかった。SB121出土の36はほぼ完形品で、茎部には木質が銹に置換された状態で柄が残っていた。鋤(はばき)部分にも茎部と直交する方向に幅7mmにわたり繊維組織が観察され、何らかの巻物が施されていたと考えられる。

斧 SB50と151で1点ずつ出土している。48はSB151出土のいわゆる有袋鉄斧である。刃先は消耗が著しい。

鑿・鑿 49はSB49出土で基部を欠く。刃の幅は9mm・厚さ7mmを測る。50はSB97出土の完形品で先端部をわずかに欠く。頭部には敲打による変形が見られることから鑿の可能性もある。

釘 SB41・67・106・109・120・167・168・176から各1点ずつ出土している。全て鍛造の角釘である。頭部の残存するものでは56が敲打しによって、56～53が敲打しと折返しで作出される。51のみが完形品で、

比較的遺存率の高いものを含めて長さを計測すると、51が115mm、52・53が80mm内外、54～56が40～50mmを測り、大中小の3法量に分かれるようである。

鋏 57はSB122より出土した。片刃であり穂部(刃部)から腕部にかけての形状から元支点の和鋏と判断した。

鎌 SB147と中世の土坑SK2284から各1点、検出面で3点出土した。いずれもその形状から古代の鎌と判断される。SB147出土の58は身部先・茎部を欠損するが平根式で身部表面は鋳作りである。59・61・62は細根式の鎌で、59は篋被(のかずき)部を欠く。60は「斧箭広根式」(後藤1939)の鎌で先端を欠くが身部は全体に細身の扇形を呈している。

鉸具 63はSB2出土の完形品で、ほぼ方形を呈する外枠は一体に作られ、T字形の逆金をはめ込んでいる。64はSB57出土で逆金部を欠損する。外金の形状は細身の馬蹄形を呈する。X線像によると逆金は外枠を貫通し、先端がリベット状に敲きつぶされて外枠に固定されている。

苧引鉄 65はSB141出土で腕部先端を欠く。刃先は鋭さが欠け平坦である。SB105出土の66は刃先は鋭いが背部に腕部の痕跡が確認されたため苧引鉄とした。

紡錘車 SB51・62・148で各1点、SB128・SK291で2点ずつ出土した。68・73・74は断面が方形を呈するが、先端に敲出しによって鉤が作り出されているため紡錘車と判断した。SK291出土の72は棒状品であるが断面形や太さが同坑内出土の70・71に良く似る。紡輪の確認されたものでは67が径53mm、69が45mm、70が59mm、71が58mmを測り、69はやや小形である。同一遺構出土の70・71は紡輪の大きさや軸の太さが良く似ている。

用途不明品 棒状品は断面形で3種類に分かれる。方形のI類は23点出土し、そのうち9点(75～83)を図示した。先細りの形状を取る76・79・80は大形の釘の可能性もある。断面が円形のII類はSB141とSN1から出土している。断面が長方形のIII類は7点出土した。そのうち89はL字形に折れ曲がるが、刀子の茎部とも思われる。板状品のうち93は刀子または鎌の可能性もある。SK554出土の94・95は同一地点で検出されたものである。著しく腐食が進行しX線像でも不明瞭であるが、94は薄い長方形の鉄板の表裏にさらに板材が重なり、60mmの間隔を置いて長さ8mm・径3mmのリベット状の棒状品が垂直に打ち込まれていた。95でも3枚以上の鉄板が確認され、91mmの間隔を置いてリベット状の棒状品が打ち込まれていた。これらは形状から「摘み鎌」(山口1978)が何枚か付着したものと考えられるが、疑問な点も多い。SB88から出土した96はV字形を呈する鍛造品である。腕部の断面観察からは内側縁は平で幅2mmの棟を有し外側縁には刀子状の刃部が見られる。下半部は腐食が著しく形状は不明である。おそらく2本の腕の間に柄が装着されて使用されたと思われるが類例がなく用途は不明である。SB173から出土した97は断面が棒状の円形を呈し、頭部は敲出しにより平にされ、そこに楕円形の穴が開けられていた。98～100は環状品である。98・99は破片で全体の形状は不明であるが、何らかの工具の一部と考えられる。SB129出土の100は側面の形状から刀子類の茎の鋤と考えられる。

(2) 銅製品 図版172、付表15

本遺跡の古代の遺構からは3点の銅製品が出土している。

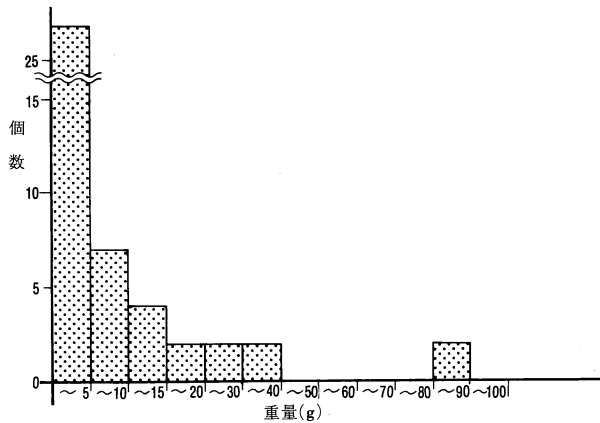
銅椀 2点出土した。SB97出土品は細片であるが銅椀の底部と考えられる。101はSB151出土の底部片で、底部は径70mmと推定される。

不明品 SB102出土の102は断面がI字形を呈する棒状品であるが、焼損し変形が著しい。鉄製の地金の上に銅が鍍金されたらしく、表面には緑色の錆が見られる。

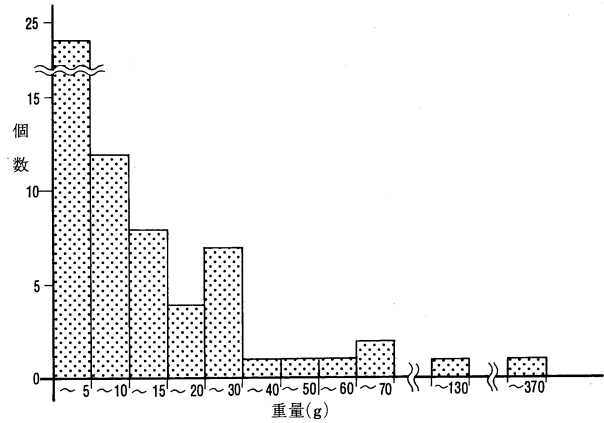
(3) 鉄滓 第215図、PL77、付表14

本遺跡出土の古代の鉄滓は777点、総計26,355gに及ぶ。そのうち遺構からは748点、24,250g出土し検出面で29点、2,105gを検出している。竪穴住居址32軒から242個、10,075g、掘立柱建物址の柱穴内・溝址から各1点105g、柵址の柱穴から36点1600g、小鍛冶址を含む土坑27基より468個12,470gが出土している。鉄滓の形状と重量については20g未満を小形品、20g以上200g未満を中形品、200g以上を大型品としたが、通常各遺構では1点ないし数点の小形・中形品が散在的に出土することが多い。また、大形

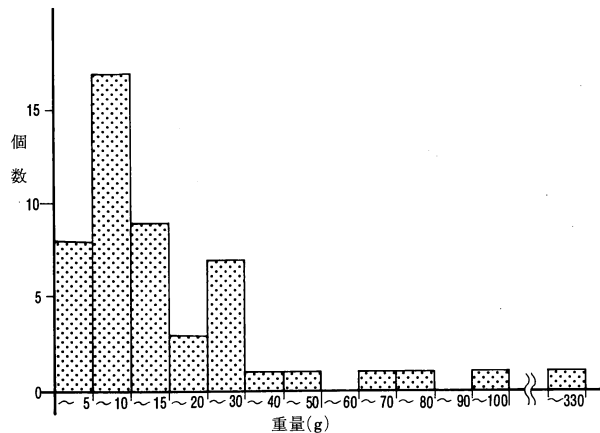
SB119



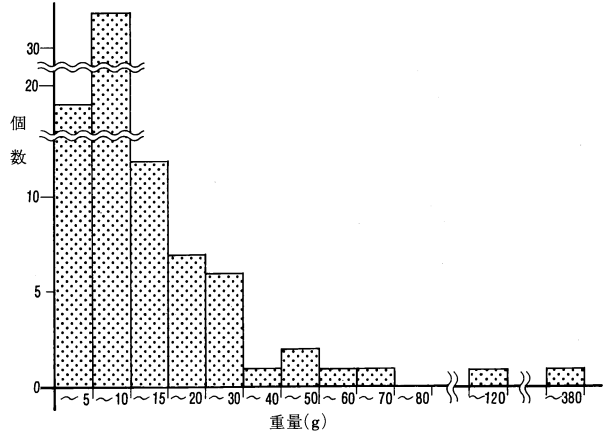
SK 432



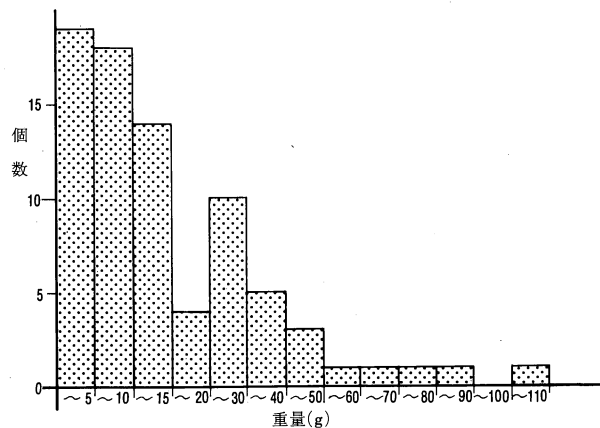
SK 546



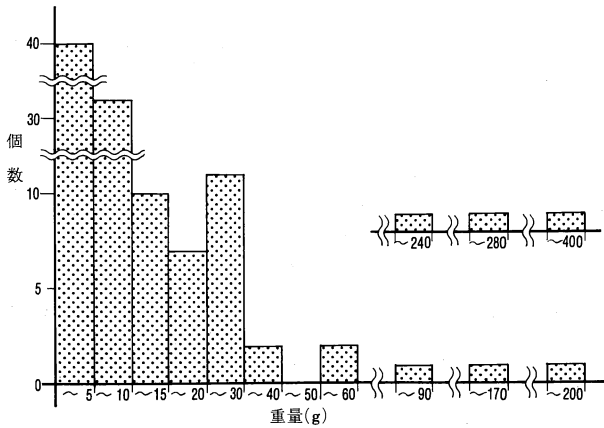
SK 930



SK1163



SK1172



第215図 遺構別出土鉄滓の重量と個数

品ではいわゆる碗形鉄滓が見られ、炉体と思われる焼成した粘土が付着していることもある。大中小の様々な鉄滓が混じり、特に小形品が多出する遺構としてはSB35・106・119・122・123、SA4・SK78・432・546・807・930・1064・1067・1163・1165・1172があげられ、そのうち遺構の状態や鞆羽口の伴出するSK432・546・1064・1165・1172は小鍛冶址と考えられる遺構である。第215図にSB119・SK432・546・930・1163・1172出土の鉄滓の重量別度数分布を掲載した。これらの遺構ではいずれも10g以下すなわち指頭大以下の鉄滓の出土が多く、200g以上の大形品は存在しても数点に過ぎない。多数の小さな鉄滓は鍛冶における副産物的存在で、鉄製品生産の原材料とは考えられないことから、出土した場所もしくはその近くで小鍛冶が行われていたことの証査となろう。PL77にSK1172出土の鉄滓を掲載した。

鉄滓の出土する遺構は南部I地区と北部II地区に集中し、一方、土製品の鞆羽口の見られる遺構も同様の地点に限定され、鉄滓と鞆羽口の出土には強い相関が見られ、小鍛冶址も当然のことながらその分布域中に存在している。出土した遺構の帰属時期の検討から南部I地区では8期に、北部II地区では7・8期に小鍛冶による鉄製品の生産が集落内で行われていたと考えられる。

4 石製品

図版173、174、PL77・78、付表11

本遺跡から出土した古代の石製品は16点で、そのうち1点が石鏝であるほかは砥石であった。出土状況は竪穴住居址から13点、土坑から1点確認されたほかは検出面の遺物である。以下、器種ごとに記述を進める。

砥石 15点出土しそのうち14点を図示した(1~14)。砥石は原材の岩石の粒子の粗密から、目の粗い砂岩製のI類(3・6・9)と、凝灰岩・ホルンフェルス・アルコース砂岩製のやや目の細かいII類(1・2・4・5・7・8・10~14)に大別される。完形品は2と9のみであるが、形状については大形で不整形な形状を呈する3・6・9はともにI類に当たり、その大きさから置き砥と判断される。作業面は6を除き複数の面に及ぶ。板状の整った形状の10はI類に当たり、表裏両面に作業面を有し、裏面には線条痕が観察される。角柱状の形態を取る砥石には断面が方形に近い2・4・7と、断面が長方形で大きさにくらべて薄手の1・5・8・12~14に分かれるが、その違いが使用法や使用頻度の相違を示すのか、使用以前の砥石の形状を示すのかは不明である。いずれも使用による消耗が著しく砥石の中央部分が減り、糸巻き形を呈している。11・14には円形の孔があげられており、携帯品と考えられる。7の作業面は凹凸が著しく、局所的に使用されたものか、あるいは丸鑿のような特殊な刃物を研いだとも考えられる。

石鏝 SB34のカマド付近から巡方が出土している。38mm×35mmの大きさで、厚さは8mmである。石材は球状石炭岩製で表面には研磨による線条痕が観察される。また、漆と考えられる黒色の付着物が認められた。裏面の四隅寄りには2孔を一对とする潜り穴が開けられている。

5 土製品

図版174・175、PL78、付表12

本遺跡で出土した古代の土製品は、紡錘車9点、土錘7点、鞆羽口37点、据えカマド2点の計55点である。出土状況は竪穴住居址17軒から24点、土坑12基から18点確認され、古代遺構の検出面で8点出土し、遺物の形態や胎土の特徴から古代の遺物と考えられる鞆羽口5点が中世の土坑から出土している。以下、器種ごとに記述を進める。

紡錘車 8点図示した(1~8)。2・3はSB57出土の完形品である。7のみ須恵器製で青灰色を呈し硬

質な焼成である。土師器製のものに比べて薄く径が大きい。土師器製の紡錘車は最大径60～73mmを測り、厚さは40mm前後と30mm前後(3・8)の2法量に分かれる。また断面形では長方形のものと、2・3のように側面中央に凹みを有する形状が見られる。8は表面に十字と六角形を組み合わせた線刻が見られ、側面にも沈線状のへら書きが観察された。6にも不明瞭ながらへら書きが認められる。中央の穴の径は7～9mmを測るが、1の紡錘車のみ3mmと小さい。

土錘 7点図示した(9～15)。9は下半部が底径27mmの円錐形で、上半部が算盤玉形を呈している。重さは24gを測る。中央部の凹みに紐を巻きつけて釣り下げたものであろうか。10～15は管状土錘で、紡錘形を呈する13・14、円筒形の10～12・15に分かれる。10～12は使用により端部が消耗し、丸みを有している。重量では15が42gと一番重く、10が21g、11が34g、12が26g、13が8g、14が21gを量り、大中小の3法量に分かれるようである。

鞆羽口 14点図示した(16～29)。完形品は見られず、管状を呈する18も長さ5cmを測るに過ぎない。大半の羽口にはガラス状の珪酸塩が付着しており、還元焰焼成によって須恵器の胎土のような青灰色に変色した部分も見られる。推定される直径は70～100mmで、胎土には長さ5～20mmの芻(すき)が混入されている。17・18・20・22・24・25・26・29は炉側先端の破片と判断される。通風孔については測定可能な18で20mmを測るが、吉田川西遺跡で指摘されたとおり、通風孔に対して外径が大きい個体が多く、高温度の炉で使用されたと判断される(長野県教委1989)。羽口の出土状況では鉄滓や焼土・炭・灰層を伴う例が多く、明らかに鍛冶に係ることを示しているが、炉体に装着された構造物としての出土ではなく、破壊・投棄された状況を示し、具体的な使用法は不明である。

据えカマド 中部II地区、ST27の東方10mの地点で(IKS11区)出土した30を図示した。残存率は低く、厚さ10～13mmの輪積み痕の見られる器壁に厚く粘土帯を張付け、厚さ40mmの支柱様に仕上げた焚口部下側の破片と、厚さ7mmで径200mmと推定される釜孔付近の破片、端部を板状工具に押し付け、平に仕上げた庇付近の破片が確認されたに留まる。推定される器高は70cm、焚口部の最大径は33cmである。庇部は焚口部の破片から、器壁を切開した後、切口を折曲げて作られたと判断される。胎土は1～3期に見られるやや黄色味を帯びた土師器甕類に類似し、砂粒が多く混じる。

第3節 中世の遺物

1 土器・陶磁器

図版176、PL79・80、付表13

(1) 概観

土器では土師器皿・内耳鍋・土師質播鉢、古瀬戸系陶器では天目茶碗・卸皿・折縁深皿・水注・四耳壺、大窯製品では天目茶碗・丸碗・丸皿・稜皿、東海系無釉陶器では山茶碗・捏鉢・常滑系壺・甕、また、輸入陶磁器としては白磁皿、青磁碗・小碗・杯、高麗青磁の梅瓶が出土している。総破片数で319点あり、1期が212点、2期は107点で、1期のうち109点がSK1800から出土した2個体の常滑系甕である。付表に示したように土坑からの出土が多く、従って分布は、土坑の密集する北部II地区に集中する。以下主な遺物について記述していく。

(2) 土器(1~7)

ア 在地系土器

皿 手捏ね成形によってつくられるものは5個体、ロクロ成形によるものは8個体が出土している。2は手捏ね成形によるもので、IB2類に分類される。橙色を呈し、胎土は緻密である。1・3・4はロクロ成形で、1は口径が小さいのに対して器高が高く、器形は体部に丸みがあり類例がない。色調は暗赤褐色で、II類のものと同通する。3は底部が厚く体部が薄いのが特徴で、底内面には明瞭にロクロ目を残している。3も類例がない。4はSK71から出土したIIA類のもので、ほかに同様な形状を有す最低3個体分の破片が確認されている。調整は粗雑で、黄橙色を呈す。

内耳鍋 SK2769から出土した5・6を図示した。5は硬質なもので、法量は小形である。口辺部内面の調整は、一度段をつけて外側へ出したあと、丸みをもって挽き上げながら再び外反させるもので、調整と焼成によりIII類に分類したい。6はIIC類か、IIB類で、口辺部内面に3回及び2回の横ナデを行っている。図示できなかったもののなかで、堂沢北地区から出土した口辺部破片でIII類に分類されるものがある。そのほかの破片は分類や法量を知ることはできない。

イ 産地不明の土器

大庭地区から出土した7の播鉢がある。色調は褐灰色をしているもので、焼きは良く硬質である。9本一組にした播目が内面に入れられ、外面の調整は縦・横・斜めの不定方向のナデが施されている。口唇部直下は丁寧なヨコナデし、口唇部は面取りして三角状に尖らせている。

(3) 陶器(8~16・26~31)

ア 古瀬戸系陶器

天目茶碗 8の天目茶碗はほぼ完形で出土しており、内側に入れ子状態で漆皿(PL79-8)が入れられていた。削出し高台で、体部下半は丁寧に回転ヘラ削りしている。口縁部は直立し、くびれは弱い。ほかに出土している4点の天目茶碗も同じ形状である。

卸皿 9は口縁端部を方形におさめ、体部下半は丸みを帯びる。釉は剥落しているが、刷毛塗りのような様子であり、古い様相を多くもつ。10は底径が広く、底面に糸による切り離し痕が残っている。11は口縁端部を二又風に分けて入る。

折縁深皿 SK2138とSK2151から接合する同一個体破片が1個体確認されている。足がつくもので、口

縁部は横に長く折れて中に突帯を有す。

水注 12はSK2521から出土したもので、紐輪積み成形痕が明瞭に残り、頸部の立ち上がりは小さく、肩に2～3本の沈線がある。ほかにSK2299から底部が出土している。鉄釉施釉、底径は4.8cm、ロクロナデが明瞭である。

イ 大窯期の製品

天目茶碗・丸碗 13のSK2432のものは体部がほぼ直線的で、口縁部は屈曲する。器高が低く、釉は灰釉を施すが、高台周辺は露胎とし、回転ヘラ削りをみることができる。14は丸碗で、灰釉が掛かり透明な黄緑色となっている。高台周辺は露胎で、ロクロナデがみられる。

丸皿・稜皿 15は丸皿で、灰釉が全面施釉され、底内面に菊花文をスタンプし、見込みに2本の線をめぐらせている。使用時に破損したらしく、漆を接着剤にして補修した痕跡がある(PL80—15)。16は稜皿で、底内面を除いて灰釉を施釉する。付高台で、体部から緩やかに外反していく。

ウ 東海系無釉陶器

山茶碗 包含層より尾張産の第VII期第3型式のものが出土しているほかは、美濃産の丸石3号窯式から大洞東4号窯式の山茶碗が数点ずつ出土している。そのなかでも新しいものが多く、26に図示したのはSK2521出土の大洞東4号窯式のものである。直線的に広がる器形で高台は低い。

捏鉢 形態のわかるものではIV類とVI類が3点出土しているほかはV類に属す。いずれも胎土の様相は類似し、緻密で色調は明るい灰白色を呈すものである。27は高台高1.1cmを測り、28・29はそれぞれ1.1cm 1.3cmである。28はVI類で、口縁端部に丸みをもたせて沈線をいれており、29はV類で口縁端部を方形におさめ、端部の面をややくぼめている。

常滑系壺・甕 壺とわかるものはSK1682から1点出土している。頸部付け根あたりで径7cm近くある。そのほかは体部小片で、壺とわかるものはない。甕ではSK1800から出土したものがまとまっている。30はI類に属すもので、肩には丸みがある。31はIII類で、口縁部の緑帯は頸部に接着せず、「N」状になっている。この2個体は時期が一致しない。このほかは小片で詳細は知れない。

(4) 磁器 (17～25)

ア 白磁

皿 IB層下部よりIX類の口禿皿が出土している。基地の色調は灰色で、口縁部は外反する。

イ 青磁

碗 17～22のF類が量的に多い。外面に鎗蓮弁文を有し、台形高台で、底部の器肉は厚い(22)。多くは明るい青緑色を発色する。これより古いものとしてA類(SK2305)や遺構外からC類・D類があり、ほかに無文となるI類がSK1677・2514から出土している。また、新しいものとしてJ類が確認される。

小碗 北部II地区から小碗III—1類(横田・森田1978)が出土している。体部に丸みがあり、残存部では無文となる。

杯 23はIII—2類、24はIII—1類(前掲書)である。前者は口縁部が鋭く外反し、後者は小形で体部が直線的に開き口縁部を弱く外反させる。

梅瓶 25は高麗青磁で、白象嵌によって円文を配置して、円圏内に雲と上にむかって羽ばたく鶴を、圏外には雲が表わされている。鶴の足には黒象嵌を施す。14世紀前後の所産と考えている。

本遺跡で出土した中世段階の文字関係資料としては石硯1点があげられる。粘板岩製の硯でSK2130覆土中から出土した。36に示したように硯尻部分の縁帯と判断される破片である。原材の節理にそって剥落したものであろう。硯のコーナー部は直角に曲がることから、長方形を呈した硯と判断される。

3 漆器 PL79—8

SK1975から1点出土している。遺構は2期の土坑で土坑墓とも考えられる。坑内南寄り出土した天目茶碗(図版176—8)の内側から、入れ子状になって出土した。漆皿と考えられ、木質部は腐り、漆の皮膜のみが残存する。口径は10cm前後、器高は1cm強くらいである。内面無文で、外面には模様があったかどうか不明である。

4 金属製品・銭貨

(1) 鉄製品 図版177・178、PL81、付表14

本遺跡から出土した中世の鉄製品は121点を数える。その内訳は鎌4点、刀子21点、斧2点、錐1点、鑿2点、楔2点、鋏3点、燧鉄2点、用途不明品84点(うち棒状品52点、板状品8点、鉄片14点、不明品10点)である。また、出土状況では竪穴住居址1軒から2点、土坑73基から89点で、残りは中世遺構を確認した検出面の遺物である。鉄製品を多く出土させた遺構としてはSK2127の11点、SK1973・2643の6点、次いでSK2333の4点があげられる。以下、器種ごとに記述を進める。

鎌 SK2344出土の103は完形品で、先細りする基部の形状から茎による着柄が考えられる。また、基部は刃部を平坦面に置いた際、柄が持ち上がるように腰入角が付けられている。104・105は刃部片である。106は刃部先端側の破片で先端付近の背縁は湾曲している。

刀子 SK2480・2643で2点、SK1785・1973・2127・2150・2160・2217・2285・2288・2289・2429・2435・2464・2496で各1点ずつ出土した。そのうち10点を図示した(107~116)。完形品は107のみであるが、形状については次のことも指摘できる。身部の棟(背縁)の断面では角棟のものが多く、また、刃部に縞を有する刀子は見られない。身部と刃部の境目では、棟側に区(まち)を有する110と、刃部側にのみ区を有する108、両側に区を有する107・109の3者が見られるが、これらの特徴が刀子製作時の形態を反映しているか否かは不明である。SK1973出土の107は木質の構造が銹に置換された状態で柄が残り、凸形を呈する茎先端から24mmの位置に径2mmの目釘が打たれていることがX線像で読み取れた。また、109には区際(まちぎわ)に帯状の付着物がX線像で認められ、樹皮あるいは皮革のようなものが鋤(はばき)部分に巻かれていたと考えられる。

斧 SK2434・2284で1点ずつ出土しているが、SK2134出土の118を図示した。完形品であるが土砂が固着しており、裏面の実測はX線像によった。手斧の刀先とも考えられる。

鑿・鑿 SK2643出土の119はやや先端を欠くがほぼ完形品である。刃先は扇形に広がる。着柄部はX線像から、最大径20mm・深さ45mmを測る円錐形の穴で、その中にソケット式に柄が差込まれていたと考えられ、銹に置換された木質片が残存していた。120はSK2156出土で頭部には敲打による変形が見られることから鑿と考えられる。

錐 121はSK1877出土でわずかに先端を欠く。身部は最大幅14mmの細長い四角錐状を呈し、径5mm・長さ14mmの茎を有する。

楔 鑿とした120に比べ長さは半分以下で、頭部の変形が見られないことや、断面が細長いV字形を呈

することから122・123は楔と判断した。

鋏 3点出土し全て図示した(124~126)。いずれも元支点の和鋏の破片と考えられる。

燧鉄 2点出土し2点とも図示した。SK2288出土の127は半欠品である。128はその形状から燧鉄と判断したが、残存する部分からはかなりの大形品になるものと思われる。

釘 SK2127から6点、SK2156・2283・2286・2539から2点ずつ出土したほか、22基の土坑から1点ずつ、検出面で2点を確認している。そのうち17点を図示した(129~145)。いずれも鍛造の角釘で、完形品が少なく不明確であるが、長さでは50mm前後と判断される129・131・132・136、60mm前後の133・134・135・138・140、90~100mmの139・141、130mmに達する132と長さには、4法量が認められようか。頭部の残存する個体では、基部上端を敲击延ばし、わずかに折り曲げた129・132と、同様に薄く敲击延ばされ直角に近く折り曲げられた133・139・141、さらに、敲击延ばされた部分が丸く折り返された135といくつかの形状に分類される。133は長さ60mm前後の4本の釘が腐食によって固着した状態で出土した。その状態から棺などに集中的に打ち込まれたというよりは、4本をまとめて土坑に埋納した状態と考えられる。

用途不明品 棒状品では断面が方形を呈するI類が29点と多く、断面が長方形のIII類が18点、断面が円形のII類は1点出土している。そのうち2点を図示した(146・147)。SK2333出土の147は両端が先細りする形状を呈している。板状品では鍛状品が丸くP字形に折り曲げられた状態である。149は環状品で断面も円形である。SK2126出土の150は厚さ10mm位を測る棒状品で先端部は直角に折り曲げられている。151はコの字形を呈した鍛造品である。152は板状の厚手な鍛造品である。

(2) 鉄滓

本遺跡では8基の土坑と中世遺構の検出面から、16個、総計470gの鉄滓が出土した。遺構出土の鉄滓はいずれも単品で北部II地区西側に位置する土坑での出土が多いことから、古代遺物の混入と判断される。また、本遺跡においては中世段階の鍛冶遺構は確認されなかった。

(3) 銭貨 図版178、PL81、付表15

本遺跡では20基の土坑と中世遺構の検出面から46枚の銅製の穴明銭が出土している。判読可能な37枚中北宋銭が36枚を数え、残る1枚は唐銭「開元通寶」であった。最も新しい銭貨は「政和通寶」で初鑄年が1111年であり本遺跡では明銭が見られないといった特徴を有している。これは銭貨の出土した遺構がSK2778を除き、北部II地区に集中し、この地区の遺構の帰属時期が中世2期前半(15世紀前半)以前に比定されることと軌を一にしたものであろう。

銭貨の種類としては多いものから「熙寧元寶」が10枚、「元祐通寶」が6枚、「元豊通寶」が5枚確認され、ほかは付表15に掲げたとおりである。遺構での出土状況はSK2534から12枚(162~172)が重なり合って出土し、銭中央の穴が貫通していたことから紐に通された状態で埋納されたものと判断される。また、SK2778では6枚が付着した状態で出土しており、遺構の項で述べたとおり「六文銭」といった葬送儀礼にかかわる遺物と判断される。

5 石製品 図版179・180、付表11、PL82

本遺跡から出土した中世の石製品は29点を数える。その内訳は砥石22点、硯1点、用途不明品2点、石臼1点、凹石3点である。出土状況はSB190から砥石1点・用途不明品2点、土坑23基から24点検出され、砥石1点と凹石3点は検出面の遺物である。以下、器種ごとに記述を進める。

砥石 22点が出土しそのうち20点を図示した(16~35)。砥石は原材の岩石の粒子の粗密から、目の粗い砂岩製のⅠ類(35)、凝灰岩製のやや粒子の細かいⅡ類(19・25)、粒子の緻密な頁岩や凝灰岩・粘板岩製のⅢ類(16~18・20~24・26~34)に大別される。完形品は33のみで、角柱状を呈し研磨面には砥石製作時の敲打痕が観察されることから、あまり使用せず廃棄に至ったと判断される。そのほかの砥石の形状については角柱状を呈する16・23・25・30・31と、使用による消耗で特に中央部が減って糸巻形の外形を有する17~20・22・24・26~29と、薄い短冊形の32・34の3種類に分かれる。17・19・22・23・28には砥面に線状の使用痕が見られる。33では側面の角が面取りされ、それを切るように表裏に砥面が見られ、側面も砥面として使用された痕跡を有することから、使用以前はかなり厚い形状で、糸巻形にならないように砥石が使用され砥面の最調整がなされていたと判断される。なお、本品は被熱により破損している。

石硯 硯尻の縁帯部分が出土した(36)。観察所見は文字関係資料の項を参照されたい。

不明石製品 SB190より2点出土した。2点とも粘板岩製で、同一母岩と判断される。欠落が著しく全体の形状は定かでないが、研磨痕の存在部位から厚さ6mm位の磨製石製品と考えられる。硯や砥石の可能性も捨て切れない。

石臼 SK2646とSK2681の出土品が接合した。挽手を装着する30mm×30mmの方形の穴が見られることから石臼の上皿と判断される。多孔質の安山岩製で推定径は31cm、臼の研磨面は光沢をもつほどに摩耗している。回転軸の回りには同心円状に溝が掘られた「ものくばり」が見られ、上皿と下皿を重ね合わせたときにできる隙間「ふくみ」は最大10mmを測る。

凹石 3点とも中世遺構の検出面(ⅠC層上面)出土の遺物である。同様の類例としては当センターが調査した北中・北方・上手木戸遺跡(長野県教委1989)、松本市教委が調査した北方・北中遺跡(松本市教委1988)の出土品があげられ、本遺跡出土品も中世の遺物と判断した。40・42は安山岩製、41は花崗岩製で、円形ないし楕円形の扁平な円礫に浅い皿状の凹みを敲打によって作り出している。40では表裏両面に凹みが見られる。いずれも用途は不明である。

第4節 近世以降の遺物

1 土器・陶磁器 図版180、第46表、第216図

概観

71点の破片が出土している。時期別には、17世紀代9片、18世紀代11片、18世紀後半以降が34片、不明17片となっており、分布は時期によって特徴なく、ほぼ全域に広がる。遺構からの出土は土坑・溝にみられ、SK2067・2234・3032・SD81からそれぞれ鎧茶碗・御深井釉丸碗・拳骨茶碗が出土し、そのほかは主にI A層またはI B層中から出土している。特にI B層上面で検出されたST103・104の周囲で多く出土している。産地別では、瀬戸・美濃系と考えられるものが59片あり、ほとんどを占める。図示できたものを中心に、以下主な遺物を取り上げて記述していく。

陶器 62	瀬戸・美濃系陶器					磁器 9	瀬戸・美濃系磁器	
	碗	天目茶碗 鎧茶碗 拳骨茶碗 丸碗	3 1 3 22	鍋 壺 甕 瓶	土鍋 甕 土瓶		1 1 4 1	碗
皿 鉢	丸皿 播鉢 片口鉢 捏鉢	4 4 1 4	その他	水滴 仏花瓶 蓋 不明	1 2 1 2	肥前系磁器		5
	肥前系陶器		1	その他の産地	6	皿 その他	小碗 小碗 皿 仏飯	1 2 1 1
	碗	碗	1	鍋 その他	土鍋 不明	産地不明		1
					3 3	その他	不明	1

第46表 近世土器・陶磁器 器種構成表

(1) 陶器(1~4)

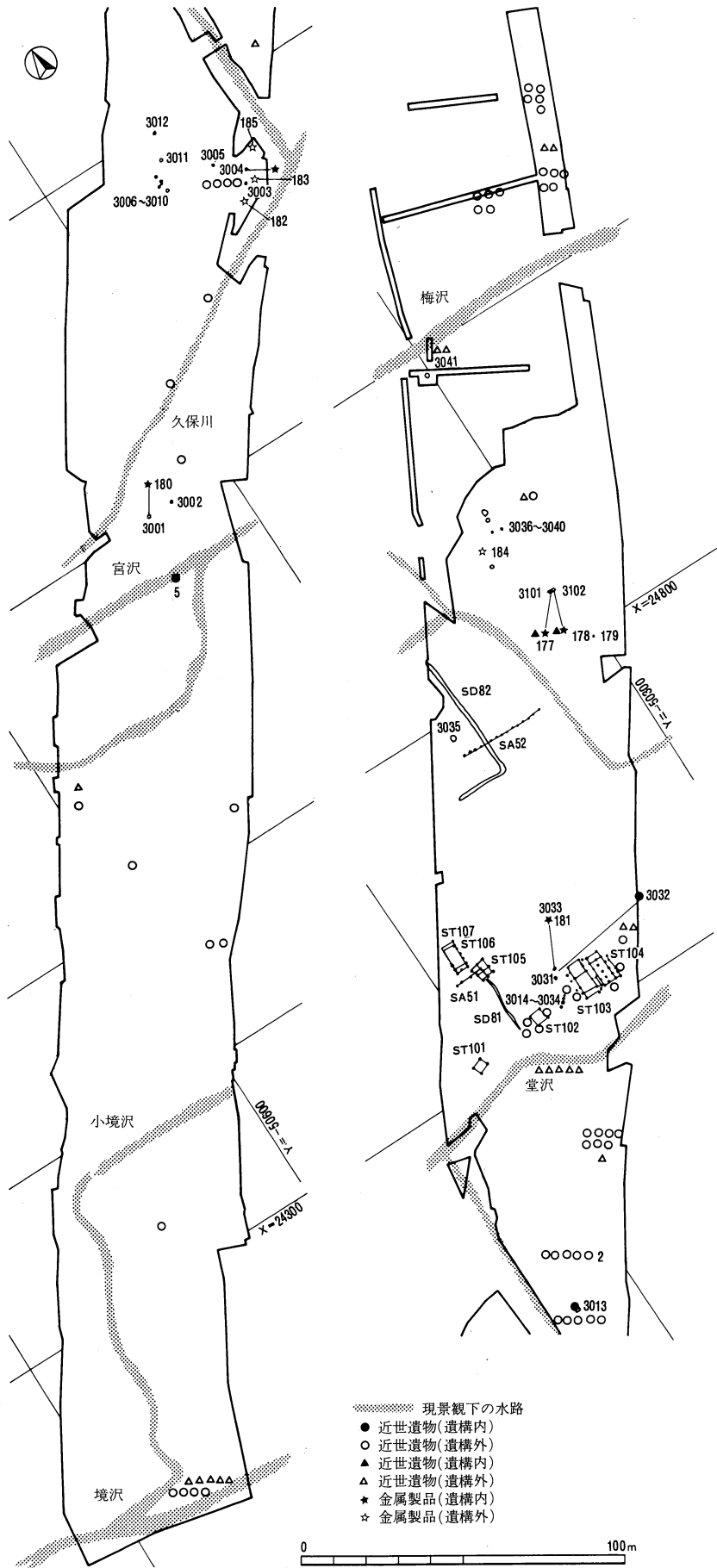
碗 瀬戸・美濃系 天目茶碗は、口縁部が短く「く」状に外へ屈折したものがある(1)。釉調は光沢のある黒色の鉄釉が厚く掛けられている。また底部片では、削出し高台となる天目茶碗があり、高台脇に段を残している(2)。17世紀代のもので、同期のものとして、体部下半にロクロナデを明瞭に残している丸碗が出土している(3)。

18世紀代では拳骨茶碗と鎧茶碗の小片があり、前者には体部に白い釉をとばして文様にしているものがある。後者には小札文様にバラエティーをもたせて、方形や三角形の印刻文を施している。同時期か後続する時期のものとして御深井釉や銹釉の丸碗があり、御深井釉丸碗の胎土はいずれも灰色をした軟質のものとなっている。

碗 肥前系 底部の破片が1点ある。釉調は透明感のある黄白色を呈したもので、貫入が多い。該期の肥前系製品と比べると、胎土は硬質感があり、色調も白色を帯びてやや異なる。あるいは後出の瀬戸・美濃系陶器の可能性もある。

皿 瀬戸・美濃系 長石釉の掛かった無文の志野織部の製品が2片出土している。17世紀に属するものである。ほかの2片は、灰釉が薄く掛かったもので、おそらく18世紀後半から19世紀にかかる頃の所産であろう。胎土が緻密で軟質感がある。

鉢 瀬戸・美濃系 播鉢は錆釉を薄く刷毛塗りしているもので、胎土の色調は白色に近く軟質のものである。4に図示した片口鉢は口縁部を厚く膨らませるもので、器形は球胴状になりそうである。捏鉢は口



第216図 近世・近代の遺構と遺物分布

縁部を玉縁状にしており、灰釉系の釉を厚く掛けているものがある。

瓶 瀬戸・美濃系 水滴の鉄釉施釉の頸部片が出土している。花瓶とも考えたが、器高が低く、丸みのある器形になりそうであり、水滴であろう。ほかに灰釉と鉄釉の仏花瓶があり、うち1点は頸部が筒状になり、把手が付く。

(2) 磁器(5)

碗 瀬戸・美濃系かと思われるもの3点、肥前系と考えられる碗・小碗3点が確認されている。瀬戸・美濃系は素地が白く硬質のもので、幕末から明治時代初頭に属す新しいもので、筆によって文様が描かれている。肥前系のものはいずれも18世紀代に属し、小碗2片は菊花文が描かれている。

その他 肥前系の仏飯がある(5)。肥前系のものとしては素地に硬質感があり、白みが強い。脚部は蛇の目高台状になって内側を丸く抉っている。上半の碗部底内面までの器高は3.5cmである。

2 金属製品・銭貨

図版180

(1) 鉄製品

釘1本と棒状品2点が見られ、いずれも近代に属する土坑から出土した。図示しなかったが近世のSK3012から板状品が出土している。以下、器種ごとに記述を進める。

釘 SK3101から出土した鍛造の角釘である。頭部及び先端を欠く。

用途不明品 178はSK3101出土で断面は方形を呈する。同遺構出土の179は2点に分かれるが本来は同一の棒状品と判断される。

(2) 銭貨

土坑2基と検出面から7点12枚の銭貨が出土した。そのうち8点は「寛永通寶」である。いずれも裏面に文字・文様の見られない一文銭である。5点を図示した。180はSK3001出土で6枚が付着した状態で検出され、表裏両面の2枚が「寛永通寶」と確認された。181はSK3033出土で「永」字部分を欠く。182～184はI A層中の遺物である。

(3) 銅製品

煙管の雁首部分が北部II地区東側のI B層中で検出された。火皿部分を欠く。煙管内には長さ25mmの竹管「ラウ」が残されていた。1枚の銅板を巻いて作られていること、火皿下の「脂返し」の部分が直線的に伸び、「ラウ」接合部に補強のために巻かれた帯が見られないことから、18世紀後半以降の所産と考えらる(古泉1985)。

第4章 調査の成果と課題

第1節 古代遺構の構造と変遷

1 竪穴住居址の構造と変遷

(1) 竪穴住居址の時期別軒数の推移

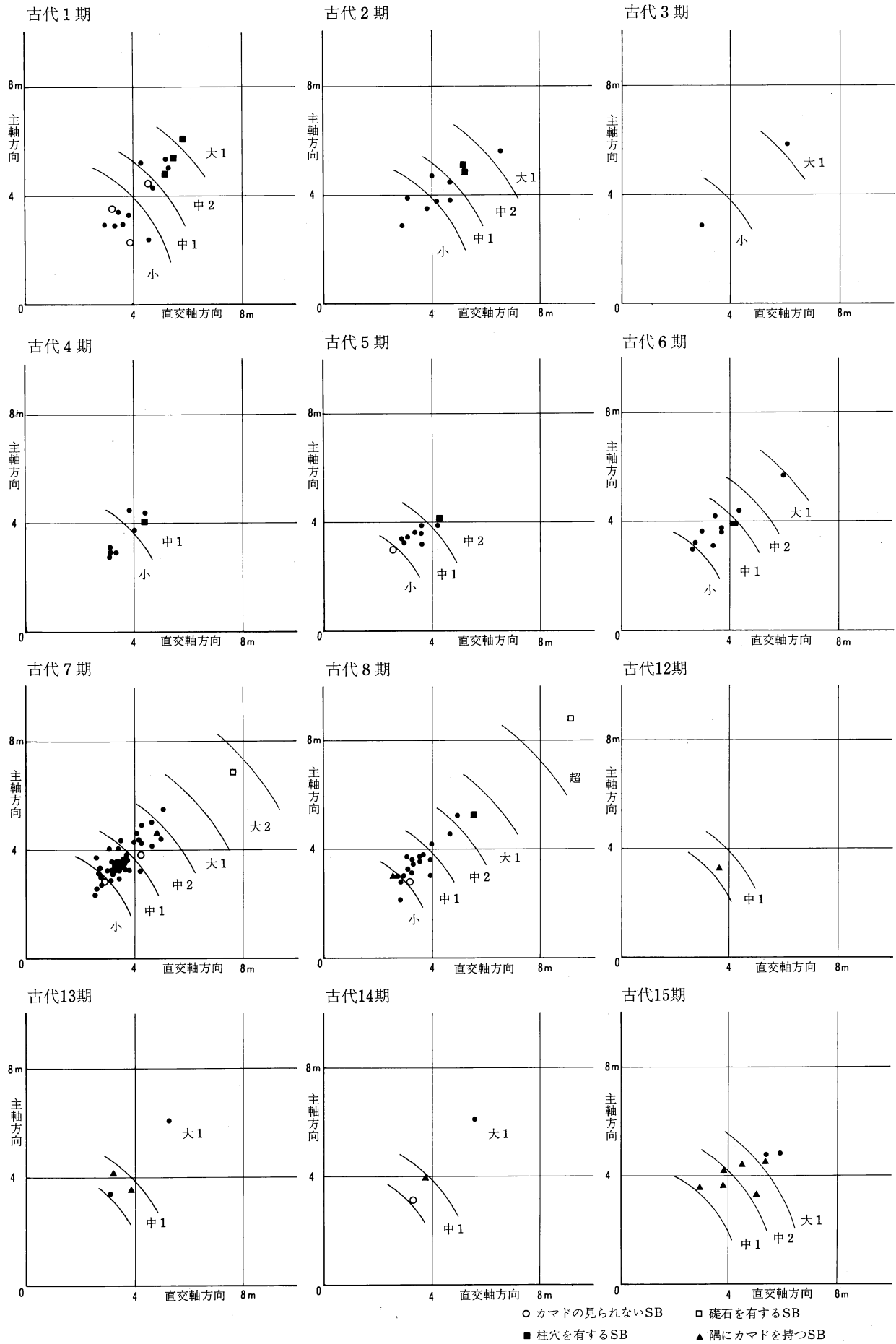
本遺跡では古代1～8期、12～15期にわたって179軒の竪穴住居址が確認された。既に個々の遺構の構造や特徴については第2章で述べてきたが、ここではそれらの事実報告をまとめる形でいくつかの考察を行いたい。なお、ここで使用する時期区分については凡例に掲げたとおり、古墳時代後期末から平安時代末にかけて15期に分けられている。それぞれの時期は特徴的な土器様相の段階ととらえられているが、藤原宮跡の出土遺物の年代観や灰釉陶器の紀年銘資料との対比から、古代1期が古墳時代後期末、文化史で言う「飛鳥文化」期に当たり、2～4期がおおよそ奈良時代、本遺跡で遺構数が飛躍的に増大する7期が9世紀後半、15期が12世紀前半に対比されている。詳細は総論編(「松本市その1」)を参照されたい。

竪穴住居址の帰属時期については出土遺物の様相を中心に遺構の配置なども考慮して決定したが、各時期ごとの軒数は次のとおりである。古代1期には19軒の竪穴住居址が検出され、それを中心に集落は成立した。2期にも13軒の竪穴住居址が継続するが3期には2軒と減少する。4期には8軒、5期には13軒、6期には16軒と増加傾向にあり、7期には54軒とピークを迎え、8期には30軒とやや減少するものの7・8期に集落が大きく成長したのは確実である。その後9・10・11期にはほかの遺構を含め集落の痕跡は確認されない。再び12期に1軒の竪穴住居址が検出され、13期に4軒、14期に3軒と推移し、15期には9軒とやや増加し中世に至ると考えられる。住居址の分布や集落景観については第2節にゆずり、ここでは竪穴住居址および付属するカマドの規模や構造とその変遷について述べてみたい。

(2) 竪穴住居址の規模とその変遷

竪穴住居址の時期別の規模について第217図に示した。グラフはカマドを通る竪穴住居址の中軸線上の床面の差し渡し(主軸)を縦軸に取り、それと直交する方向の床面の差し渡しを横軸に取った。竪穴住居址の規模については凡例に掲げたとおり小型1、中型2、大型1、大型2、超大型の6法量(規模)の類型に分けられ(総論編参照)、各時期の規模別の住居址の動向と床面の平均面積は以下のとおりである。

1期には床面の平均面積は18.1㎡を測り、小型と中型2類が主体的で大型1類に属する住居址も1軒見られる。2期にも同様の傾向が見られ平均床面積も19.5㎡と近似している。3期には平均床面積22.3㎡と規模を増すようであるが、住居址数は2軒に過ぎず詳細は不明である。4期には小型と中型1類に分かれ、一辺3m強の竪穴住居址と一辺4m前後の大きさに集中し、大型以上のものは見られない。平均面積は13.3㎡と前代に比べかなり小型化している。5・6期は4期と同じ傾向にある。多数の住居址が中型1類に集中するようになり、6期では1軒のみが大型1類に属している。平均面積は5期が12.4㎡、6期が15.0㎡である。なお、6期には部分的な調査に留まり全体像は不明であるが一辺9mを越えると考えられるSB102が存在し、後続する7・8期の状況と類似点も見出せる。54軒と多数の住居址が確認された7期では、中型1類に分類される一辺3～4mの竪穴住居址が主体を占め、一辺4.5～5mの中型2類がこれに



第217図 古代の竪穴住居址の規模

つぐ。また、超大型に近い規模で礎石建ちという特異な構造を有するSB151が存在し、画一的な規模の多数の住居址と極少数(1軒)の超大型という組合せが看取される。同様な状況は8期にも観察され、中型2類が存在しないものの基本的な規模の種類の構成は7期と変わらない。7～8期の住居址の平均床面積は16.1㎡と4～6期より増加傾向にあるものの、大きな変化は認められない。12～14期は軒数が少なく様相は明らかにできないが、住居址の規模は中型1類と大型1類の組合せと考えられる。平均床面積は18～19㎡を測る。15期にはややまとまった軒数を得ているが、各住居址は中型1・2類・大型1類に散在的に分布しており、4～8期とは異なった様相を呈している。

以上のことから古代の竪穴住居址の規模については1～3期、4～8期、12～15期と大きく3段階の様相に分けられる。1～3期では総じて住居址の規模は大きく、各規模の類型に住居址が偏在無く分布している様である。これに対し4～8期では住居址の小型化が進み、一辺3～5m位の大きさの竪穴住居址が主体を占めており、住居址の画一化現象と捉えることができよう。その一方で超大型など大きな住居址がわずかに存在することも見逃しえない事実である。12～15期では再び住居址は大型化し、超大型クラスの住居址は見られないものの規模の面では偏在は無く、様々な規模の住居址が存在するという様相を押えることができる。

(3) 竪穴住居址の平面形

竪穴住居址の平面形については凡例に掲げたとおり、方形(方)、隅丸方形(隅方)、長方形1類(長1)、隅丸長方形1類(隅長1)、長方形2類(長2)、隅丸長方形(隅長2)の6形状に分けることができる。この分類は竪穴住居址の主軸方向の差し渡しと直交軸方向の差し渡しの差が10%未満を(隅丸)方形、その差が10～15%の住居址を(隅丸)長方形1類、15%以上を(隅丸)長方形2類とした。各形状ごとの存在比率を時期別に第220図に示した。このグラフによると、どの時期でも方形・隅丸方形に分類されるいわゆる「四角い住居址」が全体の5割以上を占め、古代の竪穴住居址の基本的なプランが正方形であったことを示している。7期には中型1類の規模で隅丸長方形プラン住居址も存在するが、中型の規模ではほとんどが方形ないし隅丸方形を呈しており、住居址の規模で見られた画一化と符号する現象と捉えられよう。12～14期は件数が少ないため一括したが、隅丸長方形1類が増加する。これは後述するように住居址の隅にカマドをもつ(「コーナーカマド」)住居址の存在と係る現象である。15期には隅丸方形の存在比率がほかの時期に比べて低く、逆に隅丸長方形2類が全体の5割弱を占めている。これは12～14期に引続きコーナーカマドを有する住居址の増加を反映した現象でもあるが、そればかりでなく、第217図に示されるようになかなかのびた住居址も確認され、竪穴住居址の構造や概観がそれ以前と相違してきたことが認められよう。奈良井川左岸の諸遺跡では中世段階で細長いプランの竪穴住居址が散見されることから、それへの萌芽と位置付けることも可能である。

次に竪穴住居址の規模と形状の関係について考えてみたい。(隅丸)長方形2類に分類される住居址は1期から存在しているが、15期を除き小型・中型1類に限られ、稀に大型以上の規模でも認められる。大型以上の住居址では礎石建ちなど特殊な構造を取る場合にこのプランが取られ、掘立柱建物址の構築法の影響も考えられるが、数値的には細長くとも基本的にカマドの使用や住居址内の空間利用に制約を受けることはなかったと判断される。前者では規模が小さくカマドの存在を加味すると同規模の方形の住居址に比べてかなり竪穴内の利用法に制約があったと思われる。そのためかこの形状の住居址では短い方の壁にカマドが構築されることが多く、またカマドを欠く住居址でもこの形状が多い。

(4) 竪穴住居址の構造と施設

本遺跡で確認された179軒中、屋根材と判断される炭化材が残されていた住居址は2軒にすぎず、上屋構造や屋内の空間利用を復元するには柱穴などの床・壁面で検出される落ち込み、配石、あるいは遺物の遺存状況から推定せざるをえない。ここでは竪穴住居址内の施設について順を追って考察を進めていく。

ア 柱穴の有無と上屋構造

柱穴を有する竪穴住居址は礎石建ちの2軒を含め14軒確認された。詳細は後述するが、4本主柱建ちが12軒、2本主柱建ちが1軒、礎石建ちが2軒である。時期別に観察すると1期ではSB121・128・148の3軒が4本主柱を有し、2期ではSB25・58・59に、4期ではSB115にその存在が指摘できる。5期に帰属する住居址で唯一柱穴を有するSB155は2本主柱建ちと考えられ、松本平の諸遺跡の古代遺構においては特異な存在である。7期ではSB77・153が4本主柱建ちと判断され、SB151の古段階もそれに該当する。SB151新段階は礎石建ちの構造である。8期ではSB2・36が4本主柱建ちと考えられ、SB147はSB151と同様な構造の礎石建ちの住居址と判断される。3・6・12～15期の竪穴住居址では柱穴は確認していない。これらの柱穴や礎石を有する遺構の規模については、4・5で中型2類でも確認されているが、ほかの時期では総じて5m以上の規模の住居址で検出されている。さらに、礎石建ちの住居址は大型2類・超大型に分類され、規模や集落内での位置から集落景観では他を圧した存在と想定できる。本遺跡では柱穴は不同沈下を避けるため硬く締まった基盤砂礫層(Ⅲ層)の上位まで彫り込まれ、柱穴や礎石を有する柱建ちの構造は、柱穴を持たない合掌組みの構造に比べて、より大きな加重に耐えられる骨組構造と判断され、当然、大きく高い垂木を地面に配さない「側壁式」(宮本1986b)の上屋が想定される。これに対して各時期8～9割の比率を占める無柱穴の竪穴住居址は、竪穴内に全く柱穴の痕跡が認められず、それに類する施設も見られないことから、竪穴外の地面に直接、垂木が配され、合掌形の上屋で竪穴を覆う形式(「伏屋B式」と想定される(宮本1986a)。ただし、垂木材を支えた柱穴が確認された例がないことから、今回のような調査方法ではつかめないような、あるいは検出不可能なほど小さな柱穴と考えられ、規模の小さな竪穴に見合った建築材料の節約できる構造と考えられる。この構造では支えられる加重は小さく、したがって4本主柱建ちの上屋に比べて建物は低く、脆弱な外観であったと判断される。

竪穴住居址の構築材の遺存例としてわずかにSB128・172出土の炭化物から屋根材が想定されるに過ぎない。SB128は多量の焼土の存在から焼失住居址と判断されるが、その中にはアシ・チガヤ類と考えられる炭化材が多量に出土していた。また、SB172では床面よりやや浮いて同様の炭化材が出土し、簾状に編まれていたと判断される。他に多数の住居址の覆土中で大形の礫が検出されている(附表3)。それらの礫は出土状況から竪穴住居址がやや埋没しかけた時点で入ったと考えられ、自然現象とは考えにくい。分布状況では集石状態を成す場合と竪穴内に散在的に出土する例に分けられる。その目的としては住居址廃絶時にカマドを破壊し遺物を投棄するという廃屋での儀礼的行為に伴うカマド袖石の投込み、あるいは生活廃棄物としての放棄が考えられるが、これらの多量な礫はその礫種からは奈良井川・樽木川・梓川の河床礫を運んだと判断され、それに投下された労力を考え合わせると、逆に何らかの意味を見出さなければならないであろう。SB151の礫石やSB154の配石はカマド袖石の転用された例であり、再利用されていたことを物語る。また、群馬県中筋遺跡(渋川市教委1988)を参考にすると屋根に重石として載せられていたと考えられ、直接的な根拠は見出せないが竪穴内に散在的に出土する例は、それに該当するかもしれない。いずれにせよこの地域では冬季の卓越風に対処する措置が屋根を葺く際に必要であろう。

イ 張出し・テラス

12軒の住居址で竪穴の壁面に平坦面もしくは床面と同レベルの掘込みが確認されている。これらを便宜的に、住居址のプランを越えて壁面が段状に掘込まれているものを「張出し」とし、基本的なプランを越えない段状の平坦面を「テラス」として分けた。張出しはSB11・62・68・135・147・151で検出され、テラス

はSB36・49・50・67・125・126で認められる。この中でカマドの左脇に位置するSB36・68・125の張出しはカマド付近の空間利用に係った施設と判断される。また、カマドのない壁面に設けられたSB11・61・67・126・147の張出しは住居址の出入りのための施設、SB49・50・126・151の張出しはその平坦面の大きさから棚のような施設として利用されていたのかもしれない。北壁に3か所の矩形の小さな張出しを有するSB135の例は上屋構造との関連を連想させる。なお、出入口に係る施設としてSB64・65・66では人頭大の扁平な円礫が床面に平らに据えられており、やはり出入りのためのステップと判断される。SB65ではこの礫の下に黒色土器A椀が埋設されており、祭祀的な行為が想定される。

ウ 貯蔵穴、灰溜め、そのほかの落込み

30軒の竪穴住居址で柱穴以外の落込みが確認された。その中でカマド脇に位置し灰・焼土粒が覆土となる落込みを「灰溜め」とし、それ以外でカマド脇に位置するものは貯蔵穴としてある。灰溜めの例としてはSB8・51があり、貯蔵穴はSB2・21・30・43・86・121・122・147・148・166で検出されている。SB43・51ではカマドの両脇の床面に貯蔵穴もしくは灰溜めが設けられているが、1基のみの例ではカマドにむかって右側に位置するものが圧倒的である。時期的には1期の住居址で確認されることが多い。SB147では8基に上る貯蔵穴がカマドの左脇から北壁際にかけてL字形に配列しており、他址には見られない特異な施設である。貯蔵穴の埋土の検討から何基かには作り替えも考えられるが、6～7基が同時に開口していたと判断され、内部からの黒色土器A皿Bが出土するなど、住居址の構造と相俟ってその特殊性が窺われる施設である。同様の例としては吉田川西遺跡のSB32が挙げられる(長野県教委1989)。SB123では床面の中央に小鍛冶炉が設けられている。同様の類例は群馬県鳥羽遺跡I・J地区で長大な竪穴の中に多数の炉が配された遺構が確認されており(群馬県教委1988)、SB123はその小規模な例と考えられる。また、SB153ではカマド右脇に配石が検出された。配石は地山を周堤状に掘り残し、その上に人頭大の扁平な礫が平らに据えられ、その大きさは120cm×110cmを測る。内部には杯類が重なり合って出土しており、什器を保管・収納する施設か、その上に板材が渡されて調理などに利用されていたと考えられる。遺物や礫の出土状況からSB107・167にも同様の施設が存在した可能性がある。そのほかの落込みでは用途の推定不可能なものが多い。

エ 貼床

48軒の竪穴住居址の床面に、他所から持ち込んだ土を入れ、敲き占めて平坦にした貼床が検出されている。時期別に存在比率を見ると、3・4・12期では確認されていないものの、他の時期では2～3割存在し、住居址の構築にとっては普遍的な造作であったことが分かる。その目的については床面の不同沈下の防止、あるいは防湿・除湿のためといった考察もあるが(松村恵司1977)、本遺跡では竪穴の掘込みが地山の砂礫層(Ⅲ層)に達することが多く、砂礫上では居住に適さないため貼床を施したと想定され、砂礫堆上に占地することが多い8期の住居址で存在比率が高いのはそのためと判断される。ただし、関東地方や県内の該期の遺跡と比較した場合、その存在比率は低く、この点でも住居址構築に際し省力化・簡略化が計られていると評価できよう。

(5) 竪穴住居址の類型

これまで述べてきたことに基づき、竪穴住居址はカマドの有無、住居址の規模、カマドの存在する位置、平面形状(プラン)、支柱穴の有無によって次の6類型に分類される(第218・219図)。

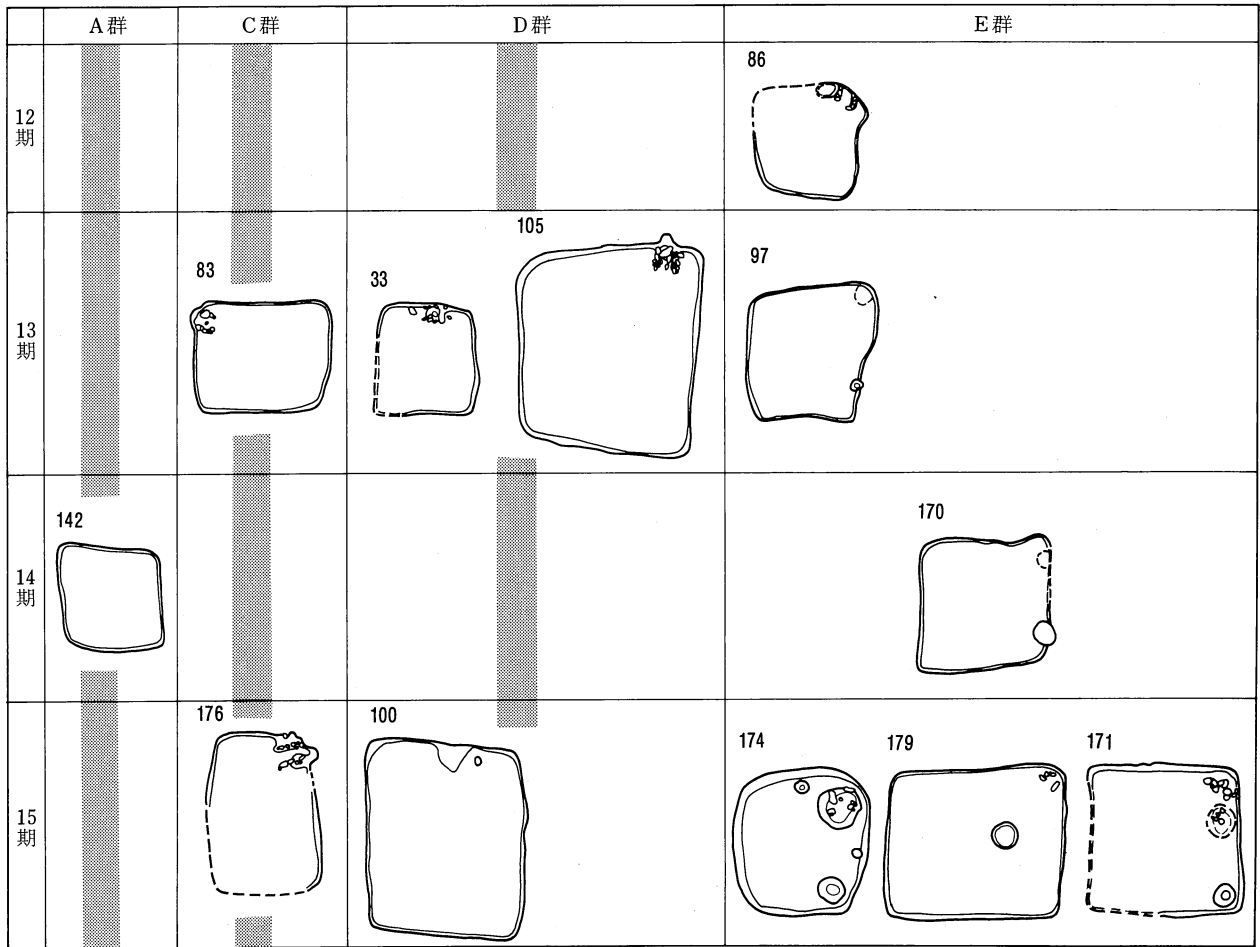
A群：カマドの存在しない竪穴住居址

B群：カマドを有し、大形1類以下の規模で支柱穴を有する竪穴住居址

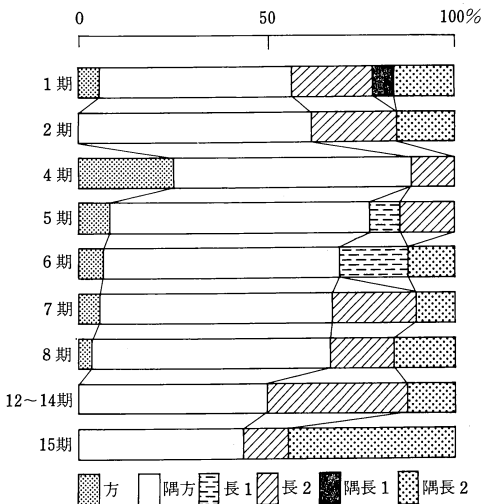
C群：カマドを有し、大形1類以下の規模で平面形が(隅丸)長方形2類の竪穴住居址

	A群	B群	C群	D群	E群	F群
1期	53 	12 	157 	43 		
2-3期		58 	23 	90 		
4期		115 	125 	156 		
5期	69 	155 		78 		
6期			21 	27 		
7期	138 	153 		122 		151
8期	44 	2 	5 	9 	16 	147

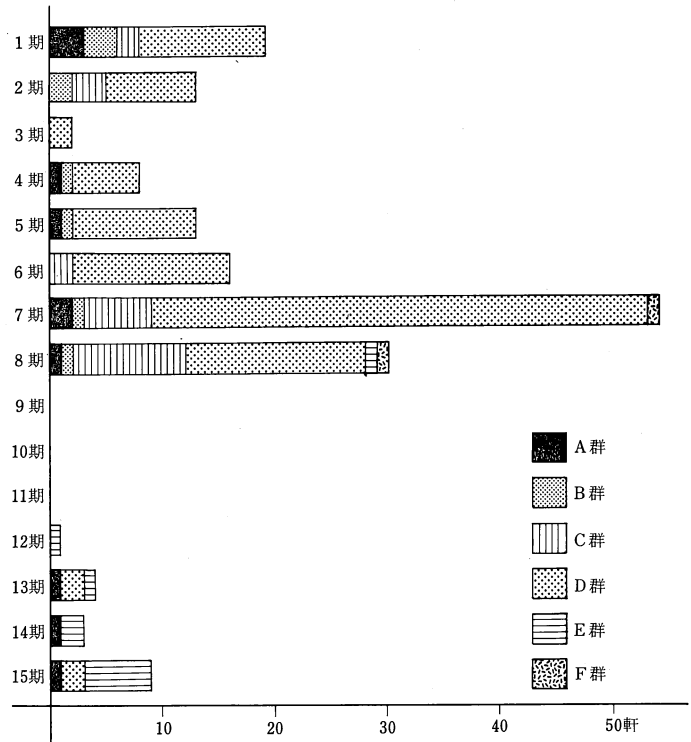
第218図 古代の竪穴住居址の類型(1)



第219図 古代の竪穴住居址の類型(2)



第220図 竪穴住居址の平面形の推移



第221図 古代竪穴住居址の類型別軒数の推移

D群：カマドを有し、大形1類以下の規模で平面形が(隅丸)方形・長方形1類の竪穴住居址

E群：カマドを有し、大形1類以下の規模で住居址の隅にカマドを有する(コーナーカマド)の竪穴住居址

F群：カマドを有し、大形2類・超大型の規模を有する竪穴住居址

A群にはSB44・52・53・69・131・133・142が挙げられ、小鍛冶炉を有するSB123も便宜上ここに分類される。時期別には1期3軒、8期に2軒、5・7・14期に1軒ずつ存在する。1期のSB52・53は隣接する掘立柱建物址群に付属したと考えられ、同時期の竪穴住居址に比べ掘込みは浅い。その他の住居址でも遺構配置の面では支柱穴をもつB類の竪穴住居址や大きなF類の周囲に存在しており、これらの付属的な施設とも理解できよう。

B群にはSB2・25・36・58・59・77・115・121・128・148・151古段階・153・155が挙げられる。既に時期的な変遷については述べたが、4本支柱と2本支柱の構造が存在する。2本支柱の構造はSB155で確認されており、カマド寄りの床面中央に、カマドの築かれた壁と平行して2本支柱穴が配されている。4本支柱の構造ではSB58・59・115のように住居址の隅寄りに柱穴が配され、支柱内面積を広げている住居址と、SB2のように柱穴が床面の中央寄りに、壁際に2基の支柱穴を設けている例も見られる。前者のSB58などは柱穴を有する住居址の中で小規模な部類に入ることから、屋根覆いのかかる面積を広げるための方策と考えられる。この場合、屋根の勾配が他の住居址と同じであったとすると壁外の平坦面にも屋根がかけられていたことになる。SB49・50で検出されたテラスもそれと同様の効果を持つと考えられ、より上位での調査が可能であれば、SB58などでもテラスが確認されたかも知れない。後者のSB2の支柱は出入口部の柱と考えられる。この場合SB2ではカマドの築かれた壁と直交する壁に出入口が設けられていたことになる。

C群にはSB5・7・21・23・37・45・50・51・75・100・107・109・114・157・173が挙げられる。なお、SB83・175・176・179はコーナーカマドを有するためE群に分類した。時期別では1・2・6期に2軒、7期に3軒、8期4軒、15期1軒、時期不明1軒で、E群を含めれば小規模で細長いプランを取る竪穴住居址は通時的に存在している。このうちSB50は四壁にテラスを有するため屋根覆いのかかる面積は計測値より大きくなり、D群に分類することも可能である。SB100は15期に帰属する住居址で規模も中型2類と他より大きく、前述したように中世への移行期の現象と捉えられる。その他の1～8期のC群の住居址は規模の類型では小型ないし中型1類に限定される。そのためかカマドは短い方の壁に設置されることが多く、竪穴住居址内の空間を有効に使うとした意図が読みとれる。一方、長い方の壁にカマドを築くSB37・157はカマド使用時には焚口部や燃料の置場を考慮すると居住可能面積はかなり狭くなると判断される。

D群にはSB1・3・4ほかA・B・C・E・F群以外の128軒の住居址が該当する。これらは通時的に存在しており、遺構の重複などで住居址の全貌が不明なものも含めてあるが、本遺跡の主体を成すのはこの類型である。規模との関係ではSB54・57・167・178が大型1類に分類されるほか、中型2類が14軒で、残りは中型1類と小型で占められ、前述した竪穴住居址の構造と合致しており、小規模で屋根の低い住居址が多数存在していたと考えられる。D群は構築にかかる労力と建築資材がかなり節約できる構造でもあり、建替えや移動の激しい本集落の動向に符合しており、集落の性格の一端を示す構築物であろう。

E群にはSB10・83・86・97・170～172・174～176・179が分類される。時期的には8期1軒、12期に1軒、13期2軒、14期1軒、15期6軒と12期以降に増加し、14・15期で主体を占める。E群の住居址は隅丸長方形プランのものも存在しているが、その他の属性ではD群と何ら変わることはない。しかし、カマドが住居址の隅に構築されることによって建物の上屋構造や外観もかなり変貌し、また、時期的な偏在を見せることを重視して本類型を設定した。E群はさらに、カマドの主軸方向やカマド脇を中心とした住居址

の平面形状からいくつかの細分も可能である。その一番目はSB16のようにカマドの主軸と住居址の主軸が平行する場合である。これはD群の住居址のカマドがそのまま平行移動したと考えられ、この場合竪穴内に住む人々の起居可能な空間は拡大するが、カマド脇に使用可能な空間が無くなるという欠点を有する。二番目はSB86で検出されたようにカマドの主軸が住居址の中央に向き、カマドの存在する壁が張出して独立し、住居址のプランが方形ないし長方形の一角を裁ち落としたような五角形状を呈するものである。カマドの主軸とカマド付近のプランの変更はカマド周囲に空間を確保するための形式改良と捉えられる。三番目はSB97・174で確認されたようにカマドの主軸は住居址の中央に向き、カマドの設置される壁を長くして、カマドと隣り合う壁との間に空間を作り出すため、住居址のプランは台形状を呈している。これも二番目と同様の効果を生み出すが、双方とも上屋を掛ける際、カマド付近の造作が複雑であったと判断される。四番目は竪穴住居址の一角に住居址の中央方向を向くカマドが設置されるもので、住居址の形状は整った(隅丸)方形・長方形を呈している。カマドの主軸は住居址に対して45°に近い角度をとるようである。E群の出現は煮炊具が長胴甕から羽釜へと変化していく現象と平行しているが、同時期にD群の住居址が存在するなど、煮炊具の変化のみに起因するとは考えられず、住居址のプランの変化など竪穴内の空間利用の変化、カマドの機能の変化など多数の要因が重なり合った現象と考えられる。

F群にはSB147・151が挙げられる。SB147は8期に、SB151は7期に比定されており、いずれも礎石建ちの構造を有している。SB151は調査所見から新旧2段階に捉えられる。古段階は東西方向の柱間は300cm、南北方向510cmを測る4本主柱建ちの住居址である。その床面を利用して構築された新段階は壁沿いとカマド前にカマド袖石の転用による礎石が据えられ、その間隔や配置から一辺570cmの3間×3間の正方形プランの上屋が想定される。北壁沿いの張出しや礎石は出入口に係る庇と判断される。西壁の張出しは新段階にのみ併設されているが、その目的は定かではない。棚のような施設とも考えられる。礎石間には溝状の落込みが掘られ、その内部から樹皮片が出土しており丸木材が横位に埋設されていたらしい。それは竪穴の覆土の検討から上屋を建てたあと礎石の位置まで埋め戻し、土留めをした際の壁板を押えた地覆木と考えられる。このように本来は掘立柱とする建物を竪穴内に据えた礎石上に構築したという特異な構造を有している。SB147についても礎石の配置、覆土の状態、貯蔵穴の位置からSB151と同様な経緯をたどって、4本主柱建ちから礎石建ちの構造へ推移したと判断される。以上のようなF群は規模や構造から、高い上屋をもったと考えられ、集落内では他を圧する大規模な構造物であったと推定される。

(6) 竪穴住居址のカマドの構造とその変遷

142軒の竪穴住居址で143基の壁面に構築されたカマドが確認された。そのうち袖や煙道が確認でき、カマドの構造や構築法の復原可能なものは119基を数える。カマドは古代1期から15期に存在しているが中世では検出されておらず、古代を象徴する構造物でもある。カマドの燃焼部は「粘土」と総称される粘質な土と礫を材料として構築され、芯材として礫を多用する「石組カマド」と、粘土のみで塗り固め部分的に礫を芯材に利用した「粘土カマド」に大別される。石組カマドは70基、粘土カマドは41基確認されている。

ア カマドの構築法の推移

カマドを有する住居址の中で石組カマドと粘土カマドの存在比率を時期別に追ってみると、1期は粘土カマドで占められその数は10基を数える。2期は8基で67%、3期・4期はそれぞれ1基・4基で50%、5・6期が5基ずつで45%・30%、7期には7基で35%を占め、8期以降は石組カマドに席捲される。構築方法は粘土カマドが5割以上を占める1～4期、3～4割の5～7期、すべてが石組化する8～15期の3段階の変遷に分けられ、住居址の規模の時期別の様相と符合しており、粘土カマドの方が古い構築法であることがわかる。

次に特徴的な粘土カマドの構築法について若干ふれてみたい。燃焼部の構築に際し部分的に袖の芯材に礫を用いることがあるが、本遺跡ではSB121のように袖の付け根と先端に一對ずつ袖石を配する例と、SB78・146のように袖の先端に礫を配するカマド、SB23のように袖付け根にのみ礫を配するカマドが存在し、それぞれその上に柱状の礫を横に据え、カマドの天井部を支える芯材としている。この3種類のうち袖付け根と先端に礫を配するカマドは松本市千鹿頭北遺跡(松本市教委1989b)で確認されている。その帰属時期は本遺跡の1期に先行する古墳時代後期7世紀中頃に比定される。袖先端に袖石を配する例は千鹿頭北遺跡のほか飯田市天伯B・山岸遺跡(長野県教委1971)では主体を占め、その時期は5世紀後半にさかのぼる。また、穂高町馬場街道遺跡(穂高町教委1987)・長野市中条遺跡(長野市教委1989)の7世紀代の住居址で確認されている。袖付け根に礫を配したカマドは千鹿頭北遺跡の7世紀中頃に比定される住居址で検出されている。以上のことから袖の芯材に部分的に礫を使うカマドは本遺跡の成立に先行する古墳時代後期のカマドを特徴付ける構築法で、その伝統は古代4期頃まで色濃く残っていたと解釈される。石組カマドは県下では礫の入手の容易な松本平や天竜川流域の遺跡で盛行するが、その礫の組み方にもいくつかの特徴が見られる。袖の石組では扁平な礫を横長方向に置く例と、柱状の礫を縦長方向に置き芯材とするカマドが見られる。また、煙道部の両側に礫を並べその上に礫を蓋石として並べるSB34・102は本遺跡でも特異な例であるが、前述した天伯B遺跡や大町市借馬遺跡の7世紀代の住居址(大町市教委1981)で確認され、古い様相をもつ構築法と判断される。袖全体に大形の礫を並べて芯材とするカマドの構築は千鹿頭北・借馬遺跡では既に7世紀代に完成された形で出現するが、本遺跡では5・6期以降の住居址で検出されることが多い。

(7) カマドの類型とその変遷

ア カマドの類型

カマドの構造や分類については既に多数の成果が提示されているが(谷1982、横川1987、黒沢1987)、本遺跡では次の視点から4群10類型に及ぶ分類を試みた(第222・223図)。まず、カマドの構築される位置から、燃焼部が住居址の壁下に存在するカマドと、燃焼部が壁を掘り込んでいるものに分けた。さらに、壁への掘込みの形状から、A群：燃焼部が住居址の壁下に存在するカマド、B群：燃焼部奥が住居址の壁を半紡錘形に掘り込んでいるカマド、C群：燃焼部が住居址の壁を円形に掘り込んでいるカマド、D群：燃焼部が住居址の壁を方形に掘り込んでいるカマドの4群に分けた。カマドの壁への掘込みは上屋構造に直接係ることであり、掘込みの度合いが大きいほど住居址内の起居可能面積は拡大するが、逆に暖房・照明といった機能は弱まる。C・D群については掘込みの度合いから細分も可能である。次に、カマドの断面形状によって細分した。特に火床から煙道への接続状態では、この部分に障壁(燃焼部奥壁)を有するカマドと、火床から煙道にかけて緩やかに立上がるなど様々な形状が観察される。C・D群に分類される壁を円形ないし方形に掘り込むカマドではすべてに燃焼部奥壁が設けられており、煙道はかなり高い位置に取り付くと考えられ、調査状況によっては検出できない場合も多い。この様なカマドの断面形状の相違は通気性や燃焼効率と直接係る問題で、当然のことながら焚き口から煙道先端の煙出しまでが水平方向に長い構造より、短く上昇角の大きい方が燃焼効率は高まるが、逆に上屋の防火が問題となり、C・D群の様に壁を掘り込んで構築されるカマドは上屋と煙出しの間にある程度の距離を保つことを目的としたものであろう。以下、類型ごとにその特徴を追っていく。

A群

A1 類型：緩傾斜の燃焼部奥壁の下位から煙道が付き煙道底部が水平なカマド。

1～5期の住居址で確認され、燃焼部奥壁は15～20cmの高さを有する。奥壁は30°以上の傾斜

	A 群				B 群		C 群			D 群
	A1	A2	A3	A4	B1	B2	C1	C2	C3	
1期	SB 121 	SB 49 	SB 146 							
2期	SB 57 	SB 58 	SB 59 		SB 23 	SB 25 	SB 25 	SB 25 		
3期	SB 76 									
4期	SB 56 	SB 125 	SB 20 	SB 78 						
5期	SB 159 		SB 28 				SB 26 			
6期			SB 102 		SB 22 	SB 96 	SB 82 			

A 群 燃焼部が住居址壁下に存在するカマド
 A 1 類型：緩傾斜の燃焼部奥壁の下位から煙道が付き、煙道底部が水平なカマド。
 A 2 類型：燃焼部火床奥から煙道が付くカマド。煙道底部は、火床側で傾斜し煙道口側では水平である。
 A 3 類型：燃焼部火床奥から急傾斜の煙道が付くカマド。
 A 4 類型：燃焼部奥壁は急傾斜で、その上位に煙道が付くカマド。

第222図 古代竪穴住居址のカマドの類型（1・1～6期）

	A 群				B 群		C 群			D 群
	A1	A2	A3	A4	B1	B2	C1	C2	C3	
7 期	SB 16		SB 47	SB 84	SB 32 SB 31	SB 19	SB 66 SB 141	SB 34 SB 116	SB 65 SB 161	SB 89
8 期			SB 5	SB 37 SB 36	SB 74 SB 144	SB 166	SB 18 SB 40	SB 167 SB 10	SB 42 SB 107	
12 期				SB 86				SB 168		
13 期				SB 33 SB 105			SB 83			
15 期				SB 71 SB 177	SB 176					

B 群 焼焼部奥が住居址の壁を半筋錐形に掘り込んでいるカマド
 B 1 類型：焼焼部奥壁は斜めで煙道と一体化しているカマド。
 B 2 類型：焼焼部奥壁は垂直に近い角度を有し、その上位から急傾斜の煙道が付くカマド

C 群 焼焼部が住居址の壁を凹形に掘り込んでいるカマド
 C 1 類型：壁を掘り込む度合が、焼焼部の長さの1/3以下のカマド
 C 2 類型：壁を掘り込む度合が半分位のもの
 C 3 類型：壁を掘り込む度合が2/3以上のもの
 D 群 焼焼部が住居址の壁を、方形に掘り込んでいるカマド

第223図 古代竪穴住居址のカマド類型 (2・7～15期)

でA 2・A 3類型にくらべて急である。

A 2 類型： 燃焼部の火床奥から煙道の付くカマドである。

煙道底部の断面形状では途中で屈折し、煙道口側では底面は水平である。1・2・4～8期で検出された。燃焼部奥壁と煙道が一体になった構造でSB125のカマドのように奥壁が存在してもその高さは10cm弱にすぎない。

A 3 類型： 燃焼部火床奥から急傾斜の煙道が付くカマドである。

1・2・4～8期で確認された。燃焼部奥壁と煙道の一体化はさらに進行し、その傾斜角は40°を超える。煙道の長さは1mに達しないことが多い。煙道の終点にはSB20のように煙道先ピットが付くカマドと、SB28のように煙道先が直角に近い角度で立上がる場合も見られる。この類型は壁への掘込みを除くとB 1類型と同構造である。

A 4 類型： 燃焼部奥壁は急傾斜でその上位に煙道が付くカマドである。

4・7・8・12～15期で確認された。燃焼部奥壁の高さは30cmを越えるようで、検出面が低い場合には煙道が確認できなかった。煙道の検出できたSB36・37・105ではその長さが50cm内外で、A 1～A 3類型に比べかなり短い。袖石や想定される煙道口の高さから燃焼部の天井は他の類型に比べかなり高く、従って容量の大きな燃焼部を確保できたと判断される。SB84のカマドには支脚石が2個残されており、掛け口が2口、つまり2個体の甕が掛けられていたと考えられる。

B群

B 1 類型： 燃焼部奥壁は斜めで煙道と一体化しているカマドである。

断面形状などから判断される燃焼部の形状はA 3類型と同様である。2・7・8・15期と散発的に確認され、数量も少ない。

B 2 類型： 燃焼部奥壁は直角に近い角度を有し、その上位から急傾斜の煙道が付くカマドである。

奥壁は高さ20～30cmを測り、SB25・166のように煙道が検出できない場合もある。A 4類型と同様に燃焼部の容積は平面形に比べて大きい。2・7・8期で確認されたが、数量は少ない。想定される煙道はSB19のように短く、底面も傾斜すると考えられる。

C群

C 1 類型： 壁を丸く掘り込んで構築されるが、その掘込みの度合いが燃焼部の長さの三分の一以下のカマドである。2・5～8・15期で検出され、6～8期に多い。燃焼部奥壁は急角度で、煙道の確認されないことが多いが、SB25では煙道口の高さは30cmを測り、おそらく他のカマドもかなり高い位置に煙道が付くと判断される。

C 2 類型： 壁を丸く掘り込んで構築されるが、その掘込みの度合いが燃焼部の長さの二分の一のカマドである。7・8・12期で確認され、7・8期に多い。燃焼部や煙道の状態はC 1類型と同じである。

C 3 類型： 壁を丸く掘り込んで構築されが、その掘込みの度合いが燃焼部の長さの三分の二以上に達するカマドである。7・8期で検出される。SB107・161では煙道の取付け部がわずかに確認されたが煙道口の高さは20cm強でC 2類型に比べやや低い。

D群

燃焼部が住居址の壁を方形に掘り込んでいるカマドである。本遺跡では1基のみが確認されたが、下神遺跡(当センター発掘調査報告書6参照)では主体的な存在でさらに細分が可能である。燃焼部奥壁は20°くらいの角度で緩やかに上昇し、煙道へと続く。

イ カマドの変遷

次にこれらの種類の時期別の変遷について述べてみたい。各類型が時期ごとにどのくらい存在するかという定量的な分析は行っていないが、おおよその動向は次のとおりである。1～4・5期にかけてはA1・A2・A3類型が主体的でA4・B1・C1類型が若干存在している。これらは基本的に壁を掘り込まずに構築されるカマドで、長い煙道を有しており、古墳時代後期の支配的な形態である。構築法でも前述したように古い様相が看守され、前代の伝統に従ったものと判断される。

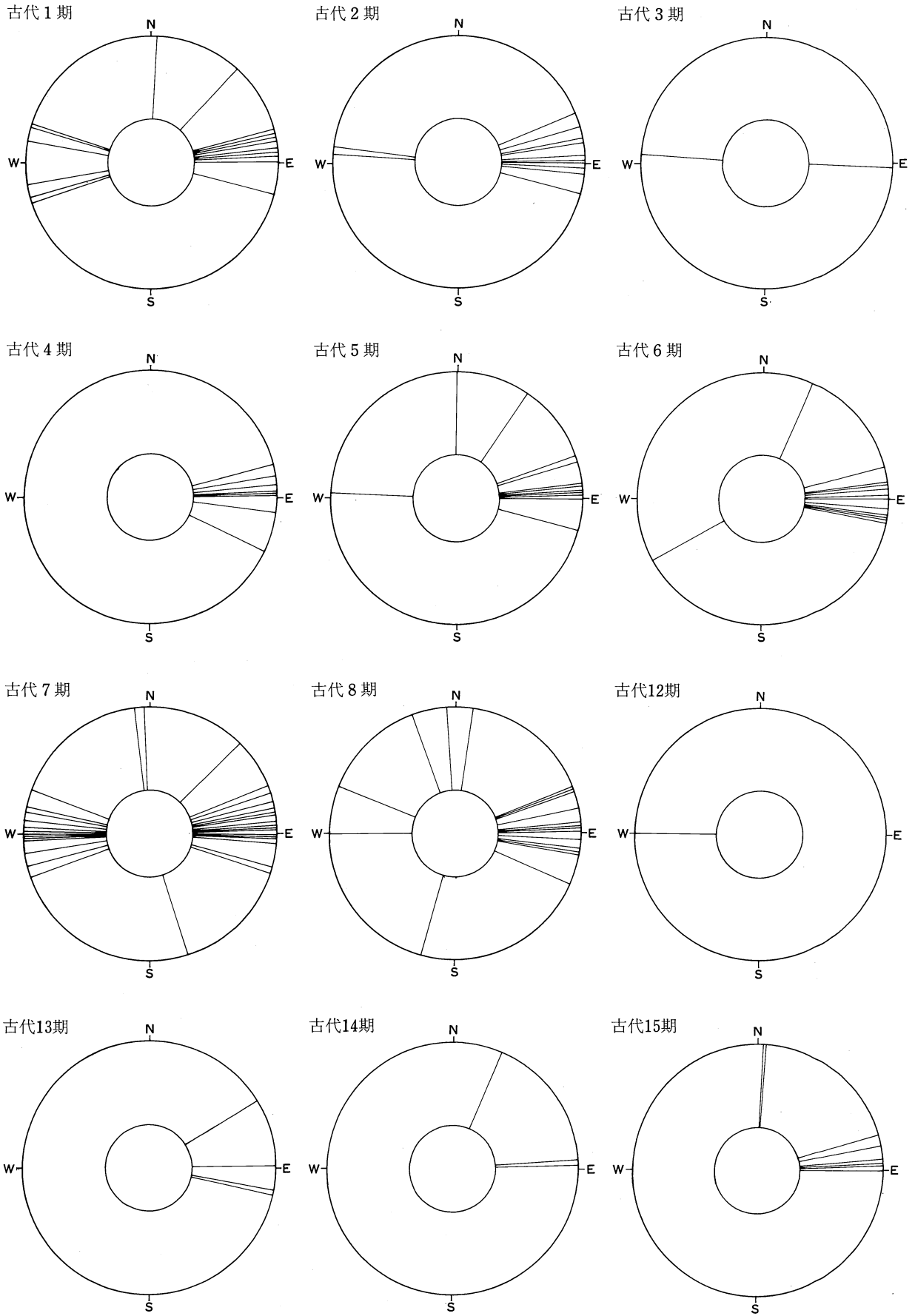
6～8期ではA2・A3類型も検出されるが、A群の中では燃焼部の容量の大きいA4類型が主体的である。A4類型ではSB84のように古い様相を残す粘土カマドも見られるが、袖芯に礫の多用されることが多い。B1・B2類型も若干存在している。この時期に隆盛するのはC1・C2・C3類型の壁を丸く掘り込んで構築されるカマドである。C群のカマドはほとんどが石組を用いて構築される。

12～15期では竪穴住居址の隅にカマドが構築されることが多いが、カマドそのものの構造や構築法には変化は認められず、6～8期と同様にA4・B1・C1類型が存在し、構築法では6～8期に完成された棒状の礫を縦位に並べて袖芯と石組の方法がそのまま利用されている。

以上のようにカマドの類型の変遷は1～4・5期のA群を主体とする様相から6～8期のB群が支配的な段階、さらに、6～8期のカマドの構造を受け継ぎつつもカマドそのものの位置を壁の中央から住居址の隅へと移動した12～15期の動向の3段階の変遷にまとめることが可能である。

最後にカマドの構造と住居址の上屋構造との関係からカマドの変遷過程について考察したいA1・A2類型のカマドは焚き口から煙道先まで水平方向に長い構造を取るため、煙出しの位置は住居址の壁や屋根から離れ、排煙や防火のための特別な造作は不必要となる。しかし、水平方向に長いため、通気性は悪くC群などに比べて燃焼効率は低かったと判断される。高い燃焼効率を得るためには短い距離間に焚き口と煙道が位置し、それによってカマド内に垂直方向に近い空気の流れを作り出すことが必要であろう。A4類型は煙道口を高い位置に設定して燃焼部の内法を高くすることで、B1・B2類型は燃焼部奥壁を斜めにして煙道を一体化させ煙道を短くすることで通気性を確保しようとした意図が読み取れる。一方、煙道を短くすれば必然的に煙出しと上屋は接近することになり、この改善策として燃焼部自体が壁を掘り込んで構築され、煙出しが上屋の壁から離れるようにしたと考えられる。既に竪穴住居址の規模の項で述べたように5期以降は住居址の面積が縮小し、中型が多数を占め、無柱穴の住居址が主体となるという住居址の小型化と構造の簡略化が同時に進行する。それと歩調を合わせるようにC群のカマドが採用されており、カマドに取られる床面積を少しでも減らし、住居址内の起居可能面積を増やそうとしたとの解釈も可能であろう。12～15期に検出される「コーナーカマド」については、既に5・6期以降カマドが壁の中央を離れ隅に寄る現象も確認され、カマドそのものの構造に変化が見られないため、新たな住居址やカマドの構築法の採用という次元から説き起こすべき問題ではなく、それまでの動向の中から生まれた現象と考えるべきである。従って、より燃焼効率の良いカマドの採用と住居址内の起居可能面積の拡大を目指した結果、カマドは住居址の隅に追いやられたと判断され、それによって竪穴住居址の壁の中心にカマドを築くという伝統的な住居址の構築法や人々に意識されていたであろうカマドを中心とした住居址内の空間観念が崩壊したことを意味している。

また、古代以降、中世1期にかけてはカマドや炉などの火処の形態はもとより、煮炊具の形態にも不明な部分が多く、わずかに言及可能な資料としてSK1278出土の足釜や、松本市入山辺南方遺跡出土の滑石製石鍋(未報告)が挙げられ、捏鉢の体部に煤が付着していることから「五徳」を使用した煮炊きが想定されている。これらはいずれも持運び可能な火処の形態であり、それを裏付けるように炉穴や火床など長期間に渡り一定の場所で煮炊きが行われたことを示す遺構の存在は皆無に等しいのが現状である。これらを考



第224図 古代竪穴住居の主軸方向

え合わせると煮炊などの直接的な機能のほかに、住居址の壁中央に位置することで住居址の空間構造そのものを律していた存在意義が消滅すれば、特別な上屋構造や煙道の構築といった労力が省ける移動可能な煮炊きの形態に移行することはたやすいであろう。その点で住居址の隅に構築されたカマドは作り付けのカマドから移動可能な煮炊きの形態への変化を準備したと評価される。

以上のことから本遺跡で確認された古代のカマドの変遷の大筋はA群からC群への移行と捉えられ、燃焼から排煙に至るまでが水平方向に長い構造から、垂直方向に近い構造への推移と捉えることができ、様々な要因が挙げられるが、燃焼効率を高めようとする型式改良の過程と総括されよう。

(8) 竪穴住居址の主軸方向

竪穴住居址の主軸方向はカマドを通る住居址の中軸線を主軸として扱い、この主軸と遺構測量に用いた南北方向の基準線(座標北)との成す角を当てた。カマドが隅に位置するものやカマドが検出されない住居址では東西方向の中軸線を主軸として計測した(第224図)。発掘された179軒の住居址で北壁にカマドを設置する(「北カマド」と略す)ものは13軒、南壁にカマドを設けた住居址(「南カマド」と略す)は2軒に過ぎず、東壁か(「東カマド」と略す)、西壁に設置する(「西カマド」と略す)ことを基本としているようである。主軸を東ないし西にとるといってもその振れ幅は30度を越えており、地点ごとで相違も観察される。以下、時期ごとにその傾向を追ってみる。

1期ではカマドが検出されないSB52や北カマドのSB55を除き、西に主軸を取る住居址と東に取るものに分かれるが、東カマドのほうが多い。中部地区では東西双方に主軸を取るが、やや東偏する住居址が多い。北部地区ではSB121・128・146・148・165のようにやや東偏する住居址と、SB129～133・145の東西方向に主軸を合わせる住居址群に分けられ、前者では遺構配置からNR9(久保川)との関連が窺われる。

2期ではSB39・48が西カマドであるほかは主軸を東に取っている。南部地区から中部地区にかけて散発的に住居址が分布するが、SB23・24・51・56～58のようにほぼ東西方向に主軸を合わせる住居址と、SB25・39・48のように10度強東偏するものに分かれ、後者のSB48は遺構配置からも1期の遺構との関連が想定される。北部地区ではNR9を挟んで3軒確認されたが、いずれもその水路に主軸を合わせている。

3期では東カマドと西カマドの住居址が1軒ずつ確認された。4期はすべて東カマドの住居址である。中部地区で確認されたSB72・78はやや西偏した主軸を取り、北部地区ではSB117を除き東西方向を意識した主軸で、遺構配置の面でも方角を強く意識した規制が窺われる。

5期には南部地区で3軒の住居址が検出されているが、主軸方向に規制は見られない。また北部地区ではSB98・119・139を除き主軸は東西方向に合わされ、4期と同様な規制が集落内にあったことが遺構配置から指摘できる。

6期では圧倒的に東カマドの住居址が多い。南部地区では東カマドで占められるが、主軸方向の振れ幅はやや広い。中部地区から北部地区にかけて散発的に住居址が分布するが北カマドのSB143を除き、東西方向に主軸を合わせるSB82・94・96・99・102・104と、やや西偏した主軸を取り、NR9と主軸を合せるように存在するSB70・92・110の2群に分けられる。さらに、この2群のなかに東カマドと西カマドの住居址が存在し、複雑な様相を呈している。

7期では西・東カマドが主体を占めるが、主軸方向の振れ幅は大きく地区ごとにその状況は異なり、主軸方向に統一性が看取できる地点もあるが、ばらつきが著しい部分も存在する。南部地区では西・北・東カマドの住居址が見られ主軸方向の振れ幅も大きいだが、SB16・17・19とNR4を挟んで位置するSB29・31・32など局所的に主軸方向を揃えている地点もある。中部地区では西・東カマドの双方が確認され、主軸方向は東西方向に合わされ、住居址の構築に強い規制があったことを窺わせる。この傾向はNR8下で

検出されたSB79・80・84・85にも及んでいる。北部地区では3種類の主軸方向への規制が看取される。NR9ぞいに展開するSB88・89・91・93・101・106・120は西・東カマドの双方が存在するが主軸方向は大きく西偏し水路に主軸を合わせていたと思われる。これらの北側ではSB137・138・149・151～153・158・161・164の東西方向に主軸を合わせる一群と、SB109・111・112・114・122・126・127・141・162・163の主軸を10°西偏させる住居址群に分かれ、特に後者のSB122・126・127・141では一定の間隔を保ちつつ直線状に配列しており、住居址の主軸方向への規制はもとより集落自体の設計にもかなり強く影響を与えた規制と判断される。

8期では東カマドの住居址が多いものの主軸方向の振れ幅はかなり大きく、それに対する規制はかなり局所的に観察される。南部地区ではSB2・10・12など東偏する主軸を有する一群と、SB3・5・8・9・13の東西方向に主軸を合わせる住居址群に分かれる。南部III地区のSB35・36・37には主軸方向の一致が認められるが、他の住居址には規制が看取できない。中部III地区で検出されたSB63・73・74には東西方向を意識した配置が、北部地区ではSB147・166に主軸方向の一致が見られるほかは、特に主軸方向への規制は読み取ることができない。

12～14期にかけては住居址数が少なく、散在的に分布するため主軸方向に規制を読み取ることは困難である。15期の北端I地区ではSB170・171・174・176に主軸方向の一致が認められカマドの構築位置も同じである。

2 掘立柱建物址の構造と変遷

(1) 掘立柱建物址の棟数の推移

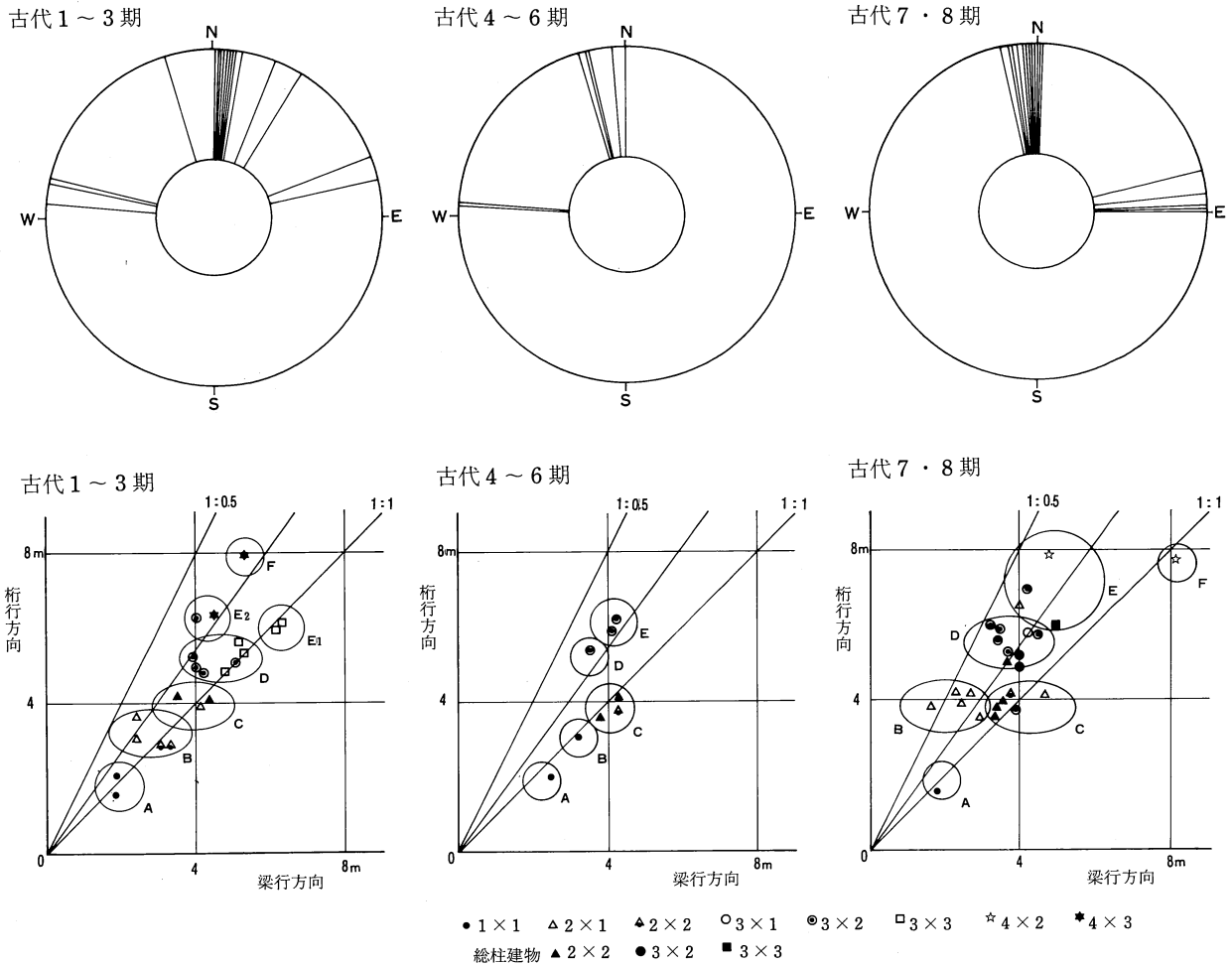
個々の遺構の特徴や帰属時期については既に第2章で述べたが、ここではそれらの事実報告をまとめ若干の考察を行いたい。建物址の帰属時期については決定可能な出土遺物に恵まれないため、掘り方の埋土の特徴や遺構配置から推定したものが多く、各時期別の棟数は次のとおりである(付表16)。

1期には2棟、2期には12棟が帰属し、中部I・II地区ではさらに8棟の建物址が1・2期のどちらかに帰属すると思われる。4～6期には各時期に1～3棟帰属すると考えられるが、確実なのは6期の2棟のみである。7期には18棟、8期には9棟と竪穴住居址の増減と歩調を合わせている。12期以降では、北部I地区で該期の住居址と同様の埋土を有するST32にその可能性がある。掘り方の埋土の特徴については1～4・5期が暗褐色土の混じる灰白色土で、6～8期の青灰色を主体とした埋土とは明瞭に区別ができた。

(2) 掘立柱建物址の規模と構造

掘立柱建物址の時期別の規模と構造を第225図に示した。ここでは棟数が少ないことや帰属時期の不明確な建物址が多いことから、竪穴住居址の変遷や次節で述べる集落の動向と合わせ、1～3期、4～6期、7・8期の3段階に分けて考察を進める。なお、規模は柱痕跡もしくは掘り方の芯芯間距離を求め、桁行方向の長さを縦軸に、梁行方向を横軸にとってグラフ化した。

1～3期には21棟の建物址が存在し、構造別には1間×1間が2棟(内1軒は建替え)、2間×1間が3棟、2間×2間が3棟、3間×2間が5棟、3間×3間が5棟、4間×3間が2棟、2間×2間の総柱建物址が1棟である。これらは建物址の規模からA～F群の6群に分けられる。各群での建物址の構造と平均面積はA群が1間×1間で3.35㎡、B群では2間×1間と2間×2間の建物址が見られ28.84㎡、C群では2間×1間と2間×2間の総柱建物址で構成され16.39㎡、D群は3間×1間と3間×2間の建物址が含まれ23.22㎡、E群はさらにプランから3間×2間と3間×1間・4間×2間の建物址に分かれ32.36㎡を



第225図 古代掘立柱建物址の棟方向と規模

測り、F群が4間×3間の建物址で面積は42.53㎡である。建物址の平面形ではB群の2間×1間、D群の3間×2間、E2群、F群を除き、桁行と梁行の長さの比が1:0.75から1:1の間にある正方形プランの建物址が多い。分類された建物址の機能や用途については次のように考えられる。D・E・F群に分類されるST16~22については中部I地区の一角を占有し、1~2期にかけて2・3棟ずつ併存したと判断される。変遷過程については次節で述べるが、土製品の製作工房的な様相を持合わせるSB53が、その遺構配置から建物址に併設されたと考えられる。さらに、ST20の西側に8基の土坑が重複しながらST20に沿うように並び、その土坑内からは竪穴住居址と同じ内容の遺物が出土し、覆土中に灰・炭・焼土を多含しており、煮炊行為が近くで行われた可能性が高く、建物址の検出面上で食器類や甕類の出土が多いことから、住居址と同様の人間の営為がなされたと思われ、建物址は住居として使用されていたと判断される。特に最大の規模を有するST21は内部に3本の束柱を有するが、建物址の規模に比べて本数が少なく、「穀」「穎」の収納による加重には耐えられないと判断され、床張の住居と判断したほうが良いであろう。3間×2間のST25・27・28は長方形プランを取ることや検出面上で遺物の出土が多いことから居住施設であったかもしれない。これらに対しA~C群はその規模から倉や納屋であったと考えられる。1間×1間のA群については「琵琶湖西岸の種籾囲い」(酒井1989)などの民俗例に類似している。ST9・12・13・15は他に比べ柱間間隔が狭いことから高床の倉庫の可能性を指摘できる。

4~6期では8棟の建物址が検出され、構造別に見ると1間×1間が2棟、2間×2間が1棟、3間×

2間が3棟、2間×2間の総柱建物址が2棟である。これらの建物址は規模からA～E群の5群に分けられる。各群の構成と平均面積はA群が1間×1間で5.09㎡、B類も1間×1間で10.40㎡、C群は2間×1間と2間×2間で15.87㎡、D群は3間×1間で20.81㎡、E群は3間×2間で26.88㎡を測る。建物址の平面形ではA～C群が方形プランであるのに対して、D・E群は長方形プランを呈している。E群のST34・36は3間×2間の建物址が東面を合わせるように併存していたと判断され、「倉」としての側面を看取できる。A～C類は1～3期と同様に倉庫と考えられるが、規模や構造の違いは収納物の相違とも考えられる。

7・8期では26棟の建物址が確認され、構造別には、1間×1間が1棟、2間×1間が6棟、2間×2間が3棟、3間×1間が1棟、3間×2間が7棟、4間×2間が2棟で、総柱建物址では2間×2間が3棟、3間×2間が2棟、3間×3間が1棟である。これらは建物址の規模からA～F群の6群に分類される。各群の構造と平均面積はA群が1間×1間で2.98㎡、B群が2間×1間で10.06㎡、C群は3間×1間と2間×2間の総柱建物址で13.77㎡、D群は2間×2間・3間×1間・3間×2間と3間×2間の総柱建物址で21.49㎡、E群は2間×2間・3間×2間・4間×3間と3間×3間の総柱建物址を含み31.46㎡、F群は4間×2間で南面に庇を有し63.33㎡を測る。建物址の平面形についてはA・C・F群は基本的に方形プランであるが、B・D・E群は長方形を呈している。特にB群は平均面積では1～6期と変わらないものの、プランは長方形へと変化し、全体に長方形プランが7割近くを占め、1～3期とは逆の様相を呈している。建物址の機能では総柱建物址のST44・48・49・58・59は高床の倉庫と考えられ、ST44・48は構造を異にするが建物址の面を合わせて併存していたと判断され、付近で風字硯(SB145出土)が検出され、この倉庫の性格を示すものといえる。そのほかST29・30・35・51・52・57は竪穴住居址の分布域の中央に位置することから、住居址群で共同管理された倉庫・納屋・作業所の性格を有していたと考えられる。D群に分類される3間×1間のST5は内部に須恵器の大甕が設置され、また、SB27出土の須恵器杯・杯蓋のセット(8・9)は出土状態からこの建物址の構築時の地鎮具と判断される。その須恵器杯は体部に「倉」の墨書が観察されることから、総柱建物址のように堅牢でない建物址も、当時は「倉」と意識されていたことを示す貴重な例であると言える。住居の特徴を有する建物址としてはST61が挙げられる。南面に幅広い庇を有し、検出面や周囲の土坑から「東」「寺」が墨書された土器が出土していることから、内部で竪穴住居址と同様の人々の営みがなされていたと判断される。A・B・C群は外観上では大きな相違を見せるがいずれもその規模から倉庫と判断される。

(3) 掘立柱建物址の変遷と性格

以上3段階に分けて掘立柱建物址の構造にふれてきたが、1～3期では方形プランの建物址が全体の6割を占めるのに対し、7・8期では長方形プランが7割近くを占め、建物址のプランが大幅に変化してきたことを物語っている。方形プランの建物址については「正税帳」や官衙遺跡の分析から松村恵司が「倉の平面形態の一般的特徴」と指摘しており(松村1983)、本遺跡の1～3期の大形の建物址は本来長方形プランの「屋」として構築されたのではなく、むしろ官衙の「正倉」を模倣したものであり、同時に「稲倉」としての機能を兼ね備えていたと解釈される。また、西日本で古墳時代後期以降発展した長方形プランの建物址が東日本では受け入れられず、伝統的な竪穴住居址の構造を受け継いだ結果、群馬県の三ツ寺遺跡に見られる豪族の居館址と判断されるような大形の方形プランの建物が成立したとする宮本長二郎の見解(宮本1983)もあるが、いずれにせよ中部I地区の大形の建物址群は調査区域の一角を占有するような独立した存在であること、当地域の古墳時代後期の通常の集落では大形の掘立柱建物址が確認されていないことから、律令制の採用という社会的背景のなかで集落にもたらされた新形式の構築物と考えられる。

また、建物址の規模からは6群に分類されることが明らかにされた。各群の規模はA群3～5㎡、B群が8～10期㎡、C群が13～16㎡、D群が20～23㎡、E群が26～32㎡、F群が42㎡以上の面積を有しており、それらが1～8には通時的存在であったと理解される。建物址の規模と遺構配置からは次のことも指摘できる。1～3期ではA・B・C群の比較的小さい建物址が個々の住居址とセットを成すように存在していることが明確に観察される。4～8期のD・E群の建物址は3～4軒の竪穴住居址の分布の中に1棟併存する場合と、北部II地区のように多数の住居址と建物址が併存する状況に分かれる。この遺構配置の特徴からA～C群の建物址は1・2軒の住居址に所属する倉もしくは納屋と考えられ、構造や規模の違いは収納物の重量の相違を反映するものであろう。D・E群の建物址は3～5軒の住居址に住む人々によって共同管理された施設と判断され、倉・納屋・作業所などの機能が想定できる。倉庫的建物址については規模を増せば増すほど共有性を有するという性格も指摘できよう。

(4) 掘立柱建物址の主軸方向

建物址の主軸方向は棟方向と測量で用いた南北方向(座標北)との成す角度を計測し、棟方向の不明なものには南北方向の主軸を当て、時期別に第225図に示した。以下、時期ごとにその傾向を追う。

1～3期の建物址は大半が南北棟と判断される。南部III～中部II地区では大形の建物址ST16～21に、周囲の建物址が主軸を合わせるように発展している。ST19・22は直角に棟を配するように位置するが、これとST9・12・13・15が主軸方向を合わせている。ST16・17・19・20・21はN2～5度を測り、ST10・11・14・25・27・28が主軸方向を一致させる。北部II地区検出のST47はSB121・128と主軸を合わせている。

4～6期でも同様に南北棟の建物址が多い。北部地区ではST34・36のように西偏した主軸をもつ建物址と、ST42・46のように東西方向を意識した主軸方向を有するものに分かれるようである。

7・8期では南北棟と東西棟の建物址が存在するが主軸方向の振れ幅は狭い範囲に納まり、建物址の構築に際して主軸方向に対する強い規制があったことを窺わせる。多数の建物址が存在する北部地区ではST33・35・38のように大きく西偏する建物址と、南北方向に主軸を取るST39・40・44・45・48～51・54・58・60の建物址、ST52・55～57・59・61のように主軸方向をわずかに2～3度西偏させる建物址の3群に主軸方向から分類が可能である。

第2節 三の宮遺跡の集落景観とその変遷

1 古代の集落景観

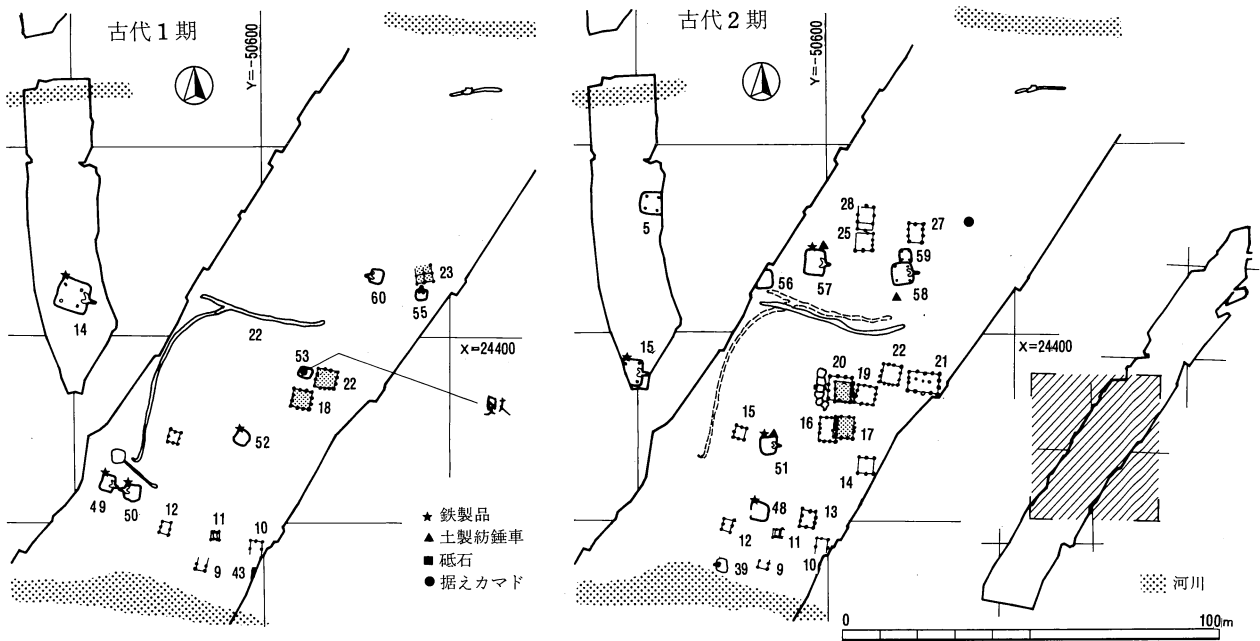
本遺跡の古代の遺構は、遺物の出土量に保証され、明確に帰属時期の確定できる175軒の竪穴住居址を中心として、遺構配置や主軸方向の一致、遺構の構造や覆土の特徴の検討を通じて、1～15期の土器様相に沿った遺構の時期区分が可能である(第227～229図)。土器様相の1時期の存続期間はその編年研究の成果から(総論編参照)30～40年と推定されているが、その区分された時期内では竪穴住居址などの遺構に1～3回の重複関係が確認され、住居址などの建物の建替えが頻繁であったことを物語っている。一方では遺構の重複関係が多い時期と少ない時期があり、各土器様相の存続期間が必ずしも同期間でなかったことも類推させる。また、本調査区域と隣接して松本市教委による発掘調査が県道下、永田集落東側、中村集落西側の3地点で行われており、その成果を必要に応じて組み入れて考察を進める(第230図)。

(1) 1～3期の集落とその変遷

本調査区域内に初めて集落が確認されるのは古代1期で、中部I地区と北部II地区に竪穴住居址、掘立柱建物址、溝址などの遺構が比較的まとまって分布している。2期になると中部地区ではさらに遺構数が増加し、また、南部地区にも遺構が出現するなど、集落が発展した結果と判断されるが、逆に北部II地区では遺構数が減少する。3期になると調査区域全体で2軒の住居址が検出されたにすぎず、4期以降の集落景観とも様相は異なり集落の発展に断絶が読み取れる。以下、各時期ごとに集落の発展を追う。

中部地区ではSB43・49・50・52・53・55・60が1期に比定され、松本市教委による調査区域では第14号住居址も同時期と思われる(第226図)。これらの分布と重なるように掘立柱建物址、溝址、土坑が存在し、検出状況や埋土の特徴から1～3期の所産と考えられる。そのなかでST18・22がSB53と隣接して主軸方向を合わせて併存し、ST22では柱痕跡で出土した遺物から2期には廃絶していたと判断される。ST18・22と同時にやや東偏した主軸方向が西偏し、南に位置するNR9(久保川)に沿うように位置している。遺物の出土が少なく必ずしも明確ではないが、住居址の重複から1～2回の建替えが想定され、次のような集落景観の変遷が考えられる。西カマドを有するSB146・148は主軸方向の一致や遺構配置から併存が考えられ、4本主柱を有することやその柱穴の大きさの類似からSB121も同時存在が指摘される。また、SB128・132は共に焼失住居と判断され、併存の根拠となろう。それを切って構築されるSB129・131・133とSB145は東西方向に主軸を合わせて居る。SB145・157・160は東カマドを有し、2期のSB160と主軸方向を揃えていることから、その後出性が窺える。ST47・SD40も1期に属す可能性がある。

南部地区ではSB23・24・25が2期に比定され、SB4にもその可能性が指摘できる。検出状況や主軸方向の一致からSB25とST4・8の併存が想定される。SB4・23・24とSB25との間にはNR3が存在している。2期とは限定できないものの南部地区の集落の形成と密接に係わった流路で、小境沢から境沢に水を落とす流下方向が復元されるが、地形環境から判断して人工的に開削された流路と判断される。中部地区では1期の様相を引き継ぐ形で集落が展開する。SB39・48・51・56・57・58・59が2期に比定される。松本市教委の調査区域では第5・15住居址が2期と判断される。検出面や柱穴掘り方の遺物の様相からST16・17・19・20・21が2期と考えられ、ST19が1期のST18と2期のST20を切って構築されることから2段階の変遷が捉えられる。遺構配置や主軸方向の一致からST17・19が東西両面を合わせるように並び、ST21とも直角に棟を配している。これらに先行してST16・20が併存したと想定される。同様にSB58・59



第226図 中部I・II地区の古代1・2期の集落

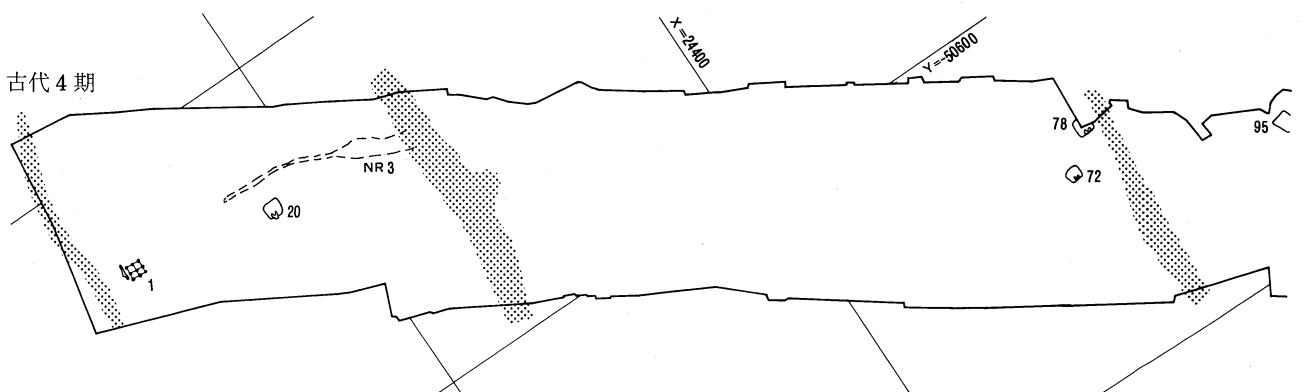
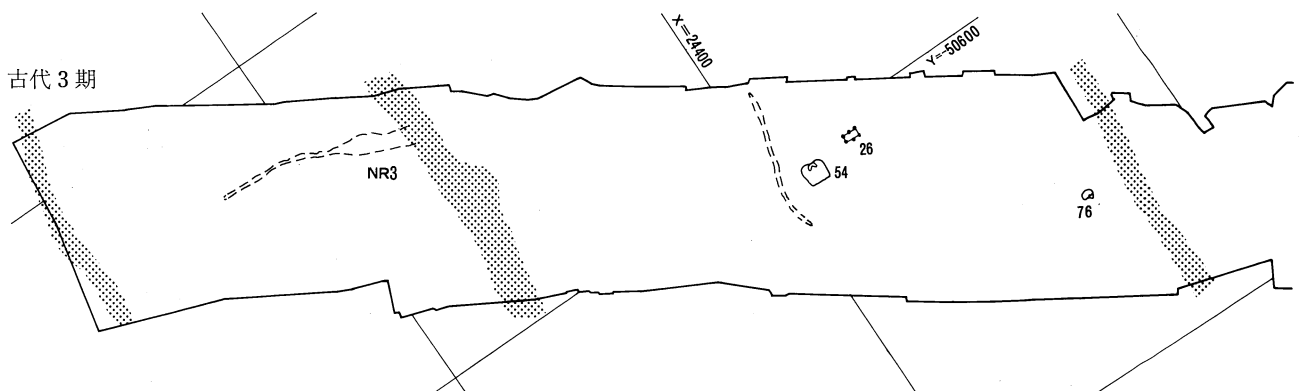
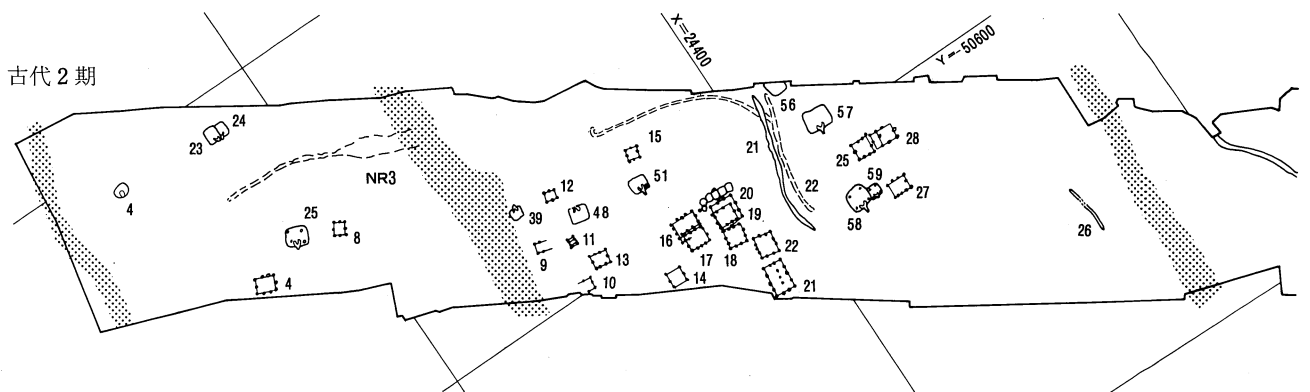
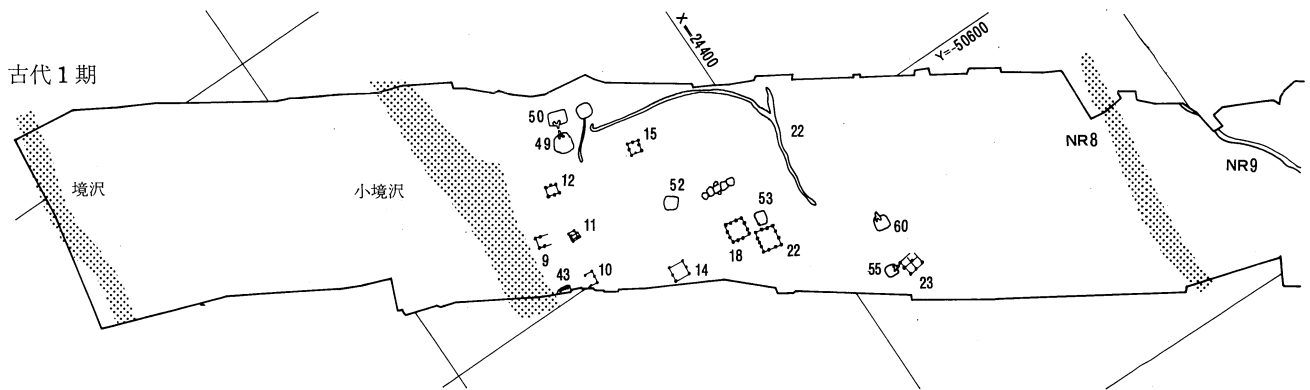
の重複関係やST25・28の位置関係から2段階の変遷が追えよう。また、これらの建物址との主軸方向の一致からST11・14・25・27・28も2期に属す可能性を有する。また、中部地区全体の遺構配置ではST16～21の大型建物址群とSB57～59・ST25・27・28の分布域の間にはSD21・22が存在しており、双方を区画し、分け隔てていたと考えられる。北部地区では久保川を挟んでSB90・124・160が散在的に分布している。

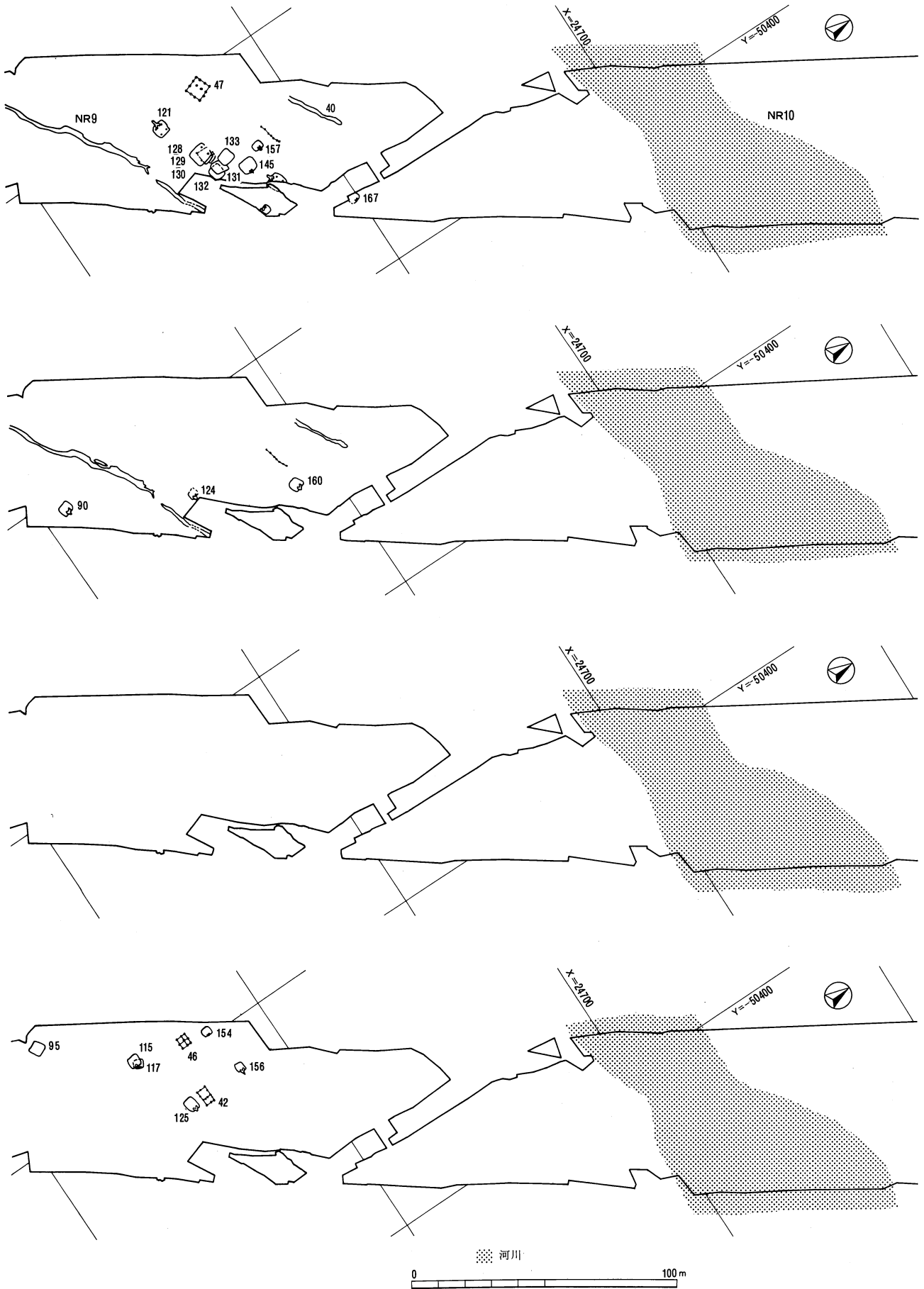
3期には中部地区でSB54・76が検出されたにすぎず、他の地区では遺構が確認されていない。また、中部I地区でもこの時期以降、集落が展開することはなくなる。

1～3期の集落景観からは次のことが指摘できる。北部地区ではSB146とSB121、SB128とSB132、SB145とSB157など一辺5～6mの比較的大きな4本支柱の住居址と、一辺3～4mの住居址がセットをなして併存していたと考えられ、このセットが2～3、即ち4～6軒の住居址が同時存在していたようである。中部地区ではこれとは様相を異にし、溝址で区画された内部に大型の建物址が存在し、周囲に小型の住居址と建物址が配置され、溝址の外側に比較的大型の住居址が分布するという、大型の建物址を中心とした3重構造の集落景観を取る。前者は松本市千鹿頭北遺跡・飯田市天伯B・山岸遺跡・大町市借馬遺跡など先行する古墳時代後期の集落との類似が指摘できるが、後者の建物址を中心とした集落は比較的大型の住居址を従えるように配置され、建物址と隣接するSB53では「財」の字がへら書きされた美濃須衛窯産須恵器杯が出土するなど、竪穴住居址を主体とする集落に比べてその優位性が窺われる。この時期の水田址については直接的な痕跡を見出せないが、中部III地区で確認されたSD23の周辺などに想定される。出土遺物ではSB57・128で鉄製の鋤鍬先が検出され開発を象徴する遺物といえる。また、鉄製品の保有率(その時期の全住居址数に対する鉄製品の出土した住居址の割合、第231図)が他の時期に比べて高く、開発に際して資材が多量に投下されたことを物語るものであろう。他には鉄製及び土製の紡錘車の出土が目立ち、水田耕作のみならず、「調布」生産を目的とした畠作を混えた多角的な経営が想定される。

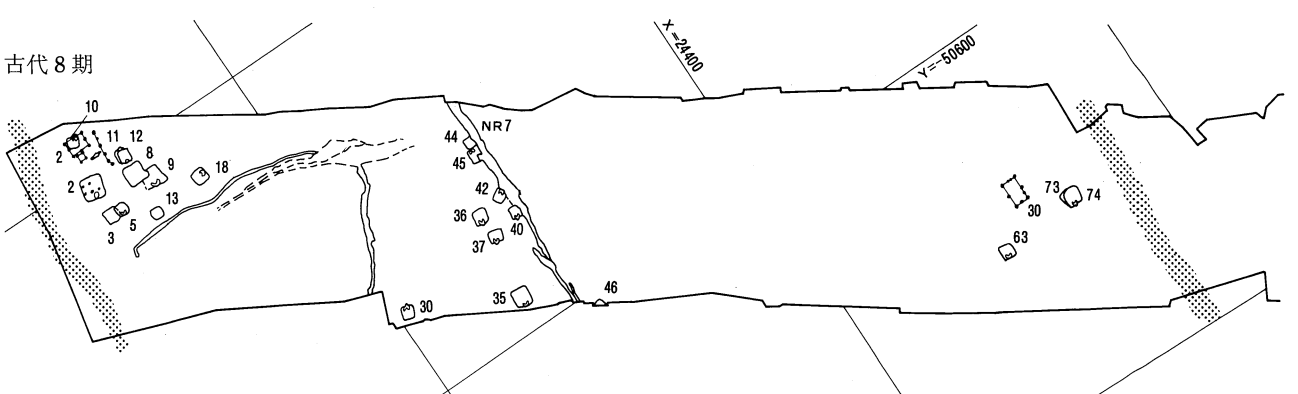
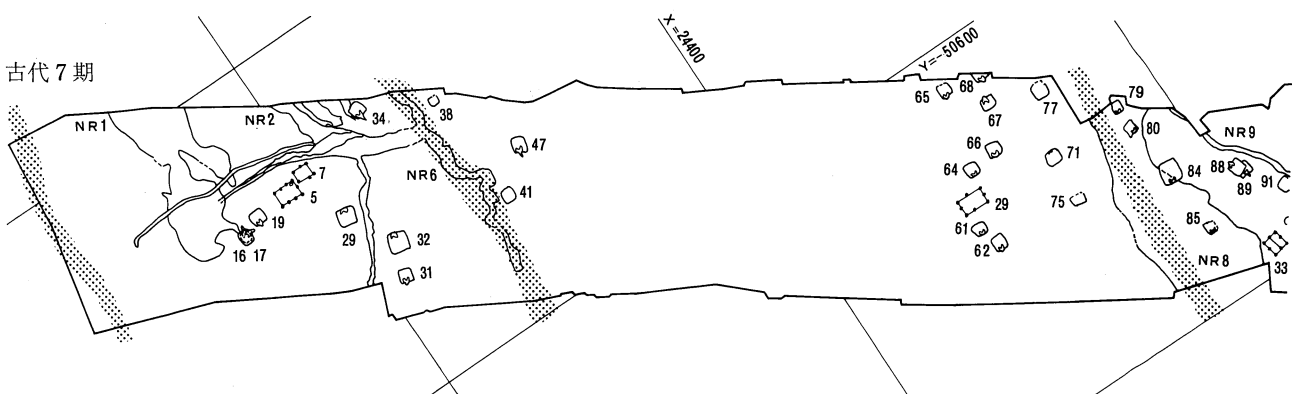
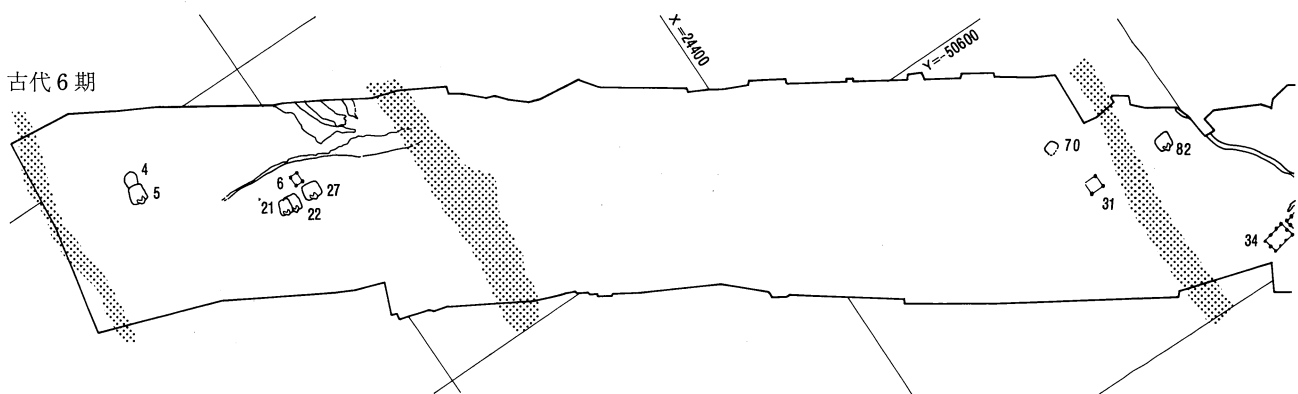
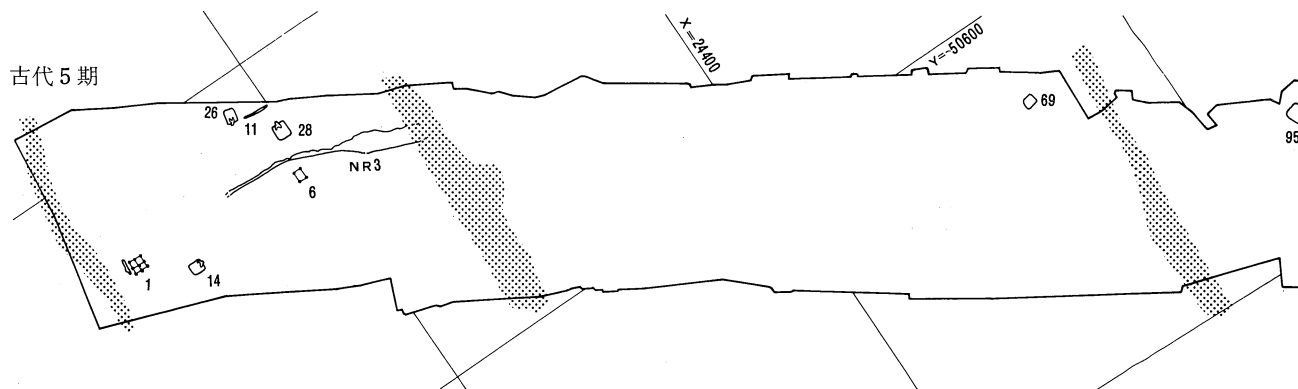
(2) 4～6期の集落とその変遷

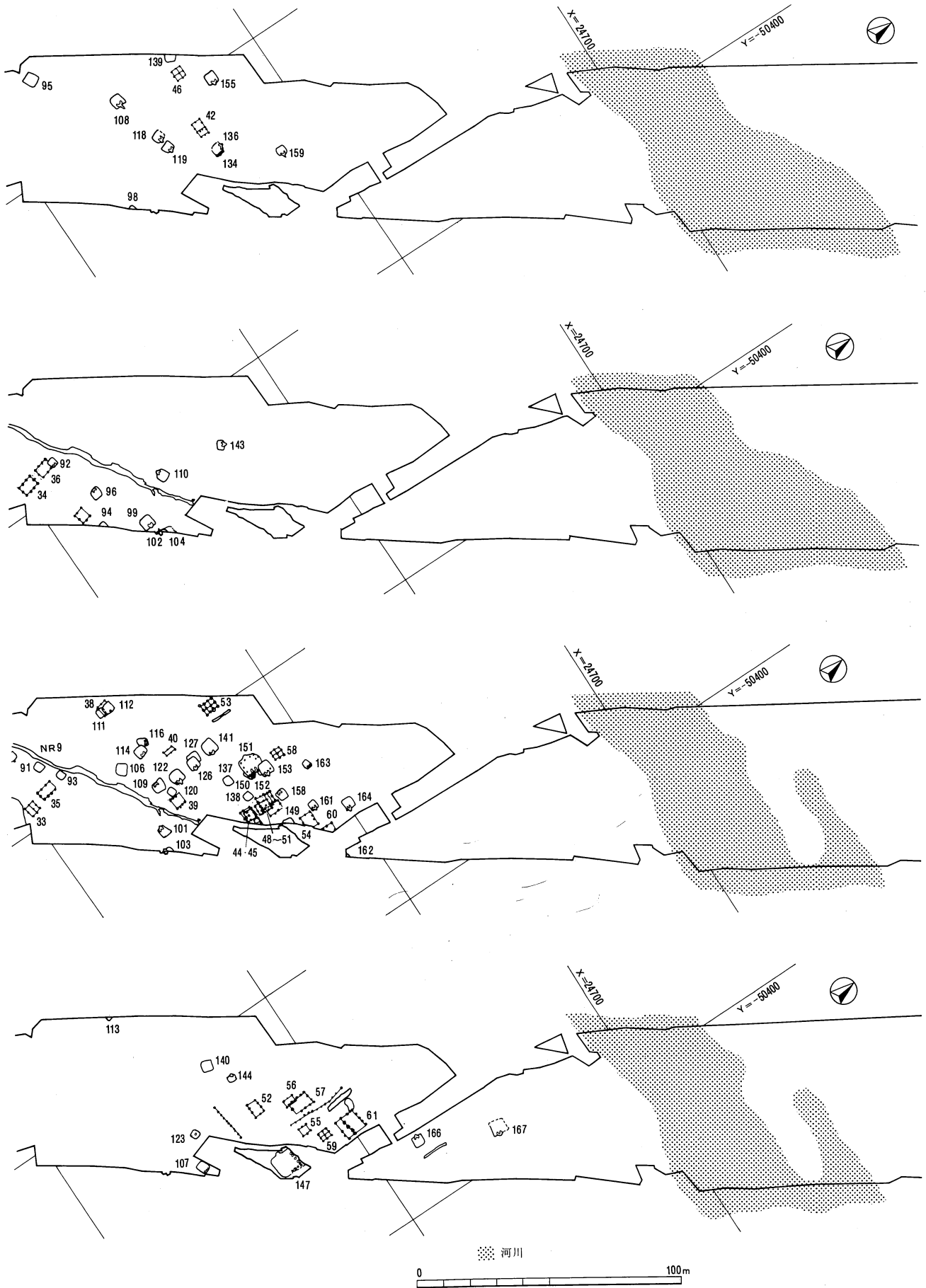
3期に集落は途絶えたが4期になると南部地区・中部III地区・北部II地区に新たに集落が形成され、5



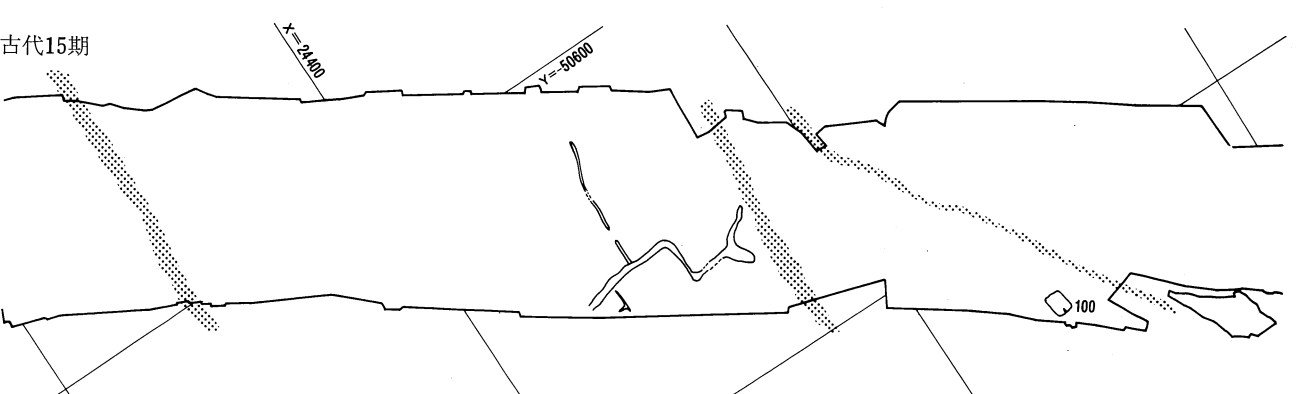
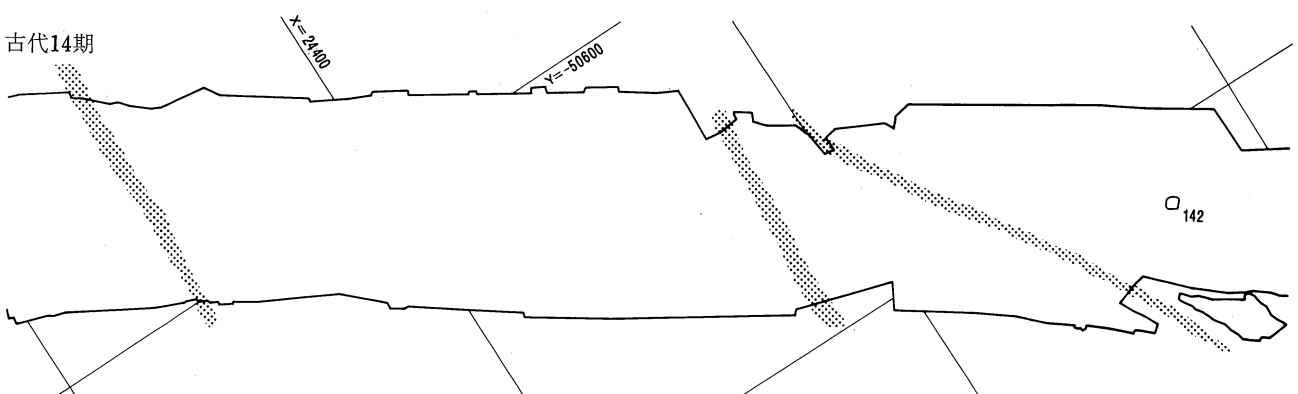
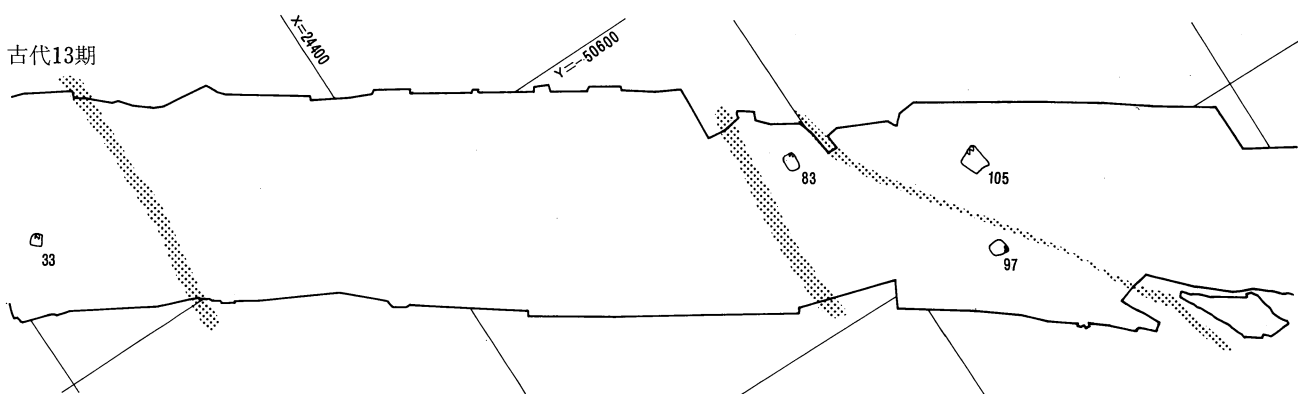
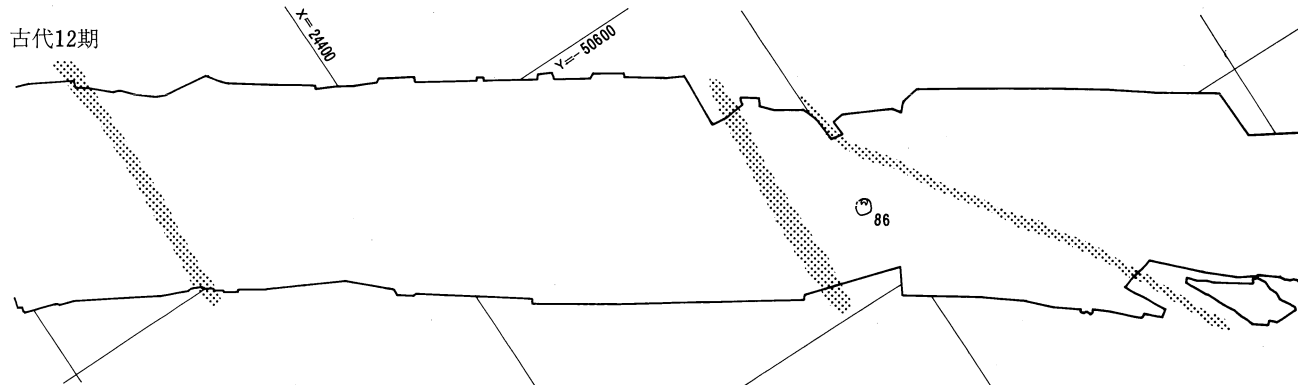


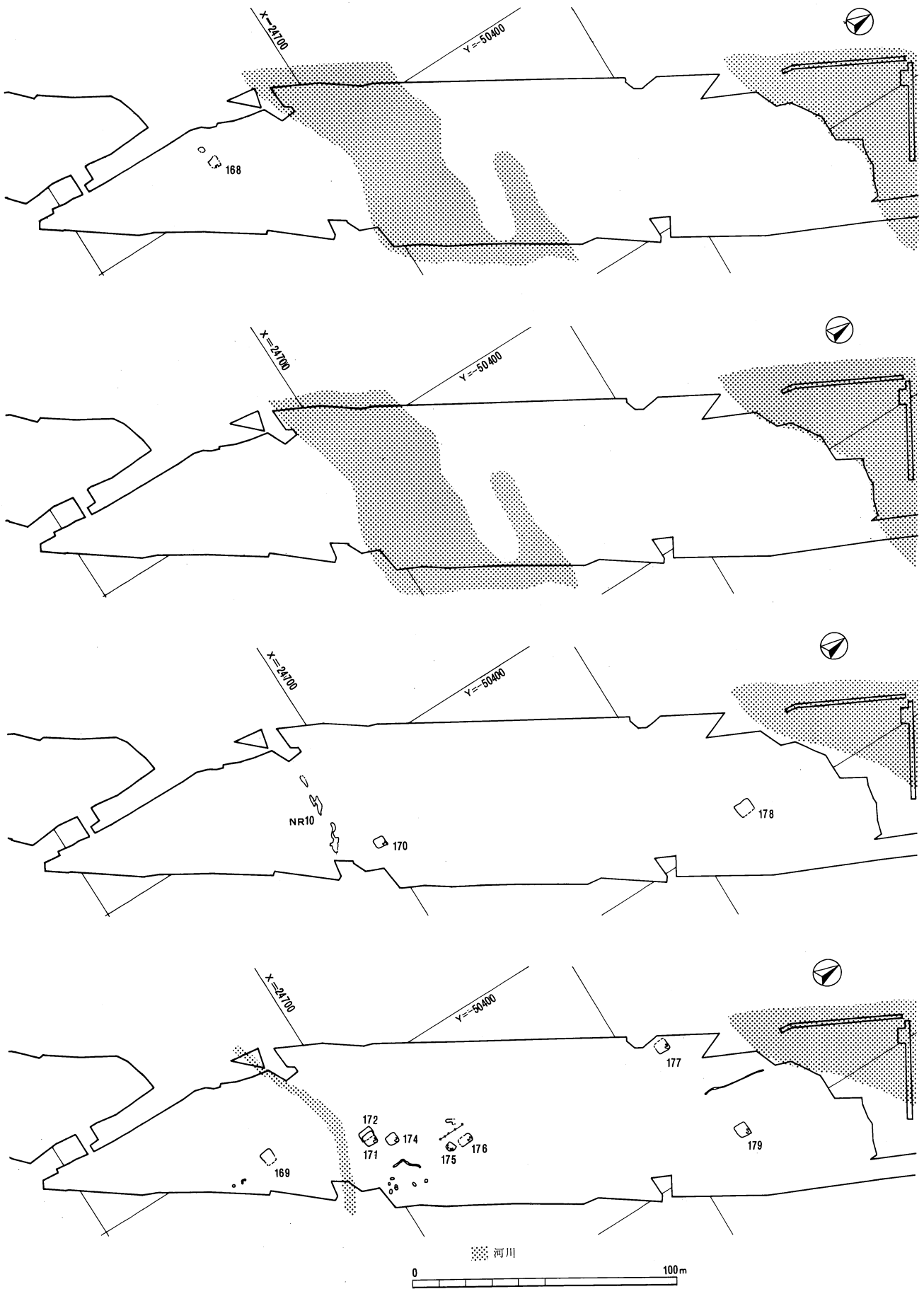
第227図 古代集落景観変遷図(1)



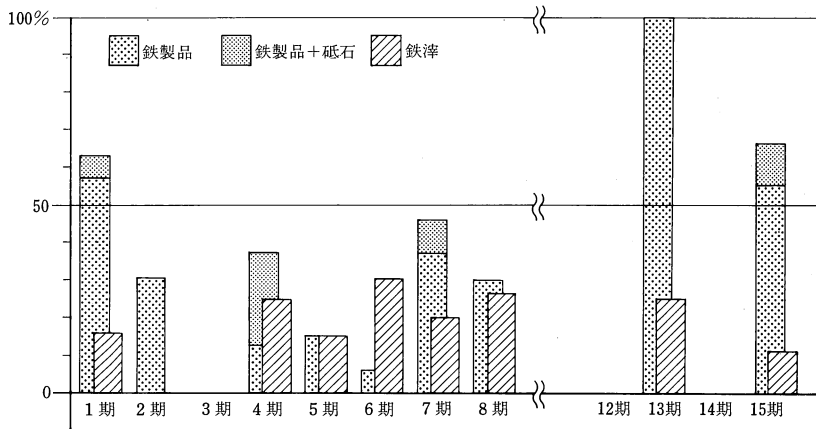


第228図 古代集落景観変遷図(2)





第229図 古代集落景観変遷図(3)



第231図 古代の鉄製品・鉄滓の時期別保有率

期にも同様の展開が見られる。

6期では南部地区では前代までの傾向を引き継ぐが、北部地区では再び久保川に主軸方向を合わせるように遺構が分布し遺構数も増加している。以下、時期ごとに集落の展開を追う。

4期では南部地区でSB20が検出され、ST1も4・5期に属すると考えられる。いずれも流路NR3を意識した遺構配置を取る。中部III地区ではNR8に沿うようにSB72・78が位置す

る。北部地区ではSB95・115・117・125・154・156が4期に比定され、ST42・46も埋土の特徴や出土遺物から4・5期に属すと判断される。なお、4・5期の北部地区の東西方向に主軸方向を取る遺構配置と久保川との間には関係が見られず、流路そのものが干上がり存在していなかったとも考えられる。

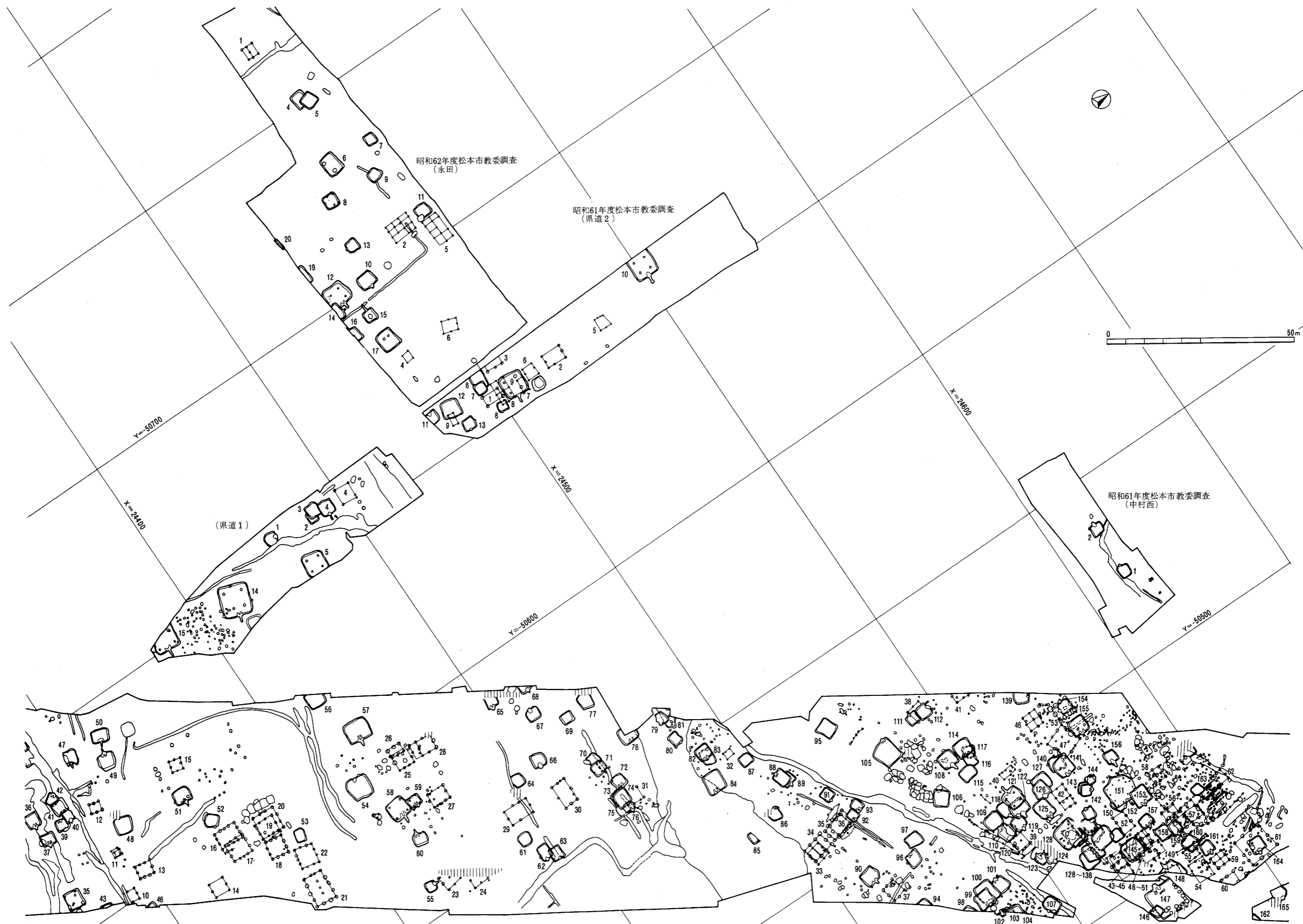
5期には南部地区でSB14・26・28が検出され、ST6も遺構配置から5期と判断される。4期と同様NR3に沿った遺構配置である。中部III地区ではSB69が検出されている。北部地区ではSB108・118・119・134・136・139・155・159が5期に比定される。遺構配置では4期と同様な展開が見られる。

6期には南部地区でSB4・5・21・22・27・ST6が検出され、重複関係から2段階の変遷が想定される。NR3に沿った遺構配置を取っているが、この時期には境沢・小境沢沿いに小規模な氾濫が起り、その伴ってNR2が流路の痕跡として残され、I Df層が同時に南部II地区を中心に堆積したと考えられる。中部III地区ではSB70・82・ST31が分布しNR8に沿った遺構配置を取る。北部地区では久保川をはさんで流路に主軸方向を合わせるようにSB92・94・96・99・102・104・110・143が検出され、ST34・36・37が出土遺物や遺構配置から6期と考えられる。

4～6期の集落景観の特徴としては次のことが挙げられる。4期と5期では極めて良く似た遺構配置が取られており、その傾向は北部地区で顕著である。4期ではSB115からSB117への建替えが見られるが、SB125・154・156と共に四角形の角を成すように配列しており、この傾向は5期の住居址配置にも受け継がれ、さらに2軒が加わり、同様な集落景観を基本としつつ集落が拡大した様子が窺える。その内部ではSB108・118間に遺物の接合関係を有すること、SB108・118・119ではカマドの構造が酷似するなど、強い関連が想定され、4期ではSB115(117)・125、SB154・156という東西方向に並ぶ住居址同志の結合の上にST42・46が所有されていたと推定される。6期では遺構の重複関係から2段階の変遷が想定され、古段階はST34・36の軒を連ねた配置にSB96・102などの西カマドの住居址が伴い、新段階ではSB92・94・99など東カマドの住居址が併存すると考えられる。この中でSB102は一辺9mを測る超大型住居址の可能性を有し、ST34・36にはその配列から倉庫としての機能が推定される。この時期の北部地区の遺構配置は久保川(NR9)と主軸方向を一致させており、6期には再びこの位置に流路が存在していたと判断される。

(3) 7・8期の集落とその変遷

7・8期は遺構数の増大した時期で、集落の範囲も拡大し遺構の重複関係や配列も複雑である。この時



第230図 三の宮遺跡隣接調査区遺構配置図

期の遺構分布は大まかに南部地区、中部III地区から北部I地区、北部II地区の3地区に分かれるので、各地区とも7・8期の変遷を一連のものとして捉え、その集落の展開を追う(第232図)。

ア 南部地区の7・8期の集落

SB15・16・17・19・29・31・32・34・41・47が7期に比定され、ST5・7も該期に帰属すると思われる。7期初頭に境沢の氾濫によってNR1が形成され、SB15はこれに浸食された。同時に堆積したI Df層によってNR3・5・6の大部分が埋没し、周辺の地形環境が変化したと考えられるが、遺構配置では6期までのNR3を中心とした展開を引き継ぎ、流路もやや位置をずらす、新たに開削されたと判断されるSD4、NR4に機能が補完されたと判断される。SB29・31・32はNR4を挟んで展開しており、NR4が7期に帰属することを立証している。I Df層の堆積の後、遺構の重複関係から2段階の変遷が想定されるが、SB16や同一文字の墨書を出土したSB29・31が古く、SB17・19・32が新しく位置付けられる。ST5からST7への建替えもこれと同調すると判断される。ST5が「倉」であったことは前節で述べた。8期になると遺構は境沢と小境沢沿いの微高地に占地するようになる。境沢沿いではSB2・3・5・8・9・10・11・12・13・18が8期に比定される。この中では重複関係や主軸方向からSB3・5・9・13・18・ST2と、やや東偏した主軸方向を有するSB2・8・10・12の新旧2段階の変遷が想定される。小境沢沿いではSB30・35・36・37・40・42・44・45・46が検出されている。これらとNR7との重複関係から2段階の変遷が追える。NR7以前にはSB40・44・45が位置付けられ、出土遺物の様相からSB35が古いと判断され、SB35・40と同様に東カマドを有するSB36・37も同段階と捉えられる。NR7以降にはSB42や出土遺物の様相からSB30が位置付けられる。8期ではそれまでと比べると狭い範囲に遺構が集中するようになり、住居址の規模では一辺5m位の住居址と小型・中型1類との併存が想定される。

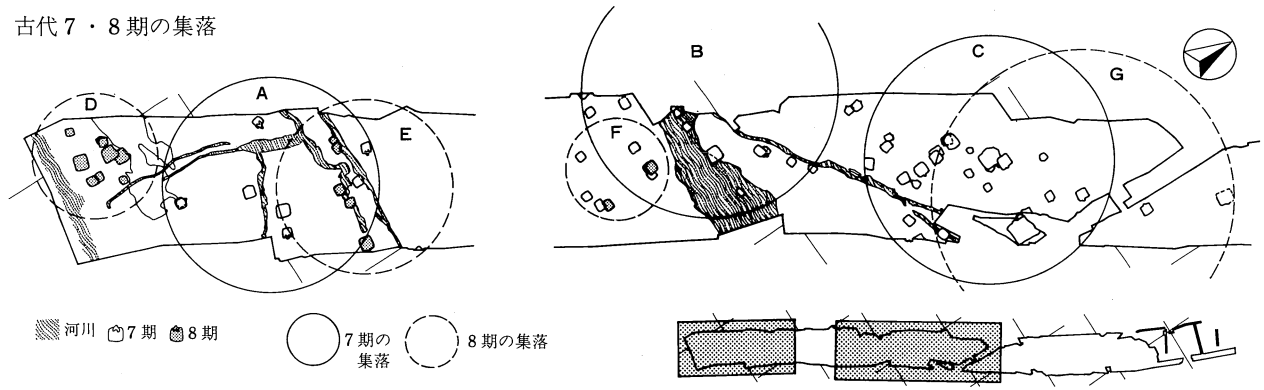
イ 中部III・北部I地区の7・8期の集落

この地区ではSB61・62・64・65・66・67・68・71・75・77・79・80・84・85が7期に比定され、これらは出土遺物の様相、特に食器の杯Aにおける須恵器と黒色土器Aの存在比率が5:5から4:6の段階、3:7から2:8の段階、軟質須恵器が出現する段階の3段階に区分が可能で、それぞれ7期前葉・中葉・後葉として記述を進める。7期前葉にはSB67・68・71・79・80・84・85が比定され、NR8(宮沢)に沿った遺構配置が取られる。前葉段階に宮沢に氾濫が起り、流路沿いに大幅に砂礫とI Df層が堆積した。SB79・80・84・85はこの氾濫に浸食されている。中葉段階ではSB64・77が存在し、後葉ではSB61・62・64・66・75が検出されST29の併設が考えられる。8期にも同様の展開が観察され、SB63・73・74とST30が併存すると判断される。以上のようにこの地区では掘立柱建物址を中心に分布する群と宮沢沿いに展開する遺構群とに分けられる。

ウ 北部II地区の7・8期の集落

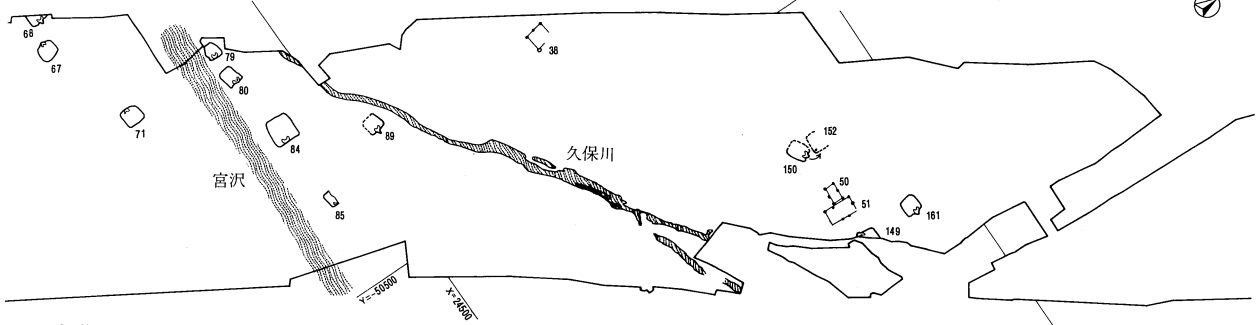
この地区でも同様に出土土器の様相から3段階に遺構を区分できる。7期前葉にはSB89・149・150・152・161が挙げられ、ST38・50・51も前葉と判断される。7期中葉にはSB88・91・93・109・122・127・137・158が比定され、SB151の古段階・ST33・36・44・48・53・58も切合いの順序からこの段階に位置付けられる。中葉段階では久保川沿いに位置し久保川に主軸方向を合わせる遺構群と、大型で4本主柱のSB151古段階とその周囲に分布する住居址と建物址の分布に分けられる。7期後葉にはSB101・106・114・116・122・126・137・138・141・153が比定され、SB151新段階・ST39・40・45・54・60がこの段階に位置付けられ、SB147も遺構配置から併存した可能性を有する。8期にはSB107・113・123・140・144・

古代7・8期の集落

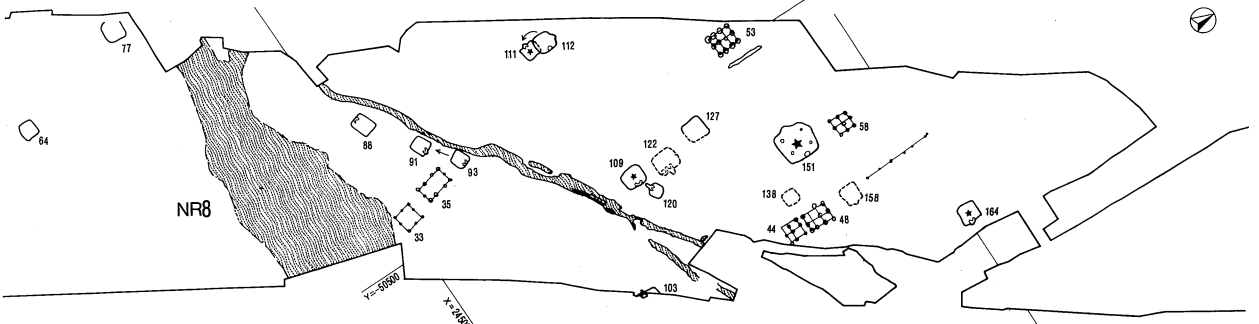


中部Ⅲ～北部地区 古代7・8期の集落

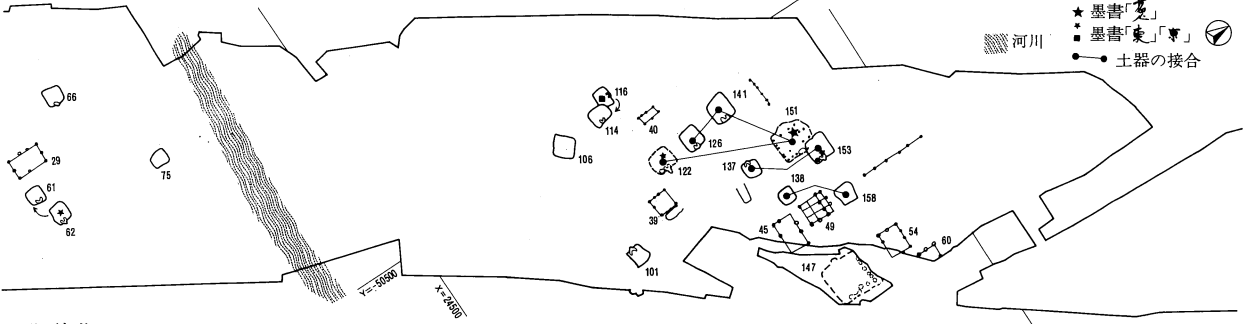
7期前葉



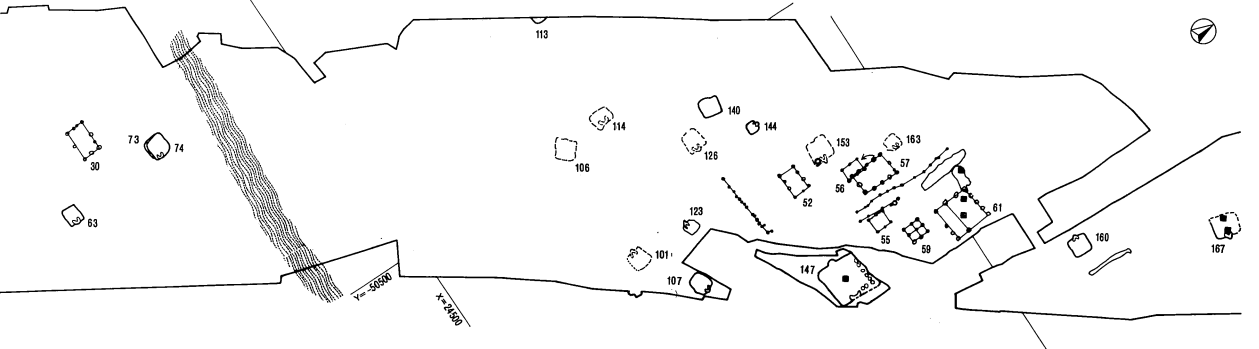
7期中葉



7期後葉

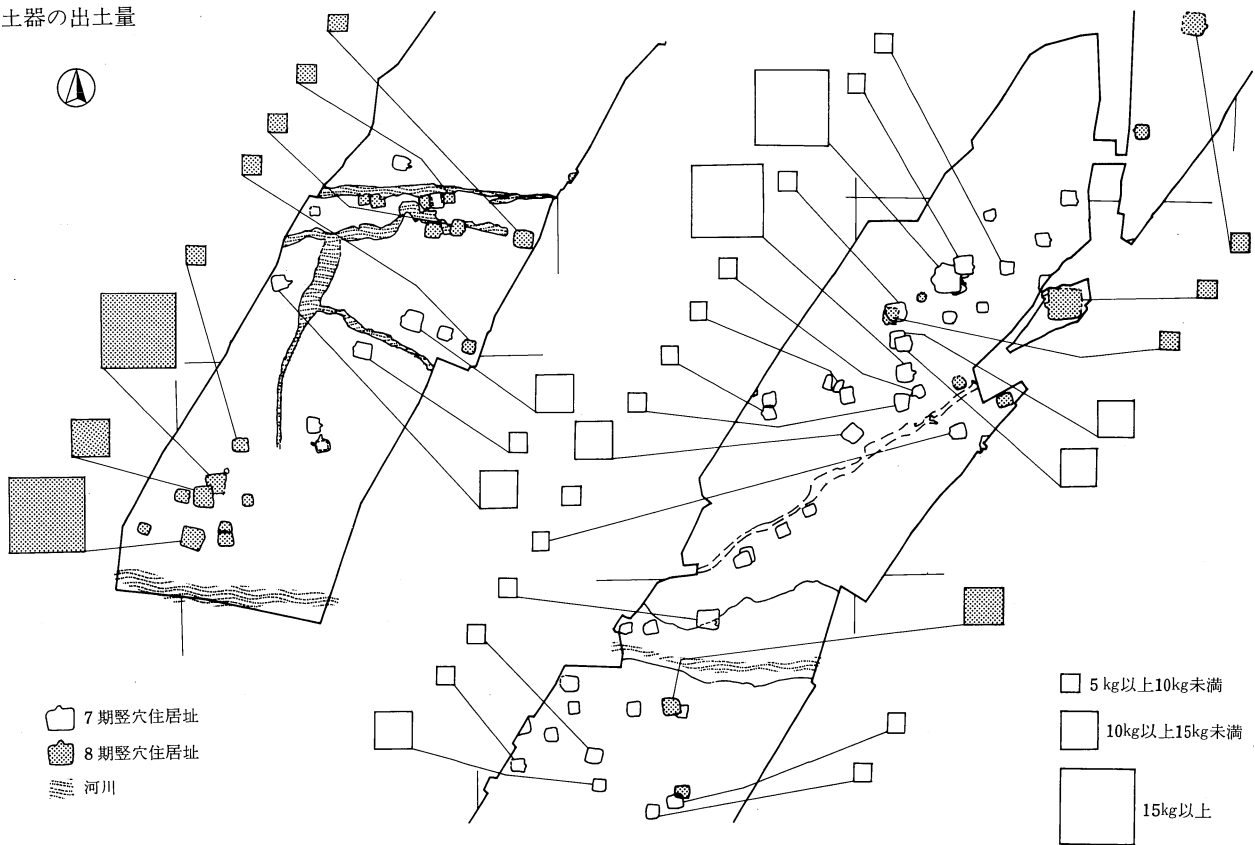


8期前葉

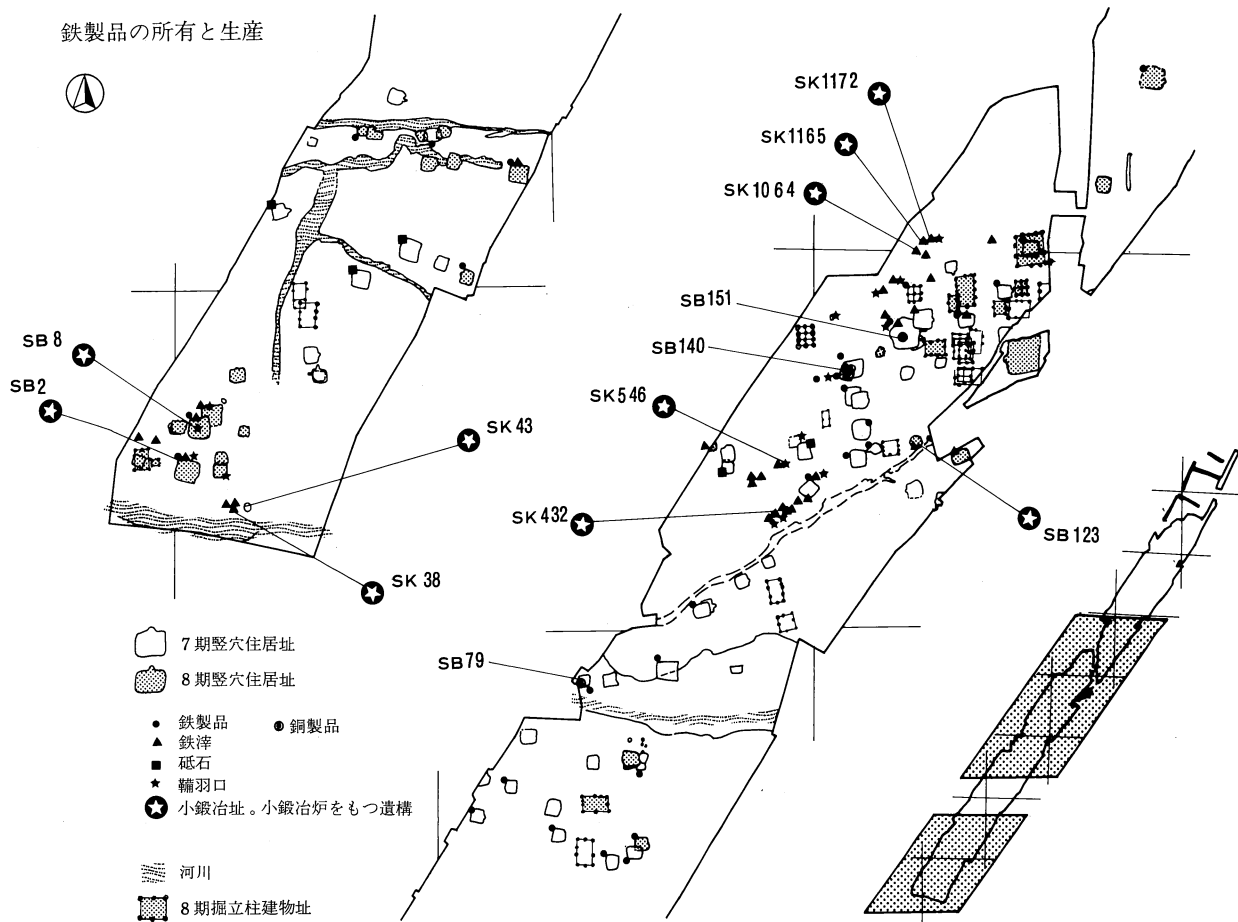


第232図 古代7・8期の集落

土器の出土量



鉄製品の所有と生産





第233図 古代7・8期の集落と土器の出土量・鉄製品の所有と生産

147・160・160・167が比定され、やや東偏した主軸方向のST52・55・56・57・59・61も8期に属すと判断される。土器様相では食器の杯Aにわずかに土師器が出現するに過ぎず、7期後葉とはさほど時間差を持たなかったと考えられるが、掘立柱建物址の主軸方向からは明確に分離が可能である。また、8期に比定されるSD39・SA13・14には含まれた遺構空白域は道路であったと考えられる。この地区の集落の動向は久保川(NR9)に主軸を合せる遺構群と、超大型クラスの住居址を中心として小型・中型の多数の住居址群と、大小様々な形態の建物址群を併存する集落とに大別され、後者では「稲倉」と考えられる総柱建物址や、礎石を有する竪穴住居址など他の集落では検出されない特徴的な遺構が存在し、その優位性が指摘できる。久保川は7期中葉まで存在したと考えられるが、8期にはSB107が流路上で検出され、再び消滅していたと考えられる。

エ 7・8期の集落と土器の出土量・鉄製品の所有と生産

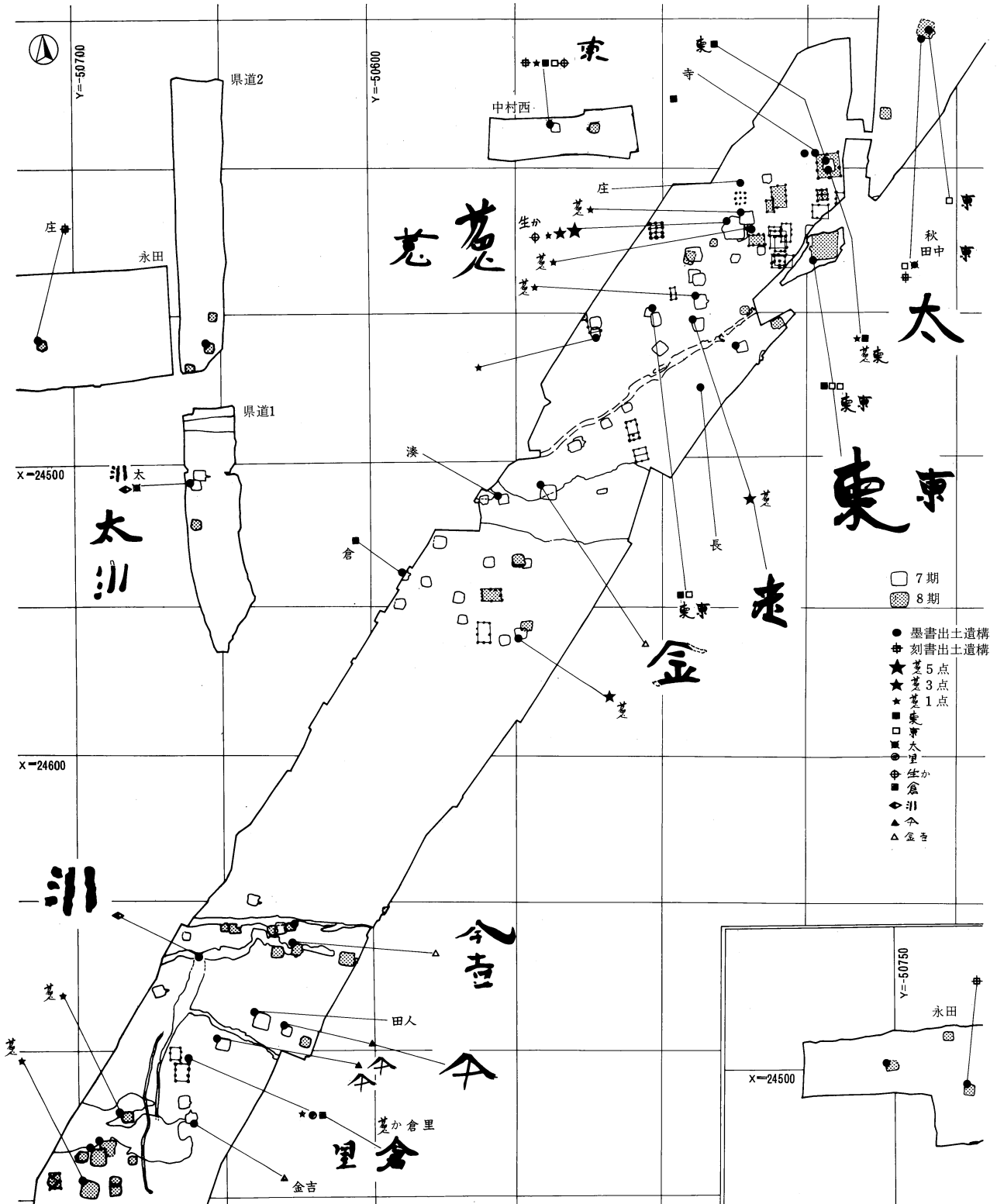
以上、古代7・8期の集落を概観してきたが、調査区域内では7期には大きく三つの集落に分けられ、8期では四つの集落が存在していたことが明らかにされた。それらの集落では遺構の特徴やその数量から優劣が認められるが、さらに出土遺物の検討を加え、集落の性格について言及したい。第233図に竪穴住居址出土の土器の総重量を図化した。それによると7期には15kg以上の土器を出土した住居址は北部II地区にのみ分布し、8期では南部I地区に存在している。土器の出土量は必ずしも出土した遺構で使用されたとは限定できないが、その周辺での土器の消費量の目安となるもので、北部II地区と南部I地区で多量に土器が使用されたことを示している。次に鉄製品や砥石の出土を同じく第233図に示したが、それによると分布状況には偏在は見られず集落間にも有意な差は認められない。一方、鉄滓や土製の鞆羽口など鍛冶にかかわる遺物の分布は南部I地区と北部II地区に集中しており、小鍛冶址や小鍛冶施設をもつ遺構の分布もそれと重なり合う。このことから7・8期には小鍛冶程度の鉄製品の生産が集落内で行われていたことが明らかにされ、遺構の構造や数量、土器の出土量から優位性が窺われる集落のみが鉄製品の生産過程を持ち得たと考えられる。また北部II地区では遺構の分布の濃密な部分の周縁部に小鍛冶址が配置しており、小鍛冶址の性格から考えて、その分布が同時に集落の外縁を画していると理解できる。

オ 7・8期の集落と墨書・刻書土器の分布

本遺跡では5期から8期にかけて墨書・刻書土器が検出されているが、特に7・8期の遺構での出土が多い。また、分布状況から北部地区に集中していることが分かる(第234図)。南部地区では6～8期の住居址で「金吉」「」が確認されるが、特定遺構への集中は見られない。北部地区ではSB151の9点を中心にしてSB62・109・111・112・153・164と松本市教委の調査した中村西地区の第2号住居址で、「菟」が出土しており、南部地区でも欠落して文字を判読できないが草冠を有する文字の墨書が確認されている。またSB147の3点やST61周囲のSB164覆土中・SK1225・1927を中心として、SB116・167中村西地区の第2号住居址で「東」もしくはそれを意図したと考えられる「」が検出されている。「菟」の墨書は7期中葉から後葉にかけての住居址での出土が多く、「東」は7期後葉から8期にかけての遺構で出土しており、その分布は前述した北部II地区の集落の広がりと同なり合い、その意味で集落を象徴する文字でもある。双方が共存する遺構としては「東」の混入が考えられるSB164を除き、中村西地区の第2号住居址のみであるが、分布する範囲はほぼ重なり合う。また、「菟」「東」とも墨書文字の観察から複数の書き手が想定され、特に「東」ではその傾向は顕著で、墨書文字集成(第214図)の56・99・105は「東」の誤書と判断される。達筆で正しい筆順で墨書されているのは「菟」ではSB151、「東」ではSB147の出土例が挙げられる。遺構群の変遷との関係からは「菟」の分布の中心遺構であるSB151がSB153へと規模を小さくして建替えられた段階に、

「東」の中心遺構であるSB147が出現しており、このことから「菟」と「東」の同時性が確認でき、また、「東」の意味は「『菟』の東側に位置する家」と考えられる。遺構の規模や構造からSB151・147には集落内での指導者としての地位が想定されるが、「菟」から「東」への推移はその地位がSB151に住む人々からSB147へ交替したことを物語るものであろう。

同じ文字の墨書が複数の遺構で検出された例としてはSB167と松本市教委による県道下の調査地区の第



第234図 古代7・8期の集落と墨書・刻書土器の分布

3号住居址で「太」、同じく3号住居址で「淵」、SB21・26・84で「金吉」、SB151と中村西地区の第2号住居址で「生」と考えられる文字が出土しており、これらに比べて狭い範囲に集中し集落の広がりを示す「菟」「東」とは異なった様相の分布状況を示している。同一文字の出土がそのまま直接的な人間関係を示すとは判断できないものの、有力な集落内での遺構の大小で象徴される上下の集団関係とは異なった、緩やかな横のつながりや、集落間の人々の往来を想定させる。なお、SB109で「庄」と思われる文字が出土しており、集落の性格を考えるうえで重要である。

(4) 12～14期集落とその変遷

8期後半に位置付けられるSB30を最後として9・10・11期は遺構はもとよりこの時期の遺物も検出されず、調査区域全体がどのような土地利用がなされていたのか不明である。松本市教委による調査でも三の宮遺跡内には遺構が検出されず、本遺跡周辺はこの時期の未開発地であったと判断される。

12期には久保川沿いと北部II地区の東側に1軒ずつ分布する。13期には小境沢沿いに1軒と久保川をはさんで3軒の住居址が存在している。14期にはI Dr層の堆積に伴って完全に離水した居住可能な安定した土地が北端I地区で新たに生れ、そこにSB170・178が検出され、また同時に堂沢の祖型となる河川もこの時期にはほぼ現在の場所に治定されたと判断される。12～14期では1～8期で看取できたような複数の住居址の併存は見られず、13期には3軒の住居址が群をなすが、その間隔は1～8期に比べかなり広い。

(5) 15期の集落の展開

15期に比定される住居址は9軒を数え、堂沢以南の地域では12～14期と同様に1軒ずつ離れて住居址が存在している。これに対し北端I地区では5軒の住居址が確認され、遺構の重複や遺構間の距離から考えて2～3軒が同時存在していたと判断される。また、SB169の南に3基の土坑が、北端I地区の東寄りにも6基の土坑が検出され、その構造や出土遺物などから墓址と判断され、住居址に併存して墓址が設けられていたと考えられる。中部I地区ではSD23の東にSL1が検出され、SD24の北側にも水田土壌が確認され、それらは溝址の出土遺物から15期と判断される。同様に水田土壌は中部I・北端II地区でも観察され、北端I地区でも小規模ながら水田址が存在しており、検出状況や遺構との切り合いから多くは9～15期の所産と考えられる。

2 中世の集落景観と墓域・生産域

本遺跡で検出された中世の遺構として竪穴住居址1軒、掘立柱建物址19棟、溝址19条、柵址6条、土坑1400余基が検出されているが、古代の住居址のように遺物の出土量に恵まれた遺構は皆無に近い。全体に古代の遺構に比べて遺物の出土量が少ないことも中世遺構の特徴の一つであるが、そのことが遺構の帰属時期の判断を困難なものにしている。時期の決定は遺構の覆土の特徴、検出状況や遺構配置に依拠することになるが、時期不詳な遺構も多い。以下、中世1期と2期に分けて遺構群の変遷を追及する。中世の時期区分については凡例に掲げてあるように、12世紀後半から14世紀後半までを中世1期、14世紀末から17世紀初頭までを中世2期としている(総論編参照)。

(1) 中世1期の集落・墓域とその変遷

ア 中部、北部I地区の集落

中部地区では遺物の出土量が少なく遺構の帰属時期の決定は困難であるが、建物址群や土坑群が廃絶されたあと水田化されており、調査区域が全面的に水田化されるのは北部II地区の土坑群が終末を迎える中

世2期前半と判断されることから、中部地区の遺構も中世2期前半より前、中世1期と推定される。遺構群は3間×3間の構造を取るST73・74が近接して存在することから2段階の変遷が想定されるが、その後関係や詳細な帰属時期は不明である。また、200基近い数を有する土坑群は、北部II地区の土坑群に比べて不整形なものが多く、遺物や集石、焼土・炭層といった人為的に構築された遺構としての属性が観察されないこと、覆土中に地山IC・IIA層が塊状に混入することから、多くの土坑は抜根のあとや風倒木痕と考えられる。土坑群はST73・74の周囲に分布しており、建物址の周囲には立木が配され、近世や近代の集落で見られるような「屋敷森」が形成されていたとも考えられる。

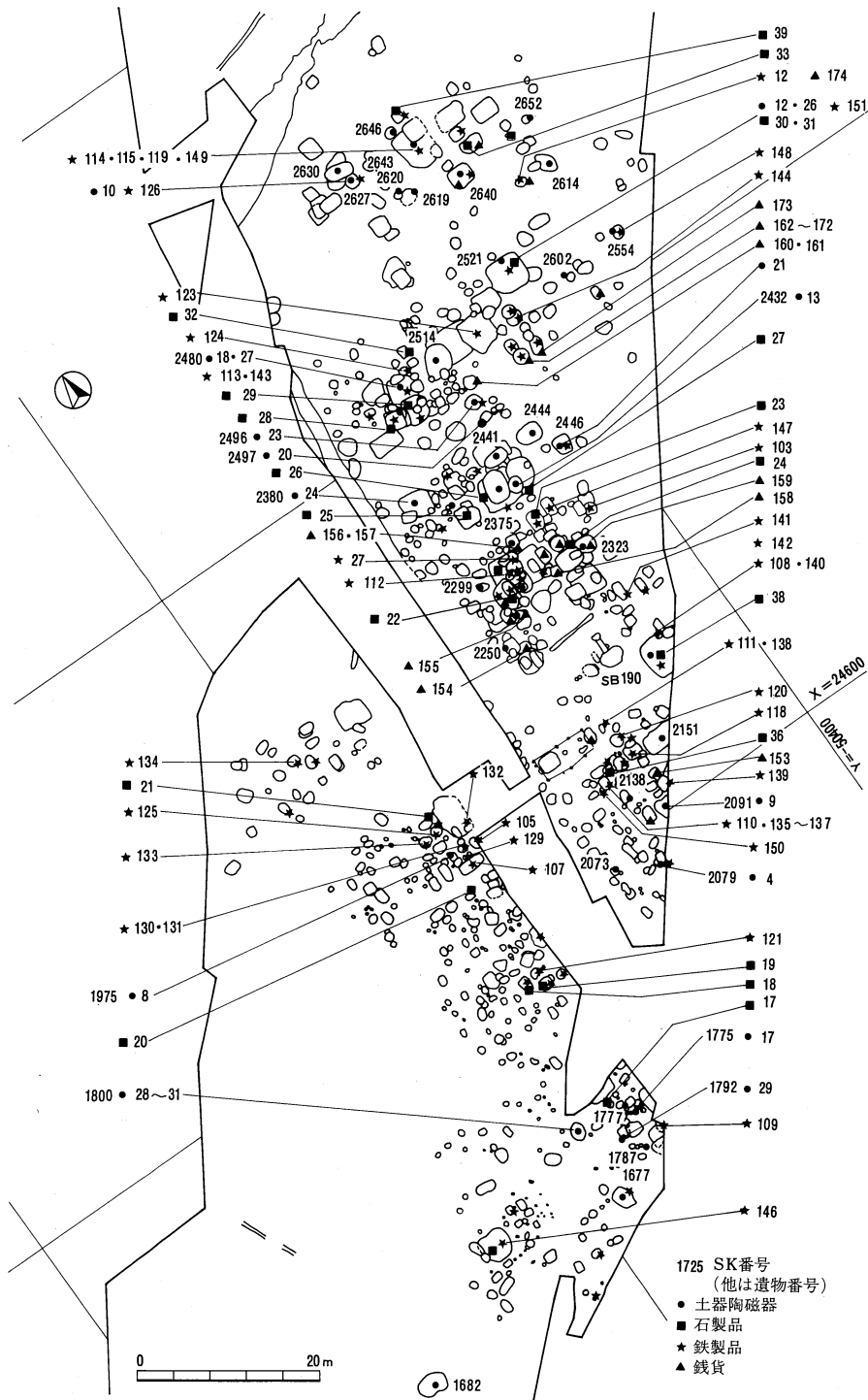
北部I地区には6間×3間の総柱で土坑を併設する大型の建物址ST77が存在するが、この特徴的な建物址については、中世1期に比定されることが既に指摘されている(百瀬1989)。今回の調査ではそれを裏付けるような資料には恵まれなかったが、中部地区の遺構群と同様な理由から1期に帰属する可能性が高い。ST77とST78、畠址SN12は検出状況や遺構配置から併存していた可能性が高い。SN12は建物址に近接していることやその規模から「屋敷畠」と判断される。これらと近接するST79・80さらに、北部II地区のST81は埋土の特徴や主軸方向が相違しており、かなり時間差をもって存在したと考えられる。

イ 北部II地区の集落と墓域

北部II地区では市道仁科線をはさんで竪穴住居址1棟、掘立柱建物址1棟と1000余基の土坑が検出されている。この中の46遺構から土器・陶磁器が出土し、それらの帰属時期から13世紀後半から15世紀前半にかけて連綿と遺構が存在したことが確認され、一部は15世紀後半まで及んでいたことが明らかである(第235図)。北部II地区の遺構群の主体を占める土坑の性格についてはSK2023・2071・2090・2305・2509・2530・2554・2640・2778が明確に墓址と認定され、それと同様な規模を有する2・3種の土坑は墓址である可能性が高いといえる。これに対し第2章でふれたように長軸方向の差し渡し3mを越えるような土坑は墓址とは考えにくく、住居址や「むろ」といった地下式の貯蔵庫の可能性が指摘されている。また集石を有する土坑など様々な機能や用途が想定される遺構が入り交じって土坑群を形成している(第236図)。

これらの遺構群の変遷については遺構の検出状況、覆土の特徴、長軸方向の一致、遺構配置や切合い関係などの検討によって12世紀末から15世紀後半まで4段階の変遷が類推される。検出状況では大部分がIC層上面で検出されているが、遺構の切合い関係が錯綜する地点ではIC層上面とIC層下面からIIA層上面にかけての上下2面の調査を行っており、出土遺物の検討からは前者、IC層上面で検出された土坑のほうが新しく位置付けられる。切合い関係では、当然切っているほうが新しいが、遺構が複雑に重複するIW18・19区付近(SK2250~2320など)では比較的切り合いが新しいと判断されるSK2284・2287・2998・2299・2300・2301・2302・2303・2304などは長軸方向を一致させ全体に「コ」の字形を成すように配列しており、他の地点でも遺構配置にこうした規則性が確認できる。

土坑の覆土はオリーブ灰色(10Y 4/2、「標準土色帖」による)を呈する細粒砂質土、灰黄褐色(10YR 4/2)を呈しマンガ、水酸化鉄の斑紋が多い細粒砂質土、灰オリーブ(5Y 5/3)を呈する細粒砂質土の3種類に分けられ、その分布を第236図に示した。それによるとオリーブ灰色土を覆土とする土坑は北部II地区の全域に偏在無く分布するが、逆に灰黄褐色土を覆土とする土坑はIW36・37区(SK1950・1973・1996他)やIW18・19区(SK2283~2293他)などに局所的に集中しており、また灰オリーブ色土を覆土とする土坑もIW39・40区(SK2129~2151他)やIS40・47区(SK2496~2480他)などに集中している。土坑群の覆土は地山IC層やIIA層を基調とし、遺構群が継続する間に新たな土層の堆積は見られないが、出土した遺物の様相から灰黄褐色を呈する覆土の土坑は1期前半と2期前半に多く、灰オリーブ色の覆土の土坑は2期前半に属するものが多いことから、覆土の土色の相違には時期差を考慮する必要もあろう。覆土の土色の相違は土坑が掘り込まれた地表面付近の土壌生成作用の違いによると判断されるが、その要因としては気候、特に降水



第235図 北部II区中世土坑群遺物出土状況

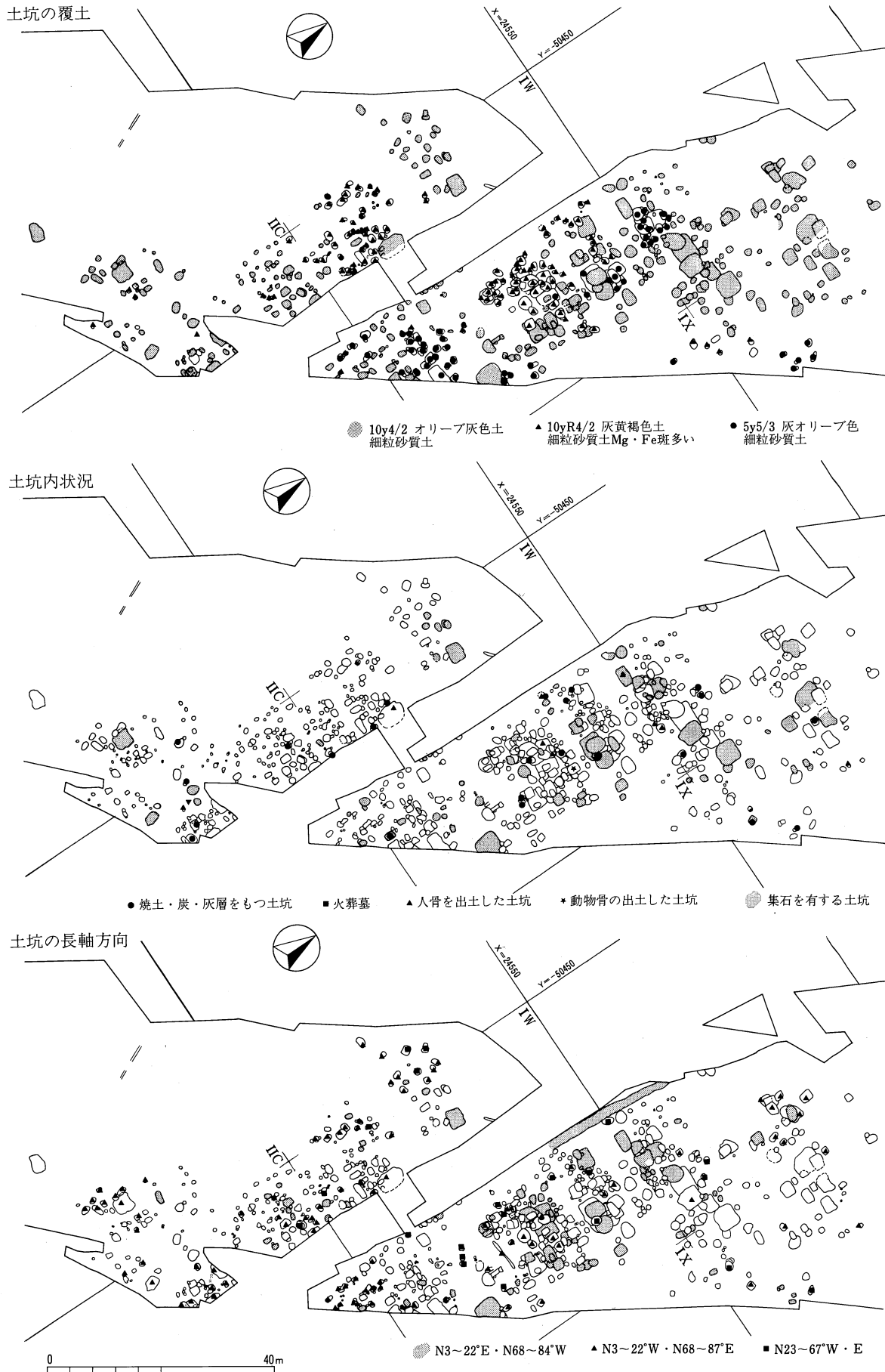
量の多寡や土地利用の差(水田か乾田かなど)が考えられる。

土坑の長軸方向は、古代の竪穴住居址と同様の方法で計測し、その結果を第237図に示した。それによると大部分の遺構は東西・南北の方向を意識して掘り込まれているが、その中でも正確に南北・東西方向に長軸を取る土坑、 $N3^{\circ} \sim 22^{\circ} E \cdot N68^{\circ} \sim 84^{\circ} W$ を測るやや長軸が東偏した土坑、 $N3^{\circ} \sim 22^{\circ} W \cdot N68^{\circ} \sim 84^{\circ} E$ を測るやや長軸が西偏した土坑とそれ以外の4群に分けられ、その分布を第236図に示した。長軸方向をやや東偏させる遺構群は市道仁科線の東側20m位までの範囲に分布する傾向にあり、これは推定される古道「仁科道」とその側溝の跡とされるSD60と主軸を合せていたと考えられる。また、長軸方向を西偏させる遺構は仁科線西側や南東寄りに多いことから、おそらく久保川の流れる方向に長軸を合せたと判断される。出土遺物の対比からは長軸を東偏させる遺構は1期に、西偏させる遺構は1期前半と2期の15世紀後半に多いことが分かる。

遺構配置の面では切合い関

係、検出状況、埋土の特徴や長軸方向で分離した段階で、隣接する土坑同志に規則的な配列が認められる場合もある。II B区ではSK1683~1687、SK1704~1710、II C区ではSK2067・2070・2076・2127~2151、I W区ではSK1961・1971・1973・1975、I T区ではSK2638~2624など、他にも多くの地点で観察することができ、土坑を掘り込む際にある程度隣同士を意識して、長軸方向を揃えたり、間隔をあけたという行為が想定され、その行為が継続されるのは限られた時間内と判断され、同時性の根拠となるであろう。

以上の分析から北部II地区の遺構群について、1期と2期をさらに2段階に分け変遷過程を示したのが第238・239図である。土坑群は2期まで継続的に展開するためここでは2期まで通してその展開を追う。



第236図 北部II地区中世土坑群の諸属性

① 中世1期1段階(12世紀末～13世紀前半、第238図)

仁科線の東側に40余基の土坑群が分布し(A群)、規模ではSK2231・2435など長軸が250cm以上を測る5種に属する大型の方形プランの土坑が検出され、その周囲にSK2291・2331など長軸方向が200cm前後を測る長方形ないしは楕円形プランの土坑が併存するようである。前者の大型で方形プランの土坑は古代の竪穴住居址に相当する規模を有している。SK2305は火葬施設と考えられこれと同規模の2種(長軸が65～90cm)・3種(長軸が90～170cm)の土坑には墓址の可能性を有する。

② 中世1期2段階(13世紀後半～14世紀前半、第238図)

この段階になると新たに仁科線西側でも遺構が出現する。北部II地区のほぼ全域に遺構が展開するようになり、遺構数も増加する。仁科線西側では分布状況からD・E・Fの3群に分かれるが、D群では長軸方向がほぼ南北に向く土坑とやや西偏するものに分かれ、さらに細分も可能である。大型で方形プランのSK1693の周囲には小土坑が分布しており、構造は判然とはしないものの竪穴住居址の可能性を有する。他にSK1798・1804など大型の土坑が存在する。SK1800は蔵骨器を有する土坑であり、またSK1783では腐敗した植物繊維が出土している。E・F群ではやや大型のSK2065がこの段階に比定されるほかは、2・3種の規模の土坑が散在的に分布する。

仁科線の東側では1期1段階に比べ遺構分布が南北に拡大するようである。遺構分布の密なA群では前段階の展開を引き継いでいるようであるが、長軸方向の相違からさらに細分も可能である。また、A群の土坑とSD60が主軸方向を一致させていることから、前述した仁科線沿いの側溝はこの段階に掘り込まれたものであろう。この群ではSK2380・2515など大型の方形プランの土坑が存在し、それに次ぐ規模の土坑としてSK2283・2317・2380・2424・2441・2443・2444・2463・2469・2480・2520など長方形ないしは楕円形プランの土坑が検出され、SK2380・2424・2441・2444は直線上に配列されたように並んでいる。これを境としてA群を南と北の遺構のまとまりに分けて考えることも可能である。A群ではSK2509・2530が墓址として存在する。B群ではSB190や墓址SK2090がこの段階に比定される。C群ではSK2643が大型の土坑として存在するほか、長軸方向の長さが200cm位の土坑が4基存在している。

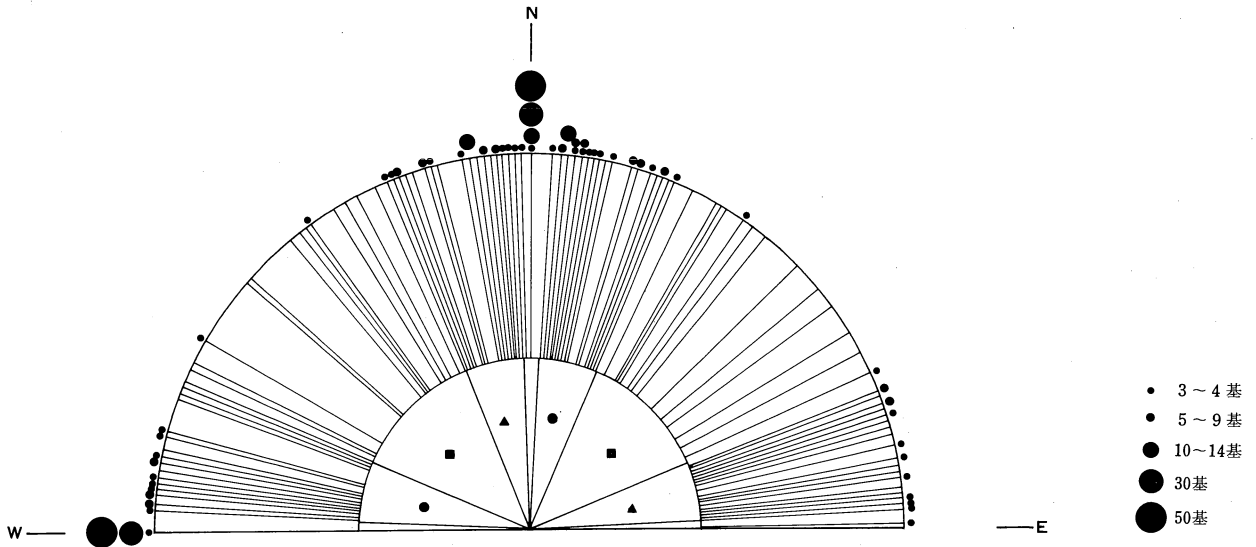
③ 中世2期1段階(14世紀末～15世紀前半、第239図)

仁科線西側のE群では大型の土坑が存在せず、SK1973・1975など墓址と考えられる形状の土坑が展開し、その分布の南を限るようSA34が存在する。F群も同様に比較的小さな土坑のみが分布している。仁科線の東側のB群ではSK2138・2151と主軸を合せるようにSK2129～2150が規則的に配置し、帯状の分布域を形作る。この分布は仁科線の西側にも継続するよう見える。これらの土坑と主軸を合せるST82もこの段階に比定される。A群ではSK2516・2521が大型の方形プランの土坑として存在するほか、大型で楕円形プランの土坑も確認されている。C群ではSK2683・2642がこの段階に位置付けられ、そのうちSK2642は墓址と判断される。

④ 中世2期2段階(15世紀後半、第239図)

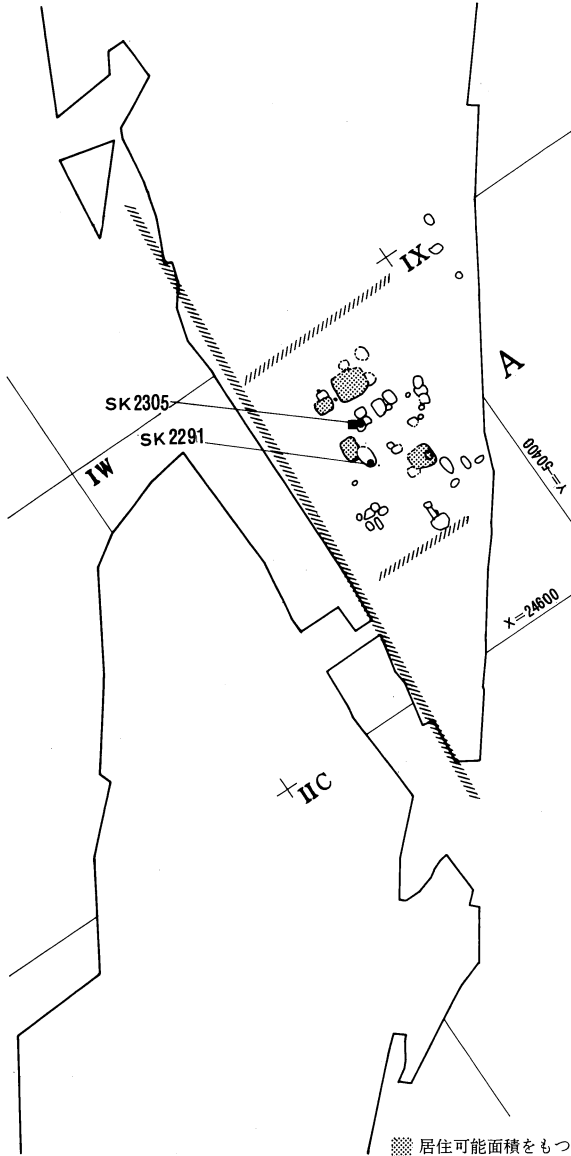
SK2023・2071が墓址と判断され、それと同規模の土坑がA・B・C・E・F群に分布する。B・E・F群に土坑が集中するが、大型の土坑は検出されず、墓址のみが継続して営まれている。この段階以降北部II地区付近に遺構が検出されることはなくなる。

以上の変遷過程から北部II地区の遺構群の特徴として次のことが挙げられる。細分された時期段階内での遺構の構成は、竪穴住居址や掘立柱建物址が1軒、竪穴住居址に準ずる規模を有する一辺300～350cmの土坑が1～3基、長軸方向の長さが200～250cmを測る楕円形ないし長方形プランの土坑が5～10基さらに、墓址と同様の規模を有する多数の土坑という遺構の組合せが看取され、それらの遺構群の分布は一辺20～30mの方形の範囲に展開していることが明らかにされた。こうした遺構の構成や分布状況からは500～1000

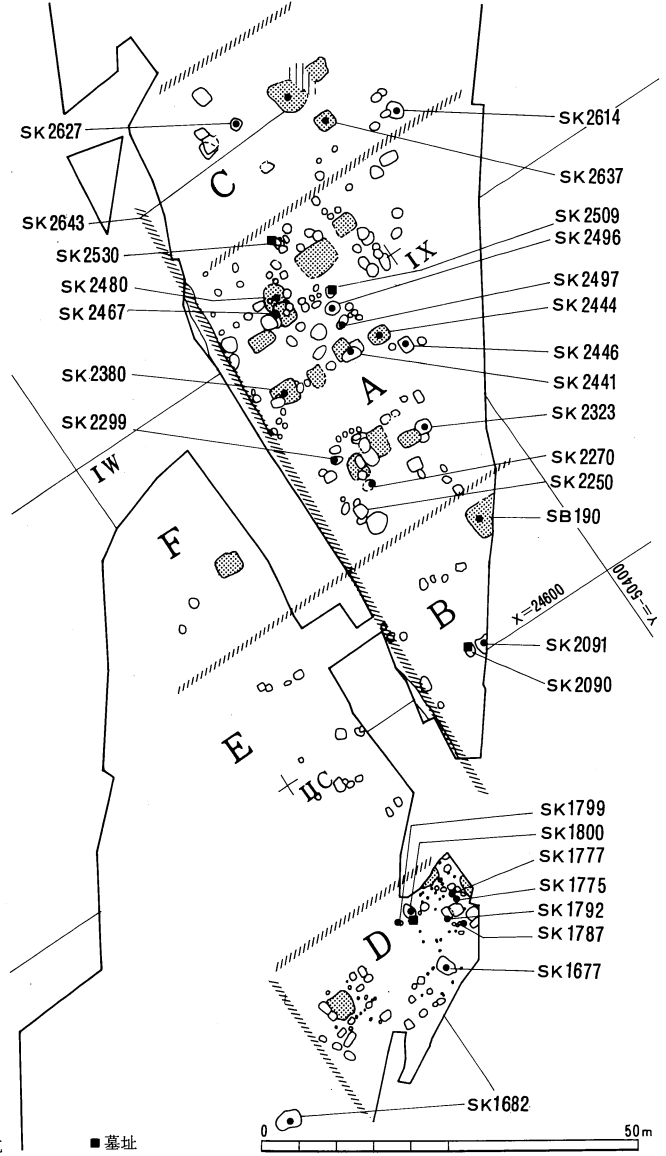


第237図 北部II地区中世土坑群の長軸方向

中世1期1段階(12世紀末~13世紀前半)



中世1期2段階(13世紀後半~14世紀前半)



第238図 北部II地区中世土坑群の変遷(1)

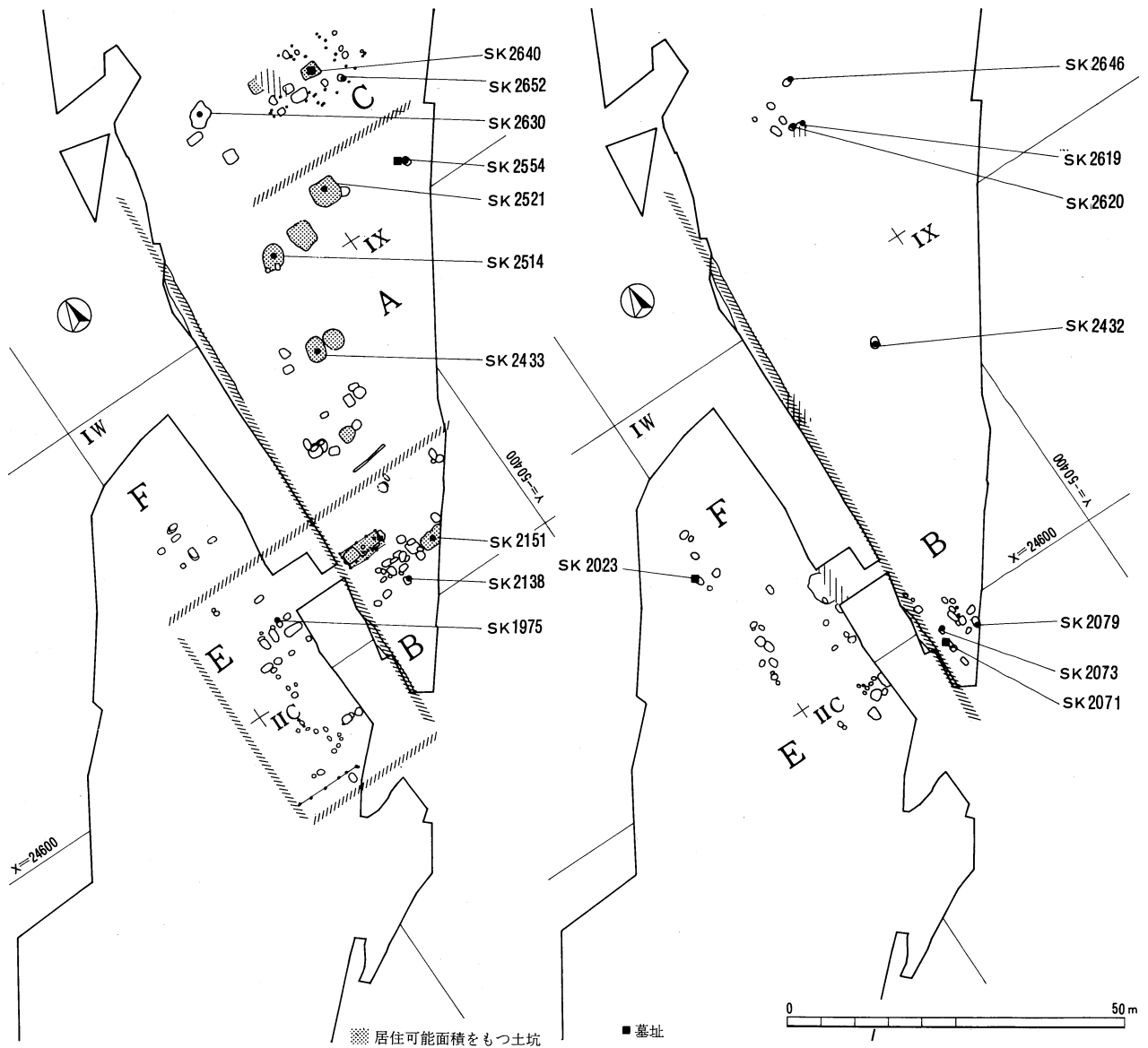
m²位の区画の中に、居住可能な主屋が1～2軒建ち、地下式あるいは半地下式の倉庫・貯蔵庫が併設されると同時に、それらと近接して土坑墓が設けられたという集落景観が想定される。

また、遺構の分布状況には現条里景観の畦畔との一致が観察される。A～F群の遺構の分布範囲はA群が「砂田」の東半部、B群が「大麦田」、C群が「四ツ長」、D群が「坊主田」、E群が「久保田」の東半部、F群が「二ツ長」というように現在の地字の範囲と重なり合うことが明確である。中世段階の土地の区画と現在の地字名を直接的に結び付けるのは危険でもあるが、現在の地字界が中世段階までさかのぼることは他の地区で検出された水田址でも観察されており、その可能性は高いと判断される。また、土坑群の分析から想定された区画が有意であることを裏付けるもので、居住の痕跡は明確ではないものの、その区画を一つの完結した「屋敷地」に比定することができよう。

居住域内に死者の埋葬地を作る慣行については勝田至が民族例や史料の分析を通じて「屋敷墓」と定義し、

中世2期1段階(14世紀末～15世紀前半)

中世2期2段階(15世紀後半)



第239図 北部II地区中世土坑群の変遷(2)

「開発先祖の祭礼および祖先による土地の守護という観念と屋敷内に埋葬して墓を作るという慣行は中世前期に密接に結び付いて発現した」と指摘している(勝田1988)。本遺跡の北部II地区の遺構群に存在する墓址はこの例と判断される。また、調査区域の東側の堂沢と久保川にはさまれた地域は現中村集落の中核を成し、地字名には「旧屋敷」「元屋敷」など屋敷地名が散見され、それらは近世をさかのぼる可能性を有し、当初から屋敷地として開発されたことを物語っている。今回調査された遺構群が屋敷墓を有する集落であるとする、この付近が開発され、屋敷地として所有・継承の始まったのは遺構群の帰属時期から鎌倉時代前期と判断され、現集落の初源もそこに求められよう。

現集落との位置関係では北部II地区と類似した位置にある、松本市教委による三の宮遺跡中村集落東地点の調査では、本調査区域で確認されたような土坑群を主体とする集落に隣接して、付属土坑を有する大型の掘立柱建物址が存在しており、土坑群を主体とした集落と掘立柱建物址を主体とした集落がどのような関係を有するのか、また、何による相違なのかが今後の調査課題であろう。

(2) 中世2期の集落とその変遷

中世2期に帰属する遺構群は、前述した北部II地区に15世紀後半まで土坑群が展開するがその後は遺構が検出されず、北端I地区を除き、調査区域の多くは水田化されたと判断される。北端I地区では中世2期後半(15世紀末)から近世にかけて、掘立柱建物址と溝址を中心とした遺構が展開する。ここでは北端I地区の中世2期の遺構群の変遷を追う(第240図)。

ア 中世1期～中世2期前半

北端I地区ではSL16・17・18・19など広範に水田址が展開しているが、それらは古代15期の竪穴住居址の覆土上でも確認でき、中世2期の建物址群に切られていることから、中世1期から2期前半の間に営まれたと判断される。出土遺物に恵まれず詳細は不明である。

イ 中世2期後半(15世紀末～16世紀)

出土遺物の様相からST87・89・SK2769・2770・SD64が中世2期後半に位置付けられ、遺構配置や切合い関係からさらに他の遺構も含め新旧2段階に細分が可能である。

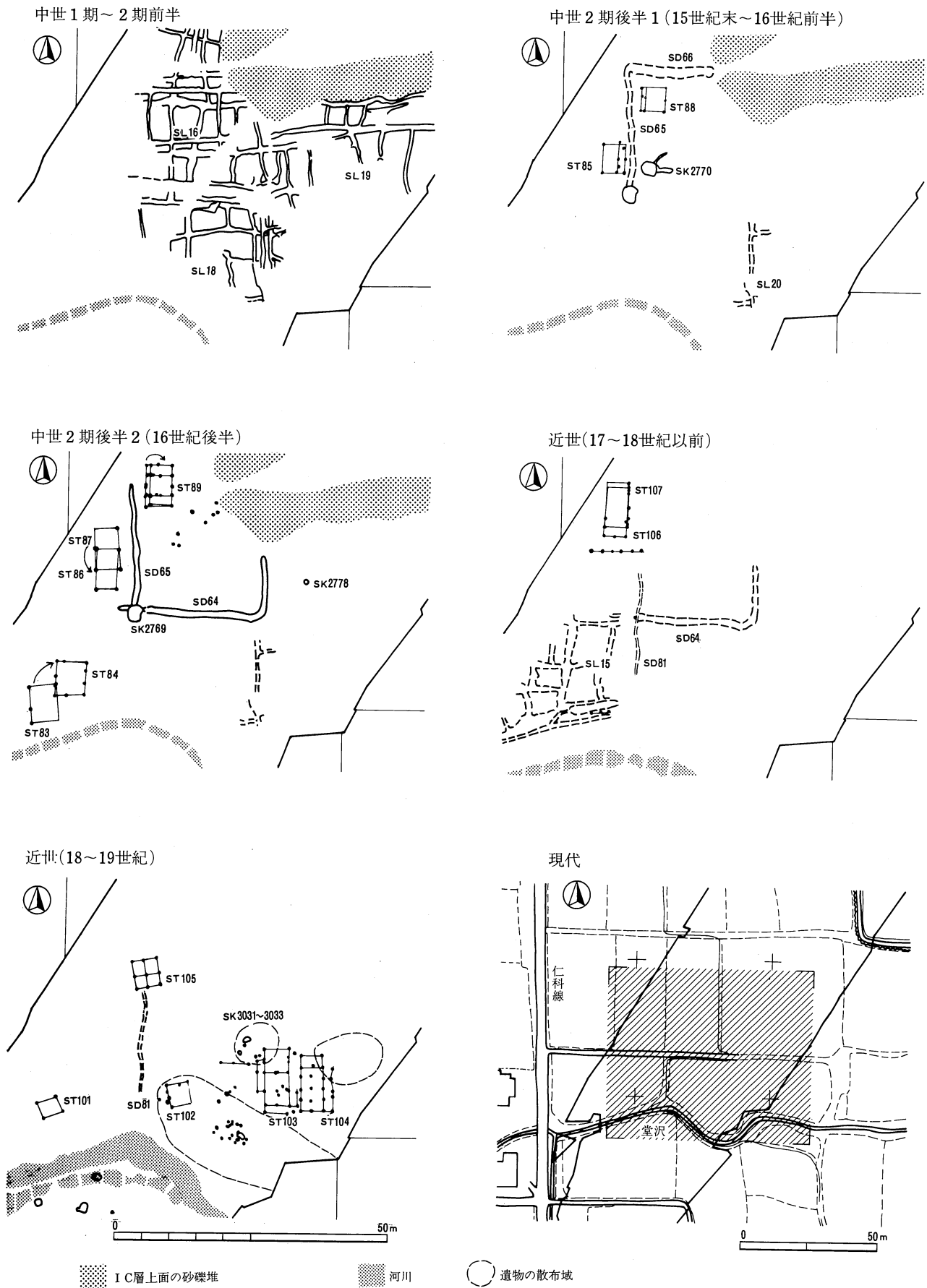
古段階の中世2期後半1の時期にはSK2770・ST85・88が存在する。SK2770は排水のための施設と判断され、それまで水田であった土地を宅地化するために設けられたと考えられる。建物址は切合い関係で古く位置付けられたST85・88が方形に近いプランを有することから併存すると判断した。

2期後半2段階にはSK2769とそれに接続するSD65・66が方形の区画を作り出し、それに沿うように位置するST86・87・89がこの段階に比定される。SK2769はSK2770と同様な機能を有し、これと接続する溝址は集落内の排水路の役目も果たしていたと考えられる。さらにST86・87の切り合いやST89の建替えから細分も可能である。建物址では柱間のスパンが同じST83・87と5間×2間構造のST89が同時存在していたと考えられ、それらを切って構築されるST84・86は主軸方向を揃えている。また、ST86と5間×1間の構造に建替えられたST89とはほぼ同一のプランを有している。火葬施設SK2778もその年代判定の結果からこの段階に比定される。

北端I地区の集落は溝址に沿って整然とした配置を取り、建物址の面積は20～30㎡でほぼ同一であることが指摘できる。集落はさらに調査区域の西側に展開していたと推定される。

(3) 中世の生産域

中世の生産関係遺構としては水田址と畠址が挙げられる。水田址が必要とする地形環境としては、砂礫を含まず保水性の良好な土壌で深耕や「刈敷き」の鋤込みの可能な厚い土層が望ましく、I Dr層やI C層



第240図 北端I地区南の中近世遺構群

の堆積に寄って、その条件を満たす土地は格段に拡大したと判断されるが、礫層が露出したり砂礫を含む土壌の分布も見られ、水田経営が可能な土地は遺跡全面には及ばなかったと判断される。南部地区西側、小境沢沿い、北端Ⅰ地区の北側の砂礫堆上では水田址や水田土壌は確認されず、調査区域全域が水田化されるのはⅠB・ⅠA層の堆積以降と判断される。また、ST77の付属土坑やSK1783など馬屋(牛屋)や飼料溜めと判断される遺構や隅蹄目の動物の墓の存在など、集落内に馬や牛が飼われていたことや古代の段階より明確であるが、それが耕作に用いられたと判断される資料には今回の調査では恵まれなかった。

水田址の形態については南部地区や中部地区の水田址では境沢と小境沢、宮沢と小境沢を南北方向にたが水を落とす水路「横堰」による灌漑が行われ、田面への水掛りは小規模な溝址(映畝、けんぼ)によったと判断される(SD51~56、57・58・SL11・12)。一方、北端地区では水田址への灌漑の方法は堂沢から樹枝状に分岐した溝址(SD62・63)によって導水されるが、田面への水掛りは「畦越し」の方式を取り、SL15・16・18・19・23など大規模な水田址はみな「梯子状区画水田」の形態を取ったと判断される。

「横堰」の開削はNR3では古代2期までさかのぼる可能性を有し、SD59も古代15期には存在している。南部地区・中部地区の水田址は格子状に用排水路を配した「条里型」の水路の形態であり、これに対し北端地区の水田址は「樹枝状型」の水路形態(小穴・石井1988)と判断され、前者のほうが開発が古く用水路を開削するなどより計画的な開田であり、後者の地域では堂沢は比較的新しい時期に治定されており、自然流路的な様相の強い水路によった開発ととらえることができよう。

中部地区や北部Ⅱ地区では集落域が水田址へと土地利用が変わり、北端Ⅰ地区では水田址が集落へと変遷している。これらの地区は前述したように土層の堆積の厚い部分であり、水田に必要な地形環境が満たされていても恒常的に水田址が経営され得ないことを示している。おそらく、この現象は生産力の落ちた水田を放棄して地力の回復を待ち、その間新たな土地が開田される「片荒し」ととらえることができる。「片荒し」される面積は中部・北部Ⅱ地区の遺構の分布域に該当する広さで、差し渡し100m、「方一町」という単位であったと考えられる。

3 近世の集落景観とその変遷

北部地区に墓址や土坑が散在し、北端Ⅰ地区では中世2期から引き続き集落が展開する。その他の地区ではⅠB・ⅠA層の堆積後、ほとんど全域が水田化されたと考えられる。北部Ⅱ地区・北端Ⅱ地区に存在する「横堰」はⅠB層堆積以降の所産である。ここでは北端Ⅰ地区の集落の変遷を追及したい(第240図)。

(1) 17世紀

ⅠB層検出のST106・107、肥前系丸碗の出土したSD81がこの段階に位置付けられる。SD81は建物址の東面に沿うように位置している。

(2) 18世紀~19世紀

ST102の周辺では17・18世紀の遺物が出土しており、ST102と主軸方向を合せるST101・105も18世紀に比定されよう。ST103・104はほぼ同規模で床束柱や小屋・庇を有する構造を取っていることから相前後して建替えられたと考えられる。いずれも検出面の遺物から18・19世紀の所産と考えられる。ⅠA層の堆積はその包含する遺物の様相からこの時期に比定され、また、堂沢も現在の位置に治定されたと考えられる。

4 三の宮遺跡における集落景観の変遷

前項では集落景観の変遷を遺構の分布状況や遺構群の構成を中心として展開してきた。ここでは集落の性格やその歴史的背景を含め、集落景観の変遷と残された課題について総括しておく。

今回の調査区域が本格的に居住域として利用されるのは古代1期である。小境沢・久保川沿いの地域に遺構が展開しており、集落の成立と水路が密接に係っていたと判断される。水路については小境沢(NR5・6・7)が自然流路として存在し、この付近一体の中心的な河川であったことがその断面観察から明らかである。小境沢は古榑木川からの分流と判断され、それから樹枝状に分岐して移送する宮沢・久保川は人工的に開削された水路と考えられる。久保川沿いの集落は流路の開削に伴って成立した集落であろう。なお、古代14期まで堂沢以北の地域は常に冠水域であり、居住域はもとより生産域にも適さなかったと判断される。1・2期の集落は中部地区の大型の掘立柱建物址を除き遺構の構造や遺構群の構成、特に竪穴住居址のあり方が古墳時代後期の集落と同様であることから、開発の主体は在地の勢力であり、古墳時代後期の社会的な伝統を引き継いだと考えられる、開発者たちの墳墓は遺跡内を流れる流路の源付近に安塚古墳群として残された。

一方、大型の掘立柱建物址はそれ以前には存在しなかった建物形態で「律令制」を象徴する構築物である。建物址群では「財」のへう書きを有する須恵器が出土するなどその優位性が窺え、集落の指導者の住居と判断される。遺構配置からは建物址と住居址が区画されたように配置しており、建物址が中心を成す集落構造からは、建物址に住む指導者層が竪穴住居址に住む集団を再編成して成立した集落であると捉えることも可能である。

古代3期には一時的に停滞したが4・5期と集落は新たな展開を見せ、北部II地区では女性裸像をへう描きした須恵器など特殊な遺物も検出されている。6・7期には水路沿いに砂礫が堆積するような小規模な河川の氾濫が確認されているが、個別的な遺構の占地に影響を与えても、集落に打撃を与えることなく集落の規模は拡大し、7期にはそれまでの時期の倍以上の遺構数が確認される。4～6期には小型・中型の規模の多数の住居址を主体とする遺構群の展開が中心となり、そこに7・8期と同様に超大型住居址が加わるという集落構造が推定される。7・8期には鉄製の鋤鍬先が出土するなど再び開発を象徴する遺物が出土し、集落の範囲も拡大する。北部II地区では7期から8期にかけて超大型の礎石建ちの竪穴住居址が確認され、その周囲には小型・中型の住居址が6～8軒、総柱の建物址を含む掘立柱建物址が4～5棟併設されており、小鍛冶址も存在している。また遺物の出土量も多く、風字硯・転用硯の出土も確認され、「菟」「東」など墨書土器も多い。この超大型住居址を中心とした集落は、農業経営によって成長してきた「農村の富裕者」と捉えることができ、「日本三代実録」に記載された筑摩郡の「辛犬甘秋子」など「富豪之輩」とされる有力者層に対比することが可能なことが指摘されている。また、農村の富裕者は居宅を構え「私倉」を数多く持ったことが史料から明らかにされている(井原1990)。

古代8期後半以降11期まで調査区域内では遺構はもとより遺物も確認されておらず、7・8期に大きく成長を遂げた集落も姿を消してしまう。松本市教委による調査でも同様な結果が得られており、集落の移動や衰退、荒廃が想定される。同時に条里制の施行に伴う耕地と居住域の分離、集住化など当時の社会的な動向の反映とも考えられ、松本平全体でも遺跡・遺構数が減少する時期に当たり、より総合的な考察が必要であろう。本調査区域はこの時期の未開発地と位置付けられる。

再び遺構が確認されるのは古代12期で、14期まで竪穴住居址が調査区域内に散在的に分布する。14・15期にはIDf・IC層が堆積し、その土砂の堆積によって堂沢以北の地域の離水が進行する。新たに形成された土地に15期にはまとまった遺構群の分布が見られ、住居址とやや離れた位置に墓址・屋外カマドも

存在している。

中世1期には古代15期の住居址と墓址のあり方を引き継ぐような遺構の展開が観察される。北部Ⅰ地区に大型の掘立柱建物址が確認されているが、遺構の中心は北部Ⅱ地区で検出された土坑群であり、小規模な竪穴住居址と貯蔵施設や墓址と考えられる土坑が併存する集落景観が中世2期まで展開している。遺構の構成や分布状況から20～30m四方の区画が存在したようで、現在の地字界との一致が確認され、「屋敷地」の形成や「屋敷墓」の発生が考えられる。

中世の集落域は全般に古代と比べて狭く、多くの部分が水田化されたことが明らかである。これは古代15期のⅠC層の堆積によって水田経営の可能な土地が拡大したことも大きな要因であろう。「堰」と総称される用排水路は古代の水路を引き継いでいるが、中世段階になって水田址の大きな畦畔や溝址と現条里景観との一致が確認されるようになる。水田址については堂沢を境に南と北の地域で、その灌漑方法に相違が確認されている。また、集落域と水田址の重複関係から「片荒し」という水田経営方法が想像される。

中世2期後半にはそれまで水田址が展開していた北端Ⅰ地区に小規模な集落が確認され、近世まで集落域として利用される。中世2期末から近世初頭にかけてⅠB層が堆積し、さらに水田域が拡大する。小規模な「横堰」はⅠB層以上で存在が確認され、現在の条里地割の詳細な部分は近世段階の所産と考えられる。他に近世段階では数基の土坑からなる墓域が調査区域内に散見される。これについては現在も水田地帯の中に石塔を有する墓地が存在しているが、これと同様の墓域が近世にもあったと考えられる。なお、石塔の銘文には「文化」「天保」などの年号が最古の例として刻まれている。

以上が今回の調査の成果をもとにした古代から近世にかけての三の宮遺跡の集落景観の変遷である。

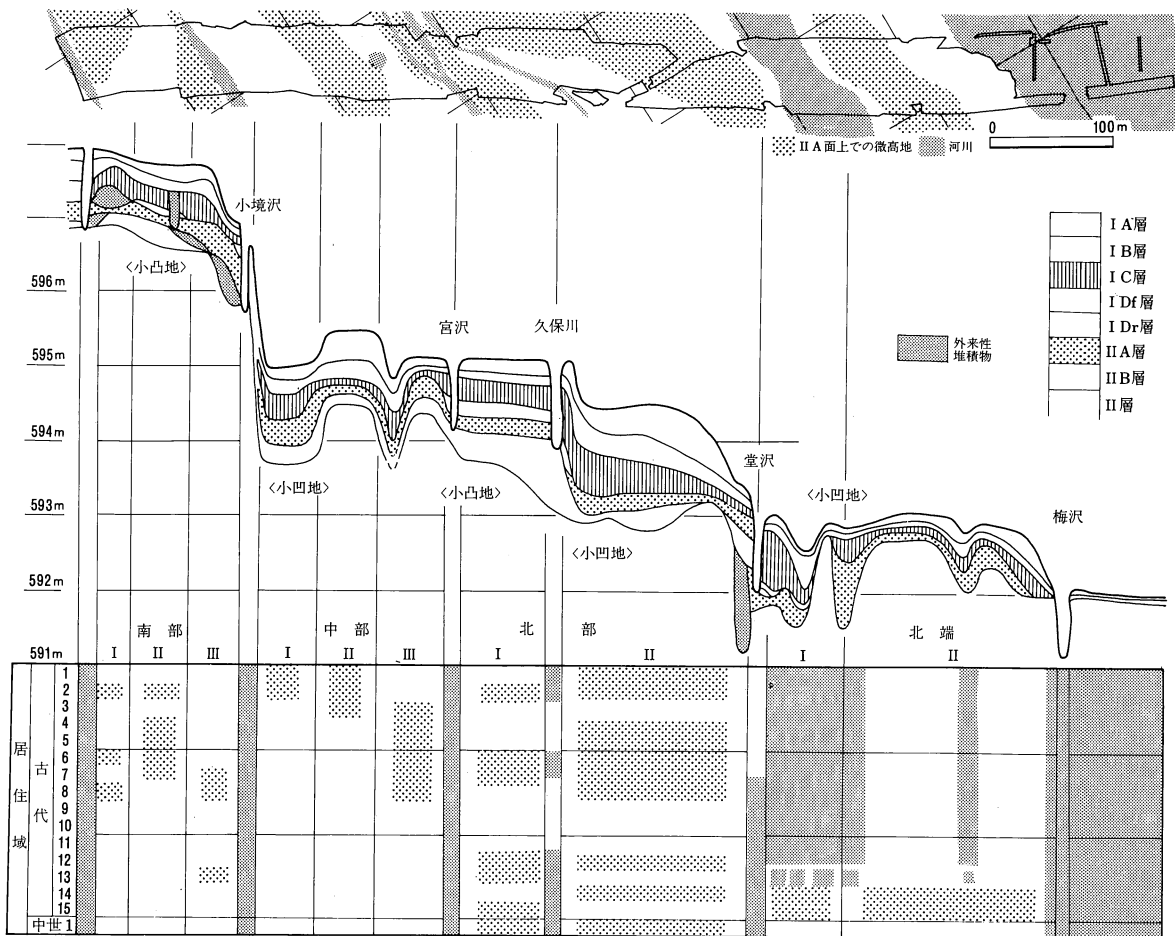
第3節 地形環境の変化と遺構群の展開

1 土層の堆積と遺構群の占地

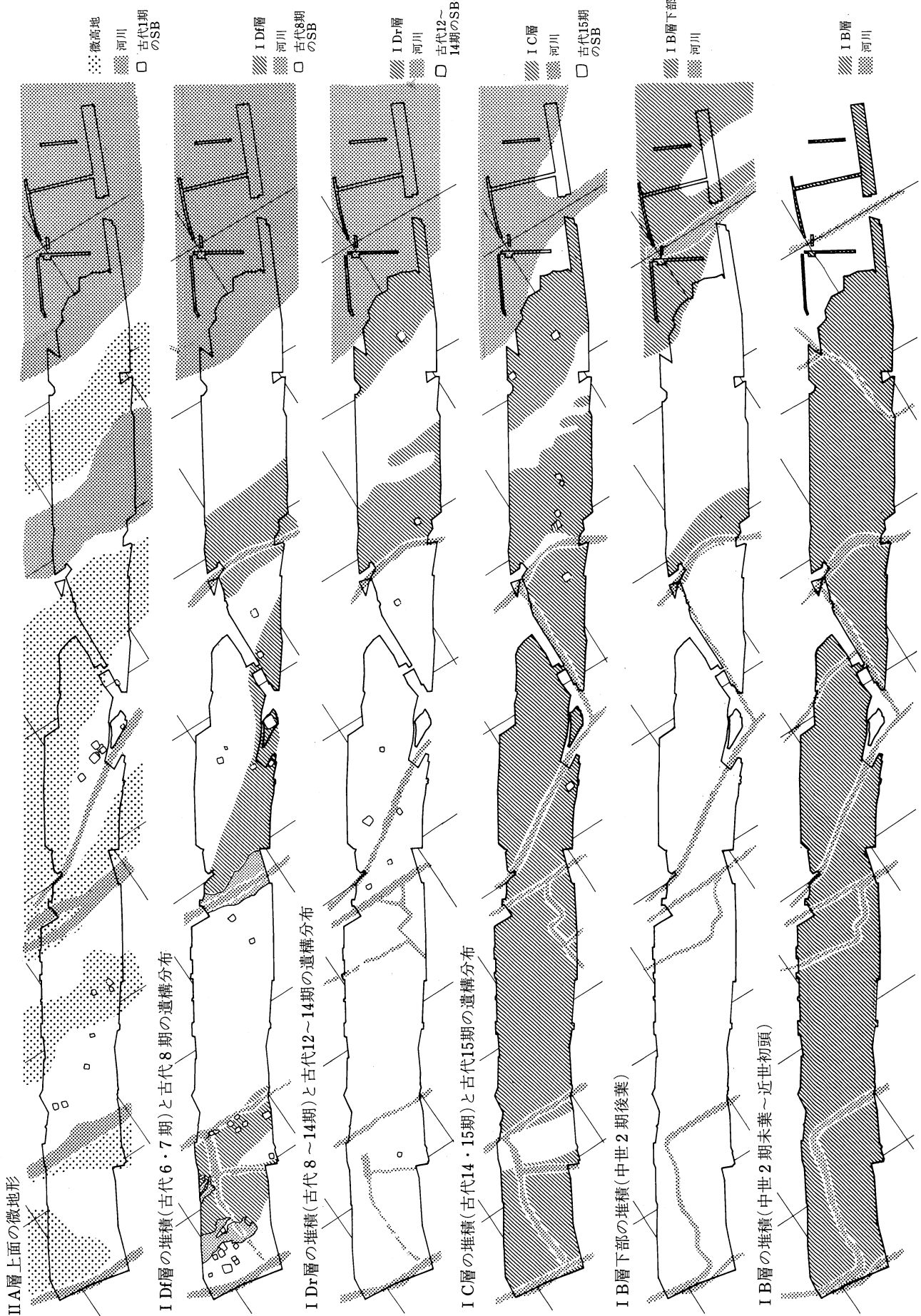
基本層序や微地形については第1章で記述したが、ここでは遺構群の変遷を総合し、土層の堆積による地形環境の変化と集落や生産域との係り、また、遺構群の占地の特徴を明らかにしたい。

第242図に土層別の堆積範囲を表わし、また第241図に路線方向に沿った本調査区域の土層断面を模式化して、微地形と居住域の変遷について示した。本遺跡周辺の地形の骨格は現地地表下1~1.5mに表れる砂礫層上面の古地形によって規定される。扇状地の網状流河川の痕跡と考えられる砂礫堆がほぼ東西方向にのび、その高まりが現在でも微高地として観察される。また、南部地区から中部地区にかけて幅100mに達する凹地状の谷地形が残されている。土層の堆積は砂礫堆間の小凹地を埋積する形で断続的に進行する。

II B層の堆積は弥生時代後期以前に、II A層は古墳時代後期以前に完了した。松本市教委による調査では中村集落東側で弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての集落が確認され、II B層の堆積によって集落の成立が可能な地形ができたと判断される。II A層の堆積はさらに土壌の被覆する土地を拡大させ、居住施設の構築や耕作可能な面積は増加したが、まだ砂礫の露出した部分も多いことが分かる。また、砂礫層上に堆積する土壌の被覆は20cm~40cmにすぎず、はたして遺跡全域で水田経営が可能かどうか疑問がもた



第241図 微地形と居住域の変遷



第242図 土層別の堆積範囲(1:4000)

れる。この段階では谷地形上に「境沢・小境沢」が自然流路起源の河川として東流し、微高地上を横断するように流れる「宮沢・久保川」は古代1期の集落の成立にともない人工的に開削された流路と判断される。なお、「堂沢」以北の地域は古代14期まで氾濫原であり、降水時には幅広い流路と化する低地で、何本かの自然流路が存在していたと考えられる。中村集落東側の弥生時代の集落はこの流路に面していたと判断される。

古代1期の遺構群の分布域は土層の堆積の厚い小凹地の上に限られており、それ以降の時期の住居址や建物址を中心とした遺構群が地形や土層の厚さに左右されず分布することに比べて対照的である。このことに関発初期の集落の占地の条件を求めることもできよう。

古代6・7期(9世紀中頃)にI Df層が小凹地に堆積する。これは境沢・久保川・宮沢・堂沢の氾濫によってもたらされた土砂であり、砂礫の堆積した地点も見られるが、個々の遺構の占地に影響をあたえても集落の動向に係ることはなかった。

古代14期(11世紀後半)にI Dr層が堆積することで地形環境は大きく変わる。I Dr層は北端地区のみで確認されているが、それによって北端I地区では氾濫原であった部分が離水し居住可能な土地へと変貌した。さらに15期(12世紀前半)にはI C層が遺跡前面を覆い尽くすように堆積した。北端地区の離水は完全なものとなり、14・15期の集落に見られるようにそれまで河床であった土地に集落が営まれるようになる。中世の遺構はこのI C層上面で展開するが、土層の厚さが増したことで水田址の確認される範囲は古代より大幅に拡大する。

中世2期から近世初頭にかけてI B層が堆積する。I B層は上部と下部に分かれるが、下部は梓川系統の堆積物と判断され、北端地区にのみ堆積していることから、この時期まで本遺跡の北側、樽木川沿いの地域は梓川の氾濫原であったと考えられる。I B層の堆積によって調査区域全域が土壌に覆われ、もはや砂礫の露出する土地は完全になくなった。集落域はごく一部でしか確認されないことから、ほぼ全面が水田化されたと判断される。近世中頃にI A層が堆積して現地表面が形成された。なお、このI B・I A層の堆積によって樽木川沿いの氾濫原は完全に離水したと判断される。

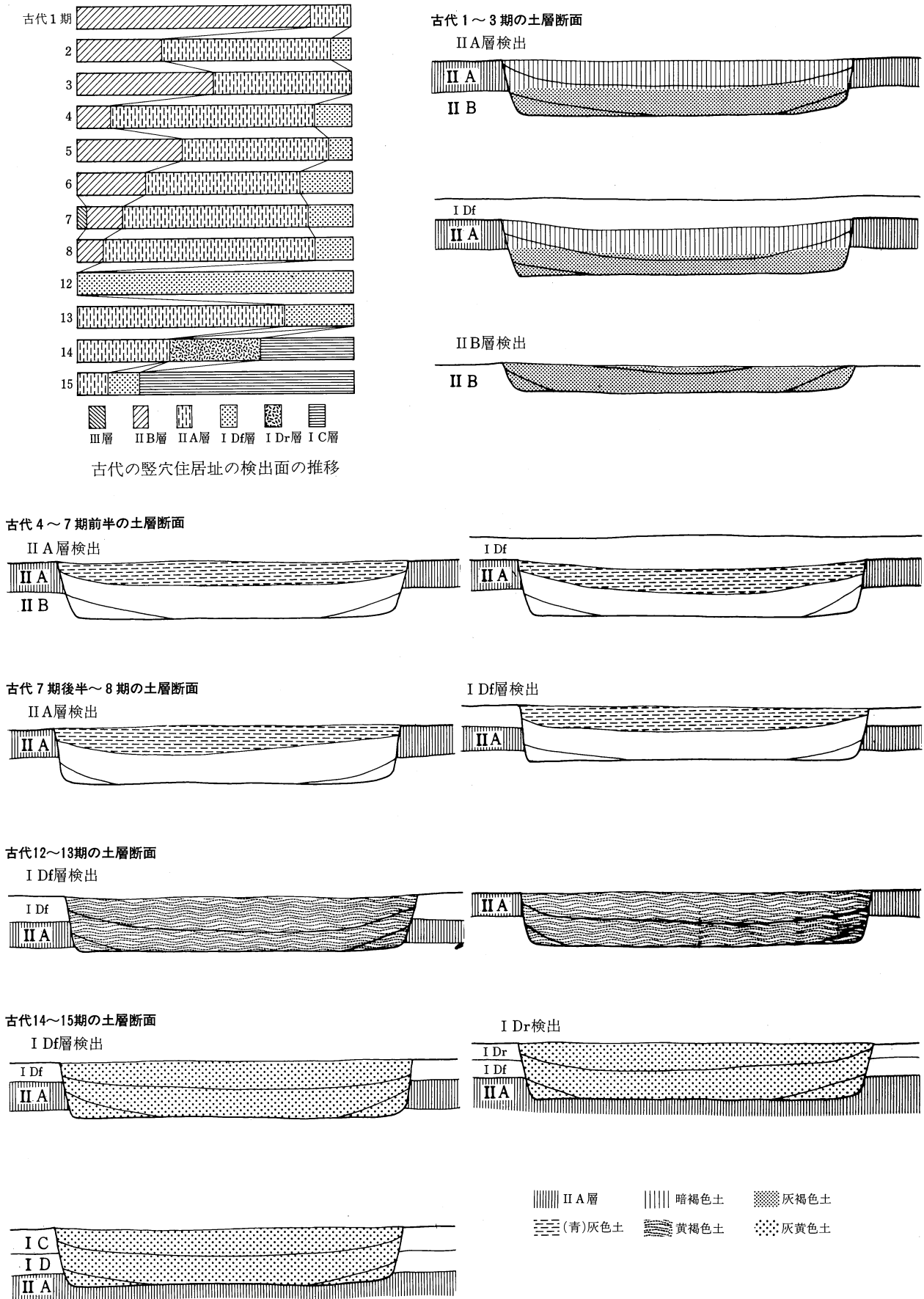
本遺跡付近は地下水位が低いいため、生活用水の確保は上水道が完備するまで遺跡内を流れる河川「堰」に頼っていた。集落はその河川に寄り添うように存在することが古代以降の集落の変遷から明らかであるが、水路の氾濫時には大きな被害を被ることになる。一方、河川の運搬してくる土砂は酸性化した耕地の土壌の中和剤ともなり、基本土層の堆積による直接的な被害は存在するものの、より安定した耕地の拡大に向かったことは確かである。

本遺跡周辺の地形環境の変遷は土壌の被覆の薄い「扇状地」的な地形から、厚い土壌を有する「沖積平野」的な地形への推移と捉えられるが、その過程でもたらされた土層の堆積は生産域の拡大につながり、本遺跡の動向もそれに支配された部分が多い。

2 古代竪穴住居址の覆土の変遷

竪穴住居址の覆土の諸属性については付表3に、また、埋没過程については第2章で記述してきた。ここではそれらをまとめ、特に遺跡検出時の土色の特徴とその時期的変遷について考える。第243図に住居址の検出面の時期的な推移を示した。それによると古代1～3期ではII B層上面を検出面とする住居址が多く、それ以降減少していくが8期でもII B層を検出面とする遺構が存在している。基本土層の堆積時期や1期でもII A層上面で検出可能な住居址が存在していること、またSB25・43・94・98・102などの土層断面の観察から遺構の切込み面はII A層上面で、古代1期でもII A層上面が生活面であったことが分かる。

1～3期の遺構では第243図に模式化したように覆土の上半部が地山II A層と同色の暗褐色を呈してお



第243図 古代の竪穴住居址の検出面の推移と土層断面図

り、そのため明確にプランの確定できるII B層A上面で調査されることが多い。6～8期の住居址で特徴的なことは検出面上で青灰色を呈した土が落ち込んでいることで、明瞭に1～3期の遺構と区別される。4・5期の住居址はその中間でII A層・II B層で検出される遺構はほぼ同数である。

こうした状況から地山II A層の土色自体が後置的にもたらされたと考えられ、土色の変色が1～3期の住居址で多く観察されることから、4・5期以降に調査区域全域で何らかの土壌化作用が進行したと判断される。また、6～8期の住居址の青灰色を呈する土壌も唯一同系統の色調を有するI Dr層とも性質が異なり、基本土層に対比することができない土壌である。12～13期の住居址の覆土は黄褐色を呈しているが、覆土の特徴はI Dr層と類似しており、I Dr層の堆積時期が12期以前にさかのぼる可能性もある。14・15期の住居址の覆土は灰黄色を呈し、その特徴からI C層起源と考えられる。

以上のように住居址の覆土の土色や特徴から遺構の帰属時期の判断もある程度可能であり、当地域の実際の発掘調査でも経験的に応用されている。12期以降の住居址の覆土の特徴は基本土層の堆積が原因であるが、1～3期と6～8期の住居址の覆土の相違は遺跡内部で生成されたと判断される。1～3期の暗褐色を呈する土壌は腐食土壌の形成を、後者の青灰色土には地表面の灰色低地土壌化現象が暗示されるが、それは遺跡全体に及んでおり局所的な現象とは片付けられない問題を含んでいる。十分な分析を待たねばならないがその要因としては植生や降水量の相違など自然環境の変化や当時の土地利用や集落廃絶後の水田化などが考えられる。このような自然環境の復原も過去の景観や農業生産力を考える際に必要であろう。

第5章 結語

今回の発掘調査では縄文・弥生時代の土器・石器、古代・中世・近世・近代の遺構と遺物が発見され、水路や河川の変遷もとらえることができた。特に、古代から近世にかけてこの場所が人々の絶え間ない生活や生産活動の場であったことを示している。調査の成果や課題については集落景観や水田址の変遷を中心に第4章で述べてあるが、ここでは時代別に成果をまとめ結語としたい。

1 縄文・弥生時代

調査区域内からは遺物が出土したにすぎないが、松本市教委による調査では弥生時代後期から古墳時代初頭の集落が確認されており、本遺跡周辺でこの時期から古代1期までの間を埋める集落や生産域の確認が期待される。

2 古代

古代1・2期の大型の掘立柱建物址を中心とした集落構造や、7・8期の礎石建ちの大型竪穴住居址が存在する集落の確認は、その性格付けを含め地域史の再構成の一助となるものと考えられる。また、河川・流路と遺構群の関係は集落の成立と用水路の開削が密接に関係し、古代においてもその水が生活や生産の重要な基盤であったことを示している。河川の調査が遺構の調査と同様に重要不可欠であるといえる。

3 中世

市道仁科線沿いに検出された土坑群を主体とした遺構群の展開を集落と評価したが、当地域では中世の集落景観の解明は始まったばかりで、さらに類例を集め検討を重ねて行く必要がある。また、水田址については明確な遺構として検出できる状況にないが、今回の調査では様々な灌漑方法の取られた水田址が地形を巧みに利用して営まれていることが確認され、当時の水田経営を知るうえで重要な史料となると思われる。

また、基本土層の堆積と遺構群の展開からは、人間の生活舞台となった地形環境の変化がどのように人々の営みに影響を与えたか、若干ではあるが示し得たと思われる。今後こうした視点からの遺跡の把握が特に沖積平野における発掘調査では重要であろう。

最後になったが、これまで御協力、ご指導を頂いた関係各位や諸団体に対し深い感謝の意を示すものである。

参考文献一覧

- 稲田 孝司 1978 「忌の竈と王権」 『考古学研究』 25—1
 井原今朝男 1990 「平安時代の生活と村落」 『長野県史 通史編』 1 (長野県史刊行会)
 小穴 喜一 1987 『土と水から歴史を探る』 (信毎書籍出版センター)
 小穴喜一・石井進 1988 「水系から村の歴史を探る—安曇野」 『朝日百科日本の歴史—歴史の読み方 2 都市と景観の読み方』 (朝日新聞社)
 大町市教委 1981 『借馬遺跡Ⅲ・追分遺跡・前田遺跡・前原遺跡』 (大町市埋蔵文化財調査報告書第6集)

- 各務原市教委 1984 『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』
- 勝田 至 1988 「中世の屋敷墓」『史林』 71-3
- 岐阜市教委 1981 『老洞古窯跡群発掘調査報告書』
- 群馬県教委 1987 『上野国分僧寺・尼寺中間地域』（関越自動車道地域埋蔵文化財発掘調査報告書第20集）
- 古泉 弘 1985 「江戸の街の出土遺物」『季刊考古学』 13
- 斎藤 孝正 1981 「猿投・尾北・美濃窯における灰釉陶器の変遷」『北丘古窯跡群・古墳群発掘調査報告書』
1988 「中世猿投窯の研究 —編年に関する一考察—」『名古屋大学文学部研究論集』C I 史学 34
- 酒井 和男 1986 「琵琶湖西岸の種籾囲い」『技術と民俗(下)都市町村の生活技術誌』（『日本民俗文化体系』14 小学館）
- 笹沢 浩 1986 「凸帯付四耳壺考」『長野県考古学会誌』 51
- 自然観察資料集作成委員会編 1983 『松本盆地のおいたちをさぐる』（松本市教育委員会ほか）
- 信濃史学会 1985 『信濃』 37-9
- 信濃史料刊行会 1952 『信濃史料』 2
- 渋川市教委 1988 『中筋遺跡第2次発掘調査概要報告書』（渋川市発掘調査報告書 第13集）
- 下総考古学会 1985 「特集 勝坂式土器の研究」『下総考古学』 8
- 田口 昭二 1982 「美濃の灰釉陶器と緑釉陶器」『考古学ジャーナル』 211（ニューサイエンス社）
1983 「美濃窯における白瓷と山茶碗」『美濃陶磁歴史館報』 II
- 谷 旬 1982 「古代東国のカマド」『千葉県文化財センター研究紀要』 7
- 長野県教委 1971 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 飯田地区』
1989 『吉田川西遺跡』（長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書3）
1989 『神戸遺跡・上二子遺跡・中二子遺跡』（長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書5）
1989 『南中遺跡・北中遺跡・北方遺跡・上手木戸遺跡』（長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書10）
1990 『下神遺跡』（長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書6）
- 長野市教委 1989 『中条遺跡』（長野市の埋蔵文化財 第32集）
- 原 明芳 1987 「松本平における平安時代の食膳具」『信濃』 39-4
- 藤沢 宗平 1973 「土師期遺跡の分布」『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』（同誌郷土史料編纂会）
- 藤澤 良祐 1982 「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋磁器』 第8号
1984 「“古瀬戸”概説」『美濃陶磁歴史館報』 III
1986 「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要』 V
- 藤原 健蔵 1976 「山形盆地の地形発達」『地理学評論』 40-10
- 藤原 宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) —数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—」『考古学と自然科学』 9
- 穂高町教委 1987 『矢原遺跡群（馬場街道遺跡）』
- 松原 典明 1983 「古銭一覧表」『日本考古学小辞典』（ニュー・サイエンス社）
- 松村 恵司 1983 「古代稲倉をめぐる諸問題」『文化財論叢』（同朋舎）
- 前川 要 1984 「猿投窯における灰釉陶器生産末期の諸様相」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』 III
- 松本市教委 1988 a 『松本市島立条里的遺構』（松本市文化財調査報告No.58）
1988 b 『松本市島立条里的遺構』（松本市文化財調査報告No.63）
1988 c 『松本市島立三の宮遺跡』（松本市文化財調査報告No.57）
1988 d 『松本市島内遺跡群 北方遺跡II・北中遺跡』（松本市文化財調査報告No.59）
1989 a 『松本市島立条里遺構III』（松本市文化財調査報告No.70）
1989 b 『松本市千鹿頭北遺跡』（松本市文化財調査報告 No.69）
- 三土 正則 1974 「低地水田土壌の生成的特徴とその土壌分類への意義」『農業技術研究所報告』 B-25
1978 「水田」『土壌調査法』
- 三輪 茂雄 1986 「石臼と木摩臼」『技術と民俗(下) 都市町村の生活技術誌』（『日本民俗文化体系』14）
- 宮本長二郎 1983 「古代の住居址と集落」講座 日本技術の社会史 7（日本評論社）
1986 a 「住居」『岩波講座 日本考古学 4 集落・祭祀』（岩波書店）

- 1989 b 「穴のなかから床上の生活へ」『日本古代史5 豊饒の大地』(集英社)
- 百瀬 新治 1989 「中世掘立柱建物址の検討—楡道下遺跡検出建物址の再評価」『信濃』 41-4
- 日本道路公団・山田水呑遺跡調査会 1977 『山田水呑遺跡』
- 山梨県教委 1987 『二之宮遺跡』(山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第23集)
- 横田賢次郎・森田勉 1978 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について 一型式分類と編年を中心として—」
『九州歴史資料館研究論集』 4
- 若尾 正成 1987 「白瓷から白瓷系陶器への転換期について」『美濃の古陶』(光琳社出版)

発掘調査および執筆などの分担一覧 (五十音順)

1 発掘調査担当および発掘調査記録の整理とまとめ

昭和60年度 調査第一部長 樋口昇一 第二部長 丸山徹一郎 第三部長 春原正毅
調査研究員 井口慶久 市沢英利 井上城典 宇賀神誠司 大竹憲昭 岡村秀雄
小口 徹 河西克造 春日雅博 斎藤正善 田中正治郎 中島経夫
中野亮一 望月 映 百瀬新治 百瀬長秀 百瀬忠幸
調査員 尾川秀吉

昭和61年度 調査第一部長 (兼第三部長) 樋口昇一 第二部長 丸山徹一郎
調査研究員 青沼博之 市沢英利 宇賀神誠司 太田典孝 岡村秀雄 小口 徹
北原正治 関 全寿 高野博正 中野亮一 望月 映 百瀬忠幸 百瀬久雄
山上秀樹

昭和62年度 調査部長 宮沢恒之
調査研究員 青沼博之 石上周蔵 市村勝巳 上田典男 大竹憲昭 小口 徹 小平和夫
小林俊一 小林 上 野村一寿 望月 映 百瀬新治

昭和63年度 調査部長 宮沢恒之
調査研究員 青沼博之 石上周蔵 市村勝巳 上田典男 大竹憲昭 岡沢秀紀 小平和夫
野村一寿 望月 映 百瀬新治

平成元年度 調査課長 青沼博之
調査研究員 石上周蔵 小平和夫 野村一寿 望月 映

2 執筆担当者

市村勝巳 第3章 第2節2
小口 徹 第1章 第3節1・2
小平和夫 第3章 第2節1
野村一寿 第3章 第1節1、第3節1、第4節1
望月 映 第1章 第1・2節、第3節3
第2章
第3章 第1節2、第2節3・4・5、第3節2・3・4、第4節2
第4章
第5章

3 その他

遺物実測 石上周蔵 市村勝巳 大竹憲昭 小平和夫 小林俊一 野村一寿 望月 映
遺物写真撮影・現像・焼付け・遺構写真焼付け 青沼博之 岡沢秀紀
土層総括 小口 徹
石質鑑定 関 全寿 望月 映
金属製品保存処理 大竹憲昭 小林 上 小松 望
編集 望月 映

付表1 三の宮遺跡プラントオパール定量分析結果(抄) 1

分析地点	土層名	深さ (cm)	イネ (Oryza sativa)		キビ族		地上部乾物重		
			地上部乾物重	種実重	地上部乾物重	種実重	ヨシ	タケ亜科	ウシクサ族
			t/10a・cm	t/10a	t/10a・cm	t/10a	t/10a・cm	t/10a・cm	t/10a・cm
20	現耕土	0	5,000	1,752	0,000	0,000	0,000	0,000	0,301
	I A層	15	2,379	0,833	0,000	0,000	0,000	0,129	1,338
	I B層	38	2,993	1,049	0,000	0,000	0,000	0,000	2,525
	I C層	47	1,786	0,626	14,819	6,729	0,000	1,166	0,000
	IDf層	66	0,000	0,000	10,108	4,590	0,000	0,000	1,712
	SB48上層	76	0,000	0,000	6,265	2,845	0,000	0,000	1,273
	SB48下層	87	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	1,726
	III層	122	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000
21	I A層	0	8,980	3,146	0,000	0,000	0,000	0,000	1,010
	I B層	22	4,730	1,657	0,000	0,000	0,000	0,000	1,662
	I C層	32	4,747	1,663	7,879	3,578	0,000	0,000	0,000
	IDf層	57	0,811	0,284	0,000	0,000	0,000	0,000	1,710
	SB54上位	67	1,851	0,648	0,000	0,000	0,000	0,000	1,951
	SB54下位	105	1,717	0,601	3,562	1,617	0,000	0,140	0,724
	II B層	113	0,000	0,000	4,864	2,209	0,000	0,000	0,494
	III層	121	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000
22	I A層	0	0,703	0,246	2,916	1,324	0,000	0,000	1,482
	I B層	37	3,803	1,332	3,945	1,792	0,000	0,155	0,000
	I C層上位	52	2,018	0,707	0,000	0,000	0,000	0,165	0,851
	I C層下位	66	4,250	1,489	0,000	0,000	0,000	0,000	0,717
	IDf層上位	81	0,853	0,299	0,000	0,000	0,000	0,000	0,720
	IDf層下位	92	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,140	0,295
	II A層	103	1,543	0,541	6,404	2,908	0,000	0,126	1,302
23	I A層	0	7,209	2,526	0,000	0,000	0,000	0,000	0,338
	I B層上位	38	11,261	3,945	0,000	0,000	0,000	0,000	0,432
	I B層下位	53	11,856	4,154	11,353	5,155	0,000	0,000	0,000
	I C層	78	4,370	1,531	3,626	1,647	0,000	0,000	0,737
	IDf層	89	1,144	0,401	4,748	2,156	0,000	0,000	1,448
24	I A層	0	4,662	1,633	3,224	1,464	0,000	0,000	0,328
	I B層	22	4,872	1,707	0,000	0,000	0,000	0,000	0,822
	I C層上位	41	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000
	I C層下位	51	1,387	0,486	0,000	0,000	0,000	0,000	0,878
25	I A層	0	7,150	2,505	0,000	0,000	0,000	0,000	1,005
	I B層上部	20	9,435	3,306	0,000	0,000	0,000	0,193	0,995
	I B層下部	38	1,054	0,369	0,000	0,000	0,000	0,000	1,334
26	I A層	0	5,065	1,775	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000
	I B層	19	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000
	I C層上位	35	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000
	I C層下位	49	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,390
	IDr層	63	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000
	II A層	77	2,559	0,897	0,000	0,000	0,000	0,000	0,720
27	現耕土	0	3,890	1,363	5,381	2,444	0,000	0,000	0,273
	I A層	14	4,184	1,466	3,473	1,577	0,000	0,000	0,000
	I B層上位	28	1,725	0,604	0,000	0,000	0,000	0,000	1,455
	I B層下位	38	5,902	2,068	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000
	I C層上位	49	1,231	0,431	0,000	0,000	0,000	0,000	0,519
	I C層下位	61	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000
	IDr層	73	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000
a	現耕土	0	5,567	1,950	8,663	3,934	0,000	0,000	0,000
	I A層	14	5,937	2,080	2,737	1,243	0,000	0,108	0,556
	I B層	23	3,890	1,363	3,228	1,466	0,000	0,127	0,000
	I C層	36	1,426	0,499	2,958	1,343	0,000	0,000	0,301
	II A層上位	49	0,000	0,000	15,917	7,228	0,000	0,000	1,348
	II A層下位	64	0,000	0,000	18,844	8,557	0,000	0,124	0,958
	II B層	130	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000
	III層	146	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000

付表1 三の宮遺跡プラントオパール定量分析結果(抄) 2

分析地点	土層名	深さ(cm)	イネ(Oryza sativa)		キビ族		地上部乾物重		
			地上部乾物重	種実重	地上部乾物重	種実重	ヨシ	タケ亜科	ウシクサ族
b	現耕土	0	7,344	2,573	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000
	I A層	12	3,817	1,337	3,960	1,798	2,250	0,156	0,000
	I B層	21	3,319	1,163	3,443	1,564	0,000	0,000	0,000
	I C層	37	2,566	0,899	0,000	0,000	0,000	0,000	0,361
	II A層	59	0,000	0,000	10,383	4,715	1,966	0,000	1,407
	II B層	80	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000
	III層	113	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000
c	現耕土	0	7,183	2,517	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000
	I A層	17	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,652
	I B層	28	4,167	1,460	5,763	2,617	0,000	0,113	0,000
	I C層	37	2,495	0,874	0,000	0,000	0,000	0,000	0,351
	II A層	49	1,729	0,606	14,346	6,514	0,000	0,000	0,729
	II B層	68	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000
	III層								
d	現耕土	0	3,385	1,186	0,000	0,000	0,000	0,221	0,286
	I A層	11	6,035	2,114	6,261	2,843	0,000	0,000	0,000
	I B層	17	6,581	2,306	0,000	0,000	0,000	0,134	0,694
	I C層	32	3,745	1,312	3,886	1,764	0,000	0,000	0,790
	IDf層	50	3,319	1,163	6,887	3,127	0,000	0,000	0,000
	II A層	61	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,833
	III層								
e	現耕土	0	6,602	2,313	3,044	1,382	0,000	0,000	0,000
	I B層	19	5,184	1,816	0,000	0,000	1,746	0,000	0,000
	I C層	37	3,045	1,067	0,000	0,000	0,000	0,000	0,321
	II A層	50	7,999	2,802	0,000	0,000	0,000	0,000	0,843
	II B層	55	2,104	0,737	8,731	3,965	2,480	0,000	0,000
	III層								
f	現耕土	0	3,039	1,065	5,045	2,291	0,000	0,000	0,000
	I A層	12	1,680	0,589	3,486	1,583	0,000	0,000	0,000
	I B層	21	4,415	1,547	3,664	1,664	0,000	0,000	0,000
	I C層	34	3,108	1,089	12,897	5,857	0,000	0,000	0,874
	II A層	45	0,000	0,000	3,633	1,650	0,000	0,000	0,000
	II B層	70	0,000	0,000	11,795	5,356	0,000	0,000	0,599
	III層	143	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000
g	現耕土	0	4,048	1,418	6,719	3,051	0,000	0,000	0,000
	I A層	14	6,241	2,187	6,475	2,940	0,000	0,255	0,658
	I B層	20	5,710	2,000	0,000	0,000	0,000	0,000	1,605
	I C層	35	3,710	1,300	15,395	6,991	0,000	0,000	0,782
	II A層	45	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	1,196
	II B層	64	0,000	0,000	9,373	4,256	0,000	0,000	0,000
	III層	145	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000
h	現耕土	0	3,215	1,126	3,335	1,514	0,000	0,000	0,339
	I A層	10	3,267	1,145	3,389	1,539	0,000	0,000	0,344
	I B層	20	11,746	4,115	4,062	1,844	0,000	0,000	0,826
	I C層	41	13,129	4,600	6,053	2,749	0,000	0,000	1,231
	II A層	65	0,000	0,000	7,083	3,216	0,000	0,000	0,360
	II B層	83	0,000	0,000	3,950	1,794	0,000	0,000	1,204
	III層	145	0,958	0,336	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000
i	現耕土	0	10,393	3,641	0,000	0,000	0,000	0,106	0,274
	I A層	11	9,946	3,484	0,000	0,000	1,302	0,000	0,932
	I B層	24	6,479	2,270	12,220	5,549	0,000	0,000	0,000
	I C層	40	10,187	3,569	21,137	9,598	2,001	0,000	0,358
	II A層	65	3,071	1,076	15,294	6,945	0,000	0,000	0,777
	II B層	102	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000	0,086	1,116
j	現耕土	0	3,416	1,197	0,000	0,000	0,000	0,000	0,360
	I A層	13	8,109	2,841	0,000	0,000	1,911	0,132	0,000
	I B層	22	6,009	2,105	0,000	0,000	0,000	0,000	0,000
	I C層	43	1,665	0,583	0,000	0,000	0,000	0,000	1,053
	II A層	58	3,986	1,396	0,000	0,000	0,000	0,000	0,672

付表2 三の宮遺跡古代竪穴住居址一覧表 1

No. ※ ()	位置	平面形	主軸方向	規模				カマド							諸施設			時期	図版No.			
				規模の 類型	主軸×直交軸 m	床面積 ㎡	深さ m	床標高 m	位置	構築	壁への掘込		煙道			煙道 口の 高さ m	その他			柱穴	柱間 間隔 m	その他
											形	大きさ	主軸	長さ m	傾き							
1 (103)	南部 I	隅方	N 5° E	小	2.50×2.80	7.00	0.25	596.75	不明	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	貼床	—	13	
2 (54)	"	"	N 114° E	大1	5.30×5.60	29.68	0.40	597.00	東壁中央	"	—	—	—	—	—	—	4	— 2.30	貯蔵穴か 支柱穴2	8	12	
3 (53)	"	"	N 87° E	中1	3.60×3.60	12.96	0.20	597.10	不明	"	—	—	—	—	—	—	—	—	貼床	8	12	
4 (-)	"	不明	—	小	3.10×3.50	10.85	0.20	597.05	東壁中央か	"	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	12	
5 (71)	"	隅長II	N 87° E	"	3.00×2.70	8.56	0.30	597.00	"	石組	—	—	—	—	—	—	—	—	支脚	—	8	12
6 (52)	"	隅方	N 94° E	中2	3.95×4.20	16.59	0.30	596.95	"	"	—	—	N 94° E	0.45	15°	0.20	—	—	—	—	6	14
7 (55)	"	隅長II	N 99° E	不明	2.65×—	不明	0.30	596.90	"	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	14
8 (51)	"	隅方	N 93° E	大1	5.25×4.95	25.99	0.60	597.00	"	石組か	—	—	—	—	—	—	—	—	—	テラス・貼床 灰溜めP	8	14
9 (73)	"	"	N 85° E	中1	4.85×—	(23)	0.30	597.15	"	"	—	—	—	—	—	—	—	—	貼床	8	14	
10 (72)	"	"	N 71° W	小	3.00×2.70	8.10	0.30	597.20	北西隅	"	丸	1/2	—	—	—	—	—	—	支脚	—	8	12
11 (65)	"	隅方か	N 90°	不明	3.00×—	不明	0.40	597.20	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	西壁に 張出し	8	14
12 (64)	"	隅方	N 99° E	中1	3.15×3.25	10.24	0.40	597.15	東壁中央 やや北	石組	—	—	N 99° E	0.20	10°	0.25	—	—	—	—	8	14
13 (74)	"	"	N 90°	小	2.80×2.85	7.98	0.45	596.85	不明	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	貼床	8	14	
14 (68)	"	"	N 0°	中1	3.20×2.95	9.74	0.40	596.65	北壁中央	"	丸	1/4	—	—	—	—	—	—	支脚	—	5	15
15 (-)	"	不明	—	—	—	—	—	—	西壁中央か	石組	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	14
16 (63)	南部 II	隅長I	N 89° W	中1	3.55×3.15	11.18	0.45	596.55	西壁中央 やや北	石組か	—	—	N 84° W	0.95	10°	0.25	煙道先P(-20cm)	—	—	—	7	17
17 (62)	"	"	N 3° W	"	2.80×3.15	8.82	0.30	597.65	北壁中央 やや西	不明	—	—	N 3° W	1.10	水平	0.15	—	—	—	貼床	7	17
18 (66)	"	隅方	N 4° E	"	3.45×3.30	11.84	0.35	596.95	北壁中央 やや西	石組	丸	1/3	—	—	—	—	—	—	—	—	6 7	16
19 (61)	"	隅長I	N 90° E	"	3.25×3.80	12.35	0.45	596.55	東壁中央	"	—	—	N 90° E	0.45	20°	0.20	—	—	—	貼床	7	17
20 (79)	"	隅方	N 97° E	"	3.70×4.00	14.80	0.40	596.60	"	石組か	—	—	N 97° E	0.55	20°	0.20	煙道先P(-15cm)	—	—	—	4	17
21 (77)	"	隅長II	N 101° E	"	3.65×3.00	10.95	0.45	597.70	"	不明	丸	1/5	N 101° E	0.15	—	0.35	—	—	—	貯蔵穴 貼床	6	17
22 (78)	"	隅長I	N 97° E	"	4.15×3.50	14.53	0.50	596.60	"	石組	"	1/4	—	—	—	—	—	—	—	貼床	6	17
23 (69)	"	隅長II	N 89° E	小	3.90×3.10	12.09	0.30	596.95	東壁北東 隅より	粘土	"	1/4	—	—	—	—	—	—	支脚	—	2	16
24 (70)	"	隅方か	N 90° E	不明	3.40×—	不明	0.20	597.00	東壁中央	不明	—	—	N 90° E	0.65	水平	0.00	—	—	—	貼床	2	16
25 (57-58)	"	隅方	N 115° E	中2	4.85×5.20	25.22	0.60	596.30	東壁中央 に2基	粘土	—	—	N 115° E	0.70	10°	0.20	カマド作替え	4 か	—	北壁下に巨 礫2・貼床	2	18
26 (67)	"	"	N 104° E	中1	3.40×3.10	10.54	0.40	596.75	東壁中央	"	丸	1/3	—	—	—	—	—	—	—	貼床	5	16

付表2 三の宮遺跡古代壜穴住居址一覧表 2

No.	位置	平面形	主軸方向	規模				カマド							諸施設			時期	図版No.											
				規模の 類型	主軸×直交軸 m	床面積 m ²	深さ m	床標高 m	位置	構築	壁への掘込		煙道			煙道 口の 高さ m	その他			柱穴	柱間 間隔 m	その他								
											形	大きさ	主軸	長さ m	傾き															
27 (75)	南部 II	隅方	N90°E	中2	3.95×4.15	16.39	0.40	596.55	東壁中央	石組	丸	1/3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	貼床 床直に巨礫1	6	17			
28 (50)	"	"	N88°W	中1	3.90×3.60	14.04	0.70	596.75	西壁中央	"	—	—	N88°W	0.60	水平	0.20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	16		
29 (49)	南部 III	方	N78°W	中2	4.35×4.20	18.27	0.40	596.60	"	"	丸	1/3	N78°W	0.15	—	0.05	—	—	—	—	—	—	—	—	貼床	7	18			
30 (23)	"	"	N68°W	中1	3.25×3.10	10.08	0.15	594.35	"	"	巾	1/2	—	—	—	—	—	支脚石	—	—	—	—	—	—	P1(貯蔵穴) 貼床	8	19			
31 (24)	"	"	N108°E	"	3.10×3.20	9.92	0.40	596.05	東壁中央 やや南	"	—	—	N98°E	0.50	5°	0.35	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	19			
32 (25)	"	隅方	N70°W	中2	5.00×4.65	23.25	0.40	596.00	西壁中央	"	丸	1/3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	P1	7	19			
33 (26)	"	隅長I	N58°W	中1	3.35×3.05	10.22	0.25	596.10	"	"	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	P1 貼床	13	19			
34 (48)	"	隅方	N162°E	中1	3.40×3.40	11.56	0.60	596.35	東壁中央 南より	石組 か	丸	1/2	N162°E	1.10	20°	0.20	煙道に石組	—	—	—	—	—	—	—	—	床下P1(-35cm) 貼床	7	19		
35 (1)	"	"	N98°E	中2	4.55×4.70	21.39	0.45	595.30	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	床面にカマド石散乱	—	—	P1~9	8	22
36 (32)	"	"	N97°E	中1	3.55×3.60	12.78	0.40	595.65	東壁中央	石組	丸	1/3	N97°E	0.30	10°	0.25	支脚石 (土器かぶせる)	4か	2.20	—	—	—	—	—	—	北東隅にテラス	8	21		
37 (2)	"	隅長II	N100°E	"	3.05×3.95	12.05	0.35	594.60	"	"	丸	1/4	N100°E	0.20	水平	0.25	—	—	—	—	—	—	—	—	—	貼床	8	21		
38 (-)	南部 II	隅方	N80°W	小	2.25×2.35	5.29	0.10	595.80	西壁中央	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	20		
39 (39)	南部 III	"	N80°W	不明	3.10×	不明	0.05	595.90	"	粘土	—	—	N80°W	0.35	水平 か	0.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	P1(-5cm)	2	21		
40 (40)	"	"	N90°E	"	3.45×	不明	0.10	595.85	東壁中央	石組 か	丸	1/3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	P1(-8cm)	8	21		
41 (33)	"	隅長I	N88°E	小	2.75×3.10	8.53	0.15	595.65	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	21		
42 (36)	"	隅方	N20°W	"	3.00×2.95	8.85	0.30	595.55	北壁中央	石組	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	貼床	8	21		
43 (35)	"	隅方 か	N72°W	不明	3.00×	不明	0.40	595.15	西壁中央	粘土	—	—	—	—	—	—	—	支脚痕(-10cm)	—	—	—	—	—	—	—	貯蔵穴2 貼床	1	22		
44 (41)	"	隅長I	N88°E	小	2.75×3.10	8.53	0.15	595.65	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8	20		
45 (38)	"	隅長II	N90°W	中1	3.70×3.10	11.47	0.15	595.55	西壁中央	石組	—	—	—	—	—	—	—	支脚痕(-10cm)	—	—	—	—	—	—	—	—	8	20		
46 (37)	"	隅方	N79°E	不明	—	不明	0.50	595.60	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	貼床	8	24		
47 (14)	中部 I	"	N105°E	中1	3.50×3.30	11.55	0.20	595.55	東壁中央	粘土 か	方	1/2	N105°E	0.25	20°	0.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	貯蔵穴 貼床・床下P	7	23	
48 (28)	"	"	N79°W	"	4.45×4.65	20.69	0.35	595.00	西壁中央 やや南	"	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	24		
49 (12)	"	隅長I	N80°W	小	3.30×3.85	12.71	0.35	595.35	西壁中央	粘土	—	—	N88°W	1.35	水平	0.35	—	—	—	—	—	—	—	—	—	四壁にテラス 貼床	1	23		
50 (13)	"	隅長II	N111°E	"	2.40×4.60	11.04	0.30	595.30	東壁中央	"	—	—	N111°E	1.20	5°	0.10	煙道先P(-5cm)	—	—	—	—	—	—	—	—	西壁にテラス 貼床	1	23		
51 (27)	"	"	N92°W	中1	3.80×4.65	17.67	0.40	594.70	"	粘土 か	—	—	N92°E	1.10	10°	0.20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	灰溜め2	2	25		
52 (34)	"	隅方	N42°E	小	3.55×3.20	11.36	0.20	594.85	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	貯蔵穴2 貼床	1	26		

付表2 三の宮遺跡古代竪穴住居址一覧表 3

No.	位置	平面形	主軸方向	規模				カマド							諸施設			時期	図版No.							
				規模の 種類	主軸×直交軸 m	床面積 ㎡	深さ m	床標高 m	位置	構築	壁への掘込		煙道			煙道 口の 高さ m	その他			柱穴	柱間 間隔 m	その他				
											形	大きさ	主軸	長さ m	傾き											
53 (-)	中部 I	隅長II	N17°W	小	2.35×3.75	8.77	0.30	594.80	不明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P1~3	1	28	
54 (82)	中部 II	隅方	N86°W	大1	5.85×6.15	35.98	0.15	594.75	西壁中央	粘土	-	-	N86°W	0.10	-	0.20	-	-	-	-	-	-	-	-	3	30
55 (3)	中部 III	"	N3°E	中2	5.35×5.25	28.09	0.25	593.83	北壁中央	"	-	-	N3°E	0.45	水平	0.15	支脚痕	-	-	-	-	-	-	P1~2	1	32
56 (5)	中部 II	隅長II	N86°W	中1	4.70×4.00	18.80	0.25	594.85	不明	-	-	-	-	-	-	-	西壁中央	-	-	-	-	-	貼床	2	29	
57 (4)	"	"	N95°E	大1	5.60×6.60	36.96	0.25	594.60	東壁中央	-	-	-	N95°E	1.40	水平	0.10	-	-	-	-	-	-	-	2	29	
58 (105)	南部 II	隅方	N87°E	中2	5.10×5.15	26.27	0.20	594.70	"	粘土	-	-	N87°E	1.45	5°	0.15	煙道先P(-15cm)	主4	3.50 3.50	-	-	-	-	2	30	
59 (106)	南部 III	"	N87°E	小	2.90×2.95	8.56	0.20	594.65	"	"	-	-	N87°E	0.35	15°	0.00	支脚痕	主4	2.00 1.86	-	-	-	-	2	30	
60 (104)	南部 II	"	N78°E	"	2.90×3.30	9.57	0.25	594.55	西壁中央	"	丸	1/4	N78°E	0.80	20°	0.15	袖・天井・地山掘残し 煙道先P(-10cm)	-	-	-	-	-	-	-	1	30
61 (56)	中部 III	"	N88°E	中1	3.30×3.40	11.22	0.30	594.60	東壁中央	石組	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	貼床 P1(-10cm)	7	32	
62 (83)	"	隅長II	N91°E	中2	4.05×3.05	12.35	0.50	594.30	"	不明	-	-	N91°E	0.40	-	0.00	-	-	-	-	-	-	南壁に張出し	7	32	
63 (84)	"	隅方	N90°E	小	3.60×3.25	11.70	0.60	594.30	東壁中央 やや南	石組	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8	32	
64 (80)	"	"	N90°E	中2	4.30×4.00	17.11	0.50	594.50	"	不明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	床直に巨礫1	7	33	
65 (6)	"	方	N96°E	中1	3.20×3.15	10.08	0.25	594.65	"	石組	丸	2/3	N96°E	-	-	-	-	-	-	-	-	-	南西隅に床直の 巨礫、貼床	7	33	
66 (81)	"	隅方	N96°E	"	3.65×3.70	13.50	0.35	594.45	東壁中央	"	"	1/2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	南西隅に床直の 巨礫	7	33	
67 (80)	"	"	N93°W	"	3.20×3.35	10.72	0.30	594.55	西壁中央	"	-	-	N93°W	0.15	10°	0.20	-	-	-	-	-	-	南東隅にテラス	7	34	
68 (7)	"	隅方か	N90°E	"	(3.6×3.6)	(13)	0.40	594.50	東壁中央	粘土 か	-	-	N90°E	0.50	水平	0.15	-	-	-	-	-	-	カマド右に張出し	7	34	
69 (81)	"	長I	N88°E	小	3.05×2.70	8.24	0.40	594.55	不明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	34	
70 (107)	"	隅方	N75°E	"	3.15×2.70	8.51	0.10	594.65	"	不明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	34	
71 (108)	"	"	N93°W	中1	3.40×3.60	12.24	0.25	594.55	西壁中央 やや南	石組 か	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	35	
72 (87)	"	"	N80°E	小	2.95×3.10	9.45	0.50	593.25	東壁中央	不明	-	-	-	-	-	-	カマド石あり	-	-	-	-	-	-	4	35	
73 (86)	"	"	N85°E	中1	4.10×3.65	14.97	0.20	594.60	不明	"	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8	35	
74 (85)	"	"	N85°E	中2	4.20×4.00	16.80	0.25	594.50	東壁中央 やや南	石組	丸	1/3	N85°E	0.40	-	0.00	-	-	-	-	-	-	-	-	8	35
75 (88)	"	隅長II	N88°E	中1	3.40×2.40	8.16	0.40	594.45	不明	不明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	35	
76 (112)	"	隅方	N92°E	小	2.90×3.00	8.70	0.30	594.40	東壁 北より	石組	丸	1/3	N92°E	0.65	水平	0.10	-	-	-	-	-	-	-	-	3	35
77 (8)	"	隅長I	N87°W	中2	3.80×4.25	16.15	0.10	594.65	西壁中央 か	石組 か	-	-	-	-	-	-	床面にカマド石散乱	4か	-	-	-	-	-	7	34	
78 (115)	"	隅方	N84°E	中1	4.40×4.45	19.58	0.40	594.30	東壁中央	粘土	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	36	

付表2 三の宮遺跡古代竪穴住居址一覧表 4

No.	位置	平面形	主軸方向	規模					カマド							諸施設		時期	図版No.					
				規模の類型	主軸×直交軸 m	床面積 ㎡	深さ m	床標高 m	位置	構築	壁への掘込		煙道			煙道の高さ m	その他			柱穴	柱間隔 m	その他		
											形	大きさ	主軸	長さ mm	傾き									
79 (80)	北部 I	隅方か	N89°W	小	3.20×—	(10)	0.35	594.40	東壁中央 やや南	粘土	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	36
80 (111)	"	隅方I	N80°E	小か	3.30×2.70	8.91	0.20	594.30	東壁中央 やや北	石組	丸	1/3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	36
81 (82)	"	隅方か	N2°W	不明	—	—	0.35	594.60	不明	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	12 13	36	
82 (85)	"	隅方	N88°E	中1	3.70×3.75	13.88	0.55	594.15	東壁中央	粘土	丸	1/3	—	—	—	—	支脚痕	東壁中央	—	—	—	—	6	36
83 (84)	"	隅長II	N100°E	"	4.15×3.25	13.49	0.40	593.90	北西隅	石組	"	1/4	—	—	—	—	支脚石	—	—	—	—	13	36	
84 (87)	"	隅方	N92°E	大1	5.45×5.05	27.52	0.30	594.20	東壁中央 やや南	粘土	—	—	—	—	—	—	支脚石2(間隔30cm)	—	—	P1(-7cm)	—	7	36	
85 (110)	"	隅方か	N87°E	中1か	3.15×—	—	0.15	592.85	東壁中央	不明	丸	1/4	—	—	—	—	—	東壁中央	—	—	—	7	38	
86 (86)	"	隅方	N90°	中1	3.25×3.58	11.64	0.35	594.20	北西隅	石組	—	—	—	—	—	—	—	—	—	カマド脇にP1 (-12cm)	—	12	38	
87 (88)	"	"	N97°W	"	3.05×3.40	10.34	0.35	594.15	西壁中央	石組か	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	37	
88 (100)	"	隅長I	N109°W	中1	4.05×3.40	13.77	0.25	594.15	"	石組	—	—	N109°W	0.25	—	—	支脚痕	—	—	—	—	7	37	
89 (89)	"	隅方	N80°E	"	3.20×3.30	10.56	0.20	594.15	東壁中央	"	方	1/3	N10°W	0.65	10°	0.10	—	—	—	—	—	7	39	
90 (10)	"	"	N74°E	小	3.50×3.85	13.48	0.35	593.30	"	粘土	—	—	N74°E	0.85	5°	0.20	—	—	—	—	—	2	40	
91 (101)	"	"	N68°E	中1	3.30×3.65	12.05	0.20	594.00	東壁中央 やや南	粘土か	方	1/2	—	—	—	—	袖先端に礫か	—	—	—	—	7	39	
92 (90)	"	"	N85°E	小	2.95×2.65	7.82	0.45	593.70	"	"	—	—	N85°E	0.50	20°	0.25	—	—	—	—	—	6	39	
93 (81)	"	隅長I	N71°E	中1	3.15×2.70	8.51	0.20	593.95	"	石組	—	—	—	—	—	—	—	—	—	P1(-15cm)	—	7	39	
94 (29)	"	隅方か	N8°W	不明	—	—	0.40	592.75	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	40	
95 (124)	"	"	N23°E	"	4.65×—	—	0.30	593.60	"	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4 5	41	
96 (11)	"	隅方	N98°W	中1	3.60×3.75	13.50	0.20	593.15	西壁中央 やや西	粘土	丸	1/4	N98°W	—	—	—	袖先端に巨礫	—	—	貼床	—	6	42	
97 (102)	"	"	N89°E	"	3.50×3.90	13.65	0.35	593.80	北東隅か	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	13	42	
98 (42)	"	隅方か	N20°W	不明	—	—	0.45	593.30	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	43	
99 (46)	"	隅方	N94°W	中2	4.35×4.40	19.14	0.45	593.25	西壁中央か	粘土	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	43	
100 (-)	"	隅長II	N11°W	大1	4.85×5.95	28.89	0.20	593.80	東壁中央	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	15	43	
101 (22)	"	隅方	N68°E	中1	3.30×3.65	12.05	0.20	594.00	東壁中央 やや南	粘土か	方	1/2	—	—	—	—	袖先端に礫か	—	—	—	—	7	43	
102 (43)	"	方か	N83°E	超か	(9.2)×—	—	0.70	593.15	西壁中央	石組	—	—	N90°W	0.85	10°	0.25	煙道に石組	—	—	床面2枚(上: 貼床)	—	6	43	
103 (47)	"	隅方か	N96°W	不明	—	—	0.40	593.45	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	43	
104 (44)	"	"	N90°	"	—	—	0.35	593.35	"	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	北壁際床面に焼 土	—	6	43	

付表2 三の宮遺跡古代竪穴住居址一覧表 5

No.	位置	平面形	主軸方向	規模					カマド										諸施設			時期	図版No.				
				規模の 類型	主軸×直交軸 m	床面積 ㎡	深さ m	床標高 m	位置	構築	壁への掘込		煙道			煙道 口の 高さ m	その他	柱穴	柱間 間隔 m	その他							
											形	大きさ	主軸	長さ m	傾き												
105 (116)	北部 I	隅長 I	N 102° E	大 1	6.10×5.30	32.33	0.15	593.85	西壁北西 隅より	石組	—	—	N 102° E	0.20	水平	0.10	—	—	—	—	—	—	—	—	13	41	
106 (167) (174)	北部 II	隅方	N 45° E	中 2	4.25×4.30	18.28	0.25	593.35	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	31	
107 (45)	北部 I	隅長 II	N 69° E	中 1	4.15×3.45	14.32	0.50	593.50	東壁中央 やや南	石組	丸	1/2	N 69° E	0.10	35°	0.25	支脚痕(—8cm)	—	—	貼床	—	—	—	—	—	8	45
108 (166)	北部 II	隅方	N 84° E	中 2	3.85×4.20	16.17	0.35	593.40	東壁中央	—	—	—	N 72° E	1.65	5°	0.20	—	—	—	—	—	—	—	—	5	56	
109 (118) (173)	〃	隅長 II	N 99° W	〃	4.00×4.70	18.75	0.45	593.30	西壁中央	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	44	
110 (155)	〃	隅長 I	N 119° W	〃	4.05×	—	0.30	593.30	〃	粘土	—	—	N 119° W	1.55	水平	0.26	—	—	—	—	—	—	—	—	6	44	
111 (10)	〃	隅方	N 99° W	中 1	3.55×3.70	13.14	0.20	592.95	〃	石組	丸	1/3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	43	
112 (17)	〃	〃	N 80° E	〃	3.50×3.55	12.43	0.20	593.00	東壁中央 やや南	〃	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	43	
113 (15)	〃	隅方か	N 88° E	不明	不明	不明	0.40	593.05	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	P 1	—	8	43	
114 (165)	北部 II	隅長 II	N 80° E	中 1	3.20×4.25	13.60	0.15	593.50	東壁中央 やや南	石組	—	—	—	—	—	—	支脚石	—	—	—	—	—	—	—	7	44	
115 (129)	〃	隅方	N 87° E	〃	4.05×4.40	17.82	0.55	593.30	東壁中央	不明	—	—	—	—	—	—	P 1(—44cm)	主 4 か	—	—	—	—	—	—	4	56	
116 (164)	〃	隅方か	N 7° W	〃	2.95×2.80	8.26	0.20	593.40	〃	石組	丸	1/3	—	—	—	—	支脚石	—	—	—	—	—	—	—	7	44	
117 (128)	〃	方	N 115° E	小	2.85×3.10	8.84	0.35	593.40	東壁中央 やや北	石組か	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	44	
118 (172)	〃	隅方	N 83° E	中 1	3.60×3.60	12.96	0.30	593.20	東壁中央	粘土	—	—	N 89° E	0.80	10° 有段	0.00	—	—	—	—	—	—	南壁際床直巨磔	—	5	57	
119 (171)	〃	〃	N 73° E	〃	3.60×3.40	12.24	0.40	592.90	〃	〃	—	—	N 73° E	0.75	5°	0.00	—	—	—	—	—	—	—	—	5	57	
120 (119)	北部 I	〃	N 120° W	小	2.55×2.60	6.63	0.35	593.30	西壁中央	不明	—	—	N 120° W	1.20	水平	0.25	—	—	—	—	—	—	—	—	7	44	
121 (175)	北部 II	〃	N 100° W	中 2	4.80×5.10	24.48	0.40	593.15	〃	粘土	—	—	N 100° W	1.60	10°	0.20	支脚石(土器底部を 被せる)	主 4	2.60 2.75	貼床	—	—	—	—	1	57	
122 (120)	〃	〃	N 81° E	〃	4.15×4.70	19.51	0.40	593.25	東壁中央	石組	—	—	N 81° E	0.80	水平	0.30	—	—	—	—	—	—	貯蔵穴(—30cm)	—	7	44	
123 (—)	〃	〃	N 29° W	小	2.80×2.45	6.86	0.20	593.20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	床中央に小鍛冶 炉	—	8	45	
124 (176)	〃	隅方か	N 81° E	〃	3.05×3.00	9.00	0.30	593.05	東壁中央	不明	—	—	N 81° E	0.75	水平	0.00	—	—	—	—	—	—	—	—	2	45	
125 (169)	〃	隅長 I	N 75° E	中 1	4.50×3.85	17.33	0.35	593.00	〃	粘土	丸	1/4	N 75° E	0.50	〃	0.25	—	—	—	—	—	—	—	テラス	—	4	57
126 (121) (122)	〃	隅長 II	N 84° E	中 2	4.35×3.50	15.23	0.30	593.20	西壁中央	石組	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	南壁にテラス	—	7	47
127 (123)	〃	隅方	N 86° E	〃	4.60×4.10	18.86	0.30	593.20	不明	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	47	
128 (150)	〃	方	N 103° W	大 1	6.05×5.80	35.09	0.40	592.95	西壁中央	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	3.50 3.70	—	1	59
129 (151)	〃	隅方	N 87° E	中 1	4.30×4.75	20.43	0.35	592.95	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	59	
130 (152)	〃	隅方か	N 80° E	不明	—	—	0.25	593.65	〃	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	不明	—	—	1	59

付表2 三の宮遺跡古代竪穴住居址一覧表 6

No.	位置	平面形	主軸方向	規模				カマド								諸施設			時期	図版No.				
				規模の 類型	主軸×直交軸 m	床面積 ㎡	深さ m	床標高 m	位置	構築	壁への掘込		煙道			煙道 口の 高さ m	その他	柱穴			柱間 間隔 m	その他		
											形	大きさ	主軸	長さ m	傾き									
131 (158)	北部 II	隅方	N90°	中1	4.55×4.55	20.70	0.40	592.90	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	59
132 (153)	"	隅長I	N90°	小	3.80×4.30	16.34	0.45	592.85	"	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	59
133 (159)	"	隅長II	N85°E	中2	5.20×4.25	22.10	0.60	592.85	"	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	59
134 (160)	"	隅方か	N90°E	不明	—	—	—	592.95	東壁中央	粘土	丸	1/3	—	—	—	—	—	—	—	—	北壁に張出し	3	5	47
135 (117)	"	隅長I	N80°E	中2 か	5.70×4.90	27.93	0.45	593.00	"	"	"	1/2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	不明	47	
136 (149)	"	"	N4°W	中1	3.20×3.70	11.84	0.40	592.95	北壁中央 やや北	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	貼床	—	5	47
137 (139)	"	隅方	N91°W	"	3.20×3.00	9.60	0.35	593.05	西壁中央	石組	丸	1/3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	47
138 (140)	"	"	N88°E	"	2.85×2.90	8.27	0.25	593.15	不明	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	47
139 (9)	"	隅方か	N34°E	中2	4.10×(4.00)	(16)	0.15	593.00	北壁中央	粘土	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	貼床	—	5	58
140 (125)	"	隅方	N114°E	中1	3.60×3.95	14.22	0.30	593.35	東壁中央	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8	47
141 (127)	"	隅長I	N81°E	中2	4.40×5.00	22.00	0.55	592.95	東壁中央 やや南	石組	—	—	N81°E	0.30	10°	0.35	—	—	—	—	西壁際に床直巨 礫	—	7	47
142 (136)	"	隅方	N23°E	中1	3.10×3.00	9.30	0.10	593.30	不明	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	14	49
143 (135)	"	"	N23°E	大2	5.70×6.10	3.77	0.30	593.25	北壁中央	"	丸	1/2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	49
144 (137)	"	隅長II	N4°W	小	2.15×2.85	6.13	0.15	593.25	"	石組	"	1/2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8	49
145 (161)	"	隅方	N87°E	中2	5.00×5.30	26.50	0.40	592.80	東壁中央	粘土	—	—	N94°E	0.50	10°	0.10	煙道先P(-9cm)	—	—	—	—	—	1	59
146 (21)	"	"	N106°W	小	2.95×2.95	8.70	0.20	592.70	西壁中央 やや南	"	丸	1/4	N116°W	0.45	20°	0.10	—	—	—	—	P1 貼床	—	1	60
147 (-)	"	"	N88°W	超	8.75×9.20	80.50	0.20	592.90	東壁中央	石組	—	—	—	—	—	—	—	—	礎石	—	貯蔵穴・貼床 地覆木痕	—	7	48
148 (162)	"	隅方か	N118°W	中2	5.40×5.45	29.43	0.40	592.80	西壁中央	粘土	—	—	N118°W	0.90	水平	0.20	—	—	4 か	2.75	貯蔵穴P1 貼床	—	1	60
149 (148)	"	隅方	N88°W	小 か	—	—	0.40	592.80	"	"	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	貼床	—	7	48
150 (156)	"	隅長II	N75°E	小	3.70×2.60	9.62	0.20	592.95	東壁中央	石組 か	丸	1/3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	50
151 (154)	"	隅長I	N90°E	大2	6.80×7.70	52.36	0.40	592.95	"	—	—	—	—	—	—	—	—	—	礎石	1.80	貼床下に4柱穴 地覆木痕	—	7	50
152 (157)	"	隅方か	N90°	不明	—	—	0.15	593.00	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	南壁際床直巨 礫	—	7	50
153 (147)	"	隅方	N90°E	中2	4.60×4.80	22.08	0.25	592.95	東壁中央	石組 か	丸	1/5	N90°E	0.40	水平	0.20	—	—	4 か	—	配石	—	7	50
154 (19)	"	方	N89°E	小	2.95×3.25	9.59	0.25	592.75	"	粘土	"	1/4	N89°E	0.20	"	0.15	—	—	—	—	P1~P5	—	4	49
155 (18)	"	隅方	N90°E	中2	4.15×4.35	18.05	0.55	597.35	"	石組	"	1/3	N90°E	0.50	10°	0.25	—	—	4 か	2.15	貼床	—	5	49
156 (141)	"	"	N88°E	小	3.10×3.10	9.61	0.30	593.00	"	粘土	—	—	N88°E	1.40	水平	0.35	—	—	—	—	—	—	4	49

付表2 三の宮遺跡古代竪穴住居址一覧表 7

No.	位置	平面 形状	主軸 方向	規 模				カ マ ド							諸 施 設			時 期	図 版 No.			
				規模 の 類型	主軸×直交軸 m	床面積 m ²	深さ m	床標高 m	位置	構築	壁への掘込		煙 道			煙道 口の 高さ m	そ の 他			柱穴	柱間 間隔 m	そ の 他
											形	大きさ	主 軸	長さ m	傾き							
157 (168)	北部 II	隅長II	N75°E	小	2.95×3.60	10.62	0.25	592.65	東壁中央	粘土	—	—	N83°E	0.70	10°	0.00	—	—	—	1	60	
158 (142)	"	隅方	N93°W	中1	3.50×3.50	12.25	0.40	592.90	西壁中央	石組 か	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	50	
159 (143)	"	"	N87°E	"	3.25×3.00	9.75	0.35	592.85	東壁中央	粘土	—	—	N87°E	1.35	水平	0.20	—	—	—	5	50	
160 (163)	"	"	N67°E	小	3.95×4.10	16.20	0.25	592.80	東壁中央 やや南	石組	—	—	N67°E	0.55	20°	0.00	—	—	—	2	61	
161 (144)	"	"	N87°E	中1	3.40×3.40	11.56	0.30	592.35	東壁中央	不明	丸	2/3	N87°E	0.20	40°	0.00	—	—	—	7	51	
162 (12)	"	"	N81°E	不明	—	—	0.20	592.75	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	54		
163 (146)	"	"	N81°E	小	2.75×2.80	7.70	0.20	592.95	東壁中央	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	51		
164 (145)	"	方	N90°E	中1	3.80×3.70	14.06	0.25	592.90	東壁南 よりか	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	53		
165 (132)	"	隅方か	N75°E	小	3.40×3.50	11.90	0.50	592.40	東壁中央	粘土	—	—	N75°E	0.10	25°	0.25	—	—	—	1	54	
166 (76)	"	隅方	N90°W	中1	3.70×3.65	13.51	0.35	592.10	西壁中央	石組	丸	1/4	—	—	—	—	—	—	貼床 貯蔵穴1	8	54	
167 (133)	"	隅方か	N100°E	大1 か	5.50×	不明	0.40	592.70	東壁中央 やや南	"	"	1/2	—	—	—	—	—	—	貼床	8	54	
168 (109)	"	隅方	N89°E	中1	4.20×3.85	16.17	0.15	592.80	東壁中央	"	"	1/3	—	—	—	—	—	—	11 12	55		
169 (113)	"	"	N5°W	大1	4.80×5.40	25.92	0.15	592.80	不明	不明	—	—	—	—	—	—	覆土中にカマド石	—	貼床	15	55	
170 (138)	北端 I	"	N2°W	中1	4.00×3.85	15.40	0.30	592.10	東壁北東 隅より	石組	—	—	—	—	—	—	—	—	貼床	14	63	
171 (131)	"	"	N3°W	中2	4.45×4.60	20.47	0.30	592.55	北東隅	"	—	—	—	—	—	—	—	—	P1(-2cm)	15	63	
172 (134)	"	"	N4°E	中1	3.65×3.80	13.87	0.30	592.40	"	"	—	—	—	—	—	—	—	—	床直に籾炭炭化物	15	63	
173 (-)	"	隅長II	N6°E	小	3.45×2.00	6.90	0.40	592.50	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	15	63	
174 (126)	"	隅方	N2°W	中1	4.20×3.85	16.17	0.30	592.50	北東隅	石組	—	—	—	—	—	—	—	—	—	15	63	
175 (130)	"	隅長II	N64°E	"	3.55×2.85	10.12	0.15	591.00	南東隅 南西隅	"	—	—	—	—	—	—	—	—	P1(-2cm)	15	64	
176 (114)	"	"	N0°	小2	3.30×5.00	16.50	0.15	592.20	南東隅	"	丸	1/3	N93°W	—	—	—	—	—	貼床	15	64	
177 (11)	北端 II	隅方か	N3°W	中2 か	—×4.65	—	0.20	592.30	東壁北西 隅より	"	—	—	N11°W	—	—	—	—	—	—	15	64	
178 (60)	"	隅方	N4°W	大2	6.10×5.60	34.16	0.10	591.70	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	貼床	14	64	
179 (59)	"	隅長II	N0°	中2	4.55×5.40	24.57	0.25	591.70	北東隅	石組	—	—	—	—	—	—	—	—	P1(-15cm) 貼床	15	64	

※ ()内は発掘調査時の遺構番号

付表3 三の宮遺跡竪穴住居址覆土一覧表 1

時期	遺構名	検出面	埋没の状態	検出面での土色	覆土の内容	炭・焼土層	大型の礫	備考	
古代1期	43	II B層上面	2分層 自然堆積	灰色	灰色土+砂礫	—	—	—	
	49	II B層上面	4分層 自然堆積	褐灰色	灰色土+II B層	—	—	—	
	50	II B層上面	6分層 自然堆積	褐灰色	灰色土+II B層	—	—	—	
	52	II A層中位	2分層 埋め戻し	暗褐色 (II A層に似る)	暗褐色土+灰色土	炭層	—	粘土層	
	53	II A層中位	単層 埋め戻し	暗褐色 (II A層に似る)	暗褐色土+灰色土+II B層	—	—	—	
	55	II B層上面	5分層 自然堆積	褐色	暗褐色土+灰色土	—	—	—	
	60	II B層上面	単層 埋め戻し	暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3)	II B層+暗褐色土	—	—	—	
	121	II B層上面	単層 自然堆積	灰オリーブ褐色 (5Y5/3)	灰色土+II B層+砂礫	—	—	—	
	128	II B層上面	単層 自然堆積	褐色	暗褐色土+砂礫	焼土層	—	焼失住居	
	129	II B層上面	2分層 自然堆積	にぶい黄褐色 (10Y6/3)	灰色土+II B層+砂礫	—	—	—	
	(130)	II B層上面	単層 埋め戻し	暗褐色	暗褐色土+II B層+砂礫	—	—	—	
	131	II B層上面	4分層 自然堆積	褐色 (10YR4/4)	灰色土+暗褐色土	—	—	—	
	(132)	II B層上面	単層 自然堆積	にぶい褐色 (7.5YR5/3)	灰色土+II B層+砂礫	焼土層	—	焼失住居か	
	133	II B層上面	3分層 自然堆積	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	灰色土+II B層+砂礫	—	—	—	
	145	II B層上面	2分層 自然堆積	灰褐色	灰色土+暗褐色土	—	—	—	
	146	II B層上面	単層 埋め戻し	褐色	褐色土	—	—	—	
148	II B層上面	単層 埋め戻し	灰色	灰黄色土+II B層+砂礫	—	—	—		
157	II B層上面	2分層 自然堆積・埋め戻し	黄褐色 (2.5Y5/3)	灰色土+砂礫	焼土層	—	焼失住居か		
165	II A層中位	単層 埋め戻し	灰色	灰色土+暗褐色土+砂礫	—	—	—		
古代2期	23	II A層中位	3分層 自然堆積	褐色 (7.5YR4/3)	暗褐色土+灰色土	—	—	—	
	24	II A層上面	単層 埋め戻し	黒褐色 (10YR4/3)	黒褐色土+灰色土	—	散在	—	
	25	II f層上面	3分層 自然堆積・埋め戻し	青灰色 (中層以下暗褐色)	暗褐色土	—	—	—	
	39	II A層中位	単層 不明	暗褐色	暗褐色土+灰色土	—	—	—	
	48	II A層中位	単層 自然堆積	暗褐色	暗褐色土+灰色土	—	—	—	
	51	II A層中位	2分層 自然堆積・埋め戻し	暗褐色	暗褐色土+灰色土	—	—	—	
	56	II A層上面	2分層 自然堆積	褐色	暗褐色土+灰色土+砂礫	—	—	—	
	57	II A層上面	2分層 自然堆積	褐色	暗褐色土+灰色土	—	—	—	
	58	II B層上面	単層 自然堆積	オリーブ褐色 (2.5Y4/3)	灰色土+暗褐色土+II B層	—	—	—	
	59	II B層上面	単層 自然堆積	褐色 (10YR4/4)	暗褐色土	—	—	—	
古代3期	90	II B層上面	4分層 自然堆積	灰褐色	灰色土+暗褐色土+砂礫	—	—	—	
	124	II A層下位	単層 埋め戻し	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	灰色土+暗褐色土+砂礫	—	集石	—	
	160	II B層上面	単層 埋め戻し	褐色 (7.5YR4/3)	灰色土+暗褐色土+砂礫	—	集石	—	
	54	II A層中位	単層 自然堆積	褐色 (10YR4/4)	暗褐色土+灰色土	—	—	—	
	76	II B層上面	単層 埋め戻し	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	暗褐色土+灰色土	—	—	—	
	古代4期	20	II f層上面	3分層 自然堆積・埋め戻し	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	暗褐色土+灰色土+砂礫	—	—	—
		72	II A層上面	2分層 自然堆積	褐色	褐色土	—	—	—
		78	II A層上面	4分層 自然堆積	灰オリーブ褐色 (7.5Y6/2)	灰色土+暗褐色土	—	集積	—
115		II A層上面	単層 自然堆積	灰色	灰色土+暗褐色土	—	—	—	
117		II A層上面	単層 自然堆積	暗褐色 (7.5YR3/4)	暗褐色土+灰色土	—	—	—	
125		II B層上面	単層 自然堆積	灰褐色	灰色土+暗褐色土+砂礫	—	—	—	
154		II A層上面	2分層 自然堆積	灰褐色	灰色土+暗褐色土	—	—	—	
156		II A層上面	単層 自然堆積	褐色 (10YR4/4)	褐色土+灰色土	—	—	—	
古代5期	14	II A層上面	2分層 自然堆積	暗灰黄色 (2.5YR4/2)	灰色土+II A・II B層+砂礫	—	—	—	
	26	II A層上面	4分層 自然堆積	灰黄褐色 (10YR4/2)	灰色土+砂礫+II A層	—	集石	—	
	28	II f層上面	4分層 自然堆積	灰黄褐色 (10YR4/2)	灰色土+砂礫	—	集石	—	
	69	II A層上面	3分層 自然堆積	灰褐色	灰色土+II A層+砂礫	—	—	—	
	98	II A層上面	2分層 自然堆積	灰色	灰色土+砂礫	—	—	—	
	108	II B層上面	単層 自然堆積	灰色	灰色土+II A層+砂礫	—	—	—	
	118	II B層上面	単層 埋め戻し	灰オリーブ褐色 (5Y5/2)	II B層+II A層+砂礫	—	—	—	
	119	II B層上面	単層 埋め戻し	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	灰色土+II A層+II B層	—	—	—	
	134	II B層上面	単層 不明	黄灰色	黄灰色土	—	—	—	
	136	II A層上面	2分層 自然堆積	灰色 (7.5Y6/1)	灰色土+II A層+砂礫	—	—	—	
	139	II B層上面	単層 不明	灰色	灰色土	—	—	—	
古代6期	155	II A層上面	8分層 自然堆積	灰褐色	灰色土	—	—	—	
	159	II A層上面	2分層 自然堆積	灰色 (7.5Y5/1)	灰色土+II A層	—	—	—	
	6	II B層上面	単層 自然堆積	暗褐色 (10YR3/4)	II A層+砂礫	—	散在	—	
	7	II B層上面	単層 自然堆積	暗褐色 (10YR3/4)	II A層+砂礫	—	集石	—	
	21	II f層上面	3分層 自然堆積・埋め戻し	暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3)	灰色土+II A層+砂礫	—	集石	—	
	22	II f層上面	3分層 自然堆積・埋め戻し	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	灰色土	—	—	—	
	27	II f層上面	4分層 自然堆積・埋め戻し	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	灰色土+II A層+砂礫	—	集石	—	
	(70)	II B層上面	単層 自然堆積	暗褐色 (10YR3/3)	灰色土+II A層	—	—	—	
	82	II A層上面	3分層 自然堆積	灰オリーブ褐色 (10YR5/2)	灰色土+II A層+砂礫	—	集石	—	
87	II A層上面	2分層 自然堆積	黄褐色 (2.5Y5/3)	灰色土	—	—	—		
92	II A層上面	3分層 自然堆積	黄褐色 (2.5Y5/3)	灰色土+砂礫	—	—	—		

付表3 三の宮遺跡竪穴住居址覆土一覧表 2

時期	遺構名	検出面	埋没の状態	検出面での土色	覆土の内容	炭・焼土層	大型の礫	備考
古代6期	94	IIA層上面	5分層 自然堆積	灰褐色	灰色土+砂礫	焼土層	—	—
	96	II B層上面	4分層 自然堆積	暗灰褐色	灰色土+IIA層+砂礫	炭層	—	—
	99	IIA層上面	単層 不明	にぶい褐色	灰色土+砂礫	—	—	—
	102	IIA層上面	2分層 埋め戻し	灰色	灰色土+IIA層+砂礫	—	—	—
	104	IIA層上面	単層 埋め戻し	灰色	灰色土+IIA層	—	—	—
	110	IIA層上面	4分層 自然堆積	褐色(7.5YR4/4)	灰色土+砂礫	炭層	散在	—
	143	IIA層上面	単層 不明	暗褐色(7.5YR3/3)	灰色土+IIA層	—	—	—
古代7期	15	III層上面	単層 不明	暗褐色(10YR3/3)	IIA層+灰色土+砂礫	—	—	—
	16	IIA層上面	2分層 埋め戻し・自然堆積	にぶい黄褐色(10YR4/3)	灰色土+IIA層+砂礫	—	集石	—
	(17)	IIA層上面	2分層 埋め戻し・自然堆積	灰黄褐色(10YR4/2)	灰色土+IIA層+砂礫	—	散在	—
	19	IIA層上面	3分層 自然堆積・埋め戻し	暗灰黄色(2.5Y4/2)	灰色土+砂礫	—	集石	—
	29	IDf層上面	4分層 自然堆積	灰黄褐色(10YR4/2)	灰色土+砂礫	—	—	—
	31	IIA層上面	4分層 自然堆積	褐灰色	灰色土+砂礫	—	集石	—
	32	IIA層上面	4分層 自然堆積	褐灰色	灰色土+IIA層+砂礫	—	集石	—
	34	IDf層上面	3分層 埋め戻し	暗灰黄色(2.5Y4/2)	灰色土+砂礫+IIA層	—	集石	—
	38	IIA層上面	3分層 不明	青灰色	灰色土+砂礫	炭・焼土層	—	—
	41	IDf層上面	2分層 自然堆積	褐灰色	灰色土+IIA層+砂礫	—	—	—
	47	II B層上面	3分層 自然堆積	灰色	灰色土+IIA層	—	—	—
	61	IDf層上面	単層 自然堆積	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)	灰色土+砂礫	—	集石	—
	62	IDf層上面	3分層 自然堆積	青灰色(5BG7/1)	灰色土+砂礫	—	—	—
	64	IDf層上面	単層 自然堆積	暗オリーブ色(7.5Y4/3)	灰色土+IIA層+砂礫	—	集石	—
	(65)	IIA層上面	2分層 自然堆積	灰色	灰色土+IIA層	—	集石	—
	(66)	IIA層上面	単層 自然堆積	暗オリーブ色(7.5Y4/3)	灰色土+砂礫	—	集石	—
	67	IIA層上面	2分層 自然堆積	青灰色	灰色土+IIA層	—	—	—
	68	IIA層上面	4分層 自然堆積	青灰色	灰色土+IIA層+砂礫	—	—	—
	71	II B層上面	単層 埋め戻し	褐色(10YR4/4)	灰色土+IIA層	—	集石	—
	(75)	IIA層上面	単層 埋め戻し	暗褐色(10YR3/3)	IIA層+灰色土	—	集石	—
	77	IIA層上面	単層 埋め戻し	灰色	灰色土+IIA層+砂礫	—	散在	—
	79	IIA層上面	2分層 自然堆積	にぶい褐色(7.5YR5/4)	灰色土+IIA層+砂礫	—	—	—
	80	II B層上面	単層 埋め戻し	にぶい褐色(7.5YR5/4)	灰色土+IIA層+砂礫	—	—	—
	84	IIA層上面	単層 自然堆積	灰褐色(5YR5/2)	灰色土+IIA層+砂礫	—	—	—
	85	II B層上面	単層 不明	灰褐色(5YR5/2)	灰色土+IIA層+砂礫	—	—	—
	88	IIA層上面	2分層 埋め戻し・自然堆積	灰色(7.5Y6/1)	灰色土+砂礫	—	散在	—
	89	IIA層上面	2分層 自然堆積	黄褐色(2.5Y5/3)	灰色土+砂礫	—	—	—
	91	IDf層上面	2分層 埋め戻し	灰黄褐色(10YR5/2)	灰色土+砂礫	—	集石	—
	93	IIA層上面	2分層 埋め戻し	灰黄褐色(10YR5/2)	灰色土+砂礫	—	集石	—
	101	IIA層上面	2分層 自然堆積	オリーブ褐色(2.5Y4/3)	灰色土+砂礫	—	—	—
	103	IIA層上面	単層 自然堆積	灰色	灰色土	—	—	—
	106	II B層上面	2分層 自然堆積	にぶい黄褐色(10YR5/4)	IIA層+灰色土	—	散在	—
	109	IIA層上面	単層 埋め戻し	灰色	灰色土+IIA・II B層+砂礫	—	散在	—
	111	III層上面	2分層 自然堆積	灰色	灰色土+砂礫	—	—	—
	112	IDf層上面	3分層 自然堆積	灰褐色	灰色土+IIA層+砂礫	—	—	—
	114	II B層上面	単層 自然堆積	にぶい黄褐色(10YR4/3)	IIA・II B層+砂礫	—	散在	—
	116	II B層上面	単層 埋め戻し	にぶい黄褐色(10YR4/3)	IIA層+灰色土+砂礫	—	集石	—
	120	IIA層上面	5分層 自然堆積	灰黄褐色(10YR5/2)	灰色土+砂礫	焼土層	—	—
	122	IIA層上面	4分層 自然堆積	にぶい黄褐色(10YR5/4)	灰色土+砂礫	—	—	—
	126	IIA層上面	単層 埋め戻し	灰オリーブ色(5Y4/2)	灰色土+IIA層+砂礫	—	集石	—
	127	IIA層上面	単層 不明	灰色	灰色土+IIA層	—	散在	—
	137	IIA層上面	単層 自然堆積	灰色	灰色土+IIA層+砂礫	—	集石	—
	138	IIA層上面	2分層 自然堆積	にぶい黄褐色(10YR5/3)	灰色土+砂礫	—	散在	—
	141	IIA層上面	単層 自然堆積	にぶい黄褐色(10YR5/3)	灰色土+砂礫	—	—	—
	149	IIA層上面	単層 埋め戻し	灰色(7.5Y4/1)	灰色土+IIA層	—	—	—
	150	IIA層上面	単層 埋め戻し	にぶい黄褐色(10YR5/3)	IIA層+砂礫	—	—	—
151	IIA層上面	単層 埋め戻し	灰色	灰色土+砂礫	—	—	—	
152	IIA層上面	単層 埋め戻し	褐色(10YR4/4)	灰色土+IIA層	—	—	—	
153	IIA層上面	単層 自然堆積	灰色	灰色土+IIA層	—	—	—	
158	IIA層上面	単層 埋め戻し	にぶい黄褐色(10YR4/3)	灰色土+IIA層	—	集石	—	
161	IIA層上面	2分層 自然堆積・埋め戻し	灰色(7.5Y5/1)	灰色土+IIA層+砂礫	—	集石	—	
(162)	IIA層上面	単層 埋め戻し	灰色	灰色土+砂礫	—	—	—	
163	IIA層上面	単層 埋め戻し	暗黄褐色(2.5Y4/2)	灰色土+IIA層+砂礫	—	集石	—	
164	IIA層上面	単層 埋め戻し	灰色(5Y6/1)	灰色土+IIA層	—	—	—	
古代8期	2	IIA層上面	5分層 自然堆積	灰オリーブ色(5Y4/2)	灰色土+IIA層	炭層	集石	—
	3	II B層上面	単層 不明	褐色	IIA層+灰色土	—	—	—
	5	IIA層上面	2分層 自然堆積・埋め戻し	暗オリーブ色(5Y4/3)	IIA層+砂礫	—	散在	—
	8	IIA層上面	4分層 自然堆積	灰黄褐色(10YR4/2)	灰色土+砂礫	炭層	散在	—

付表3 三の宮遺跡竪穴住居址覆土一覧表 3

時期	遺構名	検出面	埋没の状態	検出面での土色	覆土の内容	炭・焼土層	大型の礫	備考
古 代 8 期	9	IIA層上面	3分層 埋め戻し・自然堆積	オリーブ褐色(2.5Y4/3)	灰色土+IIA層+砂礫	—	集石	—
	10	IIA層上面	2分層 自然堆積	灰黄褐色(10YR5/2)	灰色土+IIA層+砂礫	—	集石	—
	(11)	IIA層上面	2分層 不明	灰色	灰色土+砂礫	—	—	—
	12	IIA層上面	3分層 自然堆積	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)	灰色土+IIA層+砂礫	—	散在	—
	13	IIA層上面	3分層 自然堆積	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)	灰色土+IIA層+砂礫	—	散在	—
	(18)	IDf層上面	2分層 自然堆積	褐灰色(10YR4/2)	灰色土+IIA層+砂礫	—	集石	—
	30	IIA層上面	4分層 自然堆積	灰褐色	灰色土+IIA層+砂礫	—	—	—
	35	IIA層上面	7分層 自然堆積	灰色	灰色土+砂礫	—	散在	—
	36	IIA層上面	2分層 自然堆積	青灰色	灰色土+IIA層	—	散在	—
	37	IDf層上面	単層 自然堆積	灰褐色	灰色土+砂礫	—	—	—
	40	IIA層上面	単層 埋め戻し	灰色	灰色土+IIA層	—	散在	—
	42	IIA層上面	3分層 自然堆積	灰色	灰色土+IIA層+砂礫	—	—	—
	44	IIA層上面	単層 不明	灰色	灰色土+砂礫	—	—	—
	45	IIA層上面	単層 不明	灰色	灰色土+IIA層+砂礫	—	—	—
	46	IIA層上面	5分層 自然堆積	青灰色	灰色土+IIA層	—	—	—
	(63)	IDf層上面	3分層 埋め戻し・自然堆積	明青灰色(5BG7/1)	灰色土+砂礫	—	集石	—
	73	IIA層上面	単層 埋め戻し	灰色	灰色土+砂礫	—	—	—
	74	IIA層上面	単層 自然堆積	灰黄褐色(2.5Y5/2)	灰色土+IIA層	—	集石	—
107	IIA層上面	2分層 自然堆積	暗灰黄色(2.5Y5/2)	灰色土+IDf層	—	散在	—	
113	IIB層上面	4分層 自然堆積	褐色	灰色土+砂礫	—	—	—	
123	IIA層中位	5分層 自然堆積	黄褐色(2.5Y5/3)	灰色土+砂礫	炭土・炭層	—	—	
140	IIA層上面	3分層 自然堆積	灰オリーブ色(5Y4/2)	灰色土+砂礫	—	—	—	
144	IIA層上面	単層 自然堆積	灰黄褐色(10YR4/2)	灰色土+砂礫	—	—	—	
147	IIB層上面	単層 自然堆積	灰色	灰色土+砂礫	—	—	—	
166	IDf層上面	単層 埋め戻し	暗オリーブ色(5Y4/3)	暗オリーブ色	—	散在	—	
167	IIA層上面	単層 埋め戻し	暗褐色	IIA層+灰色土+砂礫	—	集石	—	
12期	86	IDf層上面	単層 埋め戻し	明黄褐色(10YR6/6)	黄褐色砂質土	—	集石	—
古 代 13 期	33	IIA層上面	4分層 自然堆積	にぶい黄橙色(10YR7/3)	黄褐色砂質土	—	散在	—
	83	IIA層上面	単層 埋め戻し	にぶい橙色(5YR6/3)	黄褐色砂質土+IIA層	—	集石	—
	97	IDf層上面	2分層 埋め戻し	にぶい黄色(2.5Y6/3)	黄褐色砂質土+IIA層	—	散在	焼失住居
	105	IIA層上面	単層 埋め戻し	暗オリーブ色(7.5Y4/3)	黄褐色砂質土	—	集石	—
古 代 14 期	142	IIA層上面	単層 自然堆積	灰オリーブ色(5Y5/3)	灰黄色土	—	—	—
	170	IDr層上面	2分層 自然堆積	暗オリーブ色(5Y4/3)	灰黄色土	—	—	—
	178	IC層上面	単層 埋め戻し	灰黄色(2.5Y6/2)	灰黄色土+灰色土	—	散在	—
古 代 15 期	100	IDf層上面	2分層 自然堆積	灰黄色(2.5Y7/2)	灰黄色土	—	—	—
	169	IIA層上面	単層 不明	にぶい黄橙色(10YR6/3)	灰黄色土	—	—	—
	171	IC層上面	2分層 自然堆積	にぶい黄色(2.5Y6/3)	灰黄色土	—	散在	—
	172	IC層上面	単層 埋め戻し	にぶい黄色(2.5Y6/4)	灰黄色土+灰色土	—	散在	—
	174	IC層上面	3分層 埋め戻し	にぶい黄色(2.5Y6/4)	灰黄色土+灰色土	—	散在	—
	175	IC層上面	単層 不明	灰オリーブ色(5Y4/2)	灰黄色土+灰色土	—	散在	—
	176	IC層上面	単層 自然堆積	灰黄色(2.5Y6/2)	灰黄色土	—	—	—
	(177)	IC層上面	単層 埋め戻し	浅黄色(2.5Y7/3)	灰黄色土+灰色土	—	散在	—
179	IC層上面	単層 埋め戻し	にぶい黄橙色(10YR7/2)	灰黄色土+灰色土	—	散在	—	
時 期 不 明	1	IDf層上面	単層 埋め戻し	灰色土	灰色+IIA層	—	—	—
	4	III層上面	単層 埋め戻し	暗褐色土	IIA層+砂礫	—	—	—
	81	IDf層上面	2分層 埋め戻し	にぶい黄褐(10YR7/2)	黄褐色砂質土+IIA・IIB層	—	—	—
	95	IIA層下位	7分層 自然堆積	暗褐色(10YR3/3)	灰色土+IIA層+砂礫	—	—	—
	135	IIA層上面	単層 自然堆積	青灰色(5BG6/1)	灰色土	—	—	—
	168	IC層上面	単層 自然堆積	灰黄色土	灰黄色	—	—	—
173	IC層上面	単層 自然堆積	にぶい黄色(2.5Y6/4)	灰黄色土	—	—	—	

付表4 三の宮遺跡古代掘立柱建物址一覧表 1

No. ※ ()	位置	類別	棟方向	規 模			柱 間 間 隔		柱穴掘り方		備 考 付属施設・遺物など	時期	図版 No.
				桁行×梁行 間	桁行×梁行 m	面 積 ㎡	桁 行 m	梁 行 m	形	規 模 (径) (深さ) m			
1 (46)	南部I	総	N85°W	2×2	3.62×3.84	13.90	1.70 1.89	1.93	円	0.45~0.65 0.35~0.50	南に溝を伴う?(SD1)	4~5	13
2 (36)	"	—	N1°E	2×2	5.07×3.86	19.57	2.53	1.84	"	0.55~0.65 0.40	SB10に切られる	8	12
3 (85)	"	—	N0°	1×1	1.57×1.90	2.98	1.57	1.90	"	0.45~0.70 0.30~0.48	ST2、SA14と重複	8	12
4 (38)	南部II	—	N22°E	3×2	4.95×4.03	19.95	1.68	1.83 2.16	"	0.60~0.75 0.50		2	15
5 (15)	"	—	N2°E	3×1	5.75×4.47	25.70	1.48 1.90 2.30	4.05 4.80	方	0.65~0.70 0.40~0.50	北西隅に須恵器大甕を埋設した土坑を伴う	7	17
6 (33)	"	—	N0°	1×1	2.01×2.53	5.09	2.53	2.01	"	0.50~0.65 0.25~0.35		5~6	17
7 (29)	"	—	N3°W	3×2	5.19×3.81	19.77	1.25~1.88	1.68~2.15	"	0.35~0.45 0.30~0.40		7	17
8 (47)	"	—	N32°E	2×2	2.93×3.31	9.70	1.48	1.68	円	0.45~0.70 0.10~0.15	IIB層上面検出	2	18
9 (12)	内部III	—	N17°W	2×1か	—×2.66	—	1.35	2.66	"	0.50 0.10	NR7に浸食される	1~2か	21
10 (8)	"	—	N4°E	2×2か	—×3.15	—	2.06	1.58	"	0.45~0.50 0.35~0.45	NR7に浸食される	1~2か	24
11 (9)	中部I	—	N1°E N4°E	1×1 1×1	1.51×1.85 2.05×1.90	2.79 3.90	1.51 2.05	1.85 1.90	"	0.25~0.35 0.10~0.20	上欄から下欄へ建替え	1~2か	24
12 (10)	"	—	N10°E	2×1	3.10×2.45	7.60	1.55	2.45	"	0.55~0.70 0.25~0.40		1~2か	23
13 (7)	"	—	N10°E	3×2	4.17×3.50	14.59	1.38	1.73	"	0.55~0.70 0.15~0.40	SD15に切られる	2か	24
14 (6)	"	—	N85°W	2×1	3.96×4.13	16.35	1.91 2.10	4.13	"	0.30~0.40 0.10~0.27		1~2か	26
15 (13)	"	—	N76°W	2×2	2.95×3.10	9.15	1.48	1.55	円	0.20~0.55 0.30~0.40		1~2か	25
16 (18)	"	—	N5°E	4×3	6.37×4.56	31.84 (29.05)	1.11 1.67 1.94	1.31 1.64	"	0.50~0.70 0.30~0.70	東面、南に1×1(2.73×1.37)の底 IIB層検出	2か	26
17 (19)	"	—	N3°E	3×3	5.60×5.16	28.90	1.20 1.47 1.90	1.63	"	0.60~0.65 0.20~0.50	IIB層検出	2か	26
18 (20)	"	—	N8°E	3×3	4.85×4.78	23.13	1.50 1.69	1.58	"	0.50~0.80 0.26~0.45	IIB層検出	1~2	28
19 (22)	"	—	N2°E	3×2	5.08×5.08	25.81	1.68 2.55	2.55	"	0.45~0.60 0.20~0.48	IIB層検出	2	28
20 (21)	"	—	N4°E	3×3	6.16×5.99	36.90	1.53 2.03	1.53 1.97 2.55	"	0.50~0.90 0.30~0.65	IIB層検出	2	28
21 (3)	"	—	N85°W	4×3	7.98×5.33	42.53	2.00	1.30~1.90	"	0.30~0.60 0.15~0.47	IIB層検出 内部に穴3つ東西方向に並ぶ	2	28
22 (23)	"	—	N78°W	3×3	5.33×5.30	26.65	1.07 1.50 1.75	1.67	"	0.55~0.65 0.25~0.45	IIB層検出	1~2	28
23 (4)	中部II	総	N78°E	2×2か	4.18×4.36	18.22	1.86 2.31	2.18	"	0.30~0.60 0.50~0.30	IIB層検出 西半調査区外	1か	32
24 (5)	"	—	N90°	2×2か	—×4.23	—	2.12	2.12	円	0.20~0.40 0.05~0.15	IIB層検出 西半調査区外	不明	32
25 (50)	"	—	N7°E	3×2	4.91×4.13	17.30	1.40 1.75	2.08	方	0.50~0.90 0.30~0.40	IIB層検出	2か	31
26 (86)	"	—	N1°E	2×1	3.67×2.43	8.91	1.62 2.07	2.43	"	0.65~0.75 0.17~0.30	IIB層検出	1~3	31
27 (48)	"	—	N2°E	3×2	5.27×3.95	20.82	0.84 1.75	1.87 2.07	円	0.30~0.70 0.20~0.30	IIB層検出	2	31
28 (51)	"	—	N6°E	3×2	6.30×4.03	25.39	1.80 2.23	1.98	方	0.40~0.70 0.22~0.35	IIB層検出 南側底か?	2	31
29 (27)	中部III	—	N1°E	3×2	6.90×4.32	29.81	2.65 2.75	2.13	"	0.40~0.60 0.27~0.50	SD24に浸食される	7~8	32
30 (39)	"	—	N89°E	2×2	6.47×4.11	26.59	3.32	2.06	"	0.50~0.70 0.30~0.50		7~8	31
31 (40)	"	—	N5°W	1×1	3.28×3.17	10.40	3.28	3.17	"	0.60~0.70 0.31~0.41		7~8	35

付表4 三の宮遺跡古代掘立柱建物址一覧表 2

No. ※ ()	位置	類別	棟方向	規 模			柱 間 間 隔		柱穴掘り方		備 考 付属施設・遺物など	時期	図版 No.
				桁行×梁行 間	桁 行×梁 行 m	面 積 m ²	桁 行 m	梁 行 m	形	規 模 (径 深さ) m			
32 (45)	北部I	—	N86°E	1×1	1.83×2.26	5.97	1.83	2.26	円	0.20~0.30 0.30		11~14	37
33 (44)	"	—	N76°E	2×2	3.92×4.14	16.23	1.60 2.32	2.05	"	0.30~0.45 0.15~0.27		7	38
34 (43)	"	—	N13°W	3×2	6.22×4.28	29.68 (26.62)	1.57 2.08	1.95 2.08	方	0.70~0.95 0.35~0.58	北面に1間×1間(1.57×1.95)庇	6	39
35 (41)	"	—	N13°W	3×2	5.96×3.55	21.15	1.71 5.96	1.81	"	0.75~0.85 0.15~0.43		7か	39
36 (42)	"	—	N14°W	3×2	5.87×4.10	24.07	1.99	2.07	"	0.75~0.85 0.43~0.62	東面・西面前に溝(SD29・30)が伴う	6	39
37 (41)	"	—	N16°W	2×2	3.78×4.32	16.33	1.62 2.12	2.16	"	0.50~0.80 0.10~0.37		6~7	40
38 (25)	北部II	—	N10°W	2×1	4.10×3.80	15.58	2.05	3.80	円	0.45 0.20		7か	43
39 (42)	"	—	N4°W	3×2	3.85×4.03	12.29	1.63 2.03 2.38	4.03	"	0.25~0.40 0.20~0.30	東面前に溝(SD36)を伴う	7か	45
40 (46)	"	—	N9°W	2×1	3.90×1.78	6.94	1.92	1.78	"	0.20~0.30 0.20~0.30		7か	46
41 (17)	"	—	N3°W	2?×?	—	—	1.70 1.75	2.10	"	0.30~0.45 0.12~0.33	IIB層検出 西半調査区域外	不明	46
42 (77)	"	—	N86°E	3×2	5.83×3.57	20.81	1.97 2.01	1.61 1.97	"	0.35~0.50 0.04~0.30	IIB層検出	4~5	59
43 (67)	"	—	N90°	3×1	—×4.33	—	2.69	4.33	方	0.65 0.27~0.58		7	48
44 (71)	"	総	N2°W	2×2	3.76×3.49	12.08	1.63 2.10	1.63 1.94	円	0.55~0.75 0.23~0.40		7	48
45 (68)	"	—	N17°E	1×1	2.73×2.73	7.45	2.73	2.73	"	0.35~0.40 0.25~0.33		不明	48
46 (26)	"	総	N5°W	2×2	4.08×4.26	17.38	1.50 2.40	1.95 2.23	"	0.35~0.50 0.20	IIB層検出	4~5	46
47 (80)	"	—	N70°E	3×3	6.14×6.34	38.93	2.01	1.77 2.49	"	0.45~0.80 0.25~0.40	IIB層検出	1か	58
48 (70)	"	総	N2°W	3×2	5.74×4.07	20.92	1.38 1.85	1.94 2.16	方	0.70~0.90 0.40~0.50		7	48
49 (66)	"	総	N2°W	3×3	5.92×5.06	29.96	1.69 2.01	1.69	"	0.50~0.65 0.30~0.50		7	48
50 (73)	"	—	N88°E	2×1	4.02×2.60	10.45	1.93	2.60	"	0.60~0.75 0.30		7	48
51 (74)	"	—	N1°W	3×2	6.03×3.35	20.20	1.95 2.17	1.65	"	0.40~0.65 0.25~0.30		7	48
52 (69)	"	—	N84°E	3×2	5.58×3.54	19.75	1.56 1.93 2.14	1.56 2.14	"	0.50~0.70 0.30~0.47		8か	50
53 (24)	"	総	N3°W	3×2	4.91×4.05	19.89	1.59	2.06	"	0.85~1.10 0.35~0.76		7	49
54 (60)	"	—	N89°E	3×2	5.77×4.59	26.48	1.69 1.91 2.18	2.30	"	0.25~0.45 0.23~0.27		7か	51
55 (59)	"	—	N4°W	2×1	3.54×3.10	10.97	1.75	3.10	円	0.35~0.45 0.20~0.29		8か	51
56 (64)	"	—	N5°W	2×1	4.20×2.42 4.20×2.80	10.16 11.76	1.90 2.25	2.42 2.80	円 (方)	0.31~0.74 0.10~0.40	上欄から下欄の建替え	8か	50
57 (58)	"	—	N4°W	4×2	7.93×4.98	39.49	1.90	2.46	円 (方)	0.40~0.96 0.30~0.47		8か	51
58 (79)	"	総	N2°W	2×2	3.92×3.62	14.19	1.90	1.80	円	0.60~0.85 0.50~0.60		7	52
59 (61)	"	総	N7°W	2×2	3.57×3.43	12.25	1.40~2.13	1.70	方 (円)	0.35~0.50 0.30		8か	51
60 (63)	"	—	N90°?	—	—	—	2.63	2.00	方	0.70~0.80	大半調査区域外	7	51
61 (62)	"	—	N84°E	4×2	7.63×8.30 (5.20)	63.33 (39.68)	1.87	2.65 3.11	"	0.65~0.85 0.20~0.44	南面に4間×1間(7.63×3.07)の庇	8か	53
62 (81)	"	—	N80°E	2×1	3.15×2.94	9.26	1.42	2.94	円	0.45~0.50 0.20	IIB面検出	不明	62

※ () 内は発掘調査時の遺構番号

付表5 三の宮遺跡中・近世掘立柱建物址一覧表

中世

No. ※ ()	位置	主軸方向	規 模			柱 間 間 隔		柱穴掘り方		備 考 付属施設・遺物など	時期	図版 No.
			桁行×梁行 間	桁行×梁行 m	面 積 ㎡	桁 行 m	梁 行 m	形	規 模 (径) (深さ) m			
71 (6)	南部	N12°W	2×1	3.19×3.47	11.07	1.24~1.95	3.47	円	0.20~0.25 0.10~0.15		不明	73
72 (28)	"	N64°W	2×1	3.60×3.60	12.96	1.62~2.08	3.60	"	0.20~0.25 0.10~0.15		不明	73
73 (31)	"	N3°E	3×3	6.21×6.16	38.25	1.94~2.14	1.94~2.14	"	0.15~0.25 0.10~0.60	建物内中央にも柱穴	不明	76
74 (37)	"	N3°Eか	3×3か	7.09×5.95	42.19	1.85~2.42	2.05~2.19	"	0.15~0.25 0.06~0.46		不明	76
75 (30)	"	N89°E	3×2	6.74×4.82	31.95	2.28	1.90~2.91	"	0.15~0.25 0.10~0.19	4柱穴 建替え	不明	79
76 (38)	"	N87°E	2×2	4.53~3.76	17.03	2.12~2.51	1.76~2.06	"	0.20~0.25 0.14~0.33		不明	80
77 (1)	北部I	N1°E	6×3	10.60×5.36	56.82	1.73	1.76	"	0.15~0.20 0.25~0.40	総柱土坑付属柱1本礎石	1か	83
78 (2)	"	N1°E	3×1	4.77×1.61	7.68	1.40~1.83	1.62	"	0.15~0.20 0.30~0.40		1か	83
79 (34)	"	N19°W	2×1か	3.88×2.60	10.09	—	2.60	"	0.20 0.20~0.27		不明	83
80 (32)	"	N5°W	2×2か	(2.80)×2.52	(7)	1.48	1.27	"	0.20 0.17~0.33	土坑付属	不明	83
81 (57)	北部II	N75°E	2×2	3.70×3.60	13.32	1.80~1.90	1.50~2.20	"	0.20~0.30 0.10~0.31	総柱	不明	82
82 (-)	"	N90°	4×1か	6.07×2.55	15.48	1.55~2.90	2.45~2.70	"	0.20~0.25 0.15~0.25	土坑付属	2か	87
83 (-)	北端I	N6°W	3×1	6.75×4.96	33.48	2.13~2.62	4.94	"	0.20~0.30 0.20~0.25		2	95
84 (33)	"	N2°E	4×2	9.44×4.06	38.33	1.43~2.08	2.15~3.23	"	0.20~0.40 0.50~0.37		2	95
85 (39)	"	N4°E	2×1	5.15×3.96	20.39	2.30~2.93	2.64~2.87	"	0.30~0.40 0.10~0.30	南側に下屋か	2	97
86 (55)	"	N2°E	4×1	7.14×3.70	26.42	1.45~1.90	3.70	"	0.25~0.40 0.10~0.25		2	97
87 (78)	"	N4°W	4×1	7.45×4.50	33.52	1.67~2.08	4.50	"	0.25~0.35 0.10~0.20		2	97
88 (52)	"	N2°E	2×2	4.23×4.27	18.06	2.11	1.68~1.85	円方	0.15~0.25 0.10~0.20		2	99
89 (54)	"	N0°	5×2 5×1	7.14×4.79 7.14×3.95	34.20 28.20	1.80 1.80~2.13	2.05~2.50 3.95	円	0.25~0.40 0.10~0.35	5間×2間から5間×1間へ建替え	2	99

近世

No. ※ ()	位置	主軸方向	規 模			柱 間 間 隔		柱穴掘り方		備 考 付属施設・遺物など	時期	図版 No.
			桁行×梁行 間	桁行×梁行 m	面 積 ㎡	桁 行 m	梁 行 m	形	規 模 (径) (深さ) m			
101 (90)	北端I	N22°W	2×1	3.85×2.95	11.36	1.51	3.85	円	0.15~0.25 0.15~0.25		—	95
102 (88)	"	N15°W	3×1	4.10×4.10	16.81	1.15~1.70	4.10	"	0.15~0.45 0.25~0.40	I B層下部検出	17~18 世紀	98
103 (52)	"	N2°W	5×2	10.43×4.63	69.22	0.61~2.63	1.33~2.31	"	0.20~0.30 0.17~0.65	西・南・東面に半間出しの下屋	18~19 世紀	96
104 (101)	"	N1°W	4×2	7.74×4.12	51.58	1.96	1.88~2.26	"	0.20~0.37 0.20~0.56	北・東面に下屋	18~19 世紀	96
105 (53)	"	N11°W	2×2	4.99×4.46	22.36	2.18・2.90	2.18	"	0.25~0.30 0.18~0.33	I B層中で検出	—	97
106 (87)	"	N3°E	4×2	9.44×4.06	38.33	1.85~2.85	1.99~2.04	"	0.20~0.30 0.15~0.30		—	99
107 (84)	"	N0°	4×2	6.95×4.20	29.19	1.60~1.90	2.10	"	0.25~0.40 0.15~0.35		—	99

※ () 内は発掘調査時の遺構番号

付表 6 三の宮遺跡遺構別古代土器一覧表 2

遺構番号	器													煮炊具					貯蔵具				個体総数			
	土師器			黒土色器 A			黒土色器 B			須臾器				灰山袖碗			須臾器		吹陶細器		黒土色器 B					
杯 D・E・F	杯 C	杯 A	他	鉢 A	鉢 B	鉢 A	鉢	高杯	鉢・鉢 A	他	杯 A	碗	杯皿	罌陶器	罌陶器	罌陶器	罌陶器	罌陶器	罌陶器	罌陶器	罌陶器	罌陶器	罌陶器	罌陶器	罌陶器	罌陶器
SB41																										25
SB42	(1)		6																							40
SB43		4	6	5																						7
SB44	1																									16
SB45		5	3	2																						22
SB46		1	1	1																						14
SB47		2	3																							28
SB48		2	9	5	1																					12
SB49		1					1	1																		5
SB50		1																								10
SB51		1																								30
SB52		3						1	1																	32
SB53		9						1	1																	34
SB54		1						1	1				(1)													46
SB55																										3
SB56																										22
SB57																										29
SB58		1																								34
SB59																										12
SB60																										10
SB61	(2)		18	6	1																					57
SB62			15	6	1																					42
SB63			6	2	1																					31
SB64			8	1	1																					33
SB65			14	5	1																					42
SB66		1	10	6	1	1																				64
SB67			4			2																				24
SB68			6		1																					31
SB69		(1)																								19
SB70																										1
SB71		1	4	1	1																					21
SB72		1																								19
SB73			7	4	1																					41
SB74		2	22	9	4	1																				109
SB75	(1)		4			1																				11
SB76																										4
SB77			4	1																						17
SB78			3			2																				22
SB79			3		1																					12
SB80			4	2	1																					42

・数量は、個体識別によって数えた個体数で表わした。
 ・()は他の期からの混入の可能性が高いと思われる器種である。

付表 6 三の宮遺跡遺構別古代土器一覽表 6

・数量は、個体識別によって数えた個体数で表わした。
 ・()は他の期からの混入の可能性が高いと思われる器種である。

遺構番号	食器										煮炊具										貯蔵具			個体総数
	土師器		黒土色器 A		黒土色器 B		須恵器		灰山釉碗		絞陶入器		須恵器		灰陶釉器		黒土色器 B							
	杯 C	杯 D	杯 A	杯 B	杯 A・C	杯 B	杯 A・B・D	皿 A・B	盤	鉢 A・B・C	高杯	他	杯 A	碗	皿	碗	皿	他	須恵器	灰陶釉器	黒土色器 B			
SA14					1	1					1								1			5		
SA15			1	1															1			6		
SD 1																			1			5		
SD12																						5		
SD23	1				4	2																30		
SD26	1				3																	19		
SD38			5	2																		20		
SD40			1																			1		
SK12			3																			4		
SK39						1	1															12		
SK101																						5		
SK156			8	8																		57		
SK187	2				5	1																21		
SK188	2				4	1	3	1														18		
SK190	1				2	1	1															6		
SK193	3				2																	12		
SK249					2																	22		
SK348					4	1																12		
SK414			1		4	1																22		
SK518					1	1																5		
SK534			1		2	2	1															18		
SK576	2				2																	11		
SK606					2	2																8		
SK676					1	2																17		
SK800			1	1																		2		
SK804			4		4	1	4															24		
SK805			1	2	7	2	1															24		
SK840			4	1	4	1																24		
SK841			2	1																		15		
SK977	1						1															3		
SK1224																						2		
SK1225			6	2																		1		
SK1258	1																					16		
SK1259	2																					2		
SK1263					1																	2		
SK1276	1																					4		
SK1278	2	1	1																			16		
NR 1					1																	7		
NR 2			3		3																	29		
NR 9			5		2																	26		

付表7 三の宮遺跡墨書・刻書土器一覧表 1

整理 番号	出土遺構	土器番号	種 類	器 種	部 位	書き方	内・外	文字	層位	遺存状態(%) 口径 底径		備 考
1	SB2	—	黒色土器A	杯A II	体	不明	外	□	ピット	10	—	
2	SB5	3	〃	〃	〃	〃	〃	〃	覆	23	—	
3	SB6	2	〃	杯A I	〃	右横	〃	〃	〃	35	—	津、湊か
4	〃	5	須恵器	杯A	底	—	〃	〃	〃	25	100	
5	〃	—	〃	〃	〃	—	〃	〃	〃	—	—	
6	SB8	4	黒色土器A	杯A II	体	不明	〃	〃	〃	11	—	土または之か
7	〃	—	〃	〃	〃	〃	〃	〃	床	—	—	
8	〃	12	軟質須恵器	杯A	〃	〃	〃	〃	〃	—	30	
9	SB9	11	黒色土器A	杯A II	〃	正位	〃	〃	〃	4	100	
10	SB16	3	須恵器	杯A	底	—	〃	〃	〃	—	45	今か
11	SB18	6	〃	〃	〃	—	〃	〃	〃	—	10	草冠か
12	SB21	1	黒色土器A	杯A II	体	正位	〃	吉	カマド	22	37	金吉になるか
13	〃	4	須恵器	杯A	〃	左横	〃	里□	床	—	100	
14	〃	5	〃	〃	〃	〃	〃	里□	〃	—	45	
15	SB26	3	〃	〃	体	不明	〃	□	カマド	20	—	
16	SB27	1	黒色土器A	杯A II	底	—	〃	里□	覆	10	100	13・14と同じか
17	〃	3	〃	〃	〃	—	〃	□	〃	—	100	
18	〃	2	〃	〃	〃	—	〃	□	〃	5	45	草冠
19	〃	8	須恵器	杯A	体	正位	〃	倉	床	60	100	
20	〃	—	〃	〃	〃	右横	〃	里	覆	—	—	
21	SB29	3	〃	〃	〃	正位	〃	今	床	30	50	
22	SB31	4	黒色土器A	椀A II	〃	不明	〃	□	〃	88	100	習書か
23	〃	5	〃	皿B	底	—	〃	今	覆	55	75	
24	SB32	12	〃	〃	体	左横	〃	田人	カマド	39	100	
25	SB35	3	〃	杯A II	〃	不明	〃	□	ピット	58	100	
26	SB37	5	〃	〃	〃	正位	外	金吉	カマド	35	35	
27	SB40	4	〃	椀A II	〃	〃	〃	只	床	30	—	
28	SB62	2	〃	杯A II	〃	左横	〃	美	〃	90	100	
29	〃	4	〃	〃	〃	右横	〃	□	〃	30	100	
30	SB68	4	須恵器	杯A	底	—	〃	倉	覆	0	75	
31	SB80	5	黒色土器A	杯A II	体	左横	〃	□	〃	10	—	津または湊か
32	SB84	3	〃	〃	〃	不明	〃	〃	〃	—	—	
33	〃	9	須恵器	杯A	〃	左横	〃	金	〃	6	45	
34	SB87	5	黒色土器A	杯A II	〃	右横	〃	□	〃	—	—	
35	SB91	2	〃	〃	〃	正位	〃	〃	〃	25	35	
36	SB92	5	須恵器	杯A	底	—	〃	□□	カマド	46	100	習書か
37	SB101	1	黒色土器A	椀A	体	右横	〃	□	床	45	100	文字多数
38	SB102	11	須恵器	杯A	〃	左横	〃	〃	覆	—	25	
39	SB106	14	灰釉陶器	椀A	底	—	〃	〃	〃	17	43	
40	SB109	7	黒色土器A	杯A II	体	正位	〃	庄	〃	20	—	
41	〃	—	〃	〃	〃	〃	〃	美	〃	—	—	

付表7 三の宮遺跡墨書・刻書土器一覧表 2

整理 番号	出土遺構	土器番号	種 類	器 種	部位	書き方	内・外	文字	層位	遺存状態(%) 口径 底径	備 考
42	SB109	—	黒色土器A	杯A II	体	不明	外	□	覆	— —	
43	〃	9	〃	杯A I	〃	右横	〃	〃	〃	34 58	本か
44	〃	26	須恵器	杯A	〃	正位	〃	堯	〃	55 15	
45	〃	24	〃	〃	〃	〃	〃	堯	〃	18 —	
46	SB111	6	黒色土器A	杯A II	〃	〃	〃	〃	床	55 100	
47	SB116	1	〃	〃	〃	〃	〃	東	〃	45 100	
48	〃	6	〃	椀A	〃	逆位	〃	〃	カマド	40 55	
49	SB122	—	〃	杯A II	〃	〃	〃	□	覆	10 —	堯か
50	〃	8	〃	〃	〃	不明	〃	〃	〃	— —	
51	〃	—	〃	〃	〃	逆位	〃	〃	〃	— 20	堯か
52	SB135	—	須恵器	杯A	底	—	〃	〃	〃	— 35	
53	〃	—	〃	〃	〃	—	〃	〃	〃	— 20	
54	SB138	—	黒色土器A	杯A II	体	不明	〃	〃	〃	— 2	
55	SB147	8	〃	〃	〃	右横	〃	東	床	55 100	
56	〃	—	〃	〃	〃	逆位	〃	〃	覆	5 —	
57	〃	21	〃	皿B	〃	〃	〃	〃	ピット	48 100	
58	SB149	2	〃	杯A II	〃	不明	〃	□	覆	— 23	
59	SB151	5	〃	〃	〃	右横	〃	堯	床	90 100	
60	〃	—	〃	〃	〃	正位	〃	〃	覆	— —	
61	〃	6	黒色土器A	〃	〃	右横	〃	□	〃	9 —	堯か
62	〃	—	〃	〃	〃	〃	〃	堯	〃	— —	
63	〃	—	〃	皿B	〃	正位	〃	□	〃	6 —	堯か
64	〃	—	〃	杯A II	〃	不明	〃	〃	〃	6 —	
65	〃	7	〃	〃	〃	正位	〃	〃	〃	— 38	呈、生か
66	〃	—	〃	椀A	〃	不明	〃	〃	〃	— —	
67	〃	—	〃	〃	〃	逆位	〃	□	〃	10 —	堯か
68	〃	19	〃	皿B	〃	左横	〃	堯	ピット	92 100	
69	〃	22	須恵器	杯A	〃	不明	〃	□	覆	15 35	
70	〃	—	〃	〃	〃	正位	〃	堯	〃	17 —	
71	〃	—	〃	〃	〃	〃	〃	堯	床	5 —	
72	〃	—	〃	〃	〃	〃	〃	□	覆	6 —	堯か
73	〃	31	〃	〃	底	—	〃	〃	〃	— 40	田か
74	SB152	1	黒色土器A	杯A II	体	逆位	〃	堯	床	65 100	
75	SB153	10	〃	〃	〃	不明	〃	□	〃	20 100	
76	SB164	3	〃	〃	〃	逆位	〃	〃	〃	90 96	
77	〃	—	〃	〃	〃	〃	〃	堯	覆	— —	
78	〃	6	〃	皿B	〃	〃	〃	□	〃	15 —	
79	〃	8	〃	鉢A	〃	正位	〃	東	床	12 15	
80	SB167	11	〃	杯A I	〃	〃	〃	—	〃	30 —	
81	〃	4	〃	杯A II	〃	〃	〃	太	カマド	78 100	
82	〃	8	〃	〃	〃	不明	〃	□	床	60 93	
83	〃	5	〃	〃	〃	逆位	〃	秋	〃	19 100	
84	〃	7	〃	〃	底	—	〃	〃	覆	— 100	

付表7 三の宮遺跡墨書・刻書土器一覧表 3

整理 番号	出土遺構	土器番号	種 類	器 種	部位	書き方	内・外	文字	層位	遺存状態(%)		備 考
										口径	底径	
85	SB167	16	黒色土器A	椀A	体	正位	外	東	覆	31	100	
86	"	17	"	"	"	左横	"	□	"	7	—	
87	"	9	"	杯又は椀	"	正位	"	"	"	10	—	
88	"	10	"	"	"	不明	"	"	"	8	—	
89	"	—	"	"	"	"	"	"	"	—	—	
90	"	26	灰釉陶器	椀A	底	—	"	秋	床	—	39	
91	SK156	1	土師器	杯	体	不明	"	□	覆	10	100	
92	SK398	—	須恵器	杯A	"	逆位	"	長	"	10	—	
93	SK518	2	黒色土器A	"	"	右横	"	之	"	20	70	
94	SK1682	—	"	椀A	"	不明	"	□	"	3	100	習書か
95	"	—	"	"	"	右横	"	"	"	—	—	之か
96	SK841	1	"	杯A II	"	不明	"	"	"	25	—	
97	SK1927	—	"	"	"	逆位	"	東	"	—	80	中世の土坑
98	SK1223	—	"	"	"	不明	"	□	"	—	—	
99	SK1225	1	"	"	"	右横	"	東	"	—	100	
100	"	—	"	"	"	不明	"	□	"	—	—	
101	"	3	"	皿B	"	"	"	"	"	10	10	東か
102	SK1226	—	須恵器	杯A	"	正位	"	寺	"	—	10	
103	SK1043	—	黒色土器A	"	"	不明	"	□	"	10	—	庄か
104	SK2495	—	"	杯A II	"	逆位	"	"	"	18	—	中世の土坑、夫か
105	"	—	"	"	"	正位	"	東	"	2	—	中世の土坑
106	遺構外	—	"	杯A I	"	"	"	□	"	18	100	
107	"	—	"	杯A II	"	不明	"	"	"	11	1	
108	"	—	須恵器	杯A	"	"	"	斗	"	94	100	
109	SB167	22	軟質須恵器	"	"	左横	"	田中	床	22	47	刻書

付表8 三の宮遺跡陶硯・転用硯一覧表

整理 番号	出土遺構	土器番号	種 類	器 種	転用部位	調整痕	層位	遺存状態(%)		備 考
								口径	底径	
110	SB145	—	陶硯	風字硯	—	—	覆			ST48~50からの混入
111	SB 2	27	灰釉陶器	椀	底部内	あり	"	—	90	
112	SB18	8	須恵器	蓋	"	なし	"	25	—	外面に朱付着
113	SB28	6	"	"	"	"	"	—	12	
114	SB35	—	灰釉陶器	椀	"	あり	床	—	100	
115	"	17	"	皿B	"	なし	"	14	100	
116	SB111	—	須恵器	甕	胴部内	あり	カマド	—	—	
117	SB113	5	灰釉陶器	椀	底部内	"	覆	—	80	朱付着
118	SB122	29	須恵器	杯B VI	"	なし	"	20	—	"
119	SB126	13	灰釉陶器	椀	底部内外	あり	"	—	87	
120	遺構外	—	"	"	底部外	"	"	—	15	朱付着

付表9 三の宮遺跡出土鉄製品・鉄滓時期別一覧表

品 種	古 代																	中 世			近 世	不 明	合 計					
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	不明	1	2	不明									
鋤・鋏	1	1					1																					3
鎌	2			2	1		6	1					3		1	5		1	1	2								21
刀子	小形	9	1		1	1	2	7	3							2	3	9	3	4								45
	大形							1								1		2	3									7
斧	1						1										1	1										4
錐																			1									1
鑿								1					1					1	1									4
鈍																												0
楔																	1	1										2
釘							4	1								1	2				1							9
鋏							1											2		1								4
ピンセット																												0
針																												0
容器																												0
燧鉄																		1		1								2
鋏								1									4											5
脛当																												0
鉸具		1						1																				2
馬具																												0
蹄鉄																												0
鐸																												0
金具																												0
苧引鉄							1						1															2
紡錘車	3	1					1	1									2											8
棒状	方形	2	1		1		6	5				1			1	6	12	10	7									52
	円形						2											1										3
	長方形						1	3								2	1	7	7	4								25
	不明																1	1	2	1								5
板状	鍛造	1						1								2	1	4	1	2	1							13
	鑄造																											0
	その他																			1								1
環状	1					1	1																				3	
管状																												0
塊状																												0
鉄片	2	1				1	2											4	2	8	1							21
その他・不明							1										3	5	4	1	2							16
合計	22	6	0	3	3	3	36	19	0	0	0	0	6	0	10	28	51	38	32	5	0							26
鉄滓	170	0	0	530	1090	930	10110	4860	0	0	0	0	30	0	50	8585	235	30	470	0	0							27090

付表10 三の宮遺跡古代鉄製品・鉄滓遺構別一覧表 1

遺構	時期	鎌	刀子		釘	鍬	金具	紡錘車	棒状				板状				鉄滓	その他・備考
			普通	大形					方形	円形	長方	不明	鍛造	鑄造	素材	不明		
SB2	古代8								1							50	*鑿1、*鉸貝1、*環状製品1、鉄滓2(小形)	
SB6	" 6															60	鉄滓1(中形)	
SB7	" 6															15	鉄滓1(小形)	
SB8	" 8	*1	**2						*1	**2		1				140	鉄滓2(中形)	
SB9	" 8															30	鉄滓2(小形)	
SB25	" 2		*1															
SB27	" 6		**2													30	鉄片1	
SB30	" 8								1	*1								
SB33	" 13	*1																
SB35	" 8		*1													935	鉄滓20(大小あり)	
SB41	" 7				1													
SB44	" 8								1									
SB48	" 2								1								鉄片1	
SB49	" 1		*2						1								鉄片1	
SB50	" 1		2														斧1か	
SB51	" 2							*1										
SB52	" 1																鉄片1	
SB57	" 2																*鋤・鉄先1、*鉸貝1か	
SB61	" 7								*2								鉄片2	
SB62	" 7							*1									*鋤・鉄先1	
SB63	" 8								*1									
SB64	" 7	*1															*環状製品1	
SB65	" 7		*1															
SB67	" 7		*1		*1													
SB68	" 7															50	鉄滓1(小形)	
SB69	" 5								1									
SB71	" 7															20	鉄滓1(小形)	
SB75	" 7								*1								刀子か	
SB78	" 4															240	鉄滓1(大形)	
SB79	" 7		*1															
SB82	" 6															235	鉄滓1(大形)	
SB83	" 13	*1																
SB84	" 7	*1																
SB87	" 6															15	鉄滓1(小形)	
SB88	" 7	1															*不明製品1	
SB97	" 13	*1							*1							30	*鑿1か、鉄滓2(小形)	
SB99	" 6															505	鉄滓1(椀形)	
SB100	" 15											1						
SB105	" 13																*苧引鉄1か	
SB106	" 7				*1											1390	鉄滓17(大小あり)	
SB107	" 8							1								115	鉄滓1(椀形)	
SB108	" 5															565	鉄滓3(中形)	
SB109	" 7				*1													

付表10 三の宮遺跡古代鉄製品・鉄滓遺構別一覧表 2

遺構	時期	鎌	刀 普通	子 大形	釘	鋏	金 具	紡 錘 車	棒 状				板 状				鉄 滓	そ の 他 ・ 備 考
									方 形	凹 形	長 方	不 明	鍛 造	鑄 造	素 材	不 明		
SB113	古代8															60	鉄滓1	
SB117	" 4	**2	*1													290	鉄滓1(中形)	
SB119	" 5	*1	*1													525	鉄滓46(大小あり)	
SB120	" 7			1												865	鉄滓5(大形)	
SB121	" 1		*1															
SB122	" 7		*1						*1	1	*1					1120	*鋏1、鉄滓8(大小あり)	
SB123	" 8															1550	鉄滓55(大小あり)	
SB127	" 7								*1							20	鉄滓1(小形)	
SB128	" 1	**2						**2					1				*鋤・鋏先1	
SB129	" 1																*環状製品1	
SB131	" 1		*1															
SB133	" 1								1									
SB138	" 7															70	鉄滓1(中形)	
SB140	" 8															280	鉄滓3(中形)	
SB141	" 7									*1						450	*苧引鉄1、鉄滓2	
SB145	" 1		*1															
SB146	" 1															40	鉄滓1(中形)	
SB147	" 8					*1												
SB148	" 1							*1								5	鉄滓2(小形)	
SB151	" 7	**2														130	*斧1、鉄滓4(小形)	
SB153	" 7															85	鉄滓2(中形)	
SB158	" 7		*1													55	鉄滓2(中形)	
SB161	" 7		*1															
SB164	" 7		*1															
SB165	" 1	**2														85	鉄滓5(小形)	
SB167	" 8				*1													
SB168	" 11・12				*1													
SB169	" 15		*1															
SB173	不明																*不明製品1	
SB174	古代15		1							**2		1				50	鉄滓1(中形)	
SB175	" 15			*1														
SB176	" 15	*1			*1													
ST23	" 1															40	鉄滓1(中形)	
ST58	" 7	*1																
SD39	" 7・8															65	鉄滓1	
SA 3	" 6~8								1						1			
SA 4	" 8															1600	鉄滓36(大小あり)	
SN 1	" 7								*1									
SK30	" 6~8															30	鉄滓1(中形)	
SK36	" 6~8		*1															
SK38	" 6~8															50	鉄滓3(中形)	
SK39	" 6~8															15	鉄滓3(小形)	
SK78	" 7															100	鉄滓18(小形)	

付表10 三の宮遺跡古代鉄製品・鉄滓遺構別一覧表 3

遺構	時期	鎌	刀子		釘	鍬	金具	紡錘車	棒状				板状				鉄滓	その他・備考
			普通	大形					方形	円形	長方	不明	鍛造	鑄造	素材	不明		
SK291	古代6・7							**2		*1								
SK426	" 6															100	鉄滓 2	
SK432	" 7															1475	鉄滓62(大小あり)	
SK433	" 7															5	鉄滓 1	
SK434	" 7															15	鉄滓 2	
SK436	" 7															20	鉄滓 2	
SK449	" 7															50	鉄滓 1	
SK452	" 7															90	鉄滓 3	
SK520	" 6~8															5	鉄滓 1	
SK524	" 6~8															50	鉄滓 1	
SK529	" 6~8															100	鉄滓 1	
SK546	" 6~8															1140	鉄滓50(大小あり)	
SK552	" 6~8																*不明製品 2	
SK570	" 6~8															690	鉄滓 1(椀形)	
SK706	" 6~8												*1					
SK807	" 7・8															470	鉄滓 6(大小あり)	
SK913	" 7・8															130	鉄滓 1	
SK930	" 6~8															1550	鉄滓83(大小あり)	
SK1048	" 6~8															200	鉄滓 2	
SK1064	" 6~8															500	鉄滓10(大小あり)	
SK1067	" 7															940	鉄滓 9(大小あり)	
SK1163	" 6~8															1450	鉄滓78(大小あり)	
SK1165	" 7															720	鉄滓17(中形)	
SK1168	" 6~8															25	鉄滓 1	
SK1169	" 6~8															10	鉄滓 1	
SK1172	" 7															2540	鉄滓110(大小あり)	
SK1260	" 15								*1									
SK1281	" 14・15				1													
SK1877	中世 2	*1																
SK1969	中世 2	*1																
SK2284	中世 1					*1												
SK2331	" 1	*1																
南部 I																110	鉄滓 9(小形)	
南部 II																5	鉄滓 1	
中部 I 中世 ST#									*1							570	鉄滓 1	
北部 II			*1													650	鉄滓 11	
北部 II 西																20	鉄滓 1	
北部 II 東 IC		*1				*3												
IIA層		*1	1						***4	1	1					750	鉄滓 6	

(注 1) 鉄滓は重量(g)、ほかは個体数である。

(注 2) *印は図版に掲載した遺物である。

(注 3) その他・備考欄に鉄滓の個数と形状(20g未満を小形・20~200gを中形・200g以上を大形)を記した。

付表11 三の宮遺跡出土石製品一覧表

遺構名	時 期	遺物名	石 質	遺存度	長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	図版No.
SB20	古代4	砥石	砂岩	半欠	8.9	5.9	2.7	1
SB29	" 7	砥石	凝灰岩	完形	8.4	4.5	3.4	2
SB32	" 7	砥石	砂岩	$\frac{2}{3}$ 欠	10.8	8.3	2.7	3
SB34	" 7	砥石	砂岩	半欠	7.9	4.9	3.2	4
SB60	" 1	砥石	凝灰岩	半欠	8.5	4.3	1.6	5
SB84	" 7	砥石	砂岩	半欠	13.6	10.3	2.5	6
SB97	" 13	砥石	凝灰岩	半欠	9.1	3.4	2.9	7
SB111	" 7	砥石	凝灰岩	半欠	4.9	4.7	1.7	8
SB114	" 7	砥石	砂岩	完形	22.2	14.1	4.6	9
SB125	" 4	砥石	砂岩	$\frac{1}{8}$ 欠	13.4	10.4	4.1	10
SB128	" 1	砥石	凝灰岩	$\frac{2}{3}$ 欠	4.4	2.8	2.0	11
SB179	" 15	砥石	凝灰岩	$\frac{3}{4}$ 欠	4.0	3.0	2.4	—
SB1267	" 15	砥石	ホルンフェルス	半欠	7.7	5.2	3.1	12
北部II東	古代	砥石	凝灰岩	半欠	8.8	4.1	2.1	13
北部II西	"	砥石	凝灰岩	半欠	8.6	3.1	1.3	14
SB34	古代7	鏝(巡方)	球状石灰岩	完形	3.8	3.5	0.7	15
SB190	中世1	砥石	凝灰岩	$\frac{3}{4}$ 欠	4.2	3.6	1.8	—
SK1553	" 2	砥石	頁岩	半欠	6.8	3.0	0.7	16
SK693	" 1	砥石	頁岩	小片	3.0	1.9	0.2	—
SK1805	" 1	砥石	凝灰岩	半欠	8.3	3.7	1.9	17
SK1870	" 2	砥石	凝灰岩	半欠	7.0	3.1	2.3	18
SK1873	" 1	砥石	凝灰岩	半欠	7.2	4.4	2.3	19
SK1946	" 2	砥石	凝灰岩	半欠	5.3	3.2	1.5	20
SK2006	" 1	砥石	凝灰岩	半欠	5.0	2.6	1.7	21
SK2283	" 1	砥石	凝灰岩	半欠	6.8	4.2	2.1	22
SK2331	" 1	砥石	凝灰岩	半欠	8.2	3.3	1.7	23
SK2339	" 1	砥石	凝灰岩	半欠	8.9	3.8	2.2	24
SK2417	" 1	砥石	凝灰岩	半欠	5.9	4.4	3.1	25
SK2435	" 2	砥石	凝灰岩	半欠	7.5	3.2	2.0	26
SK2436	" 1	砥石	凝灰岩	$\frac{1}{3}$ 欠	10.4	4.6	1.8	27
SK2464	" 1	砥石	凝灰岩	半欠	5.7	3.6	1.9	28
SK2467	" 1	砥石	凝灰岩	半欠	5.6	4.2	2.1	29
SK2521	" 1	砥石	凝灰岩	半欠	8.4	3.1	1.9	30
SK2521	" 1	砥石	頁岩	半欠	6.4	3.5	2.0	31
SK2527	" 1	砥石	頁岩	半欠	5.1	2.9	0.5	32
SK2640	" 1	砥石	凝灰岩	完形	16.2	4.5	4.2	33
SK2708	" 2	砥石	粘板岩	半欠	8.9	3.4	0.6	34
北部II東	" 1	砥石	砂岩	$\frac{1}{3}$ 欠	11.8	5.6	3.4	35
SK2130	" 2	硯	粘板岩	小片	3.0	0.8	0.5	36
SB190	" 1	不明品	粘板岩	完形か	4.7	3.0	0.7	37
SB190	" 1	不明品	粘板岩	完形か	3.5	3.3	0.6	38
SK2646 SK2681	" 1	石臼	安山岩	半欠	31.5	16.0	8.0	39
遺構外	中世	凹石	安山岩	完形	15.9	11.2	7.8	40
北部I東	"	凹石	花崗岩	完形	7.0	6.6	3.8	41
北部I	"	凹石	安山岩	半欠	18.2	10.8	6.6	42

付表12 三の宮遺跡出土土製品一覧表

遺構名	時期	出土遺物	備考	図版No.
SB 2	古代 8	*土錘 1 点、羽口 2 点		10・16
SB 3	" 8	羽口 1 点		—
SB 8	" 8	羽口 1 点		17
SB 9	" 9	羽口 2 点		—
SB25	" 2	*土錘 1 点		11
SB51	" 2	*紡錘車 1 点・*土錘 1 点		1・12
SB57	" 2	**紡錘車 2 点・*土錘 1 点		2・3・9
SB106	" 7	*羽口 1 点		18
SB108	" 5	*羽口 1 点		19
SB115	" 4	*羽口 1 点		20
SB116	" 7	*羽口 1 点		21
SB117	" 4	*羽口 1 点		22
SB119	" 5	*羽口 1 点		23
SB128	" 1	*紡錘車 1 点		4
SB140	" 8	*羽口 1 点		—
SB151	" 7	*土錘 1 点		13
SB157	" 1	*紡錘車 1 点、羽口 1 点		5
SK200	" 1～3	*紡錘車 1 点		6
SK426	" 5～7	*羽口 3 点		24
SK432	" 7	羽口 1 点		—
SK546	" 6～8	*羽口 1 点		25
SK753	" 6～7	羽口 1 点		—
SK807	" 7～8	*羽口 1 点		26
SK909	" 7～8	羽口 1 点		—
SK930	" 6～8	羽口 1 点		—
SK1064	" 6～8	羽口 1 点		—
SK1163	" 6～8	*羽口 1 点		27
SK1165	" 7	紡錘車 1 点・*羽口 1 点		28
SK1172	" 7	羽口 4 点		—
SK1263	" 15	*羽口 1 点		29
SK1556	中 世	羽口 1 点	古代の遺物か	—
SK1794	中世 1	羽口 1 点	"	—
SK1890	" 1	羽口 1 点	"	—
SK2231	" 1	羽口 1 点	"	—
SK2521	" 2	羽口 1 点	"	—
中部 I 東	古 代	据えカマド 1 点		—
中部 II	"	据えカマド 1 点	IIKS11区出土	30
中部 II・III	"	*土錘 1 点		15
北部 I	"	*土錘 1 点・羽口 1 点		14
北部 II	"	**紡錘車 2 点・羽口 1 点	紡錘車 8 は須恵器製	7・8

*印 図版に掲載した遺物

付表13 三の宮遺跡中世土器・陶磁器出土遺構別一覧表 1

遺 構	中世出土遺物〔所属時期、掲載図版番号、() 内は破片数〕	備 考
SB76	青磁碗D類 (1)	古代の遺構
SB77	土師器皿IB2類 (1) 図版176-2・? (1) 図版176-1、白磁?	〃
SB106	古瀬戸天目茶碗 (1)	〃
SB148	捏鉢VI類 (1)	〃
SB190	古瀬戸四耳壺 (1)、常滑系甕 (1)	〃
SD64	土師器皿IIB類 (2) 図版176-3	
SK1272	土師器皿IIA類 (1)	古代の遺構
SK1419	捏鉢V類 (1)	
SK1504	常滑系甕 (1)	
SK1553	土師器皿IIA類 (28) 図版176-4	
SK1677	土師器皿IA・B類 (3)、山茶碗白土原～明和1号窯式 (1)、青磁碗I類 (1)、捏鉢 (1)	
SK1682	常滑系壺13C? (1)	
SK1775	青磁碗F類 (2) 図版176-17	
SK1777	青磁碗F類 (1)、常滑系甕 (1)	
SK1787	常滑系甕 (1)、山茶碗白土原～明和1号窯式 (3)	SK2375と同一か?
SK1792	捏鉢V類 (2)	
SK1799	捏鉢 (1)	
SK1800	常滑系甕 (109) I類図版176-30・III類図版176-31、捏鉢VI類 (6) 図版176-28・V類 (3) 図版176-29・不明 (7)	
SK1975	古瀬戸天目茶碗15C前 (1) 図版176-8	漆皿出土
SK2073	土師器皿IIA類 (1)、常滑系甕 (1)	
SK2091	古瀬戸卸皿13C (2) 図版176-9	
SK2138	山茶碗大洞東1号窯式 (4)、古瀬戸折縁深皿15C (1)、常滑系甕 (1)	折縁深皿SK2151と接合
SK2151	古瀬戸天目茶碗 (1)・折縁深皿15C (2)、常滑系甕 (1)	折縁深皿SK2138と接合
SK2250	古瀬戸壺?～14C (1)	
SK2270	古瀬戸四耳壺14C? (1)	
SK2291	山茶碗丸石3号窯式 (1)	
SK2299	古瀬戸水注?14C? (2)	
SK2305	青磁碗A類 (1)	
SK2323	青磁碗F類 (1)	
SK2375	常滑系甕 (1)	SK1787と同一?
SK2380	青磁杯III-1 (1) 図版176-24	
SK2432	常滑系甕 (1)、大窯期灰釉天目茶碗15C～(1) 図版176-13	
SK2435	大窯期皿 (1)	SK2438からの混入か?
SK2441	古瀬戸水注14C?～(1)	
SK2444	古瀬戸卸皿14C (2)	
SK2446	青磁碗F類 (1) 図版176-21	
SK2467	古瀬戸水注14C?～(1)	
SK2480	捏鉢 (2) 図版176-27、山茶碗浅間窯下～丸石3号窯式 (1)、青磁碗F類 (1) 図版176-18	
SK2496	青磁杯III-4 (1) 図版176-23	
SK2497	青磁碗F類 (1) 図版176-20	

付表13 三の宮遺跡中世土器・陶磁器出土遺構別一覧表 2

遺 構	中世出土遺物〔所属時期、掲載図版番号、() 内は破片数〕	備 考
SK2514	青磁碗 I 類 (1)	
SK2521	山茶碗大洞東 1 号窯式 (2) 図版176-26、古瀬戸水注14C (1) 図版176-12	
SK2554	古瀬戸折縁深皿15C前 (1)	C ¹⁴ : 640±80B.P.
SK2602	捏鉢 (2)	
SK2614	山茶碗白土原~明和 1 号窯式 (2)	
SK2619	内耳鍋 (3)	
SK2620	内耳鍋 (3)	
SK2627	古瀬戸卸皿14C?~(1) 図版176-10	
SK2630	古瀬戸天目茶碗15C前 (1)	
SK2637	古瀬戸壺類? (7)	
SK2646	内耳鍋 (3)	
SK2652	山茶碗大洞東 1 号窯式 (1)	
SK2769	内耳鍋III類 (1) 図版176- 5、II C類かII B類 (1) 図版176- 6、大窯期稜皿16C中 (2) 図版176-15	
SK2770	内耳鍋 (3)、大窯期丸皿 (1) 図版176-16	
SK2780	内耳鍋 (5)	
自然流路、遺構外出土遺物		
出土地点	中世出土遺物〔所属時期、掲載図版番号、() 内は破片数〕	
NR 8	山茶碗窯洞 1 号窯式 (1)	
02トレ	青磁碗 F 類 (1) 図版176-19	
03トレ	常滑系甕 (1)、古瀬戸天目茶碗 (1)?	
04トレ	常滑系甕 (2)	
05トレ	常滑系甕 (2)、捏鉢 (2)、古瀬戸瓶13C? (1)、青磁碗 F 類 (2) 図版176-22・J 類 (1)	
北部II	常滑系甕 (4)、捏鉢IV類 (1)、古瀬戸天目茶碗 (1)?、青磁碗 C 類 (1)・FかH類 (1) 青磁小碗13C後~14C中 (1)	
北端II	内耳鍋 (2)	
大庭北	内耳鍋 (7)、須恵質擂鉢 (7) 図版176- 7、捏鉢 (1)、大窯期丸皿16C (1) 山茶碗白土原~明和 1 号窯式 (1)、青磁碗 (1)	
大庭	高麗青磁梅瓶14C前後 (1) 図版176-25	
堂沢	大窯期丸皿 (1)・稜皿16C (1)	
堂沢北	青磁碗 (1)、大窯期丸碗 (1) 図版176-14、内耳鍋III類 (1)	
梅沢北	古瀬戸卸皿15C (1) 図版□-11、青磁碗 (1)	
I WL11区	捏鉢 (1)	
地点不明	内耳鍋 (3)、土師器皿 I 類 (1)、山茶碗白土原~明和 1 号窯式 (1)、白磁皿IX類 (2)	

付表14 三の宮遺跡中世鉄製品・鉄滓遺構別一覧表 1

遺構	時期	鎌	刀子		釘	鍬	金具	紡錘車	棒状				板状				鉄滓	その他・備考
			普通	大形					方形	円形	長方	不明	鍛造	鑄造	素材	不明		
SB190	中世1																	
SK1580	中世	*1																
SK1664	中世1																	不明製品1
SK1668	" 1															45		不明製品1・鉄滓1
SK1674	" 1															20		鉄滓1
SK1677	" 1																	不明製品2
SK1691	" 1															10		鉄滓1
SK1693	" 1								*1									
SK1707	" 1										1							
SK1775	" 1																	鉄片1
SK1785	中世		*1															
SK1854	中世2															10		鉄滓1
SK1870	" 2										1							
SK1873	" 2				1						1		1					
SK1875	" 2				1								1					
SK1877	" 2																	*錐1
SK1890	" 1															130		鉄滓1
SK1903	" 2										1							
SK1946	" 2															10		鉄滓1
SK1948	" 2															10		鉄滓1
SK1969	中世				*1													
SK1973	中世2		*1		1	1		1		2								
SK1977	" 2				*2				1									
SK1979	" 2	*1																
SK1998	"												1					*鉄1
SK1999	"				1													
SK2002	中世2				*1													
SK2005	中世				*1													
SK2038	中世2										1							
SK2057	" 1				*1													
SK2058	" 2				1													
SK2079	" 2								1									
SK2126	" 2								2									*不明製品1
SK2127	" 2	*1			***6				2		1							不明製品1
SK2130	" 2								2									
SK2131	" 2																	鉄片2
SK2134	" 2												1					*斧1
SK2144	中世				*1													
SK2149	中世2				1						1							
SK2150	" 2		1															
SK2156	" 2				2													*鑿1
SK2160	" 1		*1		*1				1									
SK2217	" 2			*1	*1						1							

付表14 三の宮遺跡中世鉄製品・鉄滓遺構別一覧表 2

遺構	時期	鎌	刀子		釘	鍬	金具	紡錘車	棒状				板状				鉄滓	その他・備考
			普通	大形					方形	円形	長方	不明	鍛造	鑄造	素材	不明		
SK2226	中世1				*1				1								不明製品1	
SK2227	" 1				*1				1		1							
SK2283	" 1				2													
SK2284	" 1																斧1	
SK2285	" 2		*1															
SK2286	" 1				2													
SK2288	" 1		1														*燧鉄1	
SK2289	" 1			1														
SK2314	" 1								1									
SK2315	" 1								1									
SK2331	" 1				1													
SK2333	" 1				1				*1		1	1				30	鉄滓1	
SK2344	" 1	*1																
SK2371	中世				1													
SK2425	中世1									1								
SK2429	" 1		1															
SK2435	" 1		1															
SK2446	" 1											1						
SK2464	" 1		1															
SK2467	" 1									1							鉄片1	
SK2469	" 1		1															
SK2480	" 1	*1	1	*1														
SK2486	" 1									1								
SK2496	" 1								1									
SK2516	" 2																*楔	
SK2521	" 2																*不明製品1	
SK2524	" 1																*鉄1	
SK2533	" 1								1									
SK2534	" 1																鉄片1	
SK2535	" 1			1													環状製品1	
SK2539	" 1			*2														
SK2540	" 1			1														
SK2554	" 2		1						1								*不明製品1	
SK2612	" 1																*楔1	
SK2627	" 1			1													*鉄1	
SK2637	" 1								1									
SK2641	" 1											2						
SK2643	" 1	*2							1								*鑿1・*環状製品1・鉄片1	
SK2647	" 1								1									
中部II	中世								1					*1	45		*燧鉄1・鉄滓1	
中部III	"																*不明製品1	
北部I	"			*1					1								鉄片1	
北部II	"	*1	**3		1	*1			5	4	1	1				375	鉄片7・鉄滓7(中形)	

付表15 三の宮遺跡出土銅製品一覧表

遺構名	遺物名	部 位		備 考		図版 No.
		錢 貨				
		錢貨名	初鑄年	鑄造国	書体	
SB79	銅 椀	底部				—
SB140	不明品			地金は鉄		102
SB151	銅 椀	底部				101
SK2090	錢 貨	不明1枚				—
SK2145	〃	紹聖元寶	1094	北宋	篆書	153
SK2161	〃	熙寧元寶	1068	北宋	篆書	—
SK2247	〃	景德元寶	1004	北宋		—
	〃	元祐通寶	1086	北宋	篆書	154
SK2267	〃	治平元寶	1064	北宋	真書	155
SK2271	〃	熙寧元寶	1068	北宋		—
SK2283	〃	熙寧元寶	1068	北宋		—
SK2305	〃	咸平元寶	998	北宋		4
	〃	元豐通寶	1078	北宋	篆書	5
	〃	大□□寶			真書	—
SK2309	〃	皇宋通寶	1039	北宋		—
SK2310	〃	不明1枚				—
SK2316	〃	熙寧元寶	1068	北宋	真書	158
SK2323	〃	開元通寶	621	唐		159
SK2509	〃	熙寧元寶	1068	北宋	真書	160
	〃	元豐通寶	1078	北宋	真書	161
SK2534	〃	咸平元寶	998	北宋		162
		景德元寶	1004	北宋		163
		元禧通寶	1017	北宋		164
		天聖元寶	1023	北宋	篆書	165
		至和通寶	1054	北宋	篆書	166
		熙寧元寶	1068	北宋	真書	167
		熙寧元寶	1068	北宋		—
		元豐通寶	1078	北宋	真書	168

遺構名	遺物名	部 位		備 考		図版 No.
		錢 貨				
		錢貨名	初鑄年	鑄造国	書体	
SK2534	錢 貨	元豐通寶	1078	北宋	真書	169
		元祐通寶	1086	北宋	篆書	170
		元祐通寶	1086	北宋	真書	171
		紹聖元寶	1094	北宋	篆書	172
SK2535	〃	熙寧元寶	1068	北宋	篆書	173
SK2548	〃	天聖元寶	1023	北宋	真書	—
SK2612	〃	元豐通寶	1078	北宋		—
		元祐通寶	1086	北宋	篆書	174
		不明1枚				—
SK2637	〃	熙寧元寶	1068	北宋		—
		元祐通寶	1086	北宋	篆書	—
		□□元寶				—
SK2640	〃	咸平元寶	998	北宋		175
		皇宋通寶	1039	北宋	篆書	176
SK2778	〃	元祐通寶	1086	北宋		—
		政和通寶	1111	北宋		—
		不明4枚				—
SK3001	〃	寬永通寶	1634			180
		寬永通寶	1634			180
		不明4枚				180
SK3004	〃	寬永通寶	1634			—
SK3033	〃	寬永通寶	1634			181
北部 I	〃	元豐通寶	1078	北宋	真書	182
北部 II	〃	寬永通寶	1634			183
		寬永通寶	1634			—
		寬永通寶	1634			—
北端 II	〃	熙寧元寶	1068	北宋	真書	—
		寬永通寶	1634			184
北部 II	煙 管	雁首		竹管残		185

初鑄年は松原典明(1983)による

付表16 三の宮遺跡古代遺構の時期区分表

時期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	不	明	総計
SB	43	23	54	20	14	6	15 77 127	2 73				86	33	142	100	1		
	49	24	76	72	26	7	16 79 137	3 74					83	170	169	4		
	50	25		78	28	21	(17) 80 138	5 107					97	178	171	135		
	52	39		115	69	22	19 84 141	8 113					105		172	173		
	53	48		117	98	27	29 85 149	9 123							174			
	55	51		125	108	(70)	31 88 150	10 140							175			
	60	56		154	118	82	32 89 151	(11) 144							176			
	121	57		156	119	87	34 91 152	12 147							(177)			
	128	58			134	92	38 93 153	13 166							179			
	129	59			136	94	41 101 158	(18) 167										
	(130)	90			139	96	47 103 161	30										
	131	124			155	99	61 106 162	35										
	(132)	160			159	102	62 109 (162)	36										
	133					104	64 111 163	37										
	145					110	(65) 112 164	40										
	146					143	(66) 114	42										
	148						67 116	44										
	157						68 120	45										
	165						71 122	46										
							(75) 126	(63)										
計	19	13	2	8	13	16	54	30	0	0	0	1	4	3	9	4		169
				1							1	1						
ST	(23)	4 (25)					34	5	48	2								24
	(47)	8 (26)					36	7	49	(3)								41
		13 27						29	50	30								45
		(16) 28						33	51	52								62
		(17)						(35)	53	(55)								
		19						(38)	(54)	(56)								
		20						(39)	58	(57)								
		21						(40)	60	(59)								
								43		(61)								
								44										
		9 10 11																
		12 14 15																
		18 22																
計	2	12	0	0	0	2	18	9	0	0	0	0	0	0	0	4		62
	8			3	1	2						1						
SD	19			0 (11)			29	4	(36)	5 43					(23)	2 17 33		
							30	(12)	(38)	(13) 39					(24)	3 18 34		
															44	6 25 35		
																7 26 37		
																8 27 40		
																14 28 41		
																15 31 42		
計	1	0	0	0	1	2	4	4	0	0	0	0	0	0	3	23		44
	3			1		2												

付表17 三の宮遺跡遺構番号新旧対照表 2

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号				
S K	195	S K	235	S K	363	S K	115	S K	447	S K	3073
	196		262		364		336		448		3070
	197		261		365		118		449		3071
	198		—		366		119		450		3072
	199		703		367		120		451		3074
	200		702		368		337		452		3075
	201		704		369		338		453		3048
	202		1260		370		20		454		3047
	203		1259		371		1555		455		3046
	204		1254		372		1453		456		722
	205		1255		373		1403		457		2431
	206		1256		374		1402		458		781
	207		1257		375		1401		459		614
	208		1253		376		1400		460		615
	209		1252		377		1399		461		612
	210		774		378		340		462		610
	211		778		379		152		463		655
	212		777		380		153		464		779
	213		776		381		339		465		654
	214		773		382		121		466		2430
	215		775		383		124		467		616
	216		—		384		123		468		617
	217		772		385		122		469		618
	218		771		386		150		470		2429
	219		768		387		125		471		611
	220		1258		388		341		472		619
	221		769		389		142		473		622
	222		—		390		342		474		633
	223		—		391		126		475		634
	224		1486		392		—		476		641
	225		679		393		128		477		642
	226		1485		394		133		478		643
	227		1487		395		129		479		644
	228		697		396		132		480		646
	229		696		397		131		481		620
	230		1488		398		130		482		621
	231		1496		399		140		483		635
	232		690		400		127		484		623
	233		—		401		136		485		637
	234		—		402		135		486		636
	235		—		403		134		487		638
	236		—		404		138		488		645
	237		—		405		139		489		647
	238		1489		460		1398		490		624
	239		692		407		1404		491		625
	240		761		408		1554		492		626
	241		760		409		1397		493		627
	242		1491		410		143		494		628
	243		—		411		144		495		630
	244		—		412		385		496		631
	245		148		413		161		497		639
	246		147		414		190		498		640
	247		146		415		162		499		648
	248		—		416		387		500		649
	249		952		417		388		501		734
	250		3008		418		163		502		650
	251		3009		419		164		503		632
	252		3006		420		386		504		2424
	253		3007		421		391		505		780
	254		958		422		392		506		1411
	255		3005		423		390		507		165
	256		1187		424		389		508		2974
	257		1189		425		3053		509		2973
	258		3002		426		3055		510		2967
	259		3003		427		3054		511		2966
	260		1190		428		3052		512		2965
	261		3004		429		3051		513		2972
	262		1186		430		3050		514		2969
	263		3001		431		3049		515		2964
	264		971		432		3056		516		2962
	265		967		433		3068		517		2963
	266		961		434		3066		518		2961
	267		962		435		3076		519		2957
	268		960		436		3067		520		2958
	269		959		437		3061		521		2970
	270		963		438		3068		522		2971
	271		964		439		3064		523		2959
	272		965		440		3065		524		2960
	273		966		441		3059		525		2954
	274		2433		442		3057		526		2953
	275		1473		443		3058		527		2952
	276		2432		444		3063		528		2955
	277		1474		445		3062		529		2956
	278		1458		446		3069		530		2941

付表17 三の宮遺跡遺構番号新旧対照表 9

新番号	旧番号
S K 2662	S K 1303
2663	1322
2664	1323
2665	1509
2666	1570
2667	1512
2668	1513
2669	1510
2670	1511
2671	1324
2672	1072
2673	1073
2674	1074
2675	1075
2676	1077
2677	1076
2678	1325
2679	1284
2680	1283
2681	1281
2682	1282
2683	1279
2684	1277
2685	1519
2686	1274
2687	1104
2688	1102
2689	1101
2690	1516
2691	1082
2692	1097
2693	1862
2694	1070
2095	1094
2696	1096
2697	1100
2698	1099
2699	1098
2700	1273
2701	1272
2702	1271
2703	1550
2704	1514
2705	1515
2706	1790
2707	1788
2708	1789
2709	1814
2710	1945
2711	1871
2712	1791
2713	1792
2714	1869
2715	1796
2716	1795
2717	1799
2718	2125
2719	2123
2720	2126
2721	2127
2722	1808
2723	1809
2724	2116
2725	2110
2726	2115
2727	1801
2728	2117
2729	2114
2730	1876
2731	2112
2732	2086
2733	2085
2734	2089
2735	1815
2736	2107
2737	2108
2738	2109
2739	1813
2740	2083
2741	2084
2742	2137
2743	1774
2744	1773
2745	1744

新番号	旧番号
S K 2746	S K 1751
2747	1750
2748	1749
2749	1742
2750	1745
2751	1746
2752	1764
2753	1763
2754	1747
2755	1748
2756	1757
2757	1758
2758	1743
2759	1759
2760	1755
2761	1756
2762	3097
2763	3092
2764	3093
2765	3091
2766	3089
2767	3095
2768	3090
2769	S X 19
2770	20
2771	S K 2991
2772	2990
2773	2988
2774	1832
2775	1833
2776	1838
2777	1843
2778	S M 1
2779	S K 1603
2780	1286
2781	1286
2782	1856
2783	1849
2784	-
2785	1837
2786	1842
2787	1827
2788	1829
2789	1830
2790	1828
2791	1667
2792	1557
2793	3102
2794	3103
2795	1772
2796	1831
2797	2923
2798	1822
2799	1769
2800	1770
2801	1733
2802	1826
2803	1672
2804	1673
2805	1674
2806	1675
2807	1676
2808	1677
2809	2937
2810	1816
2811	1817
2812	1679
2813	1678
2814	1602
2815	1601
2816	(I) 144
2817	(I) 145
2818	(I) 143
2819	(I) 142
2820	(I) 140
2821	(I) 138
2822	(I) 134
2823	(I) 141
2824	(I) 139
2825	(I) 137
2826	(I) 135
2827	(I) 136
2828	(I) 117
2829	(I) 133

新番号	旧番号
S K 2830	S K (I) 132
2831	(I) 131
2832	(I) 129
2833	(I) 128
2834	(I) 127
2835	(I) 126
2836	(I) 130

近世 S K

新番号	旧番号
S K 3001	S K 883
3002	1130
3003	31
3004	35
3005	1933
3006	1926
3007	1927
3008	1928
3009	1929
3010	1930
3011	1931
3012	1932
3013	873
3014	1631
3015	1632
3016	1634
3017	1636
3018	1623
3019	1622
3020	1620
3021	1619
3022	-
3023	-
3024	-
3025	3077
3026	(I) 124
3027	1628
3028	2903
3029	2895
2030	1738
3031	1215
3032	1214
3033	1213
3034	1735
3035	(I) 119
3036	604
3037	608
3038	609
3039	606
3040	607
3041	(I) 118

近代 S K

新番号	旧番号
S K 3101	S K 603
3102	602

N R

新番号	旧番号
N R 1	-
2	1
3	-
4	1
5	11
6	9
7	10
8	2
9	6
10	-
11	8

(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 9

中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 9

—松本市内その6—

三の宮遺跡

本文編

発行 平成 2 年 3 月 31 日 発行
発行者 日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会
(財)長野県埋蔵文化財センター
印刷 信毎書籍印刷株式会社

